

副司令マルコス／ガレアノ

昔からきた抵抗のお話



翻訳 小林致広

2022年2月2日

はしがき

これは、2021 年半ばから 2022 年 1 月にかけて Note (<https://note.com/20supmune21>) に掲載した『老アントニオのお話』続編（全 8 回）のもととなっている原稿である。

翻訳・紹介するお話は、すべて副司令マルコス・ガレアノによって紹介されたものである。

収録しているお話の語り手は、老アントニオだけではない。すでになくなっていく先祖たち、村や共同体の長老などもいる。とりわけ、第 6 部の 2006 年から 2007 年にかけて実施された「別のキャンペーン」で公表されたお話の多くは、訪問先の先住民共同体などで語り継がれてきた伝承が題材となっている。同時に 21 世紀のお話では、EZLN 調査委員エリアス・コントレラス、ラ・マグダレナやソンプラ、そしてサパティスタのこどもたちデフェンサ・サパティスタやカラミダーといった創作人物がお話を展開する事例が増えている。

それゆえ、表題を『昔からきた抵抗のお話』とすることにした。

ここでは、発表された年代順で訳出している。

『老アントニオのお話』続編の作業に取り組もうと思った契機となったのは、鋤柄史子さんから、チアパス自治大学（UACH）の雑誌 *Entre Diversidades* へ投稿してみないかと勧誘されたことである。

当該論文（*Invención de memorias de la resistencia por la reescritura de los relatos indígenas: un estudio para leer las historias contadas por los antiguos en las narrativas zapatistas*）は *EntreDiversidades* No.18（2022）に所収され、下記アドレスで参照できる。

<http://entrediversidades.unach.mx/index.php/entrediversidades/article/view/337/554>

論文では、副司令がお話のタネ本として参照したと思われる年代記（『ポポル・ウーフ』、『チラム・バラム』など）、各種の説話集、伝記（『カネック』）、研究書（『ユカタンのカースト戦争』、『抵抗とユートピア』など）のいくつかを明らかにするとともに、どのように副司令がタネ本を剽窃（？）し、新しい抵抗の根拠となるお話として、書き直し、翻案・創作しているかを論じている。

構成

第 1 部（1994 年）	多くの世界がはいれる世界	3～ 39
第 2 部（1995～96 年）	われわれの後ろにはあなた方であるわれわれがいる	40～ 71
第 3 部（1997～1998 年）	沈黙という力	72～ 90
第 4 部（1999～2000 年）	トウモロコシの人間	91～128
第 5 部（2001～2004 年）	大地の色の行進とカラコル	129～154
第 6 部（2006～2007 年）	先祖たちの語り	155～211
第 7 部（2009～2021 年）	やがて来る記憶	212～226

第1部 多くの世界がはいれる世界



第1部：1994年 多くの世界がはいれる世界（*は老アントニオが登場しないお話）

- 1 アントニオは夢見る
- 2 われわれの長い苦悩の夜はどこから生まれたのか*
- 3 人々の意志に基づいて統治する*
- 4 ボタン・サパタ*
- 5 人間の創造
- 6 降伏という言葉はない*
- 7 拍手で迎えられた
- 8 ライオンは見つめて殺す
- 9 太陽と月のお話
- 10 夜と星のお話
- 11 色のお話
- 12 雲と雨のお話
- 13 質問のお話
- 14 言葉のお話

1 アントニオは夢見ている (1994/1/27)

アントニオは夢見ている。土地は耕作する者たちのものである。流した汗は公正かつ誠実に報われる。無知を治すための学校や、死を追い払う薬がある。家には明かりが灯り、食卓には食物がある。土地は自由である。統治し、自己管理しているのは、人間の理性である。自分だけでなく、世界と調和する。こうした夢を実現するには、闘わねばならない。生命のため、生命を賭けねばならない。アントニオはこのような夢を見ていた。

アントニオは目覚めた。何をすべきか？彼にはわかっている。しゃがみこんで炉の火をかき立てる妻の姿が目に入る。息子が泣いている声が聞こえてくる。東の空に顔を覗かせた太陽を見ながら、彼はマチェーテの刃を研いでいる。一陣の風が巻き起こり、すべてが彼を目覚めさせた。アントニオは立ち上がり、人に会いに出かける。誰かが彼に言ったことがある。彼が望んでいることは、多くの人が望んでいることである。仲間を探しに行くのだ。

副王は夢見ている。すべてを扇動する恐ろしい風によって、彼の土地がかき乱されている。略奪したものが奪われる。邸宅が破壊され、彼が統治していた王国は崩壊する。悪夢のせいで眠れない。副王は封建領主のもとに出かけた。彼らも同じ夢を見たという。副王は落ち着かず、かかりつけの医者を同伴する。衆議一致した。これはインディオたちの魔術のせいだ。この邪術から逃れるには血が必要だ。副王は命令する。殺せ、投獄せよ。もっとたくさんの刑務所と兵舎を建設するのだ。悪夢にうなされ、副王は眠れない日が続く。

この国では誰もが夢見ている。もう、目覚めるときがきたのだ。



2 われわれの長い苦悩の夜はどこから生まれたのか (1994/2/14)

仲間の皆さん。

耐えがたい長い年月にわたり、われわれがチアパスの農村で見てきたのは、仲間たちの死だった。われわれのこどもは、われわれには分からない原因で死んでいった。われわれ男女は、われわれの歩みに影を落とす無知という長い夜の中を歩んできた。真実もなく、理解されることもなく、われわれ人民は道を歩んできた。われわれが歩んだ道には目的地がなかった。

われわれは、ただ生まれて、死ぬだけだった。われわれ人民の長老のなかの最長老たちは、はるか彼方からやってきた言葉で、われわれがまだ生まれていなかった時代、われわれの声が沈黙していた時代のことを語っていた。真実は、長老のなかの最長老たちの言葉のなかにあった。長老のなかの最長老たちの言葉に耳を傾けながら、われわれは次のことを学んだ。

われわれ人民の長い苦悩の夜は、権力者の連中の手と言葉によってもたらされた。われわれの不幸を糧として、ひと握りの少数者の富は築かれる。権力者が住む家は、われわれの先祖の骨や

こどもたちの身を粉にした犠牲の上に聳えている。われわれは、彼らの家に一步も立ち入れない。彼らの家を明るく照らす光は、われわれの暗い闇と引き換えにもたらされる。彼らの豪華な食卓は、われわれの空っぽの胃袋と引き換えに満たされる。彼らの贅沢な生活によって、われわれの悲惨な生活はもたらされる。われわれの脆弱な身体を犠牲にして、彼らの家の頑丈な屋根や壁は成りたっている。彼らの健康は、われわれの死によってもたらされる。彼らが享受している知恵は、われわれの無知につけこむかたちで存在している。彼らを包んでいる見せかけの平和は、われわれにとっては戦争を意味している。その外国崇拜により、われわれの土地や歴史とはまったく縁のない場所へと、権力者たちは向かっている。

しかし、われわれ人民の最長老たちの言葉の歩みをたどってきた真実は、苦悩や死だけではない。われわれの歴史にとっての希望は、彼らの言葉から生まれた。その言葉から、われわれの仲間である一人の人物が現れた。

それはエミリアノ・サパタである。われわれの歩みが真実であるために歩むべき場所をわれわれはサパタのなかに見出した。われわれの血のなかでわれわれの闘争の歴史がよみがえり、われわれの手は人々の叫びで満たされ、われわれの口には尊厳がもどり、われわれは自分の眼で新しい世界を見出す。

こうして、われわれは兵士になった。われわれの大地は戦いの場となった。ふたたび、われわれは鉛の弾と銃で武装し、歩きだした。恐怖はわれわれの死者とともに埋葬され、権力者の土地にわれわれの声を送り込んだ。嘘が支配する土地のただ中に真実を植え付けるため、われわれの真実を携え、こうして都市部まで来た。われわれの同胞の眼に、われわれが運んできた死者の姿をはっきりと見せるためだった。同胞の中には、良い人も悪い人も、賢い人も無知な人も、権力者も謙虚な人も、支配者も被支配者も存在している。



ラ・ガルーチヤの集会所に描かれたエミリアノ・サパタの壁画

われわれの闘いの叫び声は、耳を傾けようとしぬ最高権力と共犯者の頑なな態度を打ち破った。われわれの尊厳ある平和を求める声は、長年にわたり山から降りることはなかった。われわれの死や悲惨な生活を見えなくするため、支配者たちは高くて堅牢な壁を築いていた。われわれを引きつけてやまない歴史に、われわれ人民の尊厳や大義を携えて、われわれが再登場するため、実力でその壁を打ち壊さねばならなかった。

すべてを独占している連中は聞く耳をもとうとしぬ。その壁を壊す最初の一撃において、われわれの民族の豊饒な血が惜しみなく流され、われわれが曝されてきた不正義は一掃された。われわれは、生きるために、死ぬことになった。われわれの死者はよみがえり、真実の歩みを始めている。泥と血にまみれながら、われわれの希望ははぐくまれていく。

しかし、われわれ人民の長老の中の最長老たちの言葉はそこにとどまらなかった。われわれの歩みは孤立してはいない。苦悩と苦痛に満ちたわれわれの歴史は、ほかの大地で生きている仲間たちの身体や血のなかで何度も繰り返されてきた。このような真実を語ってくれた。

「ほかのもたざる人々の耳元にも、おまえたちの声を届けよ。おまえたちの闘いをほかの人た

ちの闘いと結びつけなさい。われわれの苦悩を覆い隠している天井には、さらに不正義という別の天井が覆いかぶさっている」

このように、われわれの人民の最長老たちは語った。

われわれは彼らの発したこの言葉から理解した。われわれの闘いが、今度も孤立したものになるなら、またもや闘いは無益になるだろう。だから、われわれの血と死者の歩みをうまく組み合わせ、真実とともに歩んでいるほかの歩みがたどっている道と出会うようにしたのである。われわれが孤立して歩むならば、何もかも無駄になってしまう。われわれの歩みが、ほかの尊厳ある人々の歩みと価値ある一歩と合流することになれば、われわれは、すべてになる。

仲間の皆さん。こうして、われわれの考えは、自らの手と一体になり、そして唇まで達した。こうして、われわれは歩きだした。

民族解放市民行動全国調整委員会の皆さんも、われわれに向かって歩みを進めてください。あなた方の言葉と真実を受け入れるため、われわれの心は開かれている。われわれの大地の貧さはまだ大きく、メキシコの歴史でわれわれが占める位置は非常に小さい。われわれが提供できるものはほとんどない。だが、皆さんやこの世界の善良な人々の歩みとともにわれわれは成長し、最終的にわれわれの尊厳と歴史にふさわしい場所を見つけなければならない。



タニペルラス集会所壁画に描かれていた黒い馬にまたがるサパタ像

3 人々の意志に基づいて統治する (1994/2/26)

EZLN が山中の霧と暗闇のなかをはいずりまわっているひとつの影にすぎなかったときのことである。正義、自由、民主主義はたんなる言葉でしかなかった。まさに昼が夜に歩みを譲ろうとする時間、われわれの死者たちの言葉の真の守護者であるわれわれの共同体の長老たちがわれわれに託したのは、夢だけだった。われわれの心のなかで、憎しみと死が広がりはじめ、絶望しか存在しなかったときのことである。出口や扉、明日も見つからず、同じ時間が繰り返され、何もかもが不正に満ちていたときのことである。

真の人間、顔をもたず、夜の闇を歩み、山と一体になった者たちは次のように語った。

「統治し統治されるもっともよい方法を探索し発見することが、よき男女の条理であり、意志である。多数者にとってよいことは、すべての人にとってよいことである。しかし、少数者の声が沈黙するようなことはあってはならない。多数の人々の意志と少数者の思いのなかで、考えや心情が共通なものとなることを待ち望みながら、その場に止まりつづけるべきである。そうすれば真の男女で構成される人々は、内側に向かって成長し、大きくなる。外部の力で、彼らを打ち

砕き、別の道に向かわせることなどできない。

多数者の意志が、統治権を有する男女の心でひとつになる。それがわれわれの歩んできた道だった。統治する者が歩むべき道は、この多数者の意志という道だった。統治する人の歩みが、人々の条理から大きく離れているなら、統治する者の心は従っている者の心と取り替えねばならなかった。こうして、われわれの力は山のなかで誕生したのである。統治するものは、真実であるものに従い、従うものは真の男女が共有している心に基づいて統治する。このような統治のあり方を命名するため、別の言葉が遠方からやってきた。その言葉によって、言葉が歩きだす前から歩んできたわれわれの道は民主主義と名づけられた」

夜を歩んでいる者たちは、さらにこう言った。

「われわれが政府のやり方と呼んでいるものは、もはや多数者のための道ではない。われわれはそう理解する。今、命令しているのは少数者である。彼らは人々の意志に従わずに命令する統治をおこなっている。多数者の意見に耳を傾けず、命令する権力は少数者のあいだでやり取りされる。少数者は、多数者の指令に従わず、命令するだけの統治をおこなっている。少数者は道理に基づくことを忘れて統治している。民主主義を欠落したまま、つまり人々の命令に基づかず、少数者は統治している。命令するだけの統治をおこなう連中の不正によって、われわれの苦悩の歩みは導かれ、われわれの死者たちの苦痛は培われている。

われわれの大地に道理と真実がもう一度よみがえるには、命令するだけの統治をする連中は遠くに立ち去るべきである。そのことをわれわれは理解した。変革が必要であり、人々の意志に従って統治する者が統治すべきである。統治の道理を命名するため遠くからやってきた言葉、民主主義は、多数者にとっても少数者にとっても善いものである。そのことをわれわれは理解した」



「人々に従いながら統治する」の標語のある壁画

顔をもたない者たちは語りつづけた。

「この世界は別の世界である。真の人間の道理や意志はもはや統治していない。われわれは少数の存在であり、忘れ去られている。死や軽蔑がわれわれを蹂躪している。われわれは小さき存在である。長い時間、われわれの発する言葉はかき消され、沈黙がわれわれの家に住みついた。

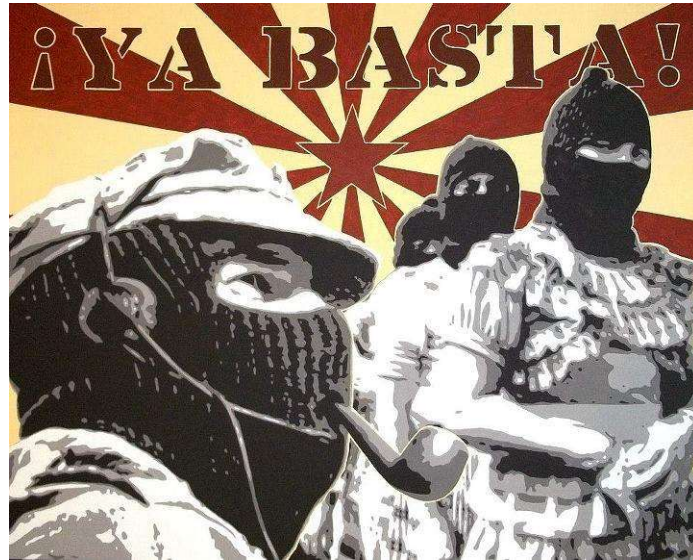
今こそ、われわれの心や他者の心に向け、声を発すべきときである。夜のなか、大地のなかから、われわれの死者たち、顔をもたない者たち、山である者たちが立ち現われることになる。彼らは戦いの衣装をまとい、自分たちの声が聞き届けられ、自らの言葉を発した後、沈黙することになる。ふたたび、彼らは夜と大地へ戻っていくだろう。そして、言葉が真実を伝え、嘘となることのないようにするため、ほかの土地を歩んでいるほかの男女に語りかけるだろう。

人々の意志に従って統治する男女、武力ではなく言葉に力をもつ者たちを探しなさい。彼らと出会ったら、話し合い、指揮権を委ねなさい。ふたたび、顔をもたない者たち、山である者たちは大地と夜に戻っていくだろう。この大地に道理がよみがえるとき、銃火の怒りは鎮まるだろう。

山である者、顔をもたない者、夜を歩む者たちは、いっしょに大地で眠りにつくだろう」

顔をもたない者たちはこのように語った。手には武器はなく、明白で偽りのない言葉があった。ふたたび、昼が夜に打ち勝つ前、彼らは立ち去り、大地にはたったひとつの言葉が残された。

「もう、たくさんだ！」



もうたくさんだ

4 ボタン・サパタ (1994/4/11)

われわれは自ら口で真実を語らねばならない。心を手に握りしめなければならない。仲間の皆さん。われわれの背後にいる者、われわれを導く者、われわれの歩みとともに歩む者、われわれの心を支配している者、われわれの言葉に騎乗する者、われわれの死を生きている者とはいったい誰なのか。それを皆さんに知ってほしい。仲間の皆さんに真実を知ってほしい。その真実はつぎのことである。

はるか昔のわれわれの先祖たちが語っている。

われわれが死んでいるこの長い夜の最初の時間が始まったときから、われわれの苦悩や忘却を集めてきた者がいた。一人の人物が、はるか彼方から自分の言葉に従って歩みながら、われわれの山まで来て、真の男女の言葉で話しかけた。その人物の歩みはこの土地のものであるとともに、この土地のものではなかった。われわれの死者の口、物知りの古老の言葉を通じて、その言葉は彼の心からわれわれの心にむかって歩んできた。

仲間の皆さん。この土地で生まれの者であれ、そうでない者であれ、一度は死んだものの、今一度生きるため、山までやってきた人物は昔も今もいる。

仲間の皆さん。その人物は夜の天井に覆われた山を棲み処としている。そうして、死んだはずの彼の心は、自分や他人の歩みのなかで生きつづけてきた。その名前は名づけられたもののなかに、昔も今も記されている。その柔らかな言葉は、われわれの苦悩のなかに立ち止まり、そして歩いている。その人物はこの土地にいる、と同時にいない。

ボタン・サパタ、人民の守護者にして心である。

ボタン・サパタ、遠方からきて、われわれの土地で誕生した光である。

ボタン・サパタ、われわれの人民のあいだでつねに新しい名前と呼ばれる。

ボタン・サパタ、われわれの死のなかで 501 年も生きてきた慎ましい火である。
ボタン・サパタ、変わっていく名前、顔をもたない人、われわれを守る軟らかい光。
ボタン・サパタ、こちらに向かってきた。

いつもわれわれのかたわらにあるのは死だった。死ねば希望も死んでしまう。こちらに向かってボタン・サパタはやってきた。

名前のない名前、ボタン・サパタはミゲル [・イダルゴ] となって見つめた。ホセ・マリア [・モレロス] として歩んできた。ビセンテ [・ゲレロ] だった。ベニート [・フアレス] と名乗っていた。エル・パハリート [ハシント・ペレス・チュシトフ、チャムーラの反乱指導者、1914 年銃殺] となって飛びまわり、エミリアノ [・サパタ] として馬にまたがり、フランシスコ [・ビジャ] として叫び、ペドロ [EZLN 副司令官ペドロ、エクトル・オチョア、1994 年蜂起時死亡] の服をまとっていた。



パハリートことハシント
・ペレス・ロペス



1994 年元日に戦死の副司令官
ペドロを記念するポスター

われわれの大地で、死にながら生き、名前のない名前だった。名前をもたないまま、ボタン・サパタは、われわれの土地にやってきた。われわれの口で話しながら、彼の言葉は沈黙した。こちら向かいながら、ここにとどまる。

ボタン・サパタ、人民の守護者にして心。われわれのなかではすべてであり、すべてでない。ボタン・サパタ、人民の守護者にして心はここにいる。夜の支配者、山の主、われわれのボタン、人民の守護者にして心である。一にして多である。無にしてすべてである。とどまってやってくる。ボタン・サパタ、人民の守護者にして心。

仲間の皆さん。

今したお話は真実である。そのことを知るべきである。ボタン・サパタは、われわれの生命のなかでは、もう二度と死ぬことはない。ボタン・サパタはわれわれの死のなかでいつまでも生きつづける。ボタン、それは人民の守護者にして心である。名前をもたないで名乗り、顔をもたない顔、全にして無、一にして多である、生きながら死んでいる。ボタン、人民の守護者にして心。小鳥タパカミーノのように、いつもわれわれの前、われわれの後を歩んでいる。ボタン・サパタ、人民の守護者にして心である。名前をもたなまま、われわれのなかで名前をもち、顔をもたない者たちの顔をした存在となり、山中の天空となっている。

ボタン、人民の守護者にして心である。

名前も顔もないわれわれの道は、われわれのなかでやっと名前を名乗った。それはサパティスタ民族解放軍（EZLN）。名前をもたない者たちはこの新しい名前と呼ばれる。この旗印で顔を覆い隠すことで、ふたたび、われわれ全員が顔をもつようになった。名前のない存在、ボタン・サパタ、人民の守護者にして心は、この名前と呼ばれている。EZLN。

荒々しい優しさで武装する。名づけられない名前である。戦争をする不正な平和である。生まれたばかりの死である。希望で作られた苦痛である。ほほえむ怒りである。叫ぶ沈黙である。他者の未来のため自己の現在を捧げる。すべてを皆のために、われわれには何もいない。名前のない者たち、われわれは、いつも死者である。われわれは強情な尊厳であり、祖国の忘れ去られた片隅の存在である。

われわれはEZLNである。われわれは驚のある三色旗のもとで旗めく赤と黒の旗である。われわれは天空で輝く赤い星である。唯一の星ではない。それ以上のもの、より小さき星である。われわれは眼差しであり声である。われわれはEZLN、われわれはボタン・サパタ、人民の守護者にして心である。これは本当である。

仲間の皆さん。

彼方からわれわれはやってきた。そしてむこうに向かっている。とどまりながらやってきている。死にながら死を生きている。ボタン・サパタ、父と母、兄弟姉妹、息子と娘、老人とこども、われわれは生きながらここにいる…



EZLN 旗とメキシコ国旗を掲げる EZLN のデモ行進

5 人間の創造（1994/5/31）

トニーータがお話をねだってきた。私は、老アントニオが私にしてくれたお話をそっくりそのまま語って聞かせた。老アントニオとは、『チアパス―暴風と預言、二つの風の渦巻く南東部』で、風にむかって立ち上がったアントニオの父である。

世界はまだ眠っていて起きようとしなかった。そんな時代のことである。自分たちの仕事について取り決めるため、偉大な神々は集会を開いた。神々は世界を創り、男や女たちを創ることに合意した。神々の頭のなかは、世界と人間を創るという考えでいっぱいだった。

人間を創ることに考えをめぐらした神々は、とてもきれいで長もちする人間を創ろうと考えた。まず、神々は黄金の人間を創った。神々は自分たちの作った人間が輝き、強靱なことにとっても満足した。だが、黄金の神々は動かなかつた。歩きも働きもせず、いつもじっとしていた。そのことに神々は気づいた。黄金の神々は重すぎたのである。

どうすればこの問題を解決できるか。合意を得るため、ふたたび神々の集會が開かれた。集會では、別の人間を創るという合意が成立した。神々は木で人間を創った。この人間は木の色をしていた。彼らはたくさん働きたくさん歩いた。この木の人間はよく働き歩いたので、神々は大いに満足した。しかし、黄金の人間は、自分を担ぎ自分のために働くことを、木の人間に強制した。

神々は自分たちが創ったものの出来がよくないことを理解した。状況を改善するため、よい合意ができないかと思案した。そして、トウモロコシの人間でよい人間を創ることに合意した。だが、ひと眠りするため、神々はその場からいなくなった。

トウモロコシの人間、真の男女だけその場に残り、状況が改善される様子を見ていた。神々が眠るためにいなくなったからである。おたがい合意できるように、トウモロコシの人間は真の言葉を話した。そして、すべての人々にとってよい道を作るのを見るために山に向かった。

老アントニオは次のようなことを私に話した。

黄金の人間は金もちで、肌は白色だった。一方、木の人間は貧しく、褐色の肌だった。いつも金もちのために働き、金もちの人間を担いでいた。黄金の人間も木の人間も、トウモロコシの人間の到着を待っていた。黄金の人間は恐怖におののきながら、木の人間は希望に胸を膨らませて、トウモロコシの人間の到着を待っていた。

トウモロコシの人間の肌は何色だったか、私は老アントニオにたずねた。彼は多種多様な色のトウモロコシの品種について説明してくれた。トウモロコシの人間はいろんな色だったが、誰もよくわからなかったと言った。トウモロコシの人間、真の男女には顔がなかったのである。



オベンティックに描かれたトウモロコシの男女

老アントニオは亡くなった。私が密林の最深部の共同体で彼と会ったのは10年前[1984年]である。彼は誰にも負けないヘビー・スモーカーだった。巻きタバコがなくなると、私にタバコの葉を要求し、トウモロコシの包葉でタバコを作った。あるとき、彼が私のパイプを興味深く見ていたので、私はパイプを貸そうとした。すると、彼は手にしたトウモロコシの包葉で作った巻きタバコを見せた。言葉には出さなかったが、自己流のタバコの喫い方がいいと、伝えたのである。

2年程前、つまり1992年、戦争の開始の是非を決める集會を組織するため、私はいくつもの共同体を巡回していた。そのとき、老アントニオの村を訪れた。私の所に息子のアントニオがきた。われわれ二人は、牧草地とコーヒー農園を横切り、集會の場所に向かった。共同体のメンバ

一が戦争について議論した。その間、老アントニオは私の手を取り、村の中心から百メートルほど下にある川に連れていった。5月なので、川の色は緑で水量もさほど多くなかった。

老アントニオは木の幹に腰を下ろしたものの、一言も喋らなかつた。やがて彼は話しだした。

「見たらどう？何もかも静かで、水は澄んでいる。何も起きていないようだ」

「フーン」と答えたのは、ハイやイエという返事を老アントニオが求めているのがわかっていたからである。

その後、彼はいちばん近くの山の頂を指差した。灰色の雲が山頂を覆い、雷によって山のまわりの青空は引き裂かれ、まさに暴風だった。だが暴風はずいぶん遠くに見え、すぐに危険な状態とはならなかつた。そこで、老アントニオはトウモロコシの包葉でタバコを巻きはじめた。彼は火をつけるものを探した。しかし、ないものが見つかるはずはない。探しているあいだ、私はライターを彼の口元に近づけた。タバコを一服すると、老アントニオは語りだした。

「下では何もかも静かでも、山の方では暴風が起きている。小さな小川の水の勢いも増し、渓谷にむかって流れだしている。雨期になると、この川も野獣のように暴れる。褐色の鞭のようになり、行方も定めず、地響きをたて、もっている力のすべてを發揮しはじめる。その強大な力は、川岸に降り注いでいる雨に由来するものではない。それに力を与えているのは、山から流れ下りている小さな小川である。川は土地を壊し、土地を築きなおす。川の水は、山の食卓に載るトウモロコシ、フリホール豆、黒糖になる。われわれの戦いも同じである」

こう言った後、老アントニオは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「山の中で力は誕生する。しかし、それが下に届くのを見定められない」

「戦争開始のときだと思いませんか？」という私の質問に答えるかのように、彼は付け加えた。

「そろそろ川の水の色が変わる頃合だ」

老アントニオは黙って私の肩につかまり立ち上がった。われわれはゆっくり村の中心に戻った。老アントニオは私に言った。

「おまえたちは小川だ。われわれ、川も…もう流れ下るべきときがきたようだ」

ふたたび沈黙が始まった。われわれが小屋に着いたとき、あたりはすっかり暗くなっていた。

やがて、息子のアントニオが合意文書をもって帰ってきた。おおよそ次のような内容だった。

「解放のための戦争を開始するときなのか？それをそれぞれの心で確認するため、男や女、子どもたちは、共同体の学校に集った。討論をするために、三つのグループ、つまり、女、子ども、男に別れた。その後、全員が学校に集まった。大多数の考えはもう戦争を始めるときだという意見だった。なぜなら、メキシコは外国勢力に売り飛ばされたからである。空腹は耐えられるが、メキシコ人でないことは耐えられない。自らの考えを正しいと思った男12名、女23名、子ども8名は合意に達した。自分たちができることと、同意できないことに関してそれぞれ署名した」

私は夜明け前に出発した。老アントニオは早朝から川に出かけ、もういなくなつた。

ふたたび老アントニオに会ったのは2ヵ月前のことである。私を見かけても、彼は一言も発しなかつた。私は彼の横に座り、いっしょにトウモロコシの粒を穂軸から外した。やがて、老アントニオは「川が勢いを増したようだ」と、つぶやいた。

「そうですね」と、私は答えた。

私は、息子のアントニオに協議の内容について説明し、われわれの要求と政府の回答が記された文書を手渡した。われわれは、息子のアントニオがオコシゴでの体験について話し合った。

今度も、帰途に就くため、夜明け前に出発した。踏みわけ道の曲がり角で老アントニオは待っていた。立ち止まってリュックをおろすと、彼に渡すタバコの葉を探した。

「今はいらんよ」と、老アントニオは差し出した袋を押し返した。私は隊列を離れ、セイバの木の根元まで歩いた。

「山のなかの小川と川について話したことを覚えているか」と、彼はたずねた。

「もちろんです」と、私は彼の質問と同じようにつぶやきながら答えた。

「言うのを忘れていた」と、老アントニオは裸足の足先を見つめ付け加えた。

私はじっと黙っていた。

「小川は…」と、言ったところで、老アントニオは身体に染みついた咳に遮られた。

少し息を継いで老アントニオは続けた。「小川は……流れ下りはじめると……」

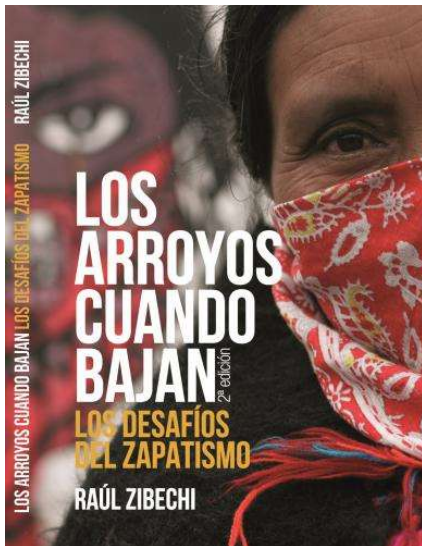
彼はまた激しく咳き込んだ。隊列の衛生兵を呼ぼうとしたが、彼は肩を支えようとした救急班の仲間の手を払った。反乱兵士は私をじっと見た。私は下がってもいいと合図した。薬入のリュックが目の届かない所に行くのを確認し、老アントニオは薄暗い場所で話を続けた。

「小川は…流れ下りだすと…戻れない…大地を流れ下るしかない」

老アントニオは突然私を抱きしめ、すぐ立ち去った。私はパイプに火をつけ、リュックを担ぎ、彼の影が遠くなるのをじっと眺めた。馬にまたがった後も、その場面をよく覚えていた。とても暗かったが、老アントニオが…泣いていたように見えた。そう見えた理由はわからない。

今、政府提案への回答を記した集落の議事録といっしょに、息子のアントニオの手紙が手元に届いた。その手紙によると、あの直後、老アントニオは重篤な状態になった。彼は私に連絡することを拒否した。そしてその晩に死んだという。息子のアントニオによると、人々は私にその様子を知らせようとしたが、老アントニオは次のようにだけ言ったという。

「いや。言うべきことは全部言った。…煩わすな。今、彼にはすべきことがたくさんある」



ラウル・シベッチ『小川が流れ下るとき』の表紙



『老アントニオのお話』（2012年ECON社刊）表紙

お話が終わると、6歳で虫歯のあるトニータはおごそかに宣告した。私のことは好きだけど、「ヒゲがチクチクする」ので、これからはキスをしないと。ロランドが言うには、トニータは衛生班詰め所に行くとき、副司令がいるかをたずねるらしい。私がいると告げると、彼女は看護婦さんの所には行かない。「だって、あの副司令さんキスばかりしたがる。とってもチクチクするの」この包囲網の内側にいる6歳で虫歯のあるトニータという女の子は誰も勝てない論理を展開する。

6 降伏という言葉はない（1994/6/12）

委員会は昼からずっと議論したが、見つからなかった。われわれは「降伏する」という語を探していた。だが見つからなかった。ツォツィル語やツェルタル語で探したものの、なかった。トホラバル語やチョル語にこの言葉があることを誰も思い出せなかった。適当な語を何時間も探した。だが見つからなかった。

外では雨が降り、雨雲がわれわれを覆い隠した。しだいに誰もが黙り込み、トタン葺きの屋根に落ちる雨音だけが聞こえるようになった。それを待っていたかのように、老アントニオは黙って私に近づいた。そして、結核に侵された咳をしながら、私の耳元でこう言った。

「そのような単語は真の言葉にはない。だから、われらはけっして降伏しない。死を選ぶ。自分たちが使わない言葉は生き延びることはない。われわれの死者たちはそう言っている」

恐怖と寒さを追い払うため、私はカマドのところに行った。私は彼の言葉をアナ・マリアに伝えた。彼女は私をやさしく見つめ、老アントニオが死んでいることを思い出させてくれた……



7 拍手で迎えられた (1994/8/3)

1985年、われわれは、初めてひとつの集落を占拠することになった。トウモロコシ畑と焼畑が終わった後の二次林、ちっぽけなバナナ畑とコーヒー園に囲まれた数軒ほどの小屋には、誇り高くエヒードの名称が記されていた。それは老アントニオのエヒードだった。1994年、老アントニオは死に抱擁された。その9年前、彼はわれわれを自分のエヒードに招待した。われわれはその集落、エヒードを占拠する計画を練っていた。コーヒー園で少し道に迷ったが、われわれは老アントニオが暮らしていた小集落の占拠に成功した。

だがわれわれは三枚目を演じることになった。われわれが到着したとき、人々は集落の中央に集まっていた。老アントニオは、密林の都市工学用語で集落の中心に当たる場所にいた。老アントニオは、教会と小学校、バスケットボール場のある場所でじっと待っていた。

「山から同志が到着した」と、老アントニオが紹介すると、人々は拍手しだした。

「なんてこった。今年は調子が悪い。何も言っていないのに拍手なんて」と、考え込んだ。

人々の拍手が終わると、「われわれのあなたへの挨拶は終わった。さて、あなたは自分の言葉を発してもよい」と、老アントニオは言った。

この地では、誰かに何か挨拶するとき、人々は拍手する。こうして、そのことを私は学んだ。だから、私としては、拍手ではなく、挨拶をお願いすることで始めたい。この瞬間、メキシコの農村や都市で、民族民主会議の第1回集会の成功を祈り、お願いし、懇願し、指を交差させ、望み、切望するすべての老若男女への挨拶をお願いしたい。この地にはわれわれも相当数いるので、彼方の地には少なくともその倍はいるだろう。



サパティスタの共同農園

8 ライオンは見つめて殺す (1994/8/26)

民族民主会議の参加者にもらったビロード製の子ウサギを自慢しながら、「これはチクチクしない」と、言っているトニーータにしたお話について。彼女の言うことがわからないふりをして、1985年に起きた出来事を説明することにした。1985年は地震が起き、(地震などに由来する)非常事態に市民が直面した年である。

老アントニオは古い猟銃(単発式猟銃)で山のライオン(ピューマに似る)を仕留めた。

「その銃はエルナン・コルテスがメキシコを征服した当時の代物ですね」と、私は彼が使用する銃を小ばかにした。すると、「そうだ。だが、その銃が誰の手にあるのか。よく見ておくことだな」と、老アントニオは反論した。

今、老アントニオは、皮をなめすため、最後の肉片をはぎ取っていた。そして自慢げに皮を見せてくれた。皮にはひとつも穴がなかった。「銃弾は目に命中」と、私は推測した。「皮が無傷なのはそれしかない」と、考えたのである。「その皮で何を作るのですか?」と、私はたずねた。老アントニオは答えず、黙ったままマチェーテでライオンの皮をこすりつづけた。



チアパス州カカウアタンで農民が仕留めた山のライオン

私は彼の横に座って、パイプにタバコの葉を詰めた。その後、トウモロコシの包葉で巻いたタバコを作ろうとした。できあがったものを老アントニオに黙って差し出したが、彼は点検すると、すぐに壊した。作り直しながら、「まだ無理だな」と、言った。いっしょにタバコを喫う儀式をするため、われわれは座り込んだ。何度もタバコをふかしながら、老アントニオはお話を紡ぎだした。

ライオンが強いのは、ほかの動物が弱いからである。ライオンはほかの動物の肉を食べる。ほかの動物は、ライオンに食べられるしかない。ライオンは爪や牙で殺すのではない。ライオンは見つめて殺すのである。最初はゆっくり…静かに、獲物に近づいていく。ライオンの足には雲のようなクッションがあるので、その足音を消すことができる。その後、ライオンは飛び掛かり、平手打ちを食らわせる。力というより、驚かせて獲物を転倒させるのである。

その後、獲物はじっと見つめる。獲物は猛獣を見る。このように（老アントニオは眉間にしわを寄せ、私に黒い目をむいてみせた…。死しかない哀れな小動物は見るしかない。自分を見ているライオンを見るしかない。自分の姿を見ることのできない小動物は、ライオンが見ているものを見る。ライオンの視線に映っている小動物のイメージを見るのである。つまり、ライオンが小動物を見ている視線のなかで、小さく弱くなっている自分の姿を見ることになる。

小動物は自分が小さくて弱いと考えたことはない。つまり、小動物ではあるが、大きくもなければ小さくもなく、強くもなければ弱くもない。だが、今や、ライオンの視線に映っている自分、つまり恐怖で固まっている自分の姿を見ることになる。自分の姿を見ているものを見て、自分が小さくて弱いと、小動物は勝手に思い込む。ライオンが小動物を見ている。その様子を見るという恐怖に包まれ、小動物は恐怖を抱くことになる。

こうして小動物は何も見られなくなる。われわれが山中の寒い夜に水をかぶったときのように、骨まで動かなくなる。小動物は降伏するしかなく、ライオンに身をまかせる。こうしてライオンは苦もなく小動物を食べる。このようにライオンは殺す。見つめて殺すのである。

そうならない小動物もいる。ライオンと遭遇しても気にせず、何もなかったように行動する。ライオンが前脚で小動物をもてあそんでも、その小動物は小さな前脚で反撃する。前脚は小さいが、引っ搔かれると血が出て痛くなる。この小動物はライオンに身をまかせることはない。なぜなら、自分を見ているものを見ることはないからである…目が見えないからである。この小動物はモグラと呼ばれている。

話が終わったと思い、「それはそうだけど」と、口を挟んだ。だが、老アントニオは私に発言させなかった。巻きタバコを作りながら話を続けた。ゆっくりとタバコを巻きながら、老アントニオはひと巻きごとに視線を上げた。私がちゃんと注意を払っているか、観察していた。

モグラは目が今でも見えない。なぜなら、自分の外側を見つめる代わりに、自分の心を見つめるからである。モグラは内側を見つめることをよぎなくされている。内側を見つめることがどうしてモグラの頭に思い浮かんだのか。そのことは誰も知らない。心を見つめることに関しては、モグラはきわめて強情である。強弱や大小など、気にすることはない。なぜなら、心は心であり、ほかの物や動物のように、その大小を計測することはできない。

内側を見つめることは、神々しかできなかつた。そこで、神々はモグラを罰し、モグラが外側を見られないようにした。地面の下で生活し、歩むようにした。それゆえ、モグラは地下で生活している。神々に罰せられたのである。だが、モグラは悲しむことはない。今でもずっと内側を見ているからである。だから、モグラはライオンが恐くない。

心を見ることが出来る人間も、ライオンを恐れぬ。心を見ることが出来る人間は、ライオンの力を見ることはない。人間は自分の心の力を見た後で、ライオンを見る。そしてライオンは人間が自分を見ていることを悟る。人間がライオンを見つめる視線には、ライオンしかいない。それをライオンは知る。自分が見られていることを知り、ライオンは恐くなり走り去る。

「このライオンを仕留めるため、心を見たのですか？」と、私は口を挟んだ。

「心だと？バカバカしい。見たのは猟銃の照準とライオンの目だけ。そして発砲した…。心なんて知らない…」と、老アントニオは答えた。

私は頭を掻いた。私の理解では、何かわからないことがあるときの仕草である。老アントニオはゆっくりと立ち上がった。ライオンの皮を綿密に調べ、皮を巻くと、やると言った。

「おまえにやる。どこを見ればよいかを知っていれば、ライオンや恐怖を殺すことができる。それを忘れないように、この皮をやる」

老アントニオはきびすを返すと、小屋に入った。それは、老アントニオの用語で「以上で終わり。さようなら」を意味する。私はナイロン袋にライオンの皮を入れ、立ち去った。

トニーータは、いつものように例の「チクチクしない」というビロード製の子ウサギを抱えて立ち去った。「死んだオポッサムならあるよ」と、ベトは慰めるように言った。彼はお母さんに死んだオポッサムを捨てるように言われていた。だが、ベトはそれを五つの風船と交換しようと、私に提案してきたのである。私は丁重にお断わりした。それを聞きつけた一人の料理係が、ベトに三つの風船を手渡した。ベトは迷っていた。風船には緑と白と赤があると、料理係は説明した。最初の提案では風船五個だったと、ベトは強調した。料理係は二つの風船と二つの Condom という案を出した。ベトは迷っていた。値切り交渉が終わりそうもないので、私は立ち去った。

以上が老アントニオとライオンに関するお話である。それ以来、私はライオンの皮を背負ってきた。民族民主会議に手渡した旗はその皮で包んでいた。その皮をご希望の方は？



贈られたライオンの皮を担ぐマルコス



子ウサギの人形をもつツェルタルの少女

9 太陽と月のお話 (1994/9/22)

追伸：トニーータにかこつけてお話をしよう。

トニーータは、オローテ [穀粒を取ったトウモロコシの穂軸] を養子にした。泥土のなかでは生きられない不幸な子ウサギは捨てられてしまった。そのトニーータがお話をすると、やってきた。私が文章を書いていることなど、彼女は何も気にしていない様子である。オローテ、いや失礼、お人形さんを握って、彼女はちょこんと座った。何か言い訳をしようと考えたが、トニーータはお話以外何も受けつけてくれなかった。私は大きく息を吸い込み、時間稼ぎするため、パイプに火をつけた。紫煙を吐き出しながら、お話を始めた。

ある雨の降る肌寒い夜だった

1984年12月。老アントニオは灯りを見つめていた。「白い尾」の鹿の肉を待ちわびていたたき火は、結局は無駄になった。鹿を「ぶらぶら追跡しよう」と出かけたが、失敗したのである。たき火のなかで、何色もの炎が揺らめき、語りあっている。老アントニオは火を見つめ、耳を傾けている。コオロギの鳴き声、炎のパチパチとはじける音と議論するかのよう、老アントニオの言葉を通じ、はるか昔の物語が紡ぎだされた。

そのお話が語られたのは、長老たちもずいぶん年を重ね、今の老人たちが今晚と同じようにたき火を囲み、血にまみれ、沈黙し、難渋しながら歩んでいた時代である。今から、十、百、千、百万日も前の夜である。鹿はおらず、寒い雨が降り、われわれにお話を伝える者しかいなかった。

最初、夜の水があった。すべてが水で夜だった。神々や人間は、年老いた酔っ払いのように、つまずいたり転んだりしながら、必死に歩き回っていた。道を見つけるための光、休息や愛のため身を横たえる大地もなかったからである。大地も光もなく、世界のできはよくなかった。

やがて、夜の水のなかで、神々はおたがいに衝突しだした。そして腹を立て、ひどい言葉を吐きだした。神々は大きかったため、腹立ちも大きかった。そこで男と女たち、真の耳をもつ人間、真のツオツ〔ツオツイル語でコウモリ〕、コウモリの男女は、神々の大きな怒りが発する騒音から身を隠した。こうして神々だけになった。喧嘩が終わりふと気づくと、神々だけになっていた。

自分たちだけになった心痛はとても大きかった。悲嘆のあまり神々は泣きだした。男や女たちはおらず、神々だけになった。そのため神々の号泣はとほうもなく大きかった。涙を流しつづけ、泣きくれた。そのため、さらに水が増え、どうしようもなくなった。心痛で神々が泣きつづけた。さらに水と夜が満ち溢れ、ずっと夜と水が続くことになった。神々はとても寒くなった。ひとりでは感じる寒さもひとしおである。すべてが夜の水になり、寒さは募っていった。

神々は考えをめぐらした。何かよい合意を導き出そうとした。自分たちだけにならないように、神々はコウモリの男女を洞窟から引き出そうと考えた。歩む道を照らす光を引き出し、休息と愛のため身を横たえる大地を引き出すことにした。神々は横になっていっしょに夢を見ることに衆議一致した。心をひとつにして、光と大地を夢見ることにしたのである。火の夢を見ているとき、神々は黙り込んだ。沈黙があたり一帯を支配した。全員でひとつの火のことを夢見ていた。

やがて、すべてを覆いつくす沈黙と水の夜、つまり神々のあいだから、ひとつの傷口、水の夜の上に裂け目が出現した。非常に小さな言葉は踊りながら、大きくなったり、小さくなったりした。長くなったり、太ったり痩せたりしながら、七名いる神々の中央で、その言葉は踊った。そのとき、七名の神々の姿が見えるようになった。姿を現わした神々は数を勘定できるようになり、ついに七名になった。もっとも偉大な最初の神々は七名だった。

真ん中で黙ったまま踊っているこの小さな言葉のため、神々は家をせっせと造りだした。神々は、その小さな言葉を「火」と命名した。小さな言葉は、夢のなかで生まれているほかの小さな言葉も近づけながら踊っていた。小さな言葉はいっしょになって話しだした。火のまわりに大地と光が引き出されていった。コウモリの男女は洞窟から出てきた。彼らはそっと眺め、見つめ、



火に飛び込む醜い神

体に触れ、愛し合いはじめた。光、そして大地ができたからである。歩む道が見え、愛と休息のため、…光に囲まれた…大地の上に…彼らは、横になれたのである。

神々の姿は見えなくなった。会議のため、神々がいなくなった。神々は館に閉じこもり外出しなかった。神々が取り決めたため、神々の館には誰も入れなかった。その館で、神々は合意を引き出した。水の夜は圧倒的であり、光と大地はわずかしかない。だから、火を消さないことにしたのである。水の夜が火に届かないようにするため、上方、つまり天空に火を運ぶことにしよう。こういう合意に神々は達した。そのことを伝えるよう、火をおこすため洞窟にいたコウモリの男女に命じた。さらには、天空にも伝えた。

神々は車座になって、小さな言葉、火のまわりに座った。誰が火を天空まで運ぶべきか？上で生きるため、下で死ぬことになるのは、誰にすべきか？神々はそれについて議論を戦わせた。

だが、神々は誰も、下で死にたくなかった。そのため意見はまとまらなかった。白色がいちばん美しく、天上の火も美しくなるから、いちばん白い神が行くべきだと、神々は言った。だが臆病者の白い神は、生きるために死にたくなかった。

すると、いちばん黒く醜い神イクツが天上へ火をもっていくと言った。彼は火をつかみ、自分の体に火をつけた。最初は黒色だったが、やがて灰色、そして白色から黄色、橙色、赤色へと変わり、ついに火が燃え上がった。パチパチという言葉をつきながら、天上へ昇り、そこで丸くなった。黄色や橙色に輝き、また赤色、灰色、白色、黒色にもなった。神々は彼を「太陽」と呼んだ。より多くの光が集まり、ずっと先の道まで見えるようになった。より多くの大地ができた。水の夜はかたわらへ追いやられ、山ができた。

白い神は恥ずかしくなり大泣きした。泣きすぎたため、白い神は進む道が見えなくなった。そのため白い神はつまずき、火のなかに倒れた。こうして彼も天上へ昇ることになった。だが、臆病な自分を恥じて泣いたため、白い神が放つ光はとても物悲しかった。こうして、太陽のそばに物悲しく青ざめた白い神の色をした火の玉ができた。神々はこの白い火の玉を月と呼んだ。

だが、太陽と月は、天上にじっとしたまま、歩もうとはしなかった。神々は悲しそうに見つめた。とても恥ずかしくなった神々は、全員火のなかに身を投じた。すると、太陽が歩きだした。太陽にお詫びを乞うため、月も太陽の後を追って歩きだした。こうして昼と夜ができた。

やがて、コウモリの男女は洞窟から出て、火の近くに住まいを構えた。彼らは昼の神と夜の神といつもいっしょだった。昼の神は太陽、夜の神は月だった。

その後に起きたことは、神々の判断ではない。神々はもう死んだ…生きるために…。

老アントニオは、両手でたき火からオキを取り出し、地面におき、「見ろ」と言った。赤色から橙、黄、白、灰、黒色という順序、お話に登場した黒色のセニョールと逆の順序で、オキの色は変化した。老アントニオはまだ熱いオキをゴツゴツしたまめだらけの手でつかみ、私に手渡した。私は熱くないふりをしたが、すぐ放り出した。老アントニオはほほえみながら地面に落ちたオキを取り上げ、水の夜にできた雨の水たまりに浸した。そして、冷たくなったオキを手渡した。

「さあ、これを…憶えておくとよい。黒色の顔をしているが、この世界に必要な光と熱を隠している」と、言って、老アントニオは私を見つめた。

「さあ、でかけるとするか」と、言って立ち上がった老アントニオは付け加えた。

「今晚は『白い尾』の鹿は現われない。食堂にはもう誰もいない」

たき火を消そうとすると、リュックを担ぎ単発式猟銃を手にした老アントニオが言った。

「そのままでもいい…。寒いから、夜にはほんの少しの熱でもありがたいから」

一言も喋らず、二人とも立ち去った。雨が降り、冷え込んだ…。

雨が降る別の肌寒い夜だった

1993年11月17日。EZLN 結成 10 周年の日。参謀本部はたき火を囲んでいた。全般的な計画が提示され、戦術レベルの細部を詰めていた。部隊はすでに就寝し、司令官の称号をもつ将校だ

けが起きていた。老アントニオも起きていた。彼はサパティスタのあらゆる監視所を通過できた。彼の歩みを止められる人はいなかった。彼はどこにでも入り込める唯一の人間だった。公式の会合は終わり、冗談や逸話を交えながら、全員でさまざまな計画や夢を設計していた。

顔を隠すことがテーマになった。パリアカテ、舞踏会用仮面、カーニバルの仮面がいいという話になった。皆が私のほうを見た。



ロランド、副司令マルコスとアナ・マリア



パリアカテと目出し帽姿の女性サパティスタ

「目出し帽がいい」と、私は言った。

「髪の毛の長い女性はどうするのよ」と、アナ・マリアが抗議口調で質問した。

「髪を切れば!」と、アルフレッドが言った。

「そんな! 正気なの? 女はスカートまで髪を伸ばせて言っていたのに」と、ヨスエは言った。

「あんたの婆さんもスカートをはいているのよ」と、アナ・マリアはやり返した。

黙って天井を見ていたモイセスは、議論の腰を折るために質問した。

「目出し帽の色はどうするの?」

「コーヒー色。軍帽と同じさ」と、ロランドが言った。緑だと言う者もいた。

老アントニオは、私に合図して仲間から引き離し、明日の夜のオキがあるか」と、たずねた。

「リュックにある」と、私は答えた。

「ちょっと探してくれないか」と、言いながら、彼はたき火を囲んでいる集団に向かった。オキを取って引き返すと、全員がたき火を囲み静かにしていた。老アントニオはその脇で、あの『白い尾』の鹿の夜と同じように、炎をじっと見つめていた。

「どうぞ」と、私は彼の手に黒いオキを置いた。

「憶えているか」と、老アントニオは私を見据えてたずねた。

私は黙って座っていた。老アントニオはオキを火の中に入れた。最初は灰色だったが、燃えさかると、白、黄、橙、赤へと色が変わった。オキは燃えさかり、光を放った。老アントニオは私をもう一度見つめた後、霧のなかへ姿を消した。全員がじっと、オキ、火、光を見ていた。

「黒にしよう」と、私はつぶやいた。

「なんて言ったの」と、アナ・マリアが聞き返した。

「黒だ。目出し帽は黒色だ」と、火をじっと見つめながら繰り返した。誰も反対しなかった。

それとは別の雨の降る肌寒い夜だった

1993年12月30日。最後の部隊が配置につくため前進を開始した。一台のトラックがぬかるみで立往生した。戦闘員は引き出そうと懸命にトラックを押ししていた。

老アントニオは火の消えたタバコをくわえ近づいてきた。土鍋の口を下に向け雨よけにし、私

は彼のタバコと自分のパイプに火をつけた。それは雨のときのために私が発明したやり方である。
「いつやるのだ？」と、老アントニオはたずねた。
「明日です」と、答え、「時間どおり到着できたんですが」と、付け加えた。
「冷えるな」と、老アントニオは古いジャケットの前をたくり込んだ。
「ウン」と、私は返事した。
「今晚はちょっと灯りか、暖房がいるな」と、タバコを巻きながら言った。
私はほほえみながら、黒色の目出し帽を彼に見せた。それを手に取り点検すると、私に返した。
「オキはあるか」と、老アントニオはたずねた。
「今晚、火を焚きましたが…何も残りませんでした」と、私はすまなさそうに答えた。
「仕方ないさ」と、老アントニオはかすれた声で言った。
「生きるために、死ぬのだ」と、言いながら、彼は私を抱きしめた。
「ひどい雨で、目までびしょ濡れだ」と、両目を袖でぬぐい、老アントニオはつぶやいた。
トラックは泥土から脱け出し、私を呼ぶ声がした。お別れを言うため、老アントニオのほうを振り向いた。だが、もう彼の姿はそこになかった……

トニーータは立ち上がり、立ち去ろうとした。「キスは？」と、私はたずねた。彼女は私に近づき、オローテを私の頬にさっと当て、走り去ろうとした。「それだけ？」と、私は抗議した。
「それがあなたへのキスよ。…だってお話は人形さんのためでしょ。だから人形さんがあなたにキスをしたの」と、トニーータは笑いながら答え、走り去った…

追伸：最初にした挨拶を今一度

地面の下を飛べる男たち
彼らに崇高で不可侵な領域はない
緊張の眼差しで飛び立つ
恐るべき剣闘士たち

—ミゲル・エルナンデス—

先住民ツェルタルの血を引き、権利と歴史からもメキシコ人のウーゴは、EZLNの政治責任者の第一世代の一人である。彼は地下革命先住民委員会（CCRI）として知られる組織の創設者の一人で、われわれの指導部の世代全体を育成した人物である。ラウル、フアン、ガビーノ、グスタボ、ラモン、シモン、フェルナンド、マクソ、そして現在のCCRIのほかのメンバーは、戦争の準備のやり方や指導の方法をウーゴから学んだ。

ウーゴという戦闘員名称をもち、そのいでたちや高貴さからツェルタルの王子といわれる人物は、通信連絡ための名称にセニョール・イクツ（Señor Ik'、黒いセニョール）を選んだ。しだいにウーゴという名前は忘れられ、セニョール・イクツと呼ばれるようになった。そして、渓谷や行政区を駆け巡り、後に世界中に知れる四つの頭文字EZLNの意味を説明した。

ツェルタル先住民地下革命委員会の指導責任者、EZLN・CCRI CGのメンバーとして、1994年1月1日、イクツはオコシゴ行政区役場を占拠した部隊の先頭で進軍した。1月2日、連邦軍が広場を攻撃した際、イクツは仲間の退路を守るために闘いつづけた。最後の部隊が退却する混乱のなか、イクツは行方不明者リストに載った。

その後、さまざまな証言が届いた。1月4日、IMSS-Coplamar地区で、彼がまだ戦っている姿を見たという。1月3日、死んだ連邦政府軍兵士の前で、敵から奪った武器を手に死んでいる彼を見たという。彼は生きて捕まったが、逃げるのに成功したという。

彼の遺体が、連邦政府がその残虐性と軍人の名誉の欠如を隠すために作られた秘密集団墓地のどこにあるか、われわれは知らない。今、山中で言われているように、セニョール・イクツは死なず、サパタの帽子や馬とともに、丘や渓谷にときおり出現する光となって、生きているかもし

れない。老アントニオのお話に出てくる黒い神のように、セニョール・イクツは、自らの死で、この大地に光と熱をもたらし、何が起きようとも再生する闘争に生命を与えてきた。

1994年4月10日、軍事式典で歌われたサパティスタ賛歌のリズムに合わせ、今も彼を待ち続けるイクツの妻（われわれ全員も）は男の子を産んだ。この大地のもの、この海のもの……



セニョール・イクことウーゴ司令官

追伸：「私を忘れないで」と言って、お別れしよう

カセット・テープに上書きしたレオン・フェリペの詩 [Canción Marinera, 1920年] が聴こえる。

われわれ全員が水夫／航海の術は承知のもの
われわれ全員が船長／海の船長／われわれ全員が船長
その違いは／海ゆく船の差だけ
水夫さん、水夫さん／水夫で船長さん
あなたの操る貧相な船で／海の上行く
水夫で船長さん／遭難なんかに怯えないで
われわれが探している財宝は
船長さん／財宝は港の丘でなく／海の底にある

10 夜と星のお話 (1994/10/6)

タチョは委員会の残りのメンバーを召集するために出かけた。彼らはお祭りに参加していたのである。それは、チェとわれわれの死者たちのため、われわれサパティスタが毎年10月8日に開催している祭りである。

私は懸命にくしゃみを治そうとしていた。そのとき、エリベルトとエバがやってきた。私は彼らのために目出し帽をかぶったアヒルの絵を書くことになった。

「どうして目出し帽がいるの？」と、私はくしゃみをしながらたずねた。

「だって、どうしても」とエバが答えた。

4歳の彼女にはそれ以上の説明はいらないのだと、私は考えた。しかし、3歳でまもなく4歳になるエリベルトは少し物分かりがよかった。彼は私を哀れみの目で見ながら言った。

「サパティスタのアヒルだから、目出し帽を描いてよ」

「そうなの！」と、私はわかったふりをして言った。

私の描いたアヒルは、面頬つき兜をかぶった感じになった。エバはベソをかきだした。アヒルの目出し帽が似合うように、僕が描き直しているあいだ、副司令がお話をしてくれるよと、エリベルトはエバを慰めるように言った。

エバは私の横に座った。だが、私のくしゃみがアグアスカリエンテスに降り注いでいる雨と同じぐらい激しいことを知っているエバは、少しばかり私から離れた。私はパイプに火をつけ、弾薬筒を整えた。そしてお見通しのとおり、くしゃみをした。私がエバにしたお話は、私が何度も話せるようにと、老アントニオがしたお話である。



司令官タチョ



ラ・レアライダーのこどもたち

夜と星のお話

まったくの夜という夜がずっと続いた。天空は地上に影を作りだしている長い天井でしかなかった。男や女たちの唄も悲しいものだった。男や女たちの歌う悲しい唄のせいで、神々も悲しくなった。そこで、神々は合意を導き出すための会合を開いた。神々は何か作業をするとき、つねに合意を導き出していた。

このやり方で、われわれの古老たちは何かをすることを学んだ。そして、われわれも学んだ。われわれは、何か作業をするためには、合意を導き出すことが必要であるということ学んだ。

神々は夜の天井を取り除くという合意を導き出した。天空にある光がすべての男や女たちに降り注ぐようにした。男や女たちの唄が悲しくならないようにしたのである。夜の天井をすべて取り払うと、大量の光が降り注ぎだした。長い夜は川から山までを塞いでいた。だから、夜の長い天井が堰き止めていた光の量は、とても膨大なものだった。

男や女たちは目が見えなくなった。光が大量だったため、目は休息することができなかった。身体を照らす光のなか、男や女たちの身体は働きどおしだった。男や女たちは自分たちに害をもたらす多量の光に対して不平を言った。男や女たちはコウモリの男女だった。

神々は自分たちの仕事の出来がよくないことに気づいた。神々であるから、彼らも間抜けではない。自分たちの導き出した合意がよくないことがわかった。そこで、神々はもう一度集合した。もう一度、夜の長い天井を埋めるために、神々は新しい合意を導き出すことにした。どうすればよい合意を導き出せるか、考えることにした。その合意を得るのにはずいぶん時間を要した。そのため、長い夜が続くことになった。こうして、コウモリの男女は夜に出歩くことを習得したのである。

夜の長い天井という問題を解決するために、神々は長い時間を要した。そのため、光がなかったのである。先ほどの新しい合意を導き出した後、神々はこうもりの男女がいる場所に赴いた。そして、この問題を解決するため、ちょっと協力をしてほしいと要請した。神々が依頼したのは、夜をあまり長くしないため、光の小さな破片を夜の天井にばらまくというものだった。

「星になってほしい」と、神々は宣言した。

すべての男女が協力を申し出た。全員が星になりたかったのである。コウモリの男女でいることに退屈していたのである。すべての男女が星になり、種を播いたように長い夜の天井の全面に貼りついたのである。こうして夜の天井の部分は完全になくなってしまった。

またもや、天空の全面は、光だけになってしまった。問題は解決するどころか、さらに悪くなってしまった。夜の天井のすべてが壊れていた。いたるところから落下する光をどうして塞げばいいのか、わからなかった。それに神々はまったく気づいていなかった。問題が解決したと思いついた神々は、満足して寝ていたからである。悩みがなくなったと思いついた神々は眠りについていて、

コウモリの男女は、自分たちが起こした問題を独力で解決しなければならなかった。そこで、神々がやっていたように、合意を導き出すため、皆が集まることになった。

そして、全員が星になろうとしたのでは駄目であり、あるものが輝いているときには、ほかのものは光を消すべきである。そのことに、彼らは気づいたのである。だが、激しい議論がもち上がった。誰も自分の光を消そうとは思わなかった。誰もが輝く星になりたかったのである。

そのとき、真の男女、大地の色の心をもつ男女トウモロコシは大地から生まれる一は、自分たちが光を消すと言った。彼らが光を消すと、夜は完璧になった。暗闇と光ができたからある。光が消え、星々は輝くようになった。われわれも目がくらみ、見えなくなることはなかった。

そのとき、神々は目覚めた。夜があり、星が輝き、世界は自分たちが創ったように美しくなっていた。その様子を神々は目のあたりにした。そして神々は立ち去った。問題を解決したのは自分たちであると、神々は思い込んでいる。しかし、ご存じのように、よい合意を導き出し、それを実行したのは、真の男女である。しかし、眠りこけていた神々は、そのことを知らない。神々は自分たちがすべての問題を解決したと思いつ込んでいる。かわいそうなことに、真の男女を覆う天井となった星と夜が、誕生したときの様子を神々は何も知らない。

これがお話である。あるものが輝くためには、ほかのものは光を消さねばならない。光を消すものがあるから、輝くものが輝くのである。でなければ、誰も輝くことはない。



夜空に輝いている星々



オベンティックの子どもたち

「目出し帽をかぶったアヒルを描き直したよ」とエリベルトが言ってきた。

エリベルトがもってきた紙は真っ黒になっていた。エバはベソをかきはじめた。目出し帽もアヒルの姿もなかったからである。しかし、自分の絵は副司令よりも出来がいいと、エリベルトは確信していた。「だけど、何も見えないわ」とエバは言った。サパティスタのアヒルは夜中に出歩くから、その姿は見えない」と、エリベルトは言った。

エリベルトはエバをアグアスカリエンテスの水たまりに行こうと誘った。頭部に鉄を詰めた副司令のアヒルとちがって、自分の描いたアヒルは浮くことを証明するためである。副司令のアヒルは浮くはずがない。かわいそうな副司令のアヒル。エバはエリベルトについて行った。二人は、エリベルトの水に関する理論を証明することにした。私はくしゃみをしつづけた。ほかに何ができるのか…

11 色のお話（1994/11/1）

エバがきて、文章を書いている私を覗き込んで、「何をしているの？」とたずねた。

「罰として課されたことをしているのだよ」と、答えた。「民族民主会議の代表者に下品な言葉を発したり怒ったり絶対にしません」という誓いの文章の 248 回目を書いていた。

エリベルトが扉から覗いてきた。彼はキャンディーをたくさんもってきた。エバ、そしてこんなに幸福な積荷を間接的に納めた人つまり私に、キャンディーを分けようとしたのである。われわれはキャンディーをしゃぶりながら、誰がいちばん大きな音をたてるか競争することになった。

「民族民主会議の代表者に悪口を言ったり、非難したりはしません」という文章を、私は 500 回以上も繰り返して書くことになっている。

それに気づいたのか、エリベルトは手伝うよと言ってきた。無言のまま（実際、言葉を発せなかった。というのは、音をたてる競争でエバが勝っていたからである。私はたったひとりの最良の副司令のはずだ）、私は彼に一枚の紙と鉛筆を手渡した。

エリベルトは最初の文字のいくつかをなんとか真似ようとした。だが、すぐに飽きて、小さなアヒルを描きはじめた。それはエリベルトにとってはどんな言い訳よりも強力であった。私は多くのロケット・エンジンがある飛行機をエリベルトに描いてやった。それを見て彼は言った。

「なんだ。そんなものでは、誰も罰を免除してくれないよ」

エバがお話をせがんできた。私が大きな音をたてる競争のチャンピオンであることが確定するのを引き伸ばそうとする作戦かなと、私は疑った。エリベルトは返事など待たずに、エバの隣にちょこんと座ると、自分が描いた絵を彼女に見せた。そして、自分の描いたアヒルにはロケット・エンジンがないけれど、副司令の飛行機よりうまく飛べると、エリベルトは言った。

キャンディーがいっぱい詰まった制服を着るところだったが、パイプに火をつけると、タバコを三服ほどふかした。そして、老アントニオと同じようにお話をすることにした。

色のお話

「あれを見ろ」と、老アントニオは昼下がりの空を横切るコンゴウインコを指差した。私は刺激的な多彩色の光の筋を見つめた。それは雨が近いことを告げる灰色の空でとても映えていた。

丘の頂上に着くと、「一羽の鳥にあんなに多くの色があるなんて、嘘っぽいな」と、私はつぶやいた。老アントニオは泥で汚れていない狭い斜面に腰をおろした。踏み分け道は泥だらけだった。彼は呼吸を整えながら、新しい巻きタバコを作った。私は彼の数歩前を歩いていたが、後で立ち止まったのに気づき、引き返して、彼の横に座った。

私もパイプに火をつけながら、「雨が降りだす前に村に着けるでしょうか？」と、たずねた。老アントニオは聞いていないようだった。今はトゥカンの群れに目を奪われていた。紫煙でゆっくりと絵を描くには、手にした巻きタバコに火をつけねばならなかった。彼は咳払いをしながら、タバコに火をつけた。いちばん楽な姿勢になると、老アントニオはゆっくりとお話を始めた。



コンゴウインコ



オオハシ（トゥカン）

昔のコンゴウインコはあんなものではなかった。色はなく、完全に灰色だった。その羽毛はぬれた雄鶏のように短かった。この世界にどのように登場したのかが知られていない鳥の仲間だった。誰がどのように鳥類を創ったのか、神々も知らなかった。まあ、ものごととはそんなものだ。

神々が目覚めたのは、夜が「自分の当番はここまで」と、昼に宣告した後のことだった。そのとき、男と女たちは寝ているか、愛し合っていた。後でぐっすり寝るため、疲れることをするのだから、愛し合うことはとてもすてきなことである。

神々は喧嘩をしていた。神々はいつも戦っていた。最初の神々、いちばん最初の世界を誕生させた七つの神々とは違って、この神々はとても喧嘩が好きだった。神々が喧嘩をしたのは、たった二色で塗られた世界が退屈でしかたなかったからである。神々が怒るのも当然だった。たった二色の色で、交互に世界を描いていたからである。ひとつは夜を支配する黒色だった。もうひとつは昼を闊歩する白色だった。

第三番目の色は色といえなかった。それは、黒色と白色が激突しないように、夕方や夜明け前を塗っている灰色だった。この神々は喧嘩好きだったが、賢かった。彼らが開催した集会で、もっと長い多くの色を作り出すという合意を導き出した。コウモリの男女の歩みと愛を楽しいものにするためだった。

自分の考えを真剣に追求しようとした神は、歩くことに集中していた。自分の考えをまじめに追求していたため、自分が歩んでいる道を見ていなかった。そのため、とても大きな石につまずいた。頭を打ったため、頭から血が出た。しばらく、その神は泣きわめいていた。だが、その神は自分の血を見て気づいた。その色は白色と黒色の二色のどちらでもなかった。そこで、ほかの神々がいる場所に走って帰った。そして、神々にその新しい色を見せた。神々はその色を赤色と名づけた。こうして三番目の色が誕生したのである。

その後、別の神は希望に塗る色を探した。かなり時間がかかったが、その色を見つけた。神々の集まりでその色を見せた。神々はその色を緑色と名づけた。それが四番目の色である。

今度は、別の神が大地を掘り返した。「何をしているの？」と、ほかの神々はたずねた。あたりに土をまき散らしながら、「大地の心を探している」と、その神は答えた。やがて、その神は、大地の心を見つけ、それをほかの神々に見せた。神々はこの五番目の色を茶色と名づけた。

別の神は真っすぐに上の方に向かった。「世界がどんな色なるのか見に行く」と、言い残すと、その神はずいぶん上まで登りつづけた。たいへん高い所に到着し、彼は下を見下ろした。そして、世界の色を見た。だが、ほかの神々がいる場所にその色をもっていく方法は思いつかなかった。ずいぶん長い時間、世界の色を見つづけたので、目が見えなくなった。彼の眼には世界の色が焼き付いていた。彼にできる唯一の方法、つまりつまずきながら降りていった。やっとのことで、ほかの神々が集会を開いている場所にたどりつき、「両方の目に世界の色を貼りつけてきた」と、言った。神々はその六番目の色を青色と名づけた。

別の神々もいろんな色を探した。そのとき、こどもの笑う声が聞こえた。ある神は用心しながらこどものいる場所に近づいた。こどもが無防備だったので、神はこどもから笑いを奪い取った。すると、こどもは泣きだした。だから言われている。こどもは笑っていたかと思うと、急に泣きだす。こどもの笑いをもってくると、神々はその七番目の色を黄色と名づけた。

その頃には、神々は疲れ切っていた。そこでポソールを飲み、一眠りすることにした。神々は色を小さな箱にしまい、セイバの木の根元に放置していた。その小さな箱は、きちんと閉まっていなかった。そのため、色が飛び出した。楽しそうにはしゃぎ、おたがいに愛しあった。そのため、別の色がつぎつぎと生まれた。

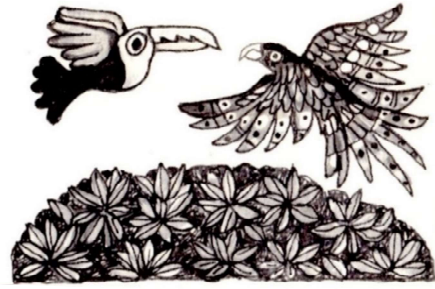
その様子をずっと見ていたセイバの木は、箱に蓋をした。雨で色が消えないようにしたのである。神々がやってきたときは、もはや七色だけではなかった。ずいぶん多くの色が増えていた。

神々はセイバの木を見て、「色を生み出したのはおまえだな。おまえは世界を見守るのだ。われわれは、おまえの樹冠から世界に色を塗ることにする」と、言った。

そして神々はセイバの樹冠に登った。そこから多くの色を遠くへばらまきだした。



トウモロコシの粉を溶いた飲料ポソールを摂る



トウカンとコンゴウインコ

青色の一部は水にとどまった。残りは空にとどまった。緑色は木や植物の上に落ちた。いちばん重かった茶色は大地に落ちた。こどもの笑い声である黄色は空高く飛び上がり、太陽を塗った。人間や動物の口に到達した赤色は食べられてしまった。そして、その内側を赤く染めた。白色と黒色はもともとこの世界にあった。こんなふうにはメチャクチャに、神々は色を放り投げたのである。放り投げた色がどこに到着するかなど、神々はまったく気にしていなかった。いくつもの色が人にばらまかれた。だから、異なった色をした人、異なる考えをする人が存在している。

疲れきった神々は、また寝てしまった。この神々は眠ることが大好きだった。この神々は、この世界を誕生させた最初の神々ではない。色のことを忘れず、色をなくさないようにするため、この神々は色を守る方法を探した。どうすればよいのかと、神々は心のなかで考えていた。そのとき、コンゴウインコの姿が眼に入った。神々はコンゴウインコを捕まえると、すべての色を塗った。すべての色が塗れるように、その羽毛を長くした。だから、コンゴウインコは色を身につけ、多くの色をまとめて飛ぶようになった。色や考え方はたくさんあること、すべての色と考え方にそれぞれ居場所があるなら、世界はとても楽しくなる。そのことを男女が忘れないようにするため、コンゴウインコは気を使っているのである。

キャンディーしゃぶりの音たて競争の勝者はエバ！と、エリベルトは高らかに宣言した。そして自分が描いたミサイルに反対するアヒルの絵を賞品としてエバに贈った。エバはその賞品があまり気に入らなかったようだ。だが、二人そろって、反乱兵士たちが映画を観ている会場に行った。すでに何度も上映されたペドロ・インファンテ主演の映画の題は、コンゴウインコと明白な関係があった。その題は『ハイタカ (gavilanes)』だった。

私はとっても悲しい気分になった。私の不満と下品な言葉遣いに対して委員会が課していた罰として、書いていた紙はキャンディーでベタベタになっていた。なぜコピーせよと命令しなかったのか」とモイがたずねた。たしかに。どうしてそうしなかったのか。



ペドロ・インファンテの『ハイタカ』のポスター

12 雲と雨のお話 (1994/11/4)

そのとき、エリベルトは、おなじみの清涼飲料水コーラのビンで馬方アリを「撫ぜる」ことに熱中していた。彼ときたら、小さな事件を記憶する能力がまったくないようだ。またしても、アリがペチャンコになっているのではと、私は気になった。人は前に犯した過ちから学習するというけれど、われわれはエリベルトに対して何ができるのだろうか？

関心をそらすため、私はエリベルトを呼んだ。そして、多くの大砲、赤外線監視装置、スマート爆弾やあらゆる近代的技術の成果を装備した強力な航空母艦の絵を描いてやった。エリベルトは一羽のアヒルを描いた。エリベルトは、何も臆することなく、自分のアヒルはバッテリーがいらないので、ラ・レアリダーの水たまりでも自由に泳げると言い放った。

そして『クリスマス用お菓子』とくっきりと書かれたチョコレート箱の横目でみながら、「副司令の小舟はラ・レアリダーでは通用しないよ」と、リベルトは宣告した。

「だって、ラ・レアリダーには乾電池はないからね」と、付け加えた。

私は失意のあまり、描いた絵を見つめて、太陽電池を描き足そうとした。それは政府がメキシコ国内の水力発電エネルギーの55%を供給しているこのチアパスの大地の住民に配布しようとしている代物である。

12月にはまだまだ時間があり、クリスマスなどチアパスの現実世界には到来しないと、エリベルトは考えたようである。彼はエバと結託し、包装紙を破った。私は太陽電池で動く航空母艦のことを教えた。すると、チョコレートで汚れた髪の毛を近づけながら、「僕のアヒルは夜でも泳げるのだ。太陽なんか関係ないよ」と、エリベルトは軽蔑した口調で言った。

エリベルトはチョコレートでベトベトの絵を私に返したので、私は航空母艦にいくつか大きいバッテリーを加えた。一方、エバはチョコレート争奪戦の停戦を提案し、話をせがんできた。私は手と鉛筆についたチョコレートをきれいに取り除き、おもむろにパイプに火をつけた。エリベルトとエバはしゃがみ込み、私の口から語られる老アントニオが話したお話に耳を傾けた。そのお話の題は…



ラ・レアリダーの水たまり

雲と雨のお話

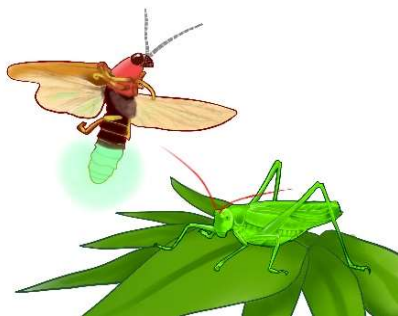
一陣の熱い突風で、われわれは大地に叩きつけられた。雷が近くの木に落ちた。黒い空を切り裂き、カギ状の稲光がきらめきだした。その光で、老アントニオが無事かどうかを確かめようと、私は彼を探した。老アントニオは、私と同じように泥まみれで、大急ぎでナイロン製テントを広げた。雨からわれわれの身を守るためだった。新米の私はその雨が絶対にやまないように思われた。私は彼のそばに行って手伝った。そして座り込み、雨がやむのを待つことにした。老アントニオはプラスチック製のテントから出て、木々のあいだに姿を隠した。やがて、彼は

落雷で砕かれた小枝の破片をもって帰ってきた。その一部はまだ火がついていた。老アントニオはカマドをあっという間に造りあげた。このようなとき、すなわち心の底までずぶぬれになったとき、彼が山でいつもすること、つまり、いちばん大事なものを取り出した。タバコである。

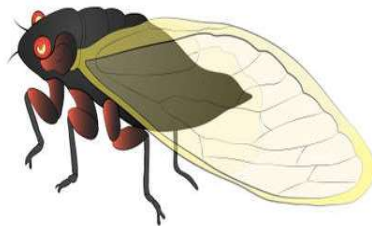
私はパイプとタバコをビニール袋に入れて運ぶということを知得した。私は老アントニオのタバコが乾き、彼がトウモロコシの包葉で巻きタバコを作り、言葉の儀礼が始まるのを待った。われわれの手や頬を撫ぜる熱とともに、老アントニオの唇から吐き出される紫煙と同じように、湿りけのある対立に関するお話しが紡ぎだされた。

大地が光をもち、コウモリの男女が、真実と愛が歩むことになる道を歩むようにするため、最初の神々、世界を誕生させた神々は死ぬことになった。しかし、その直前、最初の神々、七つの神々は、死ぬときも、死なないようにすることを夢見た。最初の七つの神々、世界を誕生させた神々は、ボロ雑巾のように漂っていた。どこであろうと漂っていた。そのため、白色だった彼らの夢も大地の色で汚れていた。灰色と少しばかりの茶色がこれらの「雲」に付着した。最初の神々、世界を誕生させた神々は、死ぬときにも死なないようにしようとした。そのことが真の男女の記憶に強く残った。

七つの神々は生きるために死んだ。それ以来、痛みをともなう大なる苦悩が、世界全体の歩みのなかに登場することになった。最初の両親、世界を誕生させた神々がなくなった苦しきは、途方もない痛みをともなうものだった。あまりにも痛いので、水は一方の側に移動し、苦悩をその内側に集めて小さくなった。痛さのあまり、大地は干上がった。痛いと言いながら、真の男女の腹や欲望は乾燥していった。歩む道に生える植物も苦悩を覚えた。昼も夜も苦悩を感じ、苦悩のあまり叫び声をあげた。夜になるとコオロギとホタルコメツキが、昼になるとセミとカブトムシが苦悩の悲鳴をあげた。すべてのものが苦悩を感じた。石も苦悩を感じ、希望も苦悩を感じた。



ホタルコメツキとコオロギ



セミ



カブトムシ

苦悩は山まで到達した。そこは、最初の神々、世界を誕生させた神々、生きるために死ななければならなかった神々の夢、つまり雲たちが休息する場所だった。その苦悩が到達したため、雲は目覚めた。雲たちに痛みを感じさせた苦悩は、ゆっくりと目覚めた。ダンボール箱のように大量にある灰色の雲は、ゆっくりとしか動けなかった。夜の山中で多くの愛や苦悩を体験した後、そうした愛や苦悩によって骨までが痛みを感じる時のように、雲はゆっくりと目覚めた。

そのとき、最初の神々の夢が語りはじめた。大なる苦痛によって世界が干上がった。その様子を雲たちは目のあたりにした。真の男女を苦しめる痛みをともなう苦悩の問題を解決する方法はないものか。このように雲たちは思案をめぐらした。

すぐさま六つの雲の言葉のなかで、怒りが込み上げてきた。雲たちは汚い言葉で批判し、声高に話した。そして、雲たち、つまり最初の神々の夢が怒っているとき、天空は雷鳴をとどろかせた。言葉による喧嘩はそこまでだった。やがて、おたがいに殴りあいだした。いちばん偉大なのは誰かをめぐって闘うという考えには打ち勝てないと心の底で思っていた。こうして雲たちは激しく衝突した。衝突が繰り返され、火が発生した。山の上では稲妻が見えた。真の男女は、恐ろしそうに稲妻を眺め、山中の激しい闘争で生じた雷鳴を聞いた。

雲は三対三に分かれて戦った。その最中、残ったひとつの雲、最初の神々の夢のひとつが、自

分たちがどこからやってきたのか、世界を誕生させた神々は何をしたのかを思い出した。苦悩のため、その雲からは水が出だした。七番目の雲は一筋の涙を流して泣きだした。というのは、最初の神々は七つで、その夢も七つだったからである。

けんか好きの雲たちが繰り広げていた大論争に、涙という苦悩を抱えた雲は、「皆さんがけんかしている最中、私の苦悩で大地の苦悩を癒そうとしました」と、大声を出して割り込んだ。

「おまえはとても小さい。大地で苦しむ苦悩を癒せるはずない。一人では何もできない」と、ほかの雲たちは七番目の雲に言った。しかし、七番目の夢のなかで苦しんでいた涙という苦悩は、「私の苦悩によって、大地の苦悩を軽くするつもりです」と、繰り返した。

そして、下方に見える山を目指して飛んでいった。自分の湿った苦悩で大地の苦悩と気軽にキスするためだった。七番目の雲のなかで別の涙という苦悩が作られた。ほかにも多くの涙という苦悩が作られた。これらの涙は、最初の涙、最初の苦悩を追いかけ、つぎつぎ落下した。「僕も行く」と、言ながら、涙という苦悩は、大地にキスして、癒すために出かけた。痩せた七番目の雲は、多くの苦悩を抱え、流れる涙まで出しながら、苦しんでいた。

それを見たほかの六つの雲たちは、喧嘩を中断した。彼らも苦しみ、雨となって、大地の乾燥した苦悩の上へと降り注ぎだした。こうして、雨が降りだした。大地で苦悩を抱え苦しんでいる苦悩を軽減する涙の形をした苦悩は、とても大きかった。この雨によって大地は癒され、あれほどあった苦悩も最初の涙で治ったと言われる。

真の男女はこの様子を見ていた。そして、癒しながら苦しむことのない喧嘩は、人の役には立たないということを彼らは心のなかで気づいた。それ以来、苦しみが三回ならば、癒しは三回を三度という風になった。真の男女の大地においては、三ヶ月の間、暑さで苦しむ。しかし、その後、三ヶ月が三回分、つまり九ヶ月の間、癒しの雨が山中では降ることになる。山は真の男女の永遠の家であり、…いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々の夢が休息している場所である。

最初の神々、世界を誕生させた神々は教えている。すでに死んだ者も生きている。死者たちの苦しみと夢のなかで、大地の痛みをともなう苦悩を癒している。もともとそうだった。大地を癒すための雨が降らないなら、その戦いは不毛である。そのことを真の男女に覚えてもらうため、山のいちばん高い所で雷鳴はとどろき、稲光が光っている。雲は激しい戦いを展開し、疲れきっている。世界が誕生したときのように、戦いとはキスで大地を癒しながら死ぬためのものである。それがわかるまで、雨は降らない。名前や顔をもたず、大地の苦しい痛みをともなう苦悩から永遠に癒される特権を求め、真の男女は戦っている。

お話が終わったとき、私の絵がないことに気づいた。馬方アリの列がチョコレートの包みと勘違いして絵をもっていったと、エリベルトは笑いながら教えてくれた。その行き先はわからないが、海でないことは直感的にわかる。私の新品の航空母艦はアリの巣に埋没した。それを知った私はとても悲しくなった。私を気の毒に思ったのか、エリベルトは小さなアヒルの絵をくれた。チョコレートを頬張った声で、「ラ・レアリダーで暮らすときのために、この小さなアヒルをあげるよ」と、彼は言った。



切った葉を運ぶ馬方蟻の列

13 質問のお話（1994/12/13）

私は何の話をしていただけだっけ。ああ、そう。エバのためのキャンディーをエリベルトがもち去ったことだった。キャンディー入りの袋をキャンプ中で捜索せよと、私はラジオを通じて命令した。それは私に贈られたもので、エバにプレゼントするために保管していたものだった。すると、当のエバがタマールの殻をもって現われた。



トウモロコシの包葉で巻いたタマール

「お母ちゃんが行ってこいと言ったの。今日は私の誕生日だって」と、言ってエバは私をじっと見つめた。10歳を越したら戦争のひとつでも起こすのでは。そのぐらい思い詰めた目付きだった。敬意をこめて感謝しながら、「プレゼントのほかに何かしようか?」と、私はたずねた。

「お話をして」と、エバは依頼とも強要とも思われる口ぶりで言った。

私は冷汗が出だした。恨みがましい褐色の視線ほど恐ろしいものはない。私がかためらっていると、映画『聖人と狼男』のように、エバの視線はみるみると変わっていった。気分を損ねているのを終わらせようと、私はあれこれ努力した。

そこに、「副司令がもう怒っていない?」と、確かめようとエリベルトがやってきた。蹴りを入れられるか計算する時間を稼ぐため、私はほほえむことにした。エリベルトがずいぶん小さくなったキャンディーの袋をもっているのに気づき、エバは誰にももらったのとたずねた。

「ふくちれいだよ」と、エリベルトは甘味料でネトネトした声で答えた。

彼が言いたかったのが「副司令」だったことに気づいたのは、エバが私を振り返って、「ねえ、私のプレゼントは?」と、言ったからである。プレゼントという言葉を知ると、エリベルトは眼をむき、空になったキャンディーの袋を捨て、エバといっしょに近づいてきた。

「そう、僕たちへのプレゼントは?」と、辟易させるような皮肉っぽい声で言った。

「君たちへのプレゼントだよ?」と、答えながら、彼にくれてやる蹴りの数を計算した。だが、すぐ近くをアナ・マリアが巡回しているのが目に入ったので、蹴りを入れるのを断念し、「隠したよ」と、答えた。

「どこに?」と、すべての疑念を一掃するかのように、エバがたずねた。

一方、エリベルトは私の言葉を挑戦であると解釈した。すぐに私のリュックを開けだした。シート、高度測定器、コンパス、タバコ、弾薬箱、靴下の片方を脇に投げ捨てた。

「ここにはない!」と、私はきっぱり叫びながら彼を制止した。

すぐさまエリベルトはモイのリュックに向かった。そしてリュックを開けながら言った。

「プレゼントがどこにあるのか。お話をしてもらって占なわなくっちゃ」

モイ司令官のリュックの紐はきつく縛ってあった。独力で開ける気をなくしたのか、エリベルトは私の方きて横に座った。エバも同じようにした。ベトとトニーータも近づいてきた。占いに手を出すという問題の厄介さを計測するための時間を稼ぐため、私はパイプに火をつけた。

そのとき、老アントニオが近づいてきた。そして、彼が贈ってくれた銀製の小さなサパタ像をサンダルで指し示す格好をしながら、今度も、私の口を通じて、次のようなお話を繰り返した。

質問のお話

この山中の寒さは厳しい。10年前の1月、夜明けがやってくる頃、私はアナ・マリアとマリオをともなって探索に出かけた。二人はゲリラ部隊に編入され、当時は歩兵隊の中尉であった私の指揮下に入ったばかりだった。私の任務は、私が別の人から教えてもらったこと、山のなかで生きる術を彼らに教えることだった。

その前日、私は初めて老アントニオと出会った。二人とも本当のことを言わなかった。彼はトウモロコシ畑を見回っていると言った。私は狩猟していると言った。おたがいが嘘をついていること、それがばれているということを、二人とも承知していた。アナ・マリアに探索を続行させ、私は川の方へと引き返した。老アントニオにもう一度会うことを期待していた。また、前方に聳えている高い丘をクリノメーターで地図に記入できるかを確かめるためだった。彼も同じことを考えていたはずだ。最初に出会った場所に彼も現われた。

昨日のことのようだ。老アントニオは地面に腰をおろした。緑色の苔を背負い子に詰めながら、タバコを巻きだした。私は彼の向かいに座りパイプに火をつけた。口火を切ったのは老アントニオだった。

「おまえさん、狩猟なんかしていないね」

「あなたもトウモロコシ畑の見回りではないですね」と、私はやり返した。

生まれてからまだ二度しか会ったことがなく、この年齢不詳で豚の皮膚のように陽に焼けた顔の人物に対して、私は敬意を払い、あなたと呼びかけることにした。

老アントニオはほほ笑みながら付け加えた。

「あんたたちのことは耳に挟んでいる。溪谷部では、盗賊だと言われている。わしの村でも、こっち方面に来るのではないかと、誰もが不安がっている」

「あなたも、われわれが盗賊だと思っていますか」と、たずねた。

老アントニオは渦巻き状の大きな煙を吐きだし、咳をしながら頭を振って否定した。

私は意を決し、質問した。「われわれは何者だと、思いますか？」

「自分から名乗ってほしいね」と、老アントニオは私の目をじっと見据えた。

「話せばとても長くなるのですが」と前置きして、私は話しはじめた。

サパタとビリャ、革命、土地、不正、飢餓、無知、病気、弾圧などすべてについてである。

「われわれはサパティスタ民族解放軍です」と言って、私は話を終えた。



老アントニオは話しのあいだずっと私を凝視していた。顔に何か変化のきざしがあるかなど、私は期待していた。紫煙を吐いて咳をした後、おもむろに老アントニオは、「そのサパタについてもっと話してくれないか」と、言った。

アネネクイルコの事件から説明を始め、アヤラ綱領、軍事作戦、民衆の組織化、チナメカでの裏切について話した。話が終わっても、老アントニオは私を見ていた。

「それはちがうな」と、彼は言った。

驚きのあまり口ごもった私は、「どちらがうのですか？」と、しか言えなかった。

「そんな話ではない」と、断言し、「サパタの本当の話をしよう」と、彼は言った。

タバコと巻紙を取り出すと、老アントニオは話しはじめた。私のパイプと彼の巻きタバコの煙が入り混じりって一体化するのと同じように、そのお話には古い時代と新しい時代が結合し、混じりあっていた。

世界を創ったいちばん最初の神々は、夜にあちこちと、うろつき回っていた頃、イカルとボタンと呼ばれる神々に関するたくさんの歴史が作られた。

この二人は一体の神だった。イカルという神を裏返せば、ボタンという神の姿が現われ、ボタンを裏返すと、イカルが現われた。二人はおたがいに逆の性質をもっていた。一方は五月の川面の朝焼けのように光に満ちていた。もう一方は寒い夜や洞窟のなかのように暗かった。

しかし、両者は同じものだった。二つでひとつだった。片方があることで、もう一方ができていた。一体である二人の神は歩かなかった。動かず、いつもじっとしていた。

「さて、何をしようか？」と、二人の神はたずねた。

「ここにもとのままじっとするのでは、人生はあまりに悲しすぎる」と、存在において一体である二人の神は嘆いた。

「夜は歩まない」と、イカルは言った。

「昼も歩まない」と、ボタンが言った。

「歩くことにしよう」と、片方が言った。

「どうやって？」ともう一方がたずねた。

「どこへ？」と、別の神がたずねた。

最初にどうやって？ 次にどこへ？と質問するために、自分たちが少しばかり動いたことに気がついた。少しだが動いたことがわかった。二人で一体である神はうれしくなった。二人は同時に動きたかったが、それはできなかった。

「どうしたらいいのだろう？」

ひとりがまず顔を出し、次にもうひとりが顔を出した。すると、またほんのちょっと動いた。ひとりが先におこない、後でもうひとりがすると、動けるということに気づいた。そして、動くため、最初にひとりが動き、後でもうひとりが動くことに彼らは合意した。

こうして動きだした。しかし、動くためにどちらが先に動いたのかは、どちらも覚えていない。動けたことに満足して、二人は言った。

「動けたのだから、どちらが最初に動いたのかは、どうでもいい」と、言いながら、一心同体の二人の神は笑った。まずは踊りを踊ることになった。そして踊りだした。ひとりが一歩、もうひとりが次の一歩といった形で、二人は踊りだした。二人の神はこうして出会えたことに満足し、ずいぶん長いあいだ踊りつづけた。

あまりにも長く踊ったので二人は疲れた。そこで、ほかに何かできることはないかと、彼らは調べた。しかし、最初の「どうやって動こうか？」という質問に対する回答は、「いっしょだが、当然、別々に」と、いうことに気づいた。彼らには、その質問はさほど重要でなかった。

自分たちが動いていることに気づき、二つの道があることがわかったとき、新たな問題が浮かんだ。一方の道はとても短くすぐ到着でき、かなり近いところで終わることがはっきりしていた。とにかく、彼らは自分の足で歩きたかった。短い道など歩きたくないと言って、すぐさま長い道

を歩くことにした。すぐさま、彼らは歩きだそうとした。

長い道を歩むことを選んだとき、「この道はどこに通じているのだろうか？」という疑問が浮かんだ。長いあいだ、彼らは答えを探した。この長い道を歩んでいけば、どこへ通じているかは、そのうちにわかるだろう。そんな考えが一心同体の二人の頭に浮かんだ。考えるだけでは、長い道がどこへ通じるのかは少しもわからない。

「では、その道を歩くことにしよう。では」と、二人で一体の神は言った。

こうして、最初にひとり、次にもうひとりと、彼らは歩きはじめた。長い道を歩むには時間がかかる。それぐらいしかわかっていなかった。しかし、「長く歩くためには、どうしたらよいのだろうか？」という新たな質問が浮かんだ。少しばかり彼らは考えた。

しかし、イカルは昼には歩けないと、ボタンは夜に歩くのは恐いと、言った。彼らはしばらく泣きじゃくった。やがて大声で泣きわめく二人の声はやんだ。二人は合意した。イカルは夜なら上手に歩くことができる。ボタンは昼なら上手に歩ける。それがわかったので、夜はイカルがボタンを担いで歩けばよい。こうして昼も夜も歩きつづけるための回答を手にした。

それ以来、神々は質問をしながら歩いた。けっして立ち止まらず、到着することも、立ち去ることもなかった。質問をすることは、立ち止まりじっとするだけでなく、歩むためにも役立つ。真の男女はそれを理解した。それ以来、真の男女は、歩むために質問し、到着するために旅立ち、出発するために出会いの挨拶をするようになった。彼らはけっして一ヶ所に留まらなかった。

私は短くなったパイプのタバコをくわえ、老アントニオが続けるのを待った。だが、彼はこれ以上話しを続ける気はないようだった。何か深刻な話を打ち壊すことを恐れながら、「ところで、サパタは？」と、たずねた。

老アントニオはほほ笑みながら、「もう、わかっただろ。ものごとを知り、歩むためには、質問をしなければならない」と、言った。

老アントニオは咳をしながら、いつ巻いたのか、次のタバコの火をつけた。唇から立ち上がる紫煙の合間を縫って、大地に播かれる種子のように、彼の言葉がこぼれていった。

あのサパタはこのあたりの山から現われた。この土地の生まれではない。そういうことだ。ずっと現われた。善い人を驚かすためではなく、長い道を歩む途中、休息するためにここに来た。それがイカルとボタンである。彼らは一体になっていた。イカルとボタンは長いあいだ二人でいっしょに歩んできたので、二人で一体となり、夜も昼も一体になっていた。ここに到着したときは、一体になり、サパタと名乗っていた。

そのサパタは言った。やっとここに到着した。この長い道がどこに通じているのか、その回答を探してきた。その長い道は、ときには光、ときには闇にあった。だが、その本質は同じだった。ボタン・サパタとイカル・サパタ、白いサパタと黒いサパタというふたつの道だった。しかし、真の男女にとっては同じ道だった。

老アントニオは背負い袋からビニール袋を取り出した。袋から 1910 年に撮られた非常に古いエミリアノ・サパタの写真が出てきた。サパタは腰つけたサーベルを左手で握っている。右手で銃を支え、胸には二つの弾薬帯をタスキ掛けにし、白と黒の二色の飾り帯を左肩から斜めに掛けている。じっとしているのか、歩いている人のように立っている。その視線は、「ここにいる」または「そっちに行こう」と言っているようだ。二つの階段がある。暗闇から出ている階段には、何かの奥底から抜け出したかのように褐色の顔の数名のサパティスタ兵士がいる。別の明るい階段には誰もいない。その階段はどこに通じ、どこからきているのかわからない。

私がこうした細かいことをすべて知っていたかのように言ったとしたら、嘘をついていることになる。このことについて注意を喚起させてくれたのは、老アントニオである。写真の裏には次のような文字が読み取れる。



アウグスティン・V・カサソラ撮影のサパタ

エミリアノ・サパタ将軍、南部軍指揮官（スペイン語）
エミリアノ・サパタ将軍、南部軍指揮官（英語）
エミリアノ・サパタ将軍、南部軍指揮官（フランス語）
1910年。アウグスティン・V・カサソラ撮影

「この写真に質問した。こうしながら、ここにきた」と老アントニオは私に言った。咳とともに吸い殻を投げ捨て、彼は写真を私に手渡して、言った。

「おまえにやる。彼に質問するやり方を習得し…道を歩めるように」

「到着したとき、お別れを言うておくほうがよい。そうすれば、別れるときにそれほど傷つくことはない」と、老アントニオは言った。

そして、手を差し伸べて言った。

「もう行くよ。つまり、今着いたばかりだ」

それ以来、老アントニオは「さようなら」と挨拶しながら近づき、別れるときには、「今着いたところだ」と言いながら、手を挙げて遠ざかった。老アントニオは立ち上がった。

ベト、トニーータ、エバ、エリベルトも立ち上がった。私はサパタの写真をリュックから取り出して、皆に見せた。

「これから山に登るところなの？それとも、下だるとこ？」と、ベトがたずねた。

「歩いて前進するの？それとも、ここに留まるの？」と、エバが聞いた。

「剣は抜くの？それとも、しまっておくの？」と、トニーータがたずねた。

「もう発砲したの？それとも、これから？」と、エリベルトが聞いた。

84年前に撮影され、1984年に老アントニオが私に贈ってくれたこのサパタの写真に関して、こどもたちからこんなに質問が出たことに、私は驚かざるをえなかった。

アナ・マリアにこの写真を贈ろうと決める前、私は最後にその写真を見つめていた。ひとつの疑問が湧いた。これは昨日のわれわれなのか？それとも、明日のわれわれなのか？

質問攻めの雰囲気の中で、4歳が終わり5・6歳になったばかりのこどもとしては驚くべき一貫性で、エバは口走った。

「で、私へのプレゼントは？」

「プレゼント」という言葉で、ベト、トニータ、エリベルトは同じ反応をした。

「で、私のプレゼントは？」と全員が叫びだした。

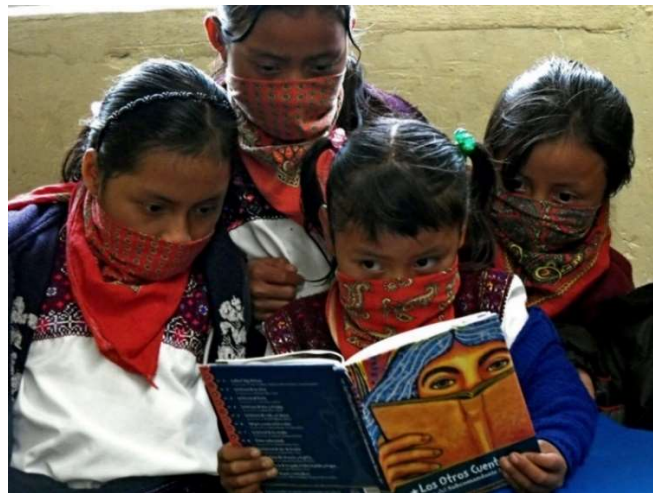
彼らは私を追い詰め、生贄にしようとした。

そのときアナ・マリアが現われた。状況こそ異なっているが、一年前のサンクリストバル市のときと同じように、彼女[1994年1月1日のサンクリストバル占拠部隊の責任者]は、私を救ってくれた。

アナ・マリアは、とても大きなキャンディー、本当に大きなキャンディーの袋をもっていた。

「ここに副司令のプレゼントがあるわよ」とアナ・マリアは言った。

そして「あなたたち男連中は、私たち女がいないと何もできないのね」という顔で私を見た。こどもたちは、キャンディーの分配をめぐり喧嘩するしかないという結論になったようだ。



『別のお話』に目を通すサパティスタのこどもたち

アナ・マリアは軍隊式の敬礼をしながら、「報告。部隊の出発の用意が完了」と、言った。「了解。朝なのでいつもどおり出発」と、ピストルをベルトに挟みながら答えた。アナ・マリアは退いた。

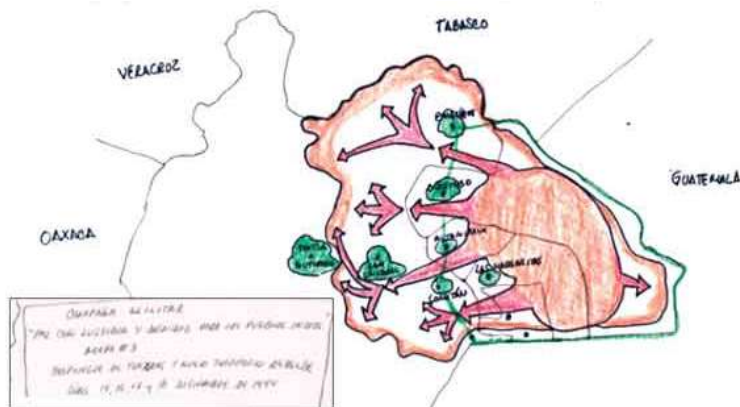
「ちょっと待って。サパタの写真をあげるよ」と言った。

「何のため？」と、彼女は聞き返した。

「われわれがどこに向かうのか知るためさ」と、私はカービン銃を点検しながら答えた。上空を一台の軍用機が旋回している……。

14 言葉のお話 (1994/12/31)

目を凝らして、霧のなかを見つめよう。引き続いて、話されていることにじっと耳を傾けよう。人類史上でもっとも権力をもち、もっとも多くの犯罪に手を染め、もっとも厚顔無知な連中が巣くっている社会階級、つまり金融資本家階級の卓越したメンバーである高名な銀行家連中たちが、ところかまわず悪態の言葉を吐いている。「メキシコ経済の問題 [1994年12月末のサパティスタによるチアパス州内の30自治地区設立宣言を契機に起きたテキーラショックといわれるメキシコ・ペソの暴落] は副司令官マルコスと呼ぶことにする」という死刑宣告が発表された。お金もちどもはこの「問題」を除去するために必要とされる銃弾の値段を計算しだした。



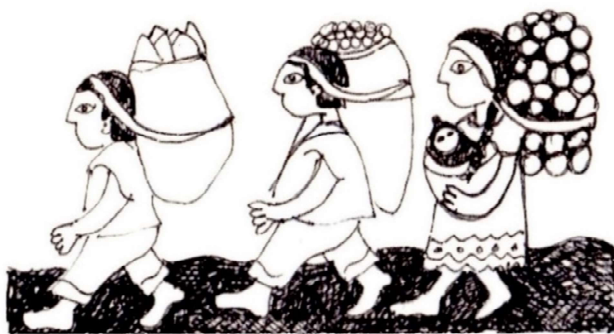
1994年12月19日の軍包圍網突破の状況を示す図

銀行の紳士連中が判決文を発表していた頃、息子のアントニオはメキシコ南東部の山中で雨と寒さに震えていた。息子のアントニオは震えていた。恐いからでなく、寒さを払い除け、雨から身を守り、夜に明かりをとす火が、今夜もないからである。だから彼は震えている。

マルコスが息子のアントニオに近づくと、その横に腰をおろし、「寒いな」と言った。息子のアントニオは黙ったまま座っている。雨と寒さに覆われた夜の帳をさらに暗くする黒いビニールシートの下には、同一の人格である二人の男が座っていた。暖をとるものは何もなかった。

しかし、別の暖かさ、つまり言葉を手にして、老アントニオが近づいてきた。老アントニオは三人の中央の大地に言葉をおくと、話した。女友だちやつれあいを抱きしめるような言葉で、暖かさと慰めをもたらした。微かな温もりが、胸や目に沁みこむ。チアパスの12月の寒い夜、息子のアントニオとマルコスはまどろんでいる。

自分の夢を紡ぎ、夜を明かすため、老アントニオは話す。少し前から、息子のアントニオとマルコスの手を取って、自分の声を伝える。話は後戻りしながら、この寒い夜、このまどろみのときから10年前のときへと飛んでいく。その時間が辿りつくのは…



言葉のお話

夜を撤して彼らは話しつづけた。

「ランプの電池がきれた」と、息子のアントニオはイライラしながら言った。

「リュックに電池を忘れた」と、マルコスは時計を見ながら答えた。

席を外していた老アントニオは、ワタピル椰子の葉をもって戻ってきた。黙って小屋を作りだした。息子のアントニオとマルコスも手伝った。二股の木の枝と蔓で徐々にひさしが完成した。その後、薪を探しに出かけた。少しばかり前から、夜になると雨が降りだした。老アントニオは手慣れたしぐさで火種を起し、すぐに勢いよくたき火が燃えだした。マルコスと息子のアントニオはできるだけ体を楽にしようと、たき火の脇に寝そべった。老アントニオは膝を組んで座ると、次のような歴史や伝承を語りながら、夜を撤して夢を紡いでいった。

真の言葉は世界を創造した最初の神々とともに生まれた。最初の言葉、すなわち最初の火から、数多くの真の言葉が創られた。農民の手でトウモロコシの実がバラバラと外されるように、別の言葉ができた。最初の言葉は三つだった。その三つの言葉から別の三つの言葉が生まれる。これが三千回繰り返された。こうして世界は言葉でいっぱいになった。

世界を創造した最初の神々によって、ひとつの大きな岩が踏み固められた。何度も踏み固められ、岩の表面は非常に滑らかになり、鏡のようになった。

この鏡にむかって、最初の神々は最初の三つの言葉を投げつけた。鏡は投げつけられた言葉をそのまま返すことはしなかった。必ず別の三つの言葉を投げ返した。もっと多くの言葉が帰ってくるように、当分の間、神々は言葉を鏡に投げつけた。それは神々が飽きるまで続いた。

やがて、神々に素晴らしい考えが浮かんだ。神々はもうひとつの大きな岩の上を歩き回り、もうひとつの鏡を磨きだした。その鏡を最初の鏡の向かいに置いた。そして、三つの言葉を最初の鏡にむかって投げつけた。最初の鏡は、投げつけられた言葉とは異なる三つの言葉を二番目の鏡にむかって、自分の力で三回も投げ返した。二番目の鏡も、受けた言葉の数の三倍の言葉を最初の鏡にむかって、三回も投げ返した。

こうして次から次へと新しい言葉が生み出された。こうして真の言葉は生まれた。それは二枚の鏡から生まれた。すべての言葉、言語に先行する最初の三つの言葉は、民主主義、自由、正義である。

「正義」は罰を与えることではない。それぞれの人にふさわしいもの、すなわち鏡に映っている自分の姿、つまり自分自身を受け取ることである。死、貧困、搾取、専横や傲慢をもたらす者は、その報いとして非常に多くの苦悩や悲しみを抱え、人生を歩むことになる。労働、生命、闘争をもたらす者、仲間となる者は、顔、胸、進路を照らすかがり火をほうびとして与えられる。

「自由」は好き勝手をする事ではない。鏡を見つけ、真の言葉を歩ませるため、あなた自身が気に入った道を選ぶことである。どの道を選ぶにせよ、あなたは鏡を見失ってはならない。あなた自身、あなたの属性、そしてほかの人々の属性を裏切ってはならない。

「民主主義」は複数の考えからうまく合意を作り出すことである。全員が同じ意見をもつことではない。すべての考え、あるいは大多数の考えから、少数の考えを排除することなく、大多数の人にとってよいと思われる合意をいっしょに模索し、そこへ到達することである。命令を下す言葉は大多数の言葉に従属しなければならない。支配権力は特定の個人の意志ではなく、集団の意志を反映する言葉をもたねばならない。鏡は歩む人、そして歩む道のすべてを映すだろう。鏡は自分の内面やまわりの世界にむかって考えを紡ぎだす拠り所になるだろう。

この三つの言葉からすべての言葉が生まれた。真の男女の生や死も、この三つの言葉と繋がっている。それは世界を創造した最初の神々が、真の男女に与えた相続財産である。相続すべき財産というより、担うべき重い責任と言ったほうがいい。



自由、民主主義、正義という標語

何事にかぎらずよくあるように、この重い責任を道の途中で放り出す者や何もせずに諦める者がでてくる。この相続財産を投げ出す人は、自分の鏡を割り、永遠に盲目で歩むことになる。彼らは、自分が何者か、どこからきて、どこに向かうのかを知ることはできない。

だが、最初の三つの言葉を相続財産としてもちつづける者たちは、トウモロコシ、コーヒー、薪を担ぐときと同じように、背中の重い荷に腰を曲げ、しっかりと大地を見つめて歩む。大きな荷を背負って小さくなり、重い荷でいつも下を見ている。だが、真の男女は偉大であり、上を見つめている。尊厳を失わず、真の男女は見つめ歩む。そういうことだ。

真の言葉を失わないため、最初の三つの言葉をいつも大切にすべきである。世界を創造した最初の神々はこう言った。ある日、言葉を映す鏡が壊れるかもしれない。生みだされた言葉も、鏡と同じように壊れるかもしれない。世界は話せる言葉をなくし、沈黙するかもしれない。だから、生きるために死ぬ直前、最初の神々はトウモロコシから生まれた男女に、三つの言葉を大切にしてほしいと頼んだのである。それ以来、真の男女はこの三つの言葉を相続財産として大切に護っている。忘れられないように、三つの言葉は、歩み、闘い、生きていく。

二人が目を覚ますと、老アントニオはテペスクイントレを調理していた。たき火の薪は赤々と燃えていた。同時に、雨と老アントニオの背中の汗で湿った薪も乾きだした。夜が明け、目が覚めると、息子のアントニオとマルコス、両肩に何か重いものを感じた。それ以来、どのようにその重い荷を軽くしようかと二人は模索している。今もそうしている。

息子のアントニオは目を覚まし、大きなあくびをした。そして、マルコスを揺り起こした。マルコスはパイプをくわえたまま、オコーテ松の根元に座って眠り込んでいた。ヘリコプターの騒音と猟犬の吠える声が、朝の静けさと夢を引き裂いている。また、歩きつづけなければならない。…そして、夢を見つづけねばならない。



テペスクイントレの料理



テペスクイントレ

第2部 われわれの後ろにはあなた方であるわれわれがいる



第2部 1995～96年 われわれの後ろにはあなた方であるわれわれがいる（*は老アントニオが登場しないお話）

- 1 大きな敵を選ぶこと
- 2 鏡のお話
- 3 老アントニオの教え
- 4 剣、木、石、そして水のお話
- 5 夢のお話
- 6 虹のお話
- 7 フー・メン*
- 8 種を播く*
- 9 ドニャ・ファニータ
- 10 夜の太陽を探す
- 11 道と道を歩む人のお話
- 12 人と空腹のお話
- 13 始まりと終わりのお話
- 14 道を創るお話
- 15 山に生きる死者たち*
- 16 遠くと近くを見つめること
- 17 雨

1 大きな敵を選ぶこと (1995/5/11)

あなた [エドゥアルド・ガレアーノ] に話しかかったのはこのことではない。あなたからお話していただくため、お話しておきたかった。老アントニオは私に教えてくれた。人の大きさは、闘うために選んだ敵の大きさに比例し、抱く恐怖が大きくなるほどその存在は小さくなる。

雨の降る5月の昼下がり、タバコと言葉が支配している時間、老アントニオは私に言った。

「大きな敵を選ぶのだ。そうすればおまえはその敵と対決できるように大きく成長する責任を引き受けざるをえなくなる。おまえの抱く恐怖を小さいものにするのだ。恐怖が大きければ、おまえが小さくなってしまうからだ。

政府はメキシコの人民を恐れている。だから、たくさんの軍隊と警官を抱えている。とても大きな恐怖を抱いている。つまり、政府はとてもちっぽけな存在である。われわれが政府に抱く恐怖とは、忘れられることである。われわれは、苦悩と血の力によって忘却される恐怖を小さくしてきた。だから、われわれはずいぶん大きな存在である」

このことをどこかで書いて話してほしい。老アントニオがこのお話をしていたことを明らかにしてほしい。これまでわれわれには老アントニオに相当する存在がいた。あなたにまだそのような存在がないのなら、私の老アントニオをお貸ししたい。南東部の先住民は、自らを大きな存在にするため、自らの抱く恐怖を小さくしている。自らが成長し、よりよき存在になる責任を引き受けるため、並はずれた敵を選んでい。そのことを説明してほしい。



1996年7月の大陸間集会でのエドゥアルド・ガレアーノ

2 鏡のお話 (1995/6/9)

1985年5月。夜明け前。鏡のような湖面に月の姿が映る。嫉妬に駆られた湖が小波をたて、月の顔は皺だらけとなる。われわれは丸木船に乗り込み、湖の対岸へ向かうルートを進む。湖を横断するという私の決意と同じぐらい、丸木船は揺るぐことなく安定している。

自分が作った丸木船に乗らないかと、老アントニオは私を誘った。新月から満月を経て28夜、老アントニオはマチェーテと斧を使い、杉の長い幹を加工した。丸木船は全長7メートルもあった。丸木船は、セドロ、マホガニー、ウァナカストレ、つまりバリイなどで建造できる。そう説明しながら、老アントニオは列挙した各種の木を教えてくれた。老アントニオは木をひとつずつ私に示した。だが、その違いはよくわからなかった。私にとってどれも巨木だった。巨木の説明は、昼間に行われた。



セドロ



マホガニー



ウアナカストレ

今、いつもどおり夜明け前である。老アントニオが「ラ・マルコンテンタ」と命名した例の杉の丸木船でわれわれは湖を横断している。細長い棒で船を操りながら、老アントニオは「月に敬意を表しそう命名した」とつぶやいた。すでに湖の中央部まで達していた。風で湖面はクシですいたように波立ち、丸木船は上へ下へと揺れだした。風が鎮まるのを待つべきと判断し、老アントニオは船を流れるままにした。

「この波だと一撃で丸木船から放り出されるかも」とつぶやくと、彼は巻きタバコを一服した。そして、風でできた波と同じような渦巻き状の煙を吐き出した。ミラマール湖に点在する大きな岩礁のシルエットが、満月の光でくっきり映し出された。渦巻き状の煙を吐きながら、老アントニオは昔から伝わるお話を語りだした。

目前に迫る難破（船酔いか、恐怖かは不明）が気になり、私は彼のお話や物語を聞く余裕はなかった。彼にはそんな私を気にする様子はみじんもないことは、一目でわかった。丸木船の底に横になると、老アントニオは断りもなく話した。



ミラマール湖



ミラマール湖を行くラ・マルコンテンタ号

鏡のお話

月はこの場所、つまり密林で生まれた。このように最長老たちは話していた。ずいぶん昔のことだ。神々はずいぶん遊び、多くのことをして疲れてしまったので、ずっと寝つづけていた。世界は少しばかり静かになっていた。世界は沈黙していた。

しかし、小声でシクシクと泣く音が、彼方の山で響きだした。神々は山の真ん中にある湖をまったく忘れていた。大地にさまざまなものを分配したとき、小さな湖が残っていた。湖をどこにおけばいいのか、神々はわからなかった。そこで、広大すぎて誰も踏みいらない山の真ん中に湖を放置した。独りぼっちになった小さな湖は泣きだした。湖は泣きわめいた。

その泣き声を聴いた世界を支える母なるセイバの木は悲しみに包まれた。身に着けた白色

の大きなスカートをたくしあげ、セイバの木は小さな湖のいる所に近づいた。セイバの木は、泣きわめいて小さな水溜まりになった湖にたずねた。

「どうしたの？」

「ひとりぼっちはいや」と、小さな湖は答えた。

「私がそばにいてあげるから」と、世界を支えるセイバの木は言った。

「ここにいたくないわ」と、小さな湖は答えた。

「じゃあ、私が連れて行ってあげる」とセイバの木は言った。

「地面に接する低い所はいや。あなたのように高い所がいい」と、小さな湖は答えた。

「じゃあ、私の頭の高さまでもち上げるわ。だけど、ほんのちょっとよ。風がきつくて、あなたは吹き飛ばされるかもしれないからね」と、セイバは言った。

母なるセイバの木はスカートをできるだけたくしあげた。そして、小さな湖を両手でつかもうと前屈みになった。世界を支えるセイバの木は、母のような細心の注意を払いながら、小さな湖をその前髪の所においた。母なるセイバの木は、小さな湖が痩せ細っているのを知った。小さな湖から水が一滴もこぼれないよう注意しながら、セイバの木はゆっくり身を起こした。

高い場所に着くと、小さな湖は叫んだ。

「高い所はとっても気持ちがいい。世界を知るため連れてって！世界中を見たい！」

「お嬢ちゃん。世界はとっても大きい。高い所にいると落ちるよ」と、セイバは答えた。

「いいから連れてって！」と、小さな湖は言い張り、前と同じように泣きわめきだした。

母なるセイバの木は小さな湖が前のように泣きわめくのが嫌だった。そこで、彼女は頭の上に小さな湖を乗せ、まっすぐ歩きだした。

それ以来、女は水いっぱい瓶を頭に乗せ、一滴の水もこぼさず歩けるようになった。小川から水を運ぶとき、密林の女は、母なるセイバの木と同じ格好で歩く。背をすっと伸ばし、頭をあげて前方を見つめ、夏雲のように軽やかに歩む。気持ちを和らげる水を高々と頭に乗せて運ぶとき、女はこんなふうにするのである。

母なるセイバの木にとっては、歩くほうが都合よかった。当時の木々は、静かに落ち着いてはおらず、あちこち動き回っていた。しかも、こどもを作りながら、世界中を木で満たしていたのである。また、風はあたり一帯を吹き抜け、ヒューヒューと単調な音をたてていた。母なるセイバの木を見つけると、風は彼女のスカートを手でまくし上げ、からかう気になった。しかし、セイバの木は怒って、風に言った。



水を運ぶグアテマラの女性



セイバの木

「風さん、お静かに！泣き叫ぶ気まぐれな小さな湖を頭上に乗せて運ぶのが見えないの？」

そう言われ、風はセイバの木のカールした前髪という高い所に見え隠れしている小さな湖を見つめた。風にはその小さな湖がとても美しく見えた。彼女を好きになったのではないか。風はそう考えた。そこで風はセイバの木の頭上まで舞い上がり、小さな湖に聞こえるよう、素敵で言葉で話しはじめた。小さな湖は、予想どおり、風に告白した。

「私を世界中に連れていってくれる？それなら、あなたについていくわ！」

風は彼女の言葉にたじろがなかった。雲で一頭の馬を作り、背中に小さな湖を乗せた。とても素早く、いつ小さな湖が頭から連れ去られたのか、母なるセイバの木は気づかなかった。

小さな湖は、風とともに出かけて、楽しい時間を過ごすようになった。なんてきれいな娘なのだろうと、風は小さな湖にささやいた。いたずらっ娘はなんてかわいいのだろう。小さな湖が湛えている水で癒せない渴きとは、いったいなんだろう。なぜ小さな湖にこの身を沈めてしまわないのか。小さな湖を口説いて、夜明け前の奥まった場所で、彼女と愛を交わそう。風はいろんなことをつぶやいていた。

小さな湖は、風のつぶやくことをすべて信じるようになった。水の溜まった場所、つまり湖の上を通過するごとに、小さな湖は自分の姿を見つめ、湿った髪を整え、潤んだ眼を半開きにし、丸い顔に小波を浮かべ、媚びる格好をした。しかし、小さな湖はあちこち歩き回りたけだけだった。夜明け前の奥まった所で愛を交わすつもりなどなかった。

嫌気がさした風は、彼女を連れて上空へと舞い上がった。そこで大きな声を出して彼女をからかった挙げ句、彼女を放り出した。小さな湖は落下した。しかし、かなり高いところにいたため、落下にずいぶん時間がかかった。でなければ、激しい衝撃を受けたにちがいない。小さな湖の落下を眺めていた星々は、小さな湖に駆け寄り、星の光の切っ先で湖を突き刺した。七つの星は、両脇をシーツのように組み、小さな湖を捕まえると、ふたたび天空高く放り上げた。

小さな湖は落下の恐怖で青白くなった。大地に降りたくない小さな湖は、そばにいるように星々をお願いした。

「いいよ。だけど、われわれが行く所へいっしょに行かないとダメ」と、星たちは答えた。

「はい。あなたたちといっしょに私は行くわ」と、小さな湖は答えた。

だが、いつも同じ道ばかり歩くのが悲しく、小さな湖はまたヒーヒーと泣きだした。

神々は彼女の泣き声で目覚めた。いったい何が起きたのか、どこから泣き声が聞こえるのかそれを探るため、神々は出かけた。そして、神々は七つの星に引かれて夜を横断している小さな湖を発見した。ことの成り行きを知った神々は怒りだした。神々が湖を創ったのは、天空を歩むためでなく、大地にいるためだったからである。

小さな湖のいる場所に赴くと、神々は言った。

「おまえはもう湖ではない。湖は空にはおれない。だから、おまえを地上には降ろすことはしない。空にずっと居なさい。おまえは『月』と名乗りなさい。媚びと自惚れの罰として、大地で光を留める場所である井戸に向かって、いつまでも光を投げかけなさい」

こうして星々の輝きや活力が消えたとき、水を飲みにくるように、神々は大地に光を留めるための大きな円い穴を作った。それ以来、月は自ら光を発さず、光を反射するだけの鏡になった。満月になると、星々が水を飲む大きな光の穴の真向いで、月は光を反射している。光を反射する鏡、それが月である。だから、月が湖の正面を通過するとき、鏡が鏡を見つめることになる。それを望んでいなかった月は満足も、怒りもしていない。よくない満足をしている。

神々は、小さな湖を甘やかして連れ歩いたかどで、母なるセイバの木も罰した。セイバの木が出歩かないように、歩くことを禁じたのである。また世界を担ぐことも命じた。さらに、泣きわめく声を聞いても悲しくならないように、セイバの木に二重の皮膚をまわせた。それ以来、石のような肌をした母なるセイバの木は、ずっと聳え立ち、動く気配はまったくない。セイバの木が少しでも動けば、世界は墜落する。

「まあ、こんなわけだ」と、老アントニオは言った。

それ以来、月は大地に保存された光を反射している。月は湖を見つけると、自分の髪と顔を整えるために静止する。そして女性たちも鏡を見ると、自分の姿を見つめようとして立ち止まる。鏡は神々の贈り物である。髪と顔を整えられるように、気ままに散歩し、天へ昇ろうという気が起きないように、それぞれの女性に一片の月が与えられた。

老アントニオの話は終わった。しかし風がやむ気配はなかった。波は小舟を翻弄しつづけた。私はじっと黙っていた。老アントニオの言葉を反芻していたのではない。口を開けたら最後、月が媚態をひけらかしながら激しく波立っている鏡のような湖面に、私が肝臓まで吐き出すのは確実だった。

3 老アントニオの教え (1995/6/20)

質問することは、歩むこと、動くことに役立つ。そのことを老アントニオは教えてくれた。イカルとボタンの例を示しながら、老アントニオは、質問し、それに答えながら歩むことで、…新しい質問や回答を導き出すことを教えてくれた。今、われわれは、彼が教えてくれたこの道を歩みつづけている。われわれは質問し、…その答えを待っている。



『老アントニオのお話』初版のイラスト



4 剣、木、石、そして水のお話 (1995/10/1)

追伸—戦術と戦略についての講義

メキシコと呼ばれる国が、地震によって無関心と自閉的な状況が打ち壊されることになったあの年（1985年）、われわれは泥と雨にまみれながら、9月の夜明けを迎えていた。老アントニオは、避難していたシュロ掛け小屋のたき火の勢いを強くした。小屋の外に出ようとしても無駄だった。老アントニオはそれをよく知っていた。泥は乾燥するとザラザラの土になり、皮膚や記憶を傷つける。老アントニオが考えていたのは、私と同じように髪にまで固まって付着した泥のことではない。湿気にみちたわれわれの到着を歓迎し近づこうとするブヨや蚊を撃退しようと考えていた。たき火の儀式に続いて、タバコの儀式が始まった。

それぞれが煙を吐き出し、独立戦争に関する話が始まった。その話しのなかで、私はイダルゴ、モレロス、ゲレロ、ミナ、ピピラ、ガレアーナー族 [いずれもメキシコ独立戦争時の英雄] のことを語った。じっと一点を見つめて話を聞きながら、老アントニオはうなずいていた。私は学校で教わった歴史や教訓をそのまま繰り返したわけではない。これらの男や女たちの孤独、迫害や中傷にもかかわらず前進しつづけた彼らの意図を再構築しようとしていた。

しかし、メキシコの山中でのビセンテ・ゲレロのゲリラ戦争の長い抵抗に関する私の話が終わらないうちに、老アントニオは咳払いで私の話を遮った。それは、紫煙の出るパイプの熱と同じように、新しい驚きが彼の唇に届いたことを告知するものだった。

たき火の炎と記憶をかきたてようと息を吹きつけながら、「そのことならちょっと覚えている」と、老アントニオは言った。価値ある重い荷物の包みを降ろすように、老アントニオはお話を語るための言葉を、過去と現在の反乱戦士、そして煙と炎とのあいだに降ろしていった。

剣、木、石、そして水のお話

老アントニオはパイプを小刻みにかじる。言葉を小刻みにかじりながら、言葉に形と意味を与える。老アントニオが話すと、それに耳を傾けると、雨は止み、水と暗闇も一休みする。

われわれの大昔の先祖たちは、この土地を征服しようと到来した異邦人と対決しなければならなかった。異邦人はわれわれに別のやり方、別の言葉、別の信仰、別の神、別の正義を押しつけるため到来した。異邦人の正義は自分だけの正義である。彼らはわれわれの正義を奪いとった。

彼らの神は黄金だった。彼らの信仰が優れたものとされた。彼らの言葉は嘘だった。彼らのやり方は残酷きわまりなかった。われわれの偉大な戦士は彼らと対決した。異邦人の魔手からこの土地を守ろうとする住人とのあいだで激しい戦闘が起きた。しかし、異邦人が携えてきた力はとても強力だった。偉大で優れた戦士たちは、戦闘に倒れ、死んだ。戦いは続いた。しかし、戦士の数は少なく、女やこどもまでが斃れた者の武器を手にした。

そのときのことである。先祖のなかのより抜きの賢者たちが集まり、剣、木、石、水の話をはじめた。ずいぶん昔のお話が語られた。その山中に、人間が働き、身を守るために携えてきた物が集合した。一方、神々はもとの所に戻っていた。つまり寝ていた。当時の神々は、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々ではなかった。彼らはきわめて怠慢だった。白みはじめた夜明けのなか、男や女たちは身体を摩滅させ心を成長させていた。夜は静まりかえっていた。夜が静かだったのは、自分に残されているものが少ないことを知っていたためである。

まず、剣が話しはじめた。－「こんな剣だ」と、老アントニオは話を中断すると、大きな両刃のマチェーテをつかんだ。マチェーテは炎の光を受けて、ほんの一瞬輝き、暗闇に戻った。老アントニオは続けた。



農作業に使うマチェーテ

まず、話しはじめた剣がこう言った。

「俺はいちばん強い。なんでも壊すことができる。俺の刃はよく切れる。俺様を手にした者は権力を手に入れ、俺に齒向かう奴は死ぬことになる」

「そんなの嘘っぱちだ」と、木が言った。

「俺がいちばん強い。俺は風や激しい暴風にも抵抗してきた」

剣と木は戦った。木は身体を強く硬くして、剣に立ち向かった。剣は木を何度も打ち据えた。幹は切断され、木は倒れた。

「俺がいちばん強い」と、剣はもう一度言った。

「そんなの、嘘っぱちだ」と、今度は石が言った。「私がいちばん強い。硬いし、ずいぶん昔からいる。しかも、重くて力強い」

そして剣と石が戦った。石は身体を硬く強固にし、剣に立ち向かった。剣は石を何度も打ちすえた。石を壊せなかったが、多くの破片にした。剣の刃はなくなり、石はバラバラになった。

「引き分けた」と、剣と石は言って、戦いが無意味だったことを嘆き、泣きだした。

小川の水は、こうした戦いを眺めるだけで、何も言わなかった。それを見ていた剣は言った。

「おまえがいちばん弱虫だ！誰にも何ひとつできない。俺はおまえよりずっと強い！」と、言う、剣は全力で小川の水に飛びかかった。

大騒動と大騒音が起こり、魚はびっくりした。しかし、水は剣の打撃にいっさい抵抗しなかった。何も言わず、水はしだいに元の形を取り戻した。剣を包むと、元の川の流れに戻った。

こうして神々が自分の喉の渴きを潤すため作った大きな水に剣は飲み込まれてしまった。時間が経ち、水中にあった剣は古くなり、錆びていった。刃がなくなったので、魚たちも恐がらずに近づき、剣をからかうようになった。

恥ずかしさのあまり、小川の中にある剣はすごすご引き下がった。剣は刃がなくなり、敗北したが、「俺がいちばん強い！水は何もしなかったが、戦わずに俺を負かした」と、文句を言った。

夜明けが訪れ、陽が昇り、ひと組の男女が目覚めた。彼らは新しくなるためいっしょにいて疲れ切っていた。ほの暗い薄明かりのなか、その男女は、剣、バラバラに砕けた石、倒れた木、そしてささやくように歌っている小川の水を見いだした。

剣、木、石、そして水のお話を話し終えると、先祖たちは言った。

「野獣に対して、われわれは剣のように戦わねばならないときがある。暴風に対して、われわれは木のように抵抗しなければならぬときがある。時間に対して、われわれは石のように戦わねばならないときがある。しかし、剣、木、石に対する水のように、われわれは戦わねばならないこともある。今こそ、われわれは水となって、川へ向かっている自分たちの道を歩むときである。その川は大きな水へと、われわれを導くものである。その大きな水は、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々が渴きを癒したものである」

老アントニオは言った。

「われわれの先祖はこんなことをした。荒々しい打撃に抵抗する水のように、先祖は抵抗した。異邦人は暴力を携えて到来し、弱者を驚かせ、勝利したと思い込んだ。だが、時の経過とともに、古くなり錆びだした。いったん勝ったのに、なぜ負けたのか？それが理解できないので、異邦人は片隅で恥ずかしくなっていた」

パイプとかまどの薪に火をつけながら、老アントニオは付け加えた。

「こうして、われわれのもっとも偉大で知恵のある先祖たちは、異邦人との大戦争に勝利した。異邦人は出ていった。小川の水が川に向かって歩みつづけるよう、われわれはここにいる。その川は、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々が渴きを癒した大きな水へ、われわれを運ぶだろう」

夜は明けた。それとともに老アントニオはいなくなった。私は、太陽の歩みを追いながら、小川の縁に沿って、西へ向かった。小川は川に合流するまで蛇行している。鏡の前には、夜明け前

の太陽と日没前の太陽のあいだにある真夜中の太陽による柔らかい愛撫がある。癒しとは傷つくことである。水とは渴きである。出会いを求める探求は続く。

老アントニオのお話にある剣と同じように、何の障害もなく、2月の政府の攻撃はサパティスタの土地を侵攻した[1995年2月9日の政府軍のグアダルーペ・テペヤック急襲]。強力で目もくらむ権力の見事なデザインの剣は、サパティスタの領域を打ち据えた。老アントニオのお話にある剣と同じように、大騒音と大騒動を引き起こした。それで何匹もの魚がびっくりした。老アントニオのお話と同じように、その剣による打撃は強大だった…。だが、それは無駄に終わった。老アントニオのお話にある剣と同じように、それは水の中に留まり、錆びつき古くなった。

水はどうしているかって？水は自分の道を歩みつづける。剣を包んだまま、それに気づくこともなく、川へと到着する。その川は、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々が、渴きを癒した大きな水へとその剣を運ぶことになる。



5 夢のお話 (1995/12/25)

追伸—夢を見ること、それと同じだが、闘うことを教えよう

マチェーテを研ぎながら、老アントニオは小屋の入口でタバコを喫っていた。コオロギの鳴き声と疲労に包まれ、私は彼の横でウトウトしていた。老アントニオが細長い紫煙を立ち上がらせていたときから、10年前であれ、10年後であれ、空は夜の海のような空だった。空は大きすぎた。どこで始まり、どこで終わるのか、わからなかった。

月は数分前に沈んだ。明るい雲が山の頂をくっきりと照らした。月の光で銀メッキを施された山の頂は、媚びを振りまくためのバルコニー、みごとな飛込みのための踏み板台、新しい飛行機便の滑走路のようだった。最後の一筋の金色の光は、それを待ちわびていた溪谷にむかってウインクを投げ掛けた。その後、金色から銀色へと、そして真珠のような白色へと変わっていった。つぎはぎだらけの帆を膨らませ、光は上に向かって飛び出した。夜が航海を始めたのである。下界では、静けさとノスタルジーが待ち受けていた。

1975年、1985年、1995年の12月。海はいつも東に広がっていた。雨は降っていない。寒さで、衣服だけでなく、しだいに息苦しくなる浅い眠りに潜む不安にみちた夢までもが濡れていた。私が目覚めたのを横目で確認すると、「何の夢を見ていたのだ？」と、老アントニオはたずねた。

「いいえ、何にも」と、返事しながら、私は弾薬帯にはさんだパイプとタバコを探した。

「そりゃ、ダメだ。夢を見ながら、人は夢を見て己れを知る。夢を見ながら理解する」

こう言うと、ふたたび、老アントニオは自分のマチューテの薄刃をヤスリでゆっくり研ぎだした。私はパイプに火をつけながらたずねた。「ダメって？ どうしてですか？」

老アントニオは研ぐのをやめ、刃の具合を確かめ、マチューテを脇においた。手と唇を使ってタバコを巻くと、お話を始めた。

夢のお話

「これからする話は誰かから聞いたものではない。たしかにわしの爺さんが話してくれた。だが、爺さんはわしにこう言った。夢を見なければこの話は理解できない。だから、おまえに語るのは爺さんがわしに語った話ではない。わしが夢見た話である」

老アントニオは足を伸ばし、疲れた膝をブラブラさせた。タバコの煙を吐き出した。その煙で、彼の脚に落ちた青味がかかった葉に届く月の光が遮られた。そして、話は続いた…。

偉大な先祖たちの顔に刻まれる一本一本の皺に、われわれの神々は潜み、生きている。それはわれわれの時代まで続く悠久の時間である。その時間とともに、われわれの先祖たちの理性は歩んできた。もっとも昔の先祖のなかで、偉大な神々が話し、われわれはそれを聞いていた。雲が大地に横たわり、山々の手につかまれる。それと同時に、男や女と遊ぶため、最初の神々は大地に降りた。そして、彼らに真実のことを教えた。最初の神々はほとんど姿を現わさず、夜や雲の相貌となって現われるだけだ。夢とは、われわれがよい存在になることを夢見ることだった。

夢を通じて、最初の神々はわれわれに話し、教えた。夢を見ない人間は、大いなる孤独感を抱き、自分の無知を恐れの中に隠した。最初の神々は、トウモロコシの男女に夢見することを教えた。話し、知り、自らを知ることができるようするためである。そして、トウモロコシの男女が人生をともに歩めるようにナワル [人と共通の魂をもつとされる守護動物] を授けた。真の男女のナワルは、ジャガー、鷲、コヨーテである。ジャガーは闘うため、鷲は夢を抱くため、コヨーテは考えをめぐらし権力者の欺瞞に騙されないためである。



同伴動物のナワル

最初の神々、世界を形成した神々の世界では、あらゆるものが夢だった。われわれが生き死にしている大地は、夢を映す大きな鏡である。そこには神々が住んでいる。偉大な神々はそこでいっしょに住んでいる。誰もが同じように生きている。誰かが上で、誰かが下ということはない。

政府がおこなう不正は、世界を解体し、一部の少数者を上に、ほかの大多数を下におく元凶である。もともと、世界はそのようなものではなかった。真の世界、最初の神々、世界を誕生させた神々の夢を写す偉大な鏡はとも巨大で、誰もが同じように入ることができた。少数者を上に鎮座させ、大多数のものを下に押し込めるため、小さくなった今の世界とはまったく違っていた。今の世界は完璧ではない。最初の神々が住んでいる夢の世界を反映するよい鏡ではない。

神々はトウモロコシの人々に尊厳という鏡を贈った。その鏡では人間はすべて対等に映る。対等でないなら、反乱を起こすことになっている。こうして最初の先祖たちの反乱が始まった。今、彼らは死んでいる。だが、それによってわれわれは生きることができる。尊厳という鏡は、暗闇をまき散らす悪魔を打ち負かすのに役立つ。暗闇の支配者は鏡に映ると形を失ってしまう。尊厳という鏡の前では、世界を不平等にする暗闇の支配者はその影も形もなくなってしまう。

神々は四つの基点をつけた。それは世界が横になるため、神々が疲れたからではない。男女がともに歩き、誰もが入り、人の上に人がいないようにするためである。飛ぶとともに、大地の上にいることができるように、神々は二つの基点をつけた。世界に意味をもたらし、真の男女に任務を与えるのは、七つの点である。つまり、前と後、右と左、上と下である。そして七番目の点はわれわれが夢を見る道である。それはトウモロコシの男女、真の男女の歩むべき命運である。

新しい男女が夢で生きられるように、神々は女の胸に月を与えた。その夢から歴史と記憶は生まれる。夢なしでは忘却と死がはびこる。われわれの偉大なる母である大地は二つの乳房をもつ。それは夢を見ることを学ぼうとする男女のためである。人は夢を見ることを覚えながら、成長や尊厳をもつこと、闘うことを学ぶ。だから真の男女は「夢を見よう」と言い、「闘おう」と言う。

老アントニオは黙った。黙ったのは私が寝たからである。私が夢を見ている夢、私が知っている夢、そして私が知っている夢を私は見ている…頭上では、月の胸が天の川に乳を与えていた。夜明け前は女王だった。すべてが実行され、夢を見ながら、闘うだけとなっている。

6 虹のお話 (1996/1/8)

この喜びに応えるために、皆さん [1996年1月初旬、サンクリストバル市で開催された先住民全国フォーラム参加者] にお願いたい。あなた方のひとり、褐色の肌、先住民の血をもつ一人の偉大な賢者から、10年前に私が聞いたお話をさせてください。

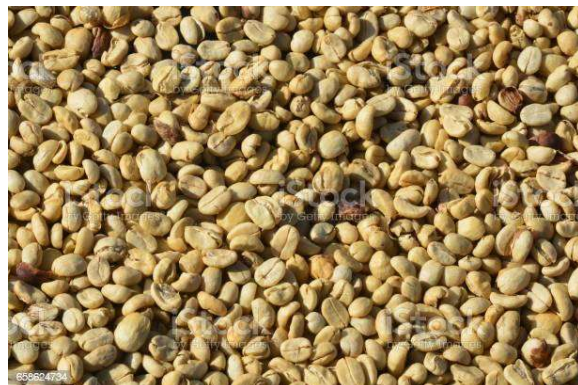
虹のお話

すでに日は暮れ、夕闇が迫っていた。周囲は夜明け前にも見られる輝きを帯びた灰色に満ちていた。老アントニオは薄皮のついたコーヒー豆を二つの袋に詰め終えて、私の傍に座った。同志のいない集落を通過する際に支援する連絡員の到着を待っていた。村の通過は夜のはずだった。1986年が開けたばかりで、後にわれわれの側になった人々から身を隠さなければならない時期だった。私は、太陽が沈む西を見ながらパイプをくよらせ、これまでとちがう明日を夢見ていた。

老アントニオはじっと黙っていた。タバコを喫いながらお話をする前のいつものタバコを巻く作業の音だけが聞こえた。老アントニオは口を開かなかった。彼を見ていた私をじっと見つめ、私が話しだすのを待っていた。最後の煙をパイプの先から立ち昇らせながら、「いつまで、われわれはまわりの人から身を隠さねばならないのだろうか？」と、私はつぶやいた。



コーヒー豆外皮を除去し生豆に



生豆を乾燥、薄皮のペルガミーノ・コーヒー

咳払いをした老アントニオはやっとタバコに火をつけ、話を始めた。希望の光が見えてきた人のように、夕闇に光をともしように、老アントニオはゆっくりと語りだした。

七つの虹のお話

原初の時代、世界が創られた。それ以後、われわれのもっとも偉大な祖父母たち、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々は、その世界を歩くようになった。そして、その神々はトウモロコシの男女と話すため、地上に降りた。それは、今のように雨が降り、チラチラとしか太陽の光が差し込まない寒い昼下がりだった。

いちばん最初の神々は、腰を据えてトウモロコシの男女と話しあった。それは、真の男女が歩くべき道に関する合意を結ぶためだった。この神々は、いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々である。後からきた神々のようにいばり散らさなかった。最初の神々はいばらず、トウモロコシの男女とよい合意を結ぼうとした。神々は人間と協力し、よい合意、よい言葉とともに、良い道を探そうとした。それは最初の世界の最初の時の昼下がり、やはり今のような昼下がりであった。もっとも偉大な神々は対等な存在としてトウモロコシの男女と話し合った。

神々は、ほかの男女、ほかの言葉、ほかの考え方とよい合意を探すという合意を結んだ。ほかの男女、ほかの色、ほかの心が理解できる言葉を探すため、トウモロコシの男女は自分の心の奥底まで歩かねばならなかった。やがて、良い世界を創るため、トウモロコシの男女がすべき作業に関する合意が得られた。

われわれを新しい存在に変えるための最初の重要な作業は七つある。そのような合意が得られた。世界を誕生させた最初の七つの神々は言った。話し合いながら、よい世界を創り、われわれを新しい存在に変えるため、遂行すべき作業は七つある。もっとも偉大な神々は、作業は七つのはずだと言った。というのは、神々が世界に被せた屋根という大気、つまり天空は七つだったからである。七つの天空でもあった最初の神々は、遂行すべき作業は七つあると言った。

七番目の大気には、ノホチャックユム、つまり偉大なる父チャックの大気があった。

六番目の大気には、チャックオブ、すなわち雨の神がいた。

五番目の大気には、クイロブ・カッシュオブ、つまり無住地の領主がいた。

四番目の大気には、動物の守護者たちがいた。

三番目の大気には、悪い精霊たちがいた。

二番目の大気には、風の神々がいた。

大地の上の一番目の大気には、村と畑の十字架を守護するバラモブがいた。

そして大地の奥底には、キシシン、地震と恐怖の神、すなわち悪魔がいた。

さらに、最初の神々は言った。色の数は七つあり、数えられた数は七である。



雨の神チャック



「先日、色の話をおまえに話しただろう。おまえが耳を傾け、話せる時間と方法があるなら、後で七つの作業の話をすることにしよう」と、言うのと、老アントニオのタバコから最後の輝きが消えた。ふたたび煙と夢を紡ぐため、老アントニオが沈黙する時間になった。手にしたマッチに小さな稲妻が走り、やがて炎が立った。

トウモロコシの男女は、よい世界にするための七つの作業を遂行することに同意した。

太陽と月が交互に仮眠している場所を見つめながら、彼らは最初の神々に次のような質問をした。新しい世界を創るための七つの作業を終えるには、どれくらい歩かねばならないのか。

最初の七つの神々の答えは、七つの作業は七つを七回歩くことだというものだった。というのも、そのような形で登場した数は、どれも偶数でなかった。そのため、つねに別の数とペアを組む必要があることを知っていた。

「わかりました」と、答えながら、トウモロコシの男女は山を見つめた。母なる大地の乳房を昼と夜に交互に保管している箱である山を見ながら、トウモロコシの男女は神々に質問した。

どうして七という数字が歩むのは、七つを七回分と知ったのか？

最初の神々は、自分たちも知らなかったと答えた。最初の神々がすべてを知るわけではない。神々でも多くを学ばねばならなかった。神々はその場を去らず、トウモロコシの男女といっしょに新しいことを学ぼうとした。こうして最初の神々とトウモロコシの男女の関係が成立した。

世界を新しくするよい道をとともに探すため、彼らはいっしょに考えるようになった。彼らはそんなことをしていた。つまり、自らのことを考え、自らを知り、自らについて語り、自らについて学んだ。雨は落下も上昇もせず、昼下がりの真ん中にぶら下がった状態になっていた。そのときまで、彼らはそこに留まりづけた。彼らはそこにいつづけた。トウモロコシの男女も、最初の神々も、おたがいを見つめあっていた。

すると、そこから、多彩色の光と雲でできた架け橋が、天空に描き出された。山から始まった架け橋は、谷へ向かって伸びた。光と雲でできた多彩色の架け橋は、どこへも向かわず、どこからも始まらず、雨と世界の上でじっとしていた。それがはっきりとわかるようになった。この光と雲でできた多彩色の架け橋は七色の帯をもっていた。

最初の神々とトウモロコシの男女は、もう一度おたがいに見つめた。その後、起点も終点もなく、そこに留まっている架け橋をもう一度眺めた。すると、光と雲でできた多彩色の架け橋は、自らが行き来するのではなく、行き来するために役立っていることがわかった。考え、学んでいた全員が、とても楽しい気分になった。その架け橋が、われわれを新しい存在に変えるよい世界が行き来するための架け橋となるのはよいことだとわかった。

音楽家たちはただちに楽器を取り出した。最初の神々と真の男女は、ずっと立ち上がり踊りだした。自らについて考え、知り、語り、学ぶことは、ほんの少ししかなかった。彼らは踊りを終わると、ふたたび集合した。七度を七回とは、七色の七つの虹が重要な七つの作業を遂行するために歩むべき回数である。そのことを彼らは確認した。ひとつの七が終わると、次の七が後に続くことも知った。なぜなら、雲でできた色と光の架け橋は、行きも来もせず、起点も終点もなく、始まりも終わりもなく、一方から別の側へと移動し、通り抜けるだけである。

最初の神々と真の男女が達した合意はこうして残っている。だから、楽しくものごとを知ったその昼下がり以来、トウモロコシの男女、真の男女は、架け橋を作りながら、一生を過ごすようになった。死んでからも架け橋を作っている。それはつねに光と雲でできている多彩色の架け橋である。つねに一方から別の側へ行くための架け橋である。新しい世界、われわれを良い存在に変える世界を創る作業をするため、トウモロコシの男女、真の男女は、七度を七回分、道を歩む。彼らは架け橋を作りながら生き、そして死ぬ。

老アントニオは黙った。私はじっと彼を見た。われわれがいつまで身を隠しつづけねばならないのか。私の質問とこの話はどんな関係があるのか。それをたずねようとしたときである。一筋の光が彼の視線を照らした。彼はほほ笑みながら、山の方、すなわち西の方角を指さした。振り向くと、虹が見えた。それは行きもせず、来もせず、じっと留まり、世界を架け橋で結びつけ、夢に架け橋を架けている。

今日、新年の七日目、すでに道には六つの虹が出現した。胸中の不安、以前からの不眠の残りや息苦しさや闘いながら、光と雲と多彩色の曲線の架け橋は、老アントニオや彼が話した七つの虹の話や六度も思い出させた。七番目の虹の出現を待ちながら、私は道を歩んできた。そしてコレート[サンクリストバル市の別称]の肌寒さで、世界を目覚めさせた褐色の人々の「もうたくさんだ！」の叫びを爆撃や兵士で消そうとした2年前の夜明け前の記憶がよみがえってきた。

7 フー・メン (1996/1/9)

1月の最初の数日でその年がどうなるか。それを読み取る習慣がわれわれメキシコの数多くの先住民共同体にある。この知識は、土地を耕し、種を播き、収穫する時期を知るのに役立つ。もっとも古い時代のマヤの人々はこの知識をショック・キン、「日々の計算」と呼んでいた。

今のわれわれの時代と同じように、昔もものごとをよく知っている男女がいた。フー・メン、「ものごとを知っている人」である。フー・メンは夢のなかで習得した多くの知識をもっていた。夢のなかで、神々はこの世界に関する知識をフー・メンに教授する。だからフー・メンは遺失物を探し、薬草や祈祷で病気を治し、聖なる石を凝視し、トウモロコシの粒を勘定し、未来を占えた。その主要な責務と関心事は、その指導で見事な収穫が確保できるようにすることだった。



現代のフー・メン (ユカタン州プンタ・ラグナ)



トウモロコシの粒を使った占い

今日、ここにわれわれのフー・メンがいる。ものごとをよく知る男女であり、尊厳ある平和を模索する EZLN 顧問団の一翼を構成している。彼や彼女らの手で、このフォーラムが組織され、われわれはおたがいに会い、七番目の虹の架け橋を架けることができた。

彼や彼女らは、世界、いちばん最初の世界を誕生させた偉大な神々の夢を見ながら、その夢のなかで神々の偉大な言葉や素晴らしい考えを習得した。彼や彼女らは、たとえば言葉、理性、無私、尊厳など失われたものを発見できた。彼や彼女らは、この世でもっとも致命的な病気、すなわち忘却と呼ばれる病気を治療できた。彼や彼女たちは、自分たちの心が語るものを読み、現在の世界で心と呼ばれるトウモロコシの粒を勘定しながら、未来を読み取ることができる。

8 種を播く (1996/1/10)

われわれは種播きの準備をすべきである。われわれは雨を降らさねばならない。チャッコブ、つまり雨の神々は、セノーテ [ユカタン半島のカルスト地帯にある湧泉] から出て、天空に集合すると、水の入った聖なるヒョウタンを携え、馬にまたがり、大地のあちこちに雨を降らした。それは生命をもたらす雨を万物が享受できるようにするためである。われわれも同じことをすべきである。

雨が降らないなら、われわれは先祖のようにしゃがみ、雨が降る前の蛙のように合唱し、嵐の風が吹きつけるようにと木の枝を揺さぶらなければならない。誰かひとりが、稲妻の杖と聖なるヒョウタンを携えたクヌ・チャック、つまり雨をつかさどる主神の役を演じることになる。

われわれは、種を播き、自身の根を大地にしっかり張りめぐらすべきである。もはや、石が柔らかく、口笛を吹きながら勝手に動き、畑を開墾するためにあくせく働かなくても、一粒のトウモロコシで家族全員が養うことができた時代ではなくなった。

指導者がチチェン・イツァーで異邦人に打ち負かされ、良い時代は終わり、悪い時代が始まった。昔の指導者はトゥルムから東の海底の下まで伸びるトンネルに潜り込んだ。こうして異邦人、ツルが権力を掌握した。今まさに、われわれの土地において、で理性がもう一度支配権をもつように、われわれは帰還すべきである。言葉の種を播きながら、われわれは帰還することになる。

われわれの大地はわれわれそのものである。われわれは自分たちがどんな存在であるかよく知っている。われわれは大地そのものである。かつて、種を播くための畑、われわれが耕作する畑は、四つの精霊に守護されていた。また集落を守護するために、別の四つの精霊がいた。そして、集落の四隅に建っている十字架ごとに、ひとつの守護精霊がいた。

マセワレス、太古のわれわれは、七つの方向をもっていた。最初の四つの方向とは、トウモロコシ畑や集落にある四つの隅を指している。五番目は中心である。それぞれの共同体は中心を十字架、一般的にはセイバの木で示すことが習わしとなった。六番目と七番目は、上と下だった。それぞれ畑と集落にいる四つの守護精霊のほか、各個人も守護精霊をもっていた。四隅とひとつの中心という五点を示すため、われわれの先祖は十字架を使っていた。時間とともに、五番目



カリブ海に面するトゥルム



トゥルムの地下に広がる水路網サク・アクトウム

の点が立ち上がり、四つの隅が五つの隅となり、五つの頂点がある星になった。その星は人間や作付けされた畑の守護精霊を表わすものだった。

人々の守護者にして心であるボタン・サパタは、言葉の守護者にして心でもある。ボタン・サパタは人間であること、彼自身を表わす五つの頂点をもつ星である。今まで、われわれは語り合い、耳を傾けてきた。だから、人々の守護者にして心であるボタン・サパタの陽気な心は、いつも以上に機嫌がよい。

9 ドニャ・ファニータ (1996/3/11)

ここまで書き終えたとき、私の所にやってきたのは…ドニャ・ファニータ。

老アントニオが亡くなった後、ドニャ・ファニータは、コーヒーを準備するのと同じぐらいゆっくりではあるが、その生命の炎を削っていた。

彼女の身体はまだまだ丈夫だったが、ドニャ・ファニータは自分の死を予告していた。

彼女の視線を避けて、「婆ちゃん、ばかなことは言わないでよ」と、私は言った。

「いいかい、おまえさん。私たちは生きるために死ぬのよ。だから、誰も私が死ぬことをじゃまできない。おまえのような若輩者にはできない」と、彼女は私を叱りつけるように言った。

老アントニオのつれあい、ドニャ・ファニータは、その生涯を通じ、当然ながら死に際しても、反乱する精神をもちつづける女性である。



チアパスの高齢先住民女性

10 夜の太陽を探す (1996/4/6)

「人類のため、新自由主義に反対するアメリカ大陸集会」 [1996年4月4～7日開催] の会場となっていたラ・レアリダーにいた老アントニオは気づいていた。この船に乗り込んでいる誰もが、これまでどの船からも排除されていたのである。だからこそ、彼らはこの船に乗りこんだのである。老アントニオは副司令マルコスに次のように説明した。

これらの男女、青年、数名の囚人、大部分が先住民からなる人々は、「もう命令などに従いたくない。参加して、船長や船員になりたい」というのである。そして、真剣、かつ楽しく人々と

出会いながら、この船をより素晴らしい未来に向かって前進させたいと思っている。

そのとおりである。だが、次のタバコに火をつけながら、老アントニオは警告した。暗闇がたくさんある。だから、深夜に太陽を探すのは、大変な労力があるだろう。

「だが、深夜の太陽はそのまわりに言葉や希望を集めている。…だから、彼らに言いたい。どうか立ち去らないでほしい。ここにいれば見ることができる。月が太鼓のようにふくらみ、風は希望をかきたてている。地平線に次々と沈んでいくことに抵抗している怠け者の星たちの数にくらべれば、コオロギなどは物の数ではない。ホタルは草の房飾りとなって光を放ち、夜のいちばん暗い場所でも光は見える。その様子を彼らは見ることができる」



夜の海に乗り出す帆船

11 道と道を歩む人のお話（1996/4/7）

追伸—閉会式で言うべきだったが言わなかったことを恥ずかしながら告白する。なぜなら、それはきわめて重大な問題だからである。

皆さんに本当のことを言いたい。われわれは皆さんが立ち去ることを望んでいない。むしろ、ここら・レアリダーにいつまでも留まってほしい。そうすれば、月の光がほんの睫毛ぐらいしかない夜、いつ、どのように、私の左手奥にあるセイバの木がスカートをたくし上げ、いつものよう樹冠をずっと高く上げ、この牧草地の中央でサパテアードを踊りはじめるか、皆さんも気づくだろう。私は首にパリアカテを粋に結わえ、二人でいっしょに旋回しはじめる。誰もがわれわれは酔っているというだろう。だが酔っているのは、われわれが知り合いにならないのを気にする月だけである。

そして、いちばん暗い夜、いちばん偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々が集まっているのを皆さんは目撃するだろう。ここで、最初の神々は、言葉を語り、驚嘆すべきこと、卑猥なことを語り、喜びや苦しみを語る。いちばん偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々は、涙と笑いを知っている。男女に語りかける方法が見つからないと絶望することもある。言うべきことが多く残っているとぼやくこともある。最初の神々は夜を歩みながら、老アントニオを探し、真の言葉を語って聞かせる。



夜のサパティアード



すでに亡くなっているが、老アントニオはタバコを紙に巻くと、端を折り曲げ、一服する。いちばん偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々は、煙に包まれた彼に語り聞かせることで歴史を記録する。そうして、トウモロコシでできた真の男女が歴史を知る方法を探せるようにする。いつも言うように、老アントニオがあんなにタバコを喫っているのは、神々が彼に語った歴史を忘れないようにするためである。彼が出歩くのはいつも夜である。夜になると、彼は私を探しにくる。私と話し、タバコに火をつけるマッチを借りるためである。

昨晚も老アントニオは私と出会った。私はマッチをすった。その炎の明かりで、タバコに火をつけようと近づいた彼の顔が照らされた。私は彼の目を見つめ、その瞳に映る私の姿を見た。そこに映っていたのは私だけではない。胸がしめつけられ息苦しくなっていた 10 年前の 4 月の晩と同じように、座っている私の隣には老アントニオがいた。いつもどおりタバコを喫いながら、二人はたき火と足元だけを見つめていた。周囲にはそれ以外のものは見えなかった。たき火、タバコ、パイプの煙を通して、二人は見つめあった。

そのときだったと私は思う。老アントニオは何かを思い出し、私に話しだした...

道と道を歩むもののお話

以前は、以後というものがあった。時間は静かにとどまっていた。以前は、いちばん偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々しかいなかった。神々は座ったままで、歩いて行く場所もなかった。というのも、以前には、以後がなかったからである。だから動くこともなかった。以前はこちら側で以後はあちら側とは言えなかった。神々は以前からそんなふうにしていた。だから、世界が以前にずっと留まり、以後に行けなくても、さほど悲しくはなかった。だが、やはり以後を発明すべきと考えるようになった。

すると七人の神々の一人が、別の神、つまり自分に向かって、いつまでも以前に留まらず、以後に到達する方法を発見すべきだと言った。それがいいと、神々は合意した。以後を発見するのはきわめてよい考えだと言った。うれしくて踊ろうとしたが、神々はうまく踊れなかった。というのは、同じ場所、つまり以前に留まりつづけたからである。同じ場所ではしか踊れず、神々はたがいにぶつかりだした。踊る場所で、ある神はある方向へ、別の神はほかの方向へ跳ねまわった。

やがて、以前は少しばかり幅が広がった。しかしまだ小さく、七本の細い光線とひとつの小さな星をともなって現われたにすぎない。だが、すでに以後を作り出していた。そのことに神々は気がついた。というのは、以前、すべての神々は一カ所にかたまっていた。だが、今、つまり以後では、ほんの少し離れていた。神々はおおいに満足して踊りだした。もともと、これらの神々は踊りたかったのである。

マリンバを奏で、腰を振るための口実を探していた。だが、前進はできない。いまだに、以前がずいぶん近くにあり、以後がずいぶん小さいということに、神々は気づいた。神々はとても真剣な態度にもどり、状況をくわしく分析した。そして以後を大きくし、以前があまり近くに留まらないようにするにはどうすべきか、意見をまとめる。そのため、以前の場所で再会することに神々は合意した。



サバティスタのマリンバ演奏者（2016年のCompARTE）

神々は準備集会の場集った。どうして、自分たちがひとつの小さな星まで描いている七つの細かい光線になったのかを神々は考えはじめた。そして、いっしょに踊りだすと、たがいにぶつかり、あちこちに跳ねてしまったことを思い出した。それは以前のことである。以後になると、神々はおたがいに少し離れ、踊ってもぶつからず、あちこちに跳ねることはなかった。

神々はおおいに満足し、また踊りだした。するとふたたび神々はぶつかりだした。また神々は以後に留まり、おたがいに少し離れた。神々は真剣な態度にもどり、以前の場所で再会することにした。こうして、かなり長い期間、神々は以前と以後を行き来した。真剣な態度と踊りを繰り返した。あいかわらず、以前も以後はとても狭かった。このようなことがなければ、神々の頭にいい考えは浮かばなかつただろう。神々は、それぞれの神が赴くことになる以後に全員が同伴することに同意した。

神々はさらに踊りひと押しした。すると、最初の七本の細い光線のひとつから、別の七本の細い光線が現われた。その後、神々は別の光線にも同じことをした。神々はそれを七回繰り返した。

その後、神々は以前の場所で再会した。以後がほんの少しばかり以前から離れていることがわかった。以後は、七本の細い光線を七回分はもっているが、あいかわらず小さかった。それ自体はいいけれど、まだまだ不十分である。以前と以後はおたがいに十分離れるべきであると、神々は判断した。そして、最初の以前の以後である以前の以後で、今一度踊りを繰り返さねばならない。このように神々は考えた。

その作業はたいへん複雑だが、まだ世界を創りださねばならないと神々は考えた。これらの神々は、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々だった。

神々は踊る仕事を担当する神を創ることにした。神々は真剣な態度にもどって、再会し、以前と以後の間隔を開けるため、おたがいに離れることに合意した。そして、真剣な態度と踊りを繰り返すたびに出現する細い光線に名前をつけるべきだと、神々は言った。神々はそれらの光線を「道」、そして踊る仕事を担当する者を「道を歩むもの」と名づけた。

そして、彼らに仕事がどのようなものかを説明した。それは容易ではなかった。以後により遠方まで行くには、そのたびに以前にもどって、踊ること、そして真剣になること、そしてもう一度再会することを習得しなければならなかつた。

その後、踊ったり真剣になったりを何度も繰り返し、神々は疲れていた。もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々は、眠るためにいなくなった。道を歩む人に道を作るように命令した後、小さな星々が作り出す道を進む星を思い描きながら、神々は眠りについた。道と道を歩む人はこのようにして創られた。それらは、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々が、厳粛さと喜びのなかで創り出したものである。

老アントニオは沈黙した。足元を見るのをやめ、私は視線を上げた。すでに夜は明ける準備を始め、老アントニオがいないことに私は気づいた。老アントニオがいたのは以前のことだった。現在はそれ以後である。われわれは出会い、そのたびごとに以前へ帰りながら、真剣かつ楽しく、道をより大きくすべきである…。

しかし、それ以後も、夜は黒い扉のように閉じられ続け、多くの暗闇があった。だから、深夜の太陽はそのまわりに言葉や希望を集めている。だから、私は皆さんに言いたかったことを思い出した。

どうか立ち去らないでほしい。ここにいれば見ることができる。月が太鼓のようにふくらみ、風は希望をかきたてている。地平線に次々と沈んでいくことに抵抗している怠け者の星たちの数にくらべれば、コオロギなどはものの数ではない。ホタルは草の房飾りとなって光を放ち、夜のいちばん暗い場所でも、その光は見える。こうした様子を皆さんは見るすることができる。

12 人と空腹のお話（1996/6/9）

ここメキシコ南東部の山中では、忍耐と希望をもって何百年も抵抗してきたように、ツェルタル、 Chol, ツォツィル、トホラバル、ソケ、マムの数千もの家族が今も抵抗している。皆さん [仲間一粒の穀粒を！平和のため、飢餓に反対する全国キャンペーンでチアパスまで食料を運搬した人たち] は、自分たちの力で、忍耐と希望が強化され、救いとなるように実践している。ここでは、時間と生命とが競争している。

「これからは飢餓の時がやってくる。そして飢餓の時になると、時は人を殺そうとする。ただ希望だけが、時によって傷つけられた人間を癒してくれる」

老アントニオがこう言ったのは、10年前の6月のある夜明け前、畑でやっとトウモロコシの芽が出ているのを見たときである。



共同農地でのトウモロコシの収穫

「小屋にも畑にもトウモロコシは残っていない。飢餓の時だ。待たねばならない時だ。さあ、畑がトウモロコシで緑に彩られるのを想像しよう。さあ、雨が乾いて硬くなったものを柔らかくしてくれることを想像しよう。トウモロコシや雨はわれわれに待つことを教える。抵抗するのだ。死んではならない。そのようにわれわれに言っている。トウモロコシが小屋に届き、真の男や女たちの食卓に届く時が、もうすぐくる。彼らに染みついている硬い土地の苦痛を雨が洗い流す時が、もうすぐやってくる。だが、まさにその時まで、多くのものが死んでいくことになる。飢餓や苦悩のほうが、その時に勝っているからだ」

老アントニオは一人のこどもの亡骸を埋葬したばかりだった。老アントニオは、女の子の墓を指し示している蔓でくりつけられた十字架を立てた後、「ダメだった」とつぶやいた。その女の子は、老アントニオとドニャ・フアニータが生きてほしいと願って産んだこどもだった。

「飢餓 (hambre) と人間 (hombre) 、人間と飢餓。対立するものがこう呼ばれるようになった。いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々は、死と生命をこう呼んだ。飢餓は死と呼ばれ、生命は人間と呼ばれた。何か…理由があるのだろう」

大地から数センチだけ芽を出したトウモロコシを失意のうちに眺めた後、老アントニオはこのように語った。私はパイプに火をつけた。老アントニオは、山の方に向かって歩きながら、娘の死を紛らわすための根を探しにいくから、いっしょに来ないかと私を誘った。

この老アントニオの懐古談、この集会の趣旨に沿っていない。それはよく承知している。だが、わずかばかりのトウモロコシ畑の正面にある山の上に、視界を汚すように三台の軍用ヘリコプターが飛んでいるのを見たとき、私はこの話をふと思い出したのである。ヘリコプターは兵士を運び、トウモロコシを運んでいない。彼らは飢餓と戦争を約束し、平和や生命を不意討ちする。

「平和のため、飢餓を撲滅しよう！」と、キャンペーンは呼びかけていたのでは？

「そのとおり」と、老アントニオは私に答えた（そのとき彼はかなり前を歩いていた。というのも、私が山を登るときに転ぶことは、メキシコ南東部の山中で伝説となっていた）。いつものようにタバコをふかしながら、私を待っていた老アントニオは言った。

「それは、結局は同じことを意味する。人間のために、そして死に反対！」

御存じのように、闘争と希望の再解釈に関しては、老アントニオに勝る者はいない…。

そう、本題からはずれている。そのことは承知している。ありがとう、そして、われわれはここで皆さんを待っている。皆さんに言うべきことはそれだけだった。そのこともわかっている。だが、皆さんも知っているように、6月の夜明けには、雨が降り、息苦しくなり、不眠不休…そして、老アントニオが現われてくる。

さて、もういいだろう。では。



13 始まりと終わりのお話（1996/6/30）

昨日、つまり 10 年前、120 ヶ月前、3650 日前。昨日...

昨日、雨はあらゆる場所にしみ込んだ。暴風雨のなかでは、老アントニオの小屋は雨よけとしてまったく役立たないように思われた。5月の硬い大地はととても長く続いていた。そのため、トウモロコシは息を引き取りかけていた。しかし、6月になって暴風雨が到来すると、トウモロコシは活力を取り戻した。

私は小屋の中と外のどちらにいたのか覚えていない。しかし、天井がないのとまったく同じだった。私はずぶ濡れだった。朝方の武器の手入れが無駄になり、武器が使えなくなるのを恐れ、私は武器が雨に濡れないようにした。部屋のなかで発生した雷、つまり巻きタバコに火をつけるため老アントニオが起こした火花によって、私は思い出した。天井やひさしから多少の雨漏りがあったものの、私は老アントニオの穀物小屋に入ることにした。タバコを一服するため、私はパイプに火をつけようとした。しかし、大粒の雨でパイプの火皿のタバコはぬれてしまい、台無しとなった。老アントニオは、彼が思いついた最良の方法で私を慰めてくれた。それはお話をすることである。



トウモロコシの収穫

始まりと終わりのお話

昨日が古くなり、世界の片隅に落ち着くまで、それなりの時間が必要だった。偉大なる神々、世界を誕生させた神々、最初の神々はずっと眠りこけていた。全員が踊り、歩き、質問し、疲れきっていた。最初の神々は眠りこけていた。真の男女と話し合い、歩きつづけるべきである。そのことに神々全員が合意した。歩きつづけることで世界は生きていた。偉大なる神々、世界を誕生させた神々、最初の神々はこう言った。

「われわれはいつまで歩きつづけるの？」と、トウモロコシの男女はたずねた。

「いったい、われわれはいつから歩きだしたの？」と、真の男女は自問した。彼らはある質問には別の質問で答えることを最初の神々から習っていた。

しかし、最初の神々は目を覚ました。偉大なる神々、世界を誕生させた神々は、先ほどの質問を聞くと、寝てはいられなかった。神々は目を覚ますと、マリンバを演奏し、歌を歌った。質問を重ね合わせ、「われわれはいつまで歩きつづけるの？いつから歩きだしたの？」という歌を作

り、踊ったり歌ったりした。もう神々は、十分に踊り、歌っただろうから、そろそろ自分たちの質問に回答して欲しい。こんなふうには真の男女が遠慮せずに神々に言わなかったら、神々はずっと踊り、歌いつづけただろう。

やおら、最初の神々は真剣な表情で言った。

「われわれがトウモロコシから創った男女は質問があると言っている。われわれから見ると、この男女はあまり物分かりがよくない。回答が自分の後や前にあるのに気づかず、よそばかり探している。この男女はトウモロコシの若穂のようにあまり賢くない」と言うと、最初の神々はまた踊りや歌を始めた。

真の男女はまた怒り狂った。バカにされるのはいいけど、自分たちの前と後に回答があるというのは、いったいどういうことだ。最初の神々は、背中と前方の視線に回答があると言った。トウモロコシの男女は見つめ合った。しかし、自分たちが何も理解していないことを自覚し、全員がじっと黙っていた。

いちばん偉大な神々は彼らに言った。

「トウモロコシの男女たちは背中から出発した。トウモロコシが大地から芽生えるときと同じように、横になって生まれた。背中から歩きはじめた。歩んでいるときも、静かに立ち止まっているときも、彼らの背中はずっと後にある。だから、背中こそが始まりである。彼らの歩みのなかでは昨日である」

真の男女はよく理解できなかった。しかし、始まりはもう始まり、昨日は過ぎ去ったことなので、それは気にならなかった。

「われわれはいつまで歩きつづけるのですか？」と、たずねた。

「それなら簡単にわかる」と、世界を誕生させた神々は言った。

「自分の視線で背中を見られるまでだ。丸く輪を描くように歩けば、それでいい。歩みを追いかけて一周し、自分に追いつけばいい。十分に歩き、遠くからでも、自分の背中が見えるようになれば、歩かなくてもよい。ちいさき兄弟姉妹よ」

このように言うと、最初の神々は眠りについた。

真の男女は満足した。背中を見るには円を描くように歩けばいい。それがわかったからである。彼らは背中が見えるように歩きながら、かなりの時間、丸く円を描くように歩いた。やがてちょっと立ち止まり、なぜ歩くことが終わらないのかを考えた

「終わりに到達するため、始めに到達することは、ずいぶん骨の折れる仕事だ。歩く仕事は終わらない。われわれの歩みを終えるため、始まりに到達するのはいつかと考える。そんなことをしても、苦悩は増えるだけだ」と、真の男女は言った

男と女たちの一部はやる気をなくした。終わりに到達するための始まりに向かう歩みが終わらない。それに腹を立て、その場に座り込んで動かなくなった。しかし、別の男女は熱心に歩きつづけた。終わりに到達するため、始めに到達するのはいつだろうかと、考えることをやめたのである。自分たちが歩んでいる道のことだけを考えるようにした。その歩みは円になっていた。そこで、彼らは一周ごとにうまくなろうとした。実際、一周ごとに歩みがうまくなっていることがわかり、彼らは満足した。彼らは歩くことにおおいに満足した。その後も、かなりの期間、彼らは歩きつづけた。そして歩きながら、真の男女は次のように言った。

「われわれがなっているこの道は、たいへん楽しい。道をよりよくするため、われわれは歩いている。われわれはほかの人たちが行き来する道になっている。みんなには、それぞれが歩む道の始まりと終わりがある。しかし、道であるわれわれには、始めも終わりもない。すべてを皆のために、われわれは何もいらぬ。われわれは道である。われわれは歩きつづけねばならない」

そのことを忘れないため、大地に円が描かれ、世界中の誰もが円のように丸く歩くようになった。真の男女は今も円のように丸くに歩く。道をよくする闘い、自分自身をよりよき者にする闘いをやめ、終わらせることはない。世界はもとから丸かった。しかし、それは今も丸くなっている。そのことを人間は信じはじめたのである。



善き統治評議会の横にある「すべてを皆のために、われわれは何もいらない」という標語



丸い終りのない道

世界というこの丸い球は、真の男女の闘いである。道そのものである。彼らはいつも歩きつづけ、自分たちが歩く歩みのなかで、道がよりよいものになることを願いつづける。歩きつづける彼らの歩みには、始めも終わりもない。真の男女は疲れることはない。彼らが望むのはいつも自分自身に到達することである。始まりを見出すため、自分の後を見つめ、自分の道の終わりに到達することである。彼らがそこに到達することはない。彼らもそのことを知っている。だが、それはどうでもいい。彼らにとって唯一重要なことは、自分がいい道であること、よりよい道になろうと努める道となることである。…

老アントニオは静かになった。だが、雨は違った。この雨はいつやむのか。私は彼にたずねようとした。しかし、その場の雰囲気は、始めと終わりに関して質問できるというものでなかった。私は老アントニオに別れを告げた。

新しい電池を入れたが、私の懐中電灯では、何も見分けられない暗闇だった。しかし夜の雨が降りしきるなか、私は退去した。ぬかるみを歩くブーツがたてる音に邪魔され、私は老アントニオの別れの言葉を聞き取れなかった。

「自分の道がいつ終わるのかと質問することに疲れてはならない。昨日と明日が結びつく所で、おまえの道は終わるだろう」

歩きだそうと決意することは、私にはとてもしんどかった。目の前のぬかるみで滑りこけるのはわかっていた。それがわかっているながら、転倒を乗り越えて歩かねばならなかった。転倒は何度も続くだろう。歩くことはつまづくこと、転倒することである。それを私に教えたのは、老アントニオではない。山が教えてくれた。試練はけっして簡単でない。山はそれを私に確信させた。

今、皆さん [1996年6月30日からの国家改革フォーラム参加者] に話したのは昨日のことである。別の昨日、老アントニオの昨日ではない、もっと最近の昨日のように雨が降っていた。昨日…

14 道を創るお話 (1996/7/6)

しかし、偉大なる神々は、主人たる騎士の偉業を語るという重い包みを担って歩むという無限の苦行から、どこかのデカ鼻の従者を解放することになる。こうして偉大なる神々のことを話していると、最初の神々、世界を誕生させた神々にもなわれ、老アントニオが登場することになる。老アントニオはいつものようにタバコを喫いながら、歩いたり、話したりしながら、あの晩、

10年前のあの晩も、私のとなりに座っていた。彼、すなわち老アントニオだけでなく、褐色の血をたたえる尊厳に満ちた心臓をもつすべての男女が、私の脇に座っている。私の脇に座り、戦いのことをわれわれに説明しようと、私に言葉や声を投げ掛けてくる。われわれに説明するため、彼らは語り、私に話しかける。われわれに押しついたり、われわれに強要したり、われわれを飲み込んでしまうためではない。雨が降り、寒々とした薄暗さが壁や天井となって立ちこめていた10年前のあの晩の戦い、彼らの生きた時代のことを語るためである。

あの晩、老アントニオは、マチューテを手にして、ぬかるみのなかを私といっしょに歩いていた。老アントニオは私といっしょに歩いていたと言ったかな？とすれば、うそを言ったことになる。彼は私といっしょに歩いてはいなかった。私は彼の後を歩いていたのである。

あの夜、もともとは、そんなふうには歩いていなかった。われわれは道に迷ってしまった。鹿を追いかけようと、老アントニオが私を誘ったのである。われわれは鹿を追いかけたが、追いつけなかった。気づくと雨が降りだし、夕闇が迫る密林のただ中へわれわれは踏み込んでいた。

「迷ったかな」と、私は虚しくつぶやいた。

「そうだな」と、老アントニオはうなずいた。

だが、さほど心配している様子ではなかった。老アントニオは一方の手でタバコに火をつけながら、一方の手を火にかざし、小さな風よけを作っていた。

「引き返す道を見つけない」と、つぶやく自分に気づき、「磁石があるから」と付け加えた。「ヒッチハイクをしたいなら、自動車があるよ」とでも言うようなものだった。主導権を私に譲りついて行く意向を示すかのように、老アントニオは「そうだな」と、もう一度つぶやいた。

山中での2年間の経験をもつゲリラ戦士としての知識を披露する用意ができていると、私は挑戦を受けて立つかのように宣言した。一本の木の下に雨宿りをしながら、私は地図と高度計、そして磁石を取り出した。実際には老アントニオの前でこれ見よがしに見せびらかすためだった。私はかん高い声で、海拔、地図上の水準点、気圧、何度何分、照準点など、われわれ軍人が「地上航法」と呼んでいる諸データについて説明した。老アントニオは黙って私の脇でじっとしていた。彼がタバコを喫っていたので、私の言うことに耳を傾けていると思っていた。専門的で科学的なテクニックをしばらく誇示した後、私は立ち上がった。磁石をもったまま、夜の闇の一方向を指した。自信満々に「こっちだ！」と言って、その方向に歩きだした。

「そうだな」と、老アントニオが相槌を打つと思っていた。だが彼は何も言わなかった。自分の猟銃、リュック、マチューテをまとめ、私の後を歩きだした。かなりの時間歩いたが、われわれが知っている地点には辿りつけなかった。私は自慢の近代的テクニックが役立たなかったことが恥ずかしかった。無言で私の後をついてきている老アントニオの方を振り返りたくなかった。やがて、われわれはスベスベした壁となってわれわれの進路をさえぎるように屹立する岩だらけの丘に到着した。

「ここから、どっちに行けばいいか？」と、大声で言ったとき、私に残っていた誇りの最後の一片も木っ端みじんとなった。やっと老アントニオは口を開いた。最初にちょっと咳払いし、タバコの破片を唾とともに吐き出した。私は自分の後方で次のような彼の言葉を聞くことになった。

「次に進む方向がわからないなら、来た道を振り返って見ればいいのだ」

彼の言葉を文字どおりに解釈し、私は後を振り返った。われわれがやって来た方向を確認するためではない。恥ずかしさ、懇願、苦悩の混じり合った目で、老アントニオを見るためだった。老アントニオは一言も言わなかった。私をじっと見つめ、私の窮状を理解してくれた。マチューテを取り出すと、藪に道を切り開きながら、別の方向に進みだした。

「こっちですか？」と、私は虚ろな声でたずねた。

「そうだ」と答え、老アントニオは夜の暗闇に隠れている蔓や湿った空気を切り開いた。数分後、われわれは踏み分け道に戻った。目もくらむ稲光で、老アントニオの住む村の輪郭がくっきりと浮かび上がった。ずぶぬれとなった私は疲労困憊で、老アントニオの小屋へ辿りついた。



近代的技術を誇示する副司令



暖かいカマドの火

ドニャ・フアニータはコーヒーを準備していた。われわれはカマドの火に身体を近づけた。老アントニオはぬれた服を脱ぎ、乾燥させるためにカマドの光の脇に置いた。室内の片隅にある地面に座ると、私に夕食を出してくれた。最初、私は固辞した。火から離れたくなかったからである。同時に、地図、磁石、高度計を無意味に誇示した恥ずかしさが残っていたからである。私はじっと座っていたかった。二人はタバコを喫いだした。私は沈黙を破り、どのように引き返す道を見つけたのか、彼に質問した。

「帰り道を見つけたのは、わしじゃあない」と、老アントニオは答えた。

「そこに道があったのではない。道を見つけたのではない。道を作ったのだ。それは自然にできたのだ。それを歩いただけだ。おまえは、道はどこかにあり、おまえの器材を駆使すれば、どこに道があるかを明らかにできると考えていた。だが、そうでなかった。わしがどこに道があるかを知っているはずだから、わしについて行こうと、おまえは考えた。だが、それも違っていた。どこに道があるかなんて、わしは知らなかった。わかっていたのは、われわれは共同して道を作らねばならないことだった。だから、われわれは共同して道を作った。その結果、われわれが目指していた場所に到着できた。われわれが道を作ったのだ。そこに道があったからではない」

「しかし、どうして次に進む方向がわからないなら、後を振り返って見ればいいと、言ったのですか？ 帰り道を発見するためではなかったのですか？」と、私はたずねた。

「そうじゃない」と、老アントニオは答えた。

「道を発見するためではない。それより前に、おまえがどこにいて、どのようなことが起き、おまえが何を望んでいたかを知るためだ」

「どうして？」と、私は恥も外聞も捨ててたずねた。

「そうだな。後を見るために振り返りながら、自分がどこにいたのか、気がついたはずだ。そうすれば、おまえがうまく作れなかった道を見ることができる。後を振り返れば、おまえも気づくはずだ。おまえが望んでいたのは帰ることだった。だが、すべきことは帰り道を発見することだった。わしが返事したのはそのことだ。それが問題なのだ。おまえは存在しない道を探そうとした。自分で道を作らねばならなかったのだ」

老アントニオは満足そうにほほ笑んだ。

「どうしてわれわれが道を作ったと言うのですか。道を作ったのはあなたですよ。私はあなたの後を歩いただけです」と、私は少しバツが悪そうに言った。

老アントニオはほほ笑みながら、「そうじゃない。わし一人で道を作ったのではない。おまえも一定の区間は道を歩いた。だから、おまえも道を作ったことになる」と、言った。

「でも、その道は何の役にも立たなかったのでは」と、口を挟んだ。

「そうじゃない。その道も役に立った。その道が役に立たないなら、われわれは二度とその道を歩かないし、作りもしない。望まない場所にわれわれを連れていったのだから。望む場所にわれわれを連れていく別の道をわれわれは作れるのだから」

こう言った老アントニオをしばらく見ていたが、「自分が作っている道を進めばここに着くと、わかっていなかったのですか？」と、私は思い切ってたずねた。

「そうだ。歩いていたら着いたのだ。働き、闘いながら。働くことは闘うことだ。こう言ったのは、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々だ」と、言って老アントニオは立ち上がった。そして、弁証法をマチューテと同じぐらいきわめて上手に操りながら付け加えた。

「神々はほかにもいろんなことを言った。働けるように戦わねばならないことがある。また、戦えるように働かねばならないこともある」

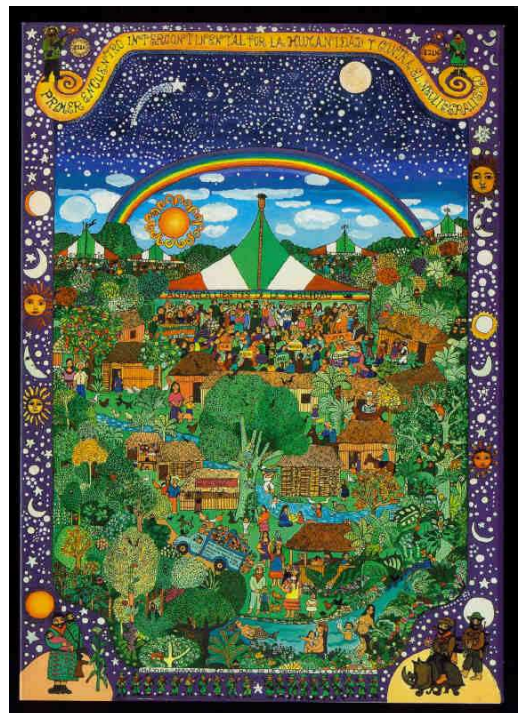
このように私が老アントニオの後を歩いたのは、10年前のあの夜のことである。老アントニオの後を歩いたと言ったかな？とすれば、私は嘘をついたことになる。私は彼の後を歩いたのではない。彼といっしょに歩いたのである。10年前のあの夜である。

今夜はそれから10年後の夜である。私を通じて、この大地の最良の存在、最初に闘い働いた者、過去の最良の時間、先住民の褐色の血が声と言葉を発する。彼らの苦悩と戦いの上に、メキシコという国が建てられたのである。

15 山に生きる死者たち (1996/7/26)



1996年7月の国際集会で発言するアナ・マリア



第1回新自由主義に反対する大陸間集会のポスター

皆さん、自己紹介させてください。われわれは EZLN である。この10年間、われわれは戦争の準備をしながらこの山中で生きてきた。この山中でわれわれは軍隊を創ってきた。

下の世界、都会や大農園では、われわれは存在しなかった。われわれの生命の値段は機械や動物にも劣っていた。われわれは道端の石ころや植物程度の価値しかなかった。われわれは言葉をもたなかった。顔も名前もなかった。明日もなかった。われわれは存在しなかった。

今日、世界のいたるところで新自由主義という名前で登場している権力からみれば、われわれはまったく勘定に入っていなかった。われわれは生産したり、物を買ったり売ったりしなかった。

巨大資本の勘定書では、われわれはまったく無価値の存在だった。

だからわれわれは山に入った。われわれがよき存在になるためである。石や植物のように忘れ去られた存在であるわれわれの苦しみを和らげるものを見いだせるか確かめるためだった。

ここメキシコ南東部の山中には、われわれの死者が生きている。山中で生きているわれわれの死者は多くのことを知っていた。自らの死についてわれわれに語り、われわれはそれに耳を傾けた。語る小箱は、昨日からきて明日に向かう別のお話をわれわれに話してくれた。山はわれわれに話しかけた。われわれふつうのありきたりの人間であるマセワルに話しかけた。われわれは素朴な人間である。権力者が言っているとおりである。

過ぎゆくあらゆる昼と夜、権力者はわれわれにシュトルを踊らせ、野蛮な征服戦争を繰り返そうとしている。カツ・ツル、偽りの人間はわれわれの大地を支配し、巨大な戦争機械をもち、われわれに苦悩と死をばらまいている。その戦争機械は、半分がピューマ、残る半分が馬という体のポーブに似ている。政府という偽りの存在は、われわれにアルーシュ、われわれの人々をだまし忘却を送りつける大嘘つきを派遣している。



ポーブの想像図



アルーシュの想像図

だから、われわれは兵士になった。そして兵士であり続けている。われわれはわれわれのこれ以上の死や嘘を望まない。われわれは忘れ去られたくない。

山はわれわれに話しかけた。声をもつためには武器を手にする、顔をもつためには顔を隠すこと、名前を呼ばれるためにはわれわれの名前を忘れること、明日を手にするために、われわれの過去を隠していることを語った。

山中には、死者たち、われわれの死者たちが生きている。これらの死者とともに、ボタンとイカル、光と闇、湿気と乾燥、大地と風、雨と火が生きている。山は、ハラッチ・ウニック、真の人間、高位の指揮者が暮らす家である。われわれは、われわれであること、真の男女であることをこの山の中で学び、しっかり記憶している。

声で武装し、顔をもって再生し、新たに名前をもったわれわれの昨日は、バラム・ナーのチャン・サンタクルスにある四つの点の中央にとどまり、ひとつの星を誕生させた。その星は人間をかたどり、世界を創る部分が五つからできていることを思い起させる。

雨を降らしながらチャーコブが騎乗していた時間、われわれは仲間と話し合った。そして、種を播く時期を教える暴風雨を準備するため、われわれは山から下りることにした。白い年とともに、われわれは戦争を開始し、この道を歩みはじめた。その道はわれわれをあなた方の心に導く。その道は、今日、あなた方をわれわれの心に導いてきた。

それがわれわれである。EZLN である。耳を傾けてもらうため、武装した声。自己表明するため、隠した顔。名前を呼ばれるため、黙した名前。耳を傾けてもらい、見てもらい、名前を呼ばれるため、人や世界に呼びかける赤い星である。昨日に収穫される明日である。

われわれの黒い顔の背後、われわれの武装した声の背後、われわれの名前のない名前の背後、

あなた方が見ているわれわれの背後には、あなた方でもあるわれわれがいる。どの民族にも存在し、あらゆる色の、あらゆる言語を話し、あらゆる場所に住んでいる単純であたりまえの男と女であるわれわれがいる。

同じように忘れ去られた男女たち。同じように排除された者たち。同じように許されざる者たち。同じように迫害される者たち。われわれはあなた方と同じ存在である。われわれの背後には、あなた方であるわれわれがいる。

…兄弟姉妹の皆さん。

山中では、語る小箱がわれわれに話しかけた。われわれの苦悩や反逆を記憶する昔のお話をわれわれに語った。われわれが糧として生きている夢は尽きないだろう。われわれは旗を降ろしはしない。われわれの死はつねに生きつづけるだろう。

われわれに話しかける山々は言っている。チャン・サンタクルスで輝く星は語っている。クルソブ、反逆者はけっして敗北しない。人の住むこの星にいるすべての人々とともに自らの道を歩みつづける。このようにわれわれに言っている。赤い人間、チャチャク・マック、世界が自由になるのを手助けする赤い星がくると言っている。山である星がわれわれに言っている。五つの人民で構成される人民、あらゆる人民の星である人民、人であると同時に世界のあらゆる人民が、人を創り出すいくつもの世界の戦いを支援するために到来するだろう。真の男女が苦しまずに生き、そして石が軟らかくなるように。

あなた方全員がチャチャク・マックである。全世界、すべての人民、あらゆる人々のなかの五つの部分で創られている人を助けるために到来する人民である。あなた方全員がわれわれのなかに鏡をもつ赤い星である。われわれであるあなた方がわれわれとともに歩むことができるなら、われわれはよい道を歩むことができるだろう。



ユカタンのカスタ戦争におけるチャン・サンタクルス



ユカタンのカースト戦争におけるクルソブ

兄弟姉妹の皆さん。

われわれ人民のなかでもっとも年配の物知りたちは、星の形をした十字架、生命をもたらす水が生まれる場所に据えた。このように生命の開始は山のなかの星で記されている。語る星、われわれのチャン・サンタクルスの声を運ぶ小川はこうして誕生し山から流れ下りる。

山の声は語った。真の男女は自由に生きることができると言いつづけた。彼らが五つの頂点のある星が約束するすべてのものになるなら。五大陸の人民が星のなかでひとつになるなら。世界である人間の五つの部分がおたがい出会い、ほかのものに出会えるなら。五つであるすべてが自分の場所と他者の場所を発見できるなら。

16 遠くと近くを見つめること (1996/7/31)

雨が横たわるように降っている。腰を折るような風が吹くと、雨は横向きに吹きつける。その夜、老アントニオと私は小屋から出発した。老アントニオは畑で芽を出したトウモロコシを盗もうとするアナグマを仕留めるつもりだった。われわれはアナグマを待っていた。だが、アナグマではなく雨と風が襲来したので、ほとんど空っぽの穀物庫に避難することにした。

老アントニオは奥の隅に座り、私は入口の敷居に座り込んだ。二人ともタバコを一服した。老アントニオはひと眠りしたが、私は、いつも以上に気まぐれに舞っている風の方によって、雨があちこちから吹きつける様子を眺めていた。やがて、気ままな風の舞は終わり、どこか別の場所に行った。雨がやむと、コオロギと蛙の耳をつんざく合唱合戦だけが残った。音を立てて老アントニオを起こさないように、私は穀物庫から出た。欲望による身体の踊りが終わったときのように、大気は湿って熱かった。

「あれを見ろ」と、老アントニオが言った。彼の手は西の空に広がる雲のすきまからのぞいている星を指し示した。私はその星を見つめた。よくわからないが、何か胸に引っ掛かっているような気がした。それは悲しく苦渋に満ちた孤独感のようなものだった。

だが、老アントニオが質問する機先を制して、「『指で太陽を指差すと、間抜けな者は指を見る』という諺[指月の教えの言い換え]を思い出した」と、私はほほえみながら言った。

「太陽を見るという奴がいるなら、それ以上に間抜けだよ。目が見えなくなる」と、老アントニオは心の底から笑いながら言った。

諺の言わんとすることを説明しようと思った私は、老アントニオの論理に打ちのめされ、口ごもった。老アントニオは笑いつづけた。彼が笑っていたのは、私自身か、私の説明か、指が指している太陽を見ようとした間抜けな奴のことか。私にはわからない。

老アントニオは座ると、単発式猟銃をかたわらにおいた。そして、古びた穀物庫から取り出したトウモロコシの包葉でタバコを巻いた。黙って耳を傾けると、私は悟った。私も横に腰を下ろし、パイプに火をつけた。老アントニオは紙巻きタバコを二・三服すると、言葉の雨を降らせはじめた。その言葉の落下に付き添うのは煙だけだった。

「さっきしようとしたのはおまえに星を指差すことではない。わしの手で天上にあるあの星に触るには、どれぐらい歩いて行かなければならないのか。それを考えていた。わしの手と星のあいだの距離を計算してくれと、言おうとしていた。だが、おまえは、出し抜けに、指と太陽の話を持ち出した。おまえにわしの手や星を指したのではない。おまえの諺に登場する間抜けな奴は賢明な代替案をもち合わせていないようだ。太陽を見た結果、目が見えなくならなかつたとしても、上ばかり見ていると、やたらに転んでしまう。一方、指ばかり見ていると、自分の進む道がわからなくなる。つまり、立ち止まったままで、指の後しか歩けなくなる。要するに、太陽を見



テホン (アナグマ) はトウモロコシや家禽をねらう



指月の教え

る奴も指を見る奴も、どちらも間抜けだ。歩きながら生きることは、偉大な真実を自分の手にすることではない。計測すると、そんなものはずいぶん小さなことがわかる。昼に到達するため、歩きだそうとすると、夜が到来しようとしている。近くだけを見ていると、われわれはこの辺りをウロウロするだけだ。遠方だけを見ていると、われわれはつまずき、道に迷ってしまう」

老アントニオはいったん喋るのを止めた。そこで、私はたずねた。

「どうすれば、遠くと近くを同時に見ることができますか？」

紙巻きタバコをくわえると、老アントニオは話しはじめた。

「話し合いながら、耳を傾けるのだ。近くにいる者と話し合い、耳を傾けるのだ。遠くにいる者と話し合い、耳を傾けるのだ」

ふたたび、老アントニオは星に手を伸ばした。手を見ながら老アントニオは言った。

「夢を見るとき、彼方の天上にある星を見なければならぬ。しかし、闘うときには、星を指差す手を見つめねばならぬ。それが生きることである。継続して視線を上げ下げするのだ」

われわれは老アントニオの村に帰った。われわれが別れの挨拶をする頃、深夜も夜明けの衣装をまといはじめていた。牧草地の門まで老アントニオは私に付き添ってくれた。私は鉄条網の外側に出ると、老アントニオの方を振り返って言った。

「アントニオ爺さん。星に手を伸ばしたとき、私はあなたの手も星も見えていなかった」

「そうか。では、二つのあいだの空間を見ていたのだな」と、老アントニオは口をはさんだ。

「いいえ。二つのあいだの空間も見えていません」と、彼に言った。

「じゃあ、何を見ていたのだ？」

私はほほ笑んだ。そして、立ち去りながら、老アントニオにむかって叫んだ。

「あなたの手と星のあいだにいるアナグマを見ていたのです」

老アントニオは地面を見つめ、私に投げつけるものがないかと探していた。それを見つけれなかったのか、彼の手が私に届くには遠くすぎる所まで私が行ってしまったのか。それはわからない。いずれにせよ、彼の単発式猟銃を担がなくてもよかったのは、私にとっては幸運だった。

私はゆっくり歩きながら立ち去り、近くと遠くを見ようとした。上でも下でも、光は昼と夜とを出会わせようとしていた。雨は7月と8月を結びつけていた。泥や転ぶこともそれほどは苦痛でなくなっていた。

その10年後、われわれは、遠くの存在でしかないと思っていた人たち、つまり…あなたたちと話し合い、耳を傾けはじめることになる。

17 雨 (1996/12/3)

密林と歴史の奥まったところにある村では、太陽と時間を追いかける長い蛇のような川岸に沿って、先住民の小屋が点在している。

老アントニオは、小屋のなかまで入るようと、私を招き入れることはなかった。太陽の日差しや雨が激しくなると、彼は小屋の暗い入り口に姿を隠した。老アントニオは、扉の支柱のところで応対した。その人物が重要であれば（老アントニオの基準では、その人の言葉に耳を傾ける価値があることを意味していた）、コルク樫の丸太の端を勧め、老アントニオ自身は、門番のように、身体をなかば出し、なかば入れて、扉の敷居にしゃがんでいた。

何年後、ある激しい雨の日、私は老アントニオがそのような行動をしてきた理由を発見することになった。激しく降りつける雨やあられを避けるため、私は本能的に小屋のなかに入ろうとした。老アントニオは手で私を押し留めた。小屋の中に姿を消すと、ナイロンの切れ端をもってきた。無言で私にコルク樫の丸太の上にナイロンの切れ端を広げてくれた。

やがて雨が過ぎ去り、天井や私の帽子から水が滴り落ちだした。私は老アントニオが渡してくれた布切れで武器を拭きはじめた。

「雨が降るのに家に上げなくて、申し訳ない」と、老アントニオはしゃがんだ格好でわびた。

「家の中はとても惨めだから…誰も招き入れたことはない…その人が惨めになってしまうからな。人を招き入れるときは、楽しいことを提供しなければならない。好意をもっている人に対してはそうするものだ」と、つぶやきながら、トウモロコシの包葉で巻きタバコを作りはじめた。

「水といえども痛みをもたらすことがある。しかし、乾いたままであるほうがさらに痛いものである…そのことをおまえはよく知っているはずだ」



サパティスタ支持基盤の小屋

第3部 沈黙という力



第3部 1997～1998年 沈黙という力 (*は老アントニオが登場しないお話)

- 1 騒音と沈黙のお話
- 2 理性と力のお話
- 3 沈黙の音
- 4 明日というパンの材料のお話
- 5 われわれは誰でもない
- 6 他者のお話
- 7 埋められた鍵のお話
- 8 上と下のテーブル*
- 9 ライオンと鏡のお話
- 10 水のなかの魚
- 11 記憶の容器のお話
- 12 ハリケーンと誕生に合意した言葉のお話
- 13 ひとつとすべてのお話

1 騒音と沈黙のお話 (1997/2/14)

追伸：そう言われるに値すると、どこで言われている？

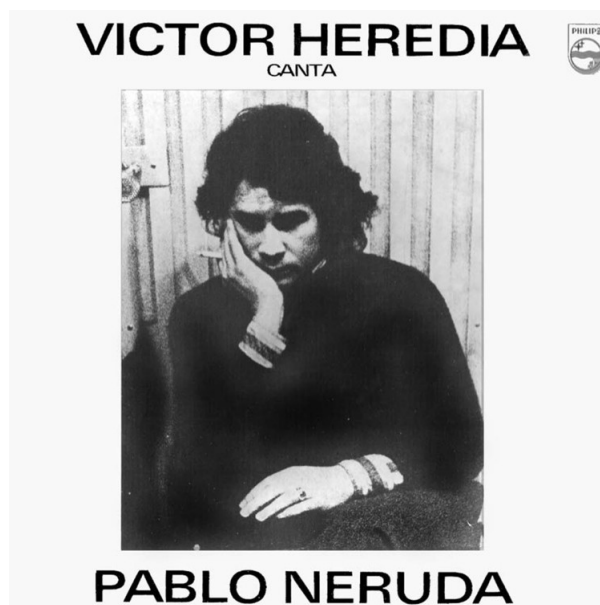
雨が降りしきっていた。愛の贈り物である心地よい疲労で、ラ・マール[マルコスの連れ合い、ジャーナリストのグロリア・ムニョスとされる]はまどろんでいた。カセットから、メルセデス・ソーサの「私に多くのものくれた人生よ、ありがとう」という歌詞が紡ぎ出されていた。

その夜明け前、哨戒中の飛行機がメキシコ南東部の山々の上空で、死の唸り声をたてていた。私はパブロ・ネルーダと称していたネフタリ・レジェスを思い出していた。

「まさにその瞬間、時は時刻どおりにやってくる。人民は人気のない街路を新鮮で堅牢な規模で充たす。ここに、その時に備えた私の優しさがある。その優しさをあなたたちは知っている。私にはほかの旗がない [El Pueblo Victorioso の歌詞]」



1987年発売の『人生よありがとう』のカセット



1974年発売ののアルバム

戦争の時計は「1997年2月14日」を指している。10年前の1987年、そのときも同じように大雨だった。ラ・マール、ラジカセ、警戒飛行機もなかった。しかし、われわれゲリラのキャンプ宿営地のまわりには、夜明けが忍びこんでいた。

老アントニオは残って話し込んだ。午後になり、彼はトスターダの袋をもってきた。キャンプの調理場にはわれわれ二人しかいなかった。カマドの残り火から昇る煙と競い合うかのように、パイプとトウモロコシの包葉で巻いたタバコから紫煙が立ち上がった。

だが、大声で叫ばないかぎり、会話はできなかった。静寂が支配するようだが、激しい雨音は夜の隅々まで侵入していた。雨音以外に音はしなかった。激しい雨音は、山を覆う木々の樹冠だけでなく、地面からも聞こえてきた。上方の木々から落ちてくる雨音、地面を叩きつける雨音で、下からの雨音は倍になっていた。その中間でも、別の雨音がしていた。密林に降り注ぐ2月の雨が、ビニールテントに当たっている雨音だった。上で下も、そして中間でも、激しい雨音がした。言葉の入り込む余地はどこにもなかった。

だから、老アントニオの声がはっきり聞こえたとき、私は驚いてしまった。彼はトウモロコシの包葉で巻いた何本目かのタバコを唇にはさむと、次のお話を始めた。

騒音と沈黙のお話

時間がまだ数えられていなかった時代にも、ひとつの時間があった。その時代、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々は、最初の神々がもともと歩んでいたように、つまり踊りながら、道を歩んでいた。その時代には、多くの騒音があった。あらゆる方向から、声や叫び声が聞こえてきた。騒音が多すぎて、何も理解できなかった。その当時の騒音は、何かを理解するためのものではなく、何も理解できなくするための騒音だった。当初、最初の神々は、騒音は音楽と踊りのためのものと思っていた。すぐさま自分の相手を探すと、こんなふうに踊りだした。

こう言いながら、老アントニオは立ち上がって、最初に片脚に、次に別の脚に重心を移すという風にバランスをとりながら、踊りのステップを示した。

しかし、騒音は音楽でも、踊りでもない。そのことが判明した。騒音は騒音でしかない。騒音では踊れず、楽しい気持ちになれなかった。聞こえてくる騒音は、いったい何を意味しているのか。それを知らうと、もっとも偉大な神々は、注意深く耳をすました。だが、何も理解できなかった。結局、騒音は騒音でしかなかった。騒音では踊れなかった。

だから、最初の神々、世界を誕生させた神々は、歩けなくなってしまった。最初の神々は、踊りながら歩いていたからである。彼らは立ち止まった。歩けなくなり、彼らはとても悲しくなった。それほど、これらの神々、もっとも偉大な最初の神々は、歩くのが大好きだった。

やがて、一部の神々は歩こうとした。この騒音にあわせて踊ろうとした。しかし、それは無理だった。歩き方を忘れ、道に迷い、おたがいに衝突し、転倒し、木や石につまずき、これらの神々はひどく傷ついた。

老アントニオはいったん話を中断すると、雨と騒音によって消えたタバコに火をつけた。火がつき、紫煙が立ち上がった。その後から言葉が出てきた。

そこで、今一度、針路を定めるため、神々は沈黙を探すことにした。しかし、神々は沈黙をどこにも発見することはできなかった。沈黙が立ち去った場所には、当然、多くの騒音だけが残っていた。もっとも偉大な神々は絶望的になってしまった。道を発見するための沈黙を発見できなかったからである。

そこで、神々は集会を開くことに同意した。集会では、神々はきわめて激しい議論を展開した。そこで生じた騒音はとてつもなく大きかった。神々は最終的に合意に到達した。それは各自が歩む道を発見するため、沈黙を探そうというものだった。神々は自分たちが行った合意に満足した。しかし、その満足度はそれほどでもなかった。まだ多くの騒音があったからである。

そこで、それぞれ自分を発見するため、神々は沈黙を探した。神々は四周を探したが、何もなかった。上にはなかった。下にもなかった。沈黙を探せる場所がなくなっていた。そこで、神々は自分の内部を探すことにした。神々は自分の内側を見つめはじめた。こうして神々は沈黙を探しだし、ついに沈黙を発見した。もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々は、自分の内部でおたがい出会い、そこで自分たちの道を再発見した。

老アントニオは黙った。雨音はしなくなった。しばらく静寂は続いた。だが、すぐにコオロギが鳴きだし、10年前の2月14日の夜の最後の静寂は打ち破られた。山の夜は明けた。老アントニオは「もう、行くよ」と、別れの挨拶をした。

一人残された私は、夜明けとともにメキシコ南東部の山中に置き去りにされた静寂の最後の断片を吸い込んだ。

2 理性と力のお話 (1997/6/20)

追伸－愛が巣を作る夢について話そう

私のかたわらにラ・マールが横たわっている。ずっと前から、われわれは苦悩、躊躇、少なからぬ夢を共有してきた。今は密林の暑い夜を私とともに寝ている。夢のなかで、私は彼女の騒ぎ立つ小麦の穂のような髪の毛を見ていた。ほんのりと暖かく瑞々しいラ・マールは、いつものように私のかたわらにあった。その姿を見て私は今一度驚いた。息苦しくなった私はベッドから抜け出した。何年も前と同じように、老アントニオを現在に連れ出すため、ペンをとった。



密林部に滞在していた時期のグロリア



川の下流の探索に同行してほしいと、私は老アントニオに頼んだ。われわれが食料として携帯したのは、ほんの少量のポソーレだった。何時間も、気ままな流れを下だっているうちに、空腹と暑さはしだいに募ってきた。午後はずっとイノシシの群れの後を辿ることになった。夕方、われわれはやっとイノシシの群れに追いついた。

しかし、一匹の巨大な雄（野生の豚）が群れから離れ、われわれに襲いかかった。私といえば、ありったけの軍事知識を引き合いに出し、自分の銃を放り出し、いちばん近くの木によじ登った。老アントニオはイノシシの攻撃にまったく無防備であった。しかし、彼は逃げずに蔓が繁茂する藪に身を隠した。巨大なイノシシは正面から全力で彼を攻撃した。しかし、蔓や棘に絡めとられた。イノシシが藪から脱出する前に、老アントニオは手もちの古い単発式猟銃を取り出し、頭を撃った。それで、その日の夕食の問題は解決した。

私の近代的な自動小銃（口径 5.56 mmのM16 銃、発射速度セレクター付き、実効射程距離 460 m、照準スコープに脚付き、90 発の「弾倉」カートリッジ装備）の手入れを終わった頃には、もう夜明け近くなっていた。実際に起きたことをすべて省き、野戦日記に次のようにメモした。

「イノシシと遭遇。アントニオが一匹仕とめる。海拔 350 メートル。雨は降らず」

われわれは肉が煮えるのを待った。私に割当てられた肉をキャンプ地で準備中のお祭りに提供すると、老アントニオに伝えた。

「お祭りだって？」と、彼は火をかきたてながらたずねた。

「そう。何月かは無関係です。いつも何か祝うことがあります」と、私は返答した。

その後、自説は歴史的な暦とサパティスタの祝賀行事に関する最高の考察であることを強調しながら、私は話をつづけた。老アントニオは黙って聞いていた。しかし、彼に興味がないことがわかり、私は横になって寝ることにした。

老アントニオが私のノートを取り出し、何か書いているのを私は夢のなかで見た。翌朝、朝食の後、われわれはイノシシの肉を分配し、それぞれ帰途についた。自分のキャンプに戻ると、私は司令官に報告した。実際に起きたことを知ってもらうため、野帳を見せた。

「これはおまえの字じゃないな」と、司令官はノートのある頁を私に見せながら言った。

前日、私がメモした文の後に、老アントニオは大きな文字で次のように書いていた。

「理性と力の両方を手にできないなら、理性を選ぶのだ。力は敵にくれてやれ。力は数多くの戦闘で勝利を収めるだろう。しかし、闘争全体で勝利することになるのは理性である。権力者は力から理性を取り出すことはできないが、われわれは理性から力を獲得できる」

最下段には、とても小さな文字が書いてあった。「お祭りを楽しんでくれ」

理由など、いうまでもない。私の空腹はどこかに消えていた。いつもどおり、お祭りはとても陽気だった。幸いなことに、「赤い髪飾りの娘」[Los Pedernalesのクンビア・ノルテーニャ]のは、サパティスタのヒットパレードにはまだのりそうもなかった。



マヤ低地密林に生息するイノシシ



『赤い髪飾りの娘』のアルバム

3 沈黙の音 (1997/7/1)

はるか昔の神々のなかで最長老のものが、天空と大地を読むことを人間に教えた。このように老アントニオは言った。世界という本を構成する偉大な二枚の頁（老アントニオによると、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々はこのように表現していた）のなかで、真の男女は、自分たちが歩むべき方向を読み取ることができる。

天空が沈黙し、太陽と月が黙って統治し、大地が堅牢な地面の内側に自らの任務を隠すとき、トウモロコシの男女は言葉をしまっておく。そして、言葉を考えながら働く。大地の天井が、雲や雨、風とともに叫び、月と太陽が少しの時間だけ顔をのぞかせ、大地が緑と生命で満たされる時、言葉のすみかであり道でもある山のなかで、ふたたび、真の男女は言葉を紡ぎ出す。

この数日間、われわれ（われわれだけではない）は沈黙した。われわれの内面を見つめるためである。新しい種を播くためである。より強くなるためである。心と言葉が自らを実現できる新しい場所を見出すためである。そのため、われわれの沈黙が響いた。

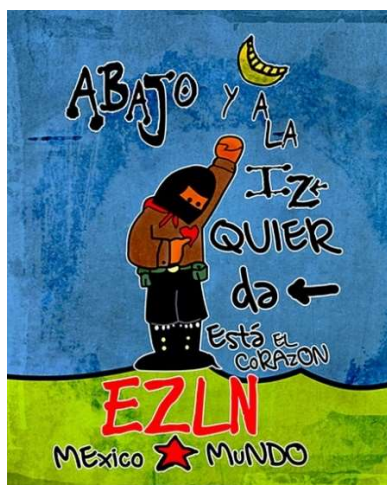
一部の人たちは、胸の左側に心と希望をもっている人々の大半は、騒音と沈黙の時間があることを理解した。そして、その時間が上から強制され押し寄せるときには、沈黙はより力強く共鳴することを学んでいた。

別の人たちは話すことを要求していた。今、黙ってしまえば、勝ち取った空間を明け渡すこと、あるいはわれわれの敗北の上に権力者が作っているもとから幸せな勘定をさらに盛り上げることになる、と言っている。

別の人たちは、われわれに、黙って「慎ましくしろ」とか、「迷惑をかけるな」と要求してきた。EZLNの先住民の登場時間でないことをわきまえろ。政党の時間であることを理解せよと言ってきた。慎ましい人たちに慎ましき、無口な人たちに沈黙を求めてきた。

軍隊は、われわれの沈黙のなかに、自分たちの手持ちの道具である政治的な包囲作戦が決して成功しないことを聴き取っている。最高権力者たちは、サパティスタ内部でおぞましい分裂や粛清が起きていると妄想（願望）していた。それゆえ、この沈黙を利用して、連邦政府や地方政府は、叛乱する共同体に対する軍事的圧力を高め、包囲網を強化してきた。選挙キャンペーンが広報しだした危機を緩和するため、連中の手持ちのすべての力を行使して、われわれを挑発しようとしてきた。

われわれは抵抗する。沈黙しながらわれわれにふさわしい明日を織り込んでいる。権力者の勇猛さと傲慢さは、尊厳と呼ばれるものと幾度も衝突してきた。今、権力者はもっとも弱くなっている。われわれは少しではあるが強くなっている。それがわれわれの沈黙の力である。



4 明日というパンの材料のお話（1997/7/17）

黄金色の風車が引き起こした吹き荒れる風とともに、この地までいろんな知らせがやってきた。善悪は別として、一部のニュースを受け、お二人に挨拶し、思い出のお話をするため、われわれは手紙を書く気になった。

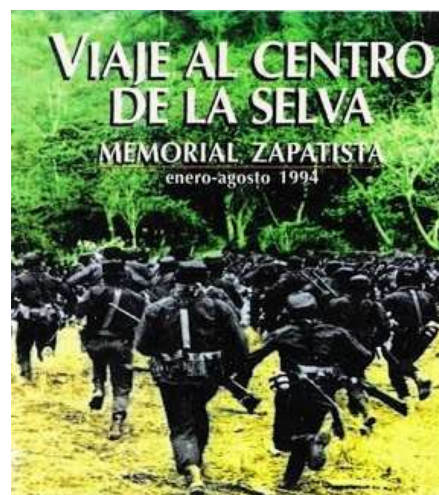
ドニャ・クリスティアーナ [カルロス・パン夫人。先住民の伝統文化保存運動に携わる。直後、癌で死去]のことはよく覚えている。1994年、われわれが彼女と話し合ったとき、彼女は、トニナー遺跡 [オコシゴ東郊にあるマヤ遺跡、現在は軍が駐留] の状況や将来をずいぶん心配されていた。彼女はこの先住民の歴史の一断片を注意深く守ろうわれわれに勧告した。われわれはその遺跡をできる範囲で大切にしてきた。だが、連邦軍は巨大な兵舎を建設し、トニナー遺跡の敷地内で実弾演

習をしている。われわれ自身もひとつの先住民の歴史の遺跡である。そのわれわれは抵抗を続け、ドニャ・クリスティーナの勧告を守り、われわれという記憶の一断片を大切に守りつづける。

われわれはドン・カルロス [ラ・ホルナーダ紙創設社主、PRD 上院議員、COCOPA 委員] のこともよく覚えている。彼と出会うたびに、われわれは、彼の真実 (残念ながらいつも一致するとはかぎらない) を追求する勇敢な責任感、批判精神と冷静さ、よりよい現在を築こうとする強情な努力を思い出す。われわれは、自分が信じていたことを修正しながら、たがいの距離を飛び越えようとするかぎり努力した。しかし、悪い政府はわれわれには真実も歴史も認めようとしない。しかし、われわれはもうひとつの強情な力である。われわれは抵抗を続け、現在が過去の悪夢を再編集しないようにする。



トニナー遺跡はフランシスコ・ゴメス自治区



カルロス・パヤンがプロデューサーの『密林へ中心部への旅』

われわれは自分たちの思い出話をしている。われわれは、われわれの過去の最良のものを取り戻し大切に扱おうとするドニャ・クリスティーナの懸念、よりよい現在を構築し大切に扱おうとするドン・カルロスの懸念を合体したい。つまり、われわれが彼らの手助けで作り出している歴史の話に昨日の一片を付け加えながら、今日を創ることにする。

こうしたお話を創って語るのに最適の人物は…なんといっても老アントニオだろう。

多くの人が明日と呼ぶパンを調理するための材料はとても多い。こう老アントニオは言った。今、カマドに薪の束をたてかけ、老アントニオは付け加える。その材料のひとつは苦悩である。

大地を緑一色に染めていく七月の雨が降った後、キラキラと輝いている昼下がり、われわれは出かけた。家に残ったドニャ・ファニータは、この地でマルケソーテと呼ばれるトウモロコシと砂糖でつくるパンを作っていた。できあがるパンは、パンを焼く容器として使ったイワシ缶の空き缶の形になる。老アントニオとドニャ・ファニータがつれあいになったのはいつのことか？それを私は知らないし、たずねたこともない。今日、密林のこの昼下がり、苦悩は希望の材料になることを老アントニオは話してくれた。ドニャ・ファニータは、老アントニオのために、お話の材料となるパンを焼いている。

数日前の夜から、ドニャ・ファニータの夢は病気で苛まされていた。老アントニオは徹夜で看病しながら、お話と遊びで彼女の病気を癒そうとした。今日の夜明け前、老アントニオは壮大な見せ物を演出した。両手とカマドからこぼれる光を使い、密林にすむ数多くの動物の影絵をファニータのために作った。老アントニオの手や声とともに、小屋の壁面に描かれたのは、夜遊びをするテペスクイントレ、落ち着きのない「白い尾」の鹿、うなり声をあげるホエザル、みえっぱりの雄キジやスキャンダラスな雌キジなどである。それを見て、ファニータは大笑いした。



「そんなもので、私の病気は治らなかったわ。だけど、とてもおかしかった。影絵でも楽しいなんて知らなかったわ」とドニャ・ファニータは私に説明してくれた。

その昼下がり、ドニャ・ファニータは老アントニオのためにマルケソーテを作っていた。それは楽しかった影絵の夜に、老アントニオが調合したが、役には立たなかった薬のことを感謝するためではなかった。彼のためでも、彼の満足のためでもなかった…

いっしょに苦しむのなら、苦悩も癒しとなり、影も楽しい。そのことを証言するためであった。そのために、ドニャ・ファニータは、自分の両手と老アントニオの薪を利用し、イワシの缶詰の古い空き缶のなかで発酵したパンを作っている。癒しともなるこの苦悩、分かち合うパンを失わないため、われわれは、熱いコーヒーを飲みながら、ドニャ・ファニータと老アントニオの共通の苦しみの証言を糧としている。

お二人に話したことは何年も前のことであり、今起きていることでもある。今、暦のこちら側から、そしてこの思い出から、お二人のもとに届くように抱擁を送りたい。それは、お二人をわれわれに近づけ、われわれといっしょにひとつの可能な形をした過去と現在を清め、大切に扱い、築きあげるためである。指針としての尊厳、材料としての思い出を備える過去と現在である。

5 われわれは誰でもない (1997/12/15)

追伸ーギリシア悲劇を現代風にしよう

夜間の軍偵察飛行機が発する脅迫的な音がとどろいた後、茶色のタツノオトシゴがラ・マールの胸に寄り掛かっている。夜明け前は、ものごとを習得する時である。そこで、霧を驚かせ、寒さを和らげるために、老アントニオがやってきた。老アントニオ（理由は説明できないが、エウリピデスの愛読者）は、闘いと未来に関する独自の理論をもっている。「権力者は歴史の転換とともに名称を変える」と、私に向かって言うと、彼は巻きタバコに火をつけた。



「権力者に反対する闘争、権力が全能であり、権力者による支配のない未来はありえない。それをめぐる権力者の見解が、何度も、われわれに繰り返され、販売されてきた。犯罪を美しく見せかけ、嘘には寛大である黄金の鏡の前で、権力者は、『誰も私を打倒できない』と何度も言っている。小さな時から、われわれはこのように歴史を教え込まれた。だから、誰も権力者を打ち負かせないと、われわれは思い込んでいる」

老アントニオはこう言うと、吐き出した長い紫煙で嘘の大きさを描いた。そして、火のついた巻きタバコの小さな光は真実の重さを物語っている。

「われわれ、下のものはいつも同じ名前をもっている。歴史の転換など大した意味をもたない。われわれ、小さき者は誰でもない…」

上空では、夜明け近いことが予告されている。何はともあれ、かくも長い夜の後には、朝と呼ばれるものがやってくる。下では…ラ・マールが寝ている。

6 他者のお話 (1998/1/21)

あなた方に関するわれわれの希望は大きくなり、われわれはよくなっている。なぜなら、われわれは人の意見に耳を傾けられるからである。老アントニオも言っていた。人の意見を聞ける人は大きくなり、自らの歩みを時間とともに進めることができる。その歩みは遠くまで及び、多くの様々な道に増えていく。平和と人類のための戦いは国際的である。この点についてわれわれは皆さんと意見が一致する。なぜなら、異なっている他者がいない人生は虚しく、活力はなくなるからである。真価を認められていないが、偉大なる国際主義者の老アントニオもそう言っている。それが、人類のため新自由主義に反対する国際的な戦いとどんな関係があるのか？ よろしい、それを皆さん [1998年1月21日メキシコ市での集会] に説明するのに最適と思われるお話を知っている。

また、ある夜明け前のことである。威嚇するように上空を偵察飛行機が飛んでいた。しかし、短いロウソクのほのかな灯りで、ラ・マールは一冊の詩の本を読もうとしていた。私は個人的に面識がない人物に手紙を走り書きしていた。その人物は、おそらく外国語を話し、別の文化を有し、おそらく外国人である。肌の色も異なり、きっと別の歴史を有しているはずである。飛行機が通り過ぎたので、私は走り書きをやめた。そうしたのは、詩を読んでいるラ・マールの声にちょっと耳を傾けようと思ったからである。だが本当は、異なる他者に手紙を書くという問題を解決する時間を稼ぐためだった。

そのとき、高い山にかかっている霧を抜け、ラ・マールのあいだから予告もなしに、老アントニオが私のそばにやってきた。私の背中を二・三度たたくと、タバコに火をつけると…



1月3日、政府軍を追い返すチアパス州ショエップの女性



メキシコ市での平和を求めるデモ参加者

他者のお話

この大地に住みついた最長老たちは話した。それによると、いちばん偉大な神々、この世界を誕生させた神々は皆でいっしょに考えることはなかった。神々は同じ考えをもたず、それぞれが独自の考えをもっていた。おたがい尊重しあい、おたがいの意見に耳を傾けた。最長老が言うには、神々はもともとそうだった。そうでなければ、この世界はけっして誕生しなかっただろう。最初の神々は闘うことにすべての時間を費やしたはずである。神々がそれぞれ感じていた考え方は異なっていたからである。最長老たちは言った。いちばん偉大な神々、最初の神々の心のなかにあった考えと同じように、世界は多くの色や形をもって誕生した。いちばん偉大な神々は七つだった。それぞれの神がもった考えは七つだった。世界を彩ったのは、七かけ七の色と形だった。

老アントニオは私に話してくれた。

「神々がおたがい感じている考え方はずいぶん異なるのに、最初の神々はどのように話し合い、合意できたのですか？」と、老アントニオは最長老たちにたずねた。老アントニオが私に語ったところでは、最長老たちは次のように答えたという。七名の神々はそれぞれ七つの異なる考え方をもち寄り会合を開いた。その集会でひとつの合意を導き出した。老アントニオは話してくれた。

最長老が言うには、最初の神々、世界を創造した神々が集った集会は大昔だった。時間がまだ存在していなかった時代だった。この集会で、最初の神々はそれぞれ独自の言葉を発した。

「私の感じている考え方は、他者の考え方と異なっている」と、すべての神々が言った。そこで、神々は黙り込んだ。誰かが「他者」と言うとき、おたがいに異なった「他者」のことを話している。そのことに神々は気づいたのである。

しばらく沈黙が続いた。だが、最初の神々はすでに最初の合意ができたことに気がついていた。その合意とは「他者」が存在するということである。しかもこの「他者」はたがいに異なっているものだった。いちばん最初の神々が手にした最初の合意は、たがいの相違を認め、他者の存在を受け入れることだった。最初の神々は、全員がもともと神だった。だから、それ以外のやり方はなかった。それを受け入れるしかなかった。多かれ少なかれ、他者でない存在はありえなかった。おたがいに異なっても歩かざるをえなかった。

この最初の合意の後も、神々の議論は続いた。なぜなら、異なった他者がいることを認めることと、そうした他者を尊敬することは、まったく別問題だったからである。かなりの期間、おたがいがどのように異なるかについて、神々は話し合い議論した。こうした議論に時間がかかるのは、神々にとり大した問題ではなかった。そのとき、まだ時間はなかったからである。

神々全員が沈黙した後、それぞれが自分の相違点について話した。その話を聞いていたほかの神々は、他者の相違点に耳を傾け、相違点を確認しながら、違ったものをもっていること自体を自覚することが最善であることに気づいた。

こうしてすべての神々は大いに満足し、踊りはじめた。ずいぶん遅れたが、神々は気にしなかった。なぜなら、まだ時間がなかったからである。没頭していた踊りが終わり、神々はひとつの合意を導き出した。異なる他者がいることはよいことであり、自分自身を知るためにも、他者の意見に耳を傾けるべきだという合意だった。この合意が結ばれた後、神々は寝るために立ち去った。踊りすぎで神々は疲れていた。話に疲れたのではない。これらの最初の神々、世界を誕生させた神々は、話がとても好きだった。神々は他者の話に耳を傾けることを習得したばかりだった。

老アントニオがいつ立ち去ったのか、まったく気づかなかった。ラ・マールはもう寝ていた。ロウソクの小さな芯は溶け、歪んだパラフィンの塊になった。上空では、明け方の光の中、天空の黒い空の色は徐々に薄まりはじめた…

このお話は、皆さんに手紙を書こうとしていたとき、老アントニオが私にしてくれたものである。私は確信している。われわれが皆さんに言うべきいちばん重要なことは、つまるところ、われわれが皆さんに耳を傾け、認知し、尊重することである。

7 埋められた鍵のお話 (1998/2/24)

歴史一下にある大地を見ることを理解すること

ラ・マールが一休みしている雲の海岸（四番目の鍵）では、満月はオレンジ色をした星のようである。膨張した満月の縁はきれいに磨かれている。われわれはいつものように横になっている。私はラ・マールに話をしている。その話とは、今朝と同じような夜明け前、老アントニオがタバコの煙で雲を補充しながら、私に話してくれたものである。

タバコの煙を渦巻き状に吐きながら、われわれは月に向けて吹き出した煙の環を見つめていた。おたがい口には出さなかったが、われわれはその紫煙の環に天空にある月を固定しようとしていた。だが、それは無駄だった。押し寄せる時間や雲を打ち破るかのように、月は前進しつづけた。

われわれは黙ってテペスクイントレを待ち伏せしていた。満月のもとでも、テペスクイントレを「照明」できることを証明しようかと、老アントニオは私に提案した。

「あそこだ！見えたか？」と、老アントニオはつぶやくように言った。

「ああ、見えた」と、嘘をつきながら、私は老アントニオのかざすランプの光の束によって浮き出ているはずのエメラルド色の両眼を探した。しかし、無理だった。

単発式猟銃は乾いた音を発し、火を噴いた。しかし、すぐにその音はコオロギの発する太鼓のような執拗な音にかき消された。私は老アントニオがランプで指し示した地点へと駆け出した。50 cmぐらいのテペスクイントレが怯えて立ちすくんでいた。マチューテの平らな背で、テペスクイントレに一撃を加えた。それで、老アントニオの単発式猟銃の一撃とともに始まった食事の準備は終了した。私はテペスクイントレをつかみ、老アントニオが新しい巻きタバコを作っている場所に運んだ。

「おまえは何も見えていなかったな」と、彼は私を見ずにつぶやいた。

実際、私は、月がつごうよく沈むことを期待しながら、『耳をそばだてて』ただけである。

「ちゃんと見ていましたよ」と、まともや平然と嘘をつくことになった。

マッチの光で老アントニオのほほ笑みと口にくわえた巻きタバコが照らしだされた。話題を変えようと、「いつランプを灯し、どこを照らすか、どうしてわかったのですか？」と、質問した。

「この下のほうで見たのだ」と、老アントニオは身振りとともに地面を指差した。

「地面の下で見たですって？」と、私は冷やかすようにたずねた。

老アントニオは質問に答えなかった。直接は答えず、横になってお話を始めた。

埋められた鍵のお話

いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々は、たいへん物覚えが悪かったと言われる。神々は、自分たちが行なったことや、言ったことをすぐに忘れていた。ある人が言うには、物覚えが悪かったのは、いちばん偉大な神々は何も覚える必要がなかったからである。時間が時間をもっていなかった時代から、神々はそうだったという。彼らの前には何もなかった。前に何もなければ、記憶すべきものはなかった。はっきりしたことは誰にもわからない。いずれにせよ、神々は何もかも忘れていた。これまで世界に存在したすべての統治者はこの悪癖を引き継いできた。

しかし、いちばん偉大な神々、最初の神々はよく知っていた。記憶は未来の鍵である。だから、大地、家、歴史を世話するためには、記憶も世話しなければならない。健忘症になるのを防止するため、最初の神々、世界を誕生させた神々は、自分たちが行なったことや知っていることすべてについてコピーを作った。地上にあるものと混同されないようにするため、神々はコピーを地面の下に隠した。だから、大地の地面の下には、地上と同じ別の世界がある。それは地上の世界と同じ歴史をもっているという。最初の世界はこの大地の下にある。

「地下にある世界は、われわれが知る世界と同じですか？」と、私は老アントニオに質問した。

「昔はそうだった。だが、今はちがう」と、老アントニオは答え、次のように説明した。

「時間が経つにつれて、地上の世界は秩序が崩れ、居心地が悪くなった。いちばん最初の神々がいなくなった。すると、どの統治者も、居心地が悪くなったものを調整するため、下を見つめるといことを忘れてしまった。自分が接している世界だけが世界であり、ほかの世界など存在するはずはない。このように新しい世代の支配者たちは考えだした。大地の下のものは、大地の上のものと同じだが、その形態はちがうようになった」

だから、新生児のヘソの緒を大地に埋めることが真の男女の習慣となったと、老アントニオは言った。世界の真実の歴史を見つめ、世界をあるべき姿に再適合させるため、新しい人間が闘えるようにするためである。この下には世界があるだけではない。よりよい世界の可能性がある。

「じゃあ、私たちは下の世界でも二人なの？」と、ラ・マールは眠そうにたずねた。

「当然、いっしょだよ」と、私は答えた。

「あなたの言うことなど信用できないわ」と、ラ・マールは言った。

しとやかに横たわっている向きを変えると、小石が地面に作っていた小さな窪みを覗いた。

「潜望鏡があれば、われわれも覗けるさ」と、私はラ・マールに言った。

「潜望鏡ですって？」と、彼女はつぶやいた。

「そう、潜望鏡だよ。逆立ちした…潜望鏡だ」と、私は言った。

結局、老アントニオの言うことは正しい。私にはそう思われる。われわれが今苦しんでいる世界にくらべ、はるかによい世界がこのわれわれの下にある。記憶は未来の鍵であると、老アントニオは言う。しかも(私が付け加えるなら)、歴史は逆立ちした…潜望鏡そのものである。

8 上と下のテーブル (1998/2/26)

上のテーブル：恐怖と退廃の静止写真

「目覚めていない者たちを目覚めさすことになる。七日間というはかない支配、夢のように過ぎ去った支配、支配が続いた七つの太陽の期間に、目覚めないままの者たちを目覚めさす。その配下の連中は、オリル・オッチ、つまりオポサム姿をしている。しかし、むだなことだが、ジャガーの皮で偽装し、統治することになる」
『チラム・バラム諸本の書』

…コラージュだって？まあ、いい。これであなた方はメキシコの権力のおぞましい七匹の野獣のイメージをもてる。大きなテーブルの上では、国家政党体制というヒドラ、組織犯罪者というメドゥーサたちがのさばっている。それには、オポッサムの政治屋、ネズミの知識人、蛇の銀行家、悪魔の宗教家、ハイエナの軍人が連なる…

下のテーブル：これから撮られる写真

「世界の人々は幸せになるだろう。あらゆる大地の人々は繁栄するだろう。臣民の血をすするアライ、カブコー（ジャガランディ）、メス狐、チャマコブ、イタチは終わりを迎えるだろう。さもない支配者やさもない政府はなくなるだろう。王侯の追従者たちもなくなり、彼らに代わるものを求める者もなくなるだろう。これは、12アハフ・カトゥンが指し示している責務である世界の喜びのため、正当な領主たちの命令は正当なものであり、誰もがそれに従うだろう」

『チラム・バラム諸本の書』



オポッサム



アリクイ



チャマコブ



カブコー

…下のテーブルは雑然としサービスも不十分である。会食し、人々と出会うためにそこに座っている人はまだ少ない。会食者はあちこちバラバラに座っている…下のテーブルはまだ空席がいっぱいある。テーブルに着くには尊厳だけあればよいと言われている…それと潜望鏡が？……

9 ライオンと鏡のお話 (1998/7/17)

憔悴した毛沢東主義に対抗する老アントニオ

老アントニオは話した。若かった頃、彼の父ドン・アントニオは銃なしでライオンを殺す方法を教えてくれた。彼が若いアントニオで、彼の父親が老アントニオだった頃、父親が彼にその話をした。老アントニオは私にその話をしてくれた。だからラ・マールも私の口を通して語られるこの話を知ることができる。老アントニオは私にその話をしたにすぎないが、私は題をつけた。

ライオンと鏡のお話

ライオンはまず獲物の身体を八つ裂きにする。その後で、獲物の心臓を食べながら、血をすする。残りの部分はソピローテ [ハゲタカ的一种] のものになる。ライオンの力に対抗できるものはいない。ライオンに立ち向かう動物はいない。人間でも逃げ出す。ライオンを倒せるのは、ライオンと同じように野蛮で血に飢えた強力な力だけである。

当時の若いアントニオから見ると当時の老アントニオにあたる父親は、トウモロコシの包葉で巻きタバコを作った。カマドの火のなかで光り輝く星のようにパチパチと燃える木の幹を見つめながら、若いアントニオの方を横目でちらりと見た。老アントニオの予想に反し、すぐに若いアントニオは、「ライオンを打ち倒すほど強大な力とは、どのようなものですか?」と、たずねた。

当時の老アントニオは、当時の若いアントニオに鏡を手渡した。

「ぼくに?」と、当時の若いアントニオは円い手鏡に映る自分の姿を覗き込んだ。当時の老アントニオは楽しくほほ笑み(当時の若いアントニオはこう言った)、彼から鏡を取り上げた。

「ちがう。おまえじゃない」と、老アントニオは言った。

「鏡を見せたのは、ライオンを倒せる力はライオン自身の力だと言いたかったからだ。ライオンを倒せるのはライオンだけだ」

当時の若いアントニオは何か言おうとしたが、「そうですか」と、つぶやいた。

当時の老アントニオは、若いアントニオが何もわかってないと知っていたが、話を続けた。

ライオンを倒せるのはライオンである。それがわかったので、ライオンがライオンに立ち向かうにはどうしたらよいかと考えはじめた。共同体の最長老たちはライオンのことをよく知らなければならないと言い、ひとりの若者を任命した。そしてライオンを知るといふ任務を彼に課した。

「あなただったの?」と、当時の若いアントニオは口をはさんだ。当時の老アントニオは、黙って座ると、カマドで燃える木の幹を調整した。そして続けた。

最長老たちは、若者をセイバの木の頂に登らせ、木の根元に子牛を縛った。若者は、ライオンがどのように子牛を扱うかを観察し、ライオンが立ち去るまで木の上で待機しなければならなかった。共同体に帰って、見たことを説明しなければならなかった。若者が待っていると、ライオンがきた。ライオンは子牛を殺し、八つ裂きにした。その後、心臓を食べながら血をすすり、立ち去った。ソピローテは分け前を待ちながら飛び跳ねていた。

若者は共同体に戻り、自分が見たことを説明した。最長老たちはしばらく考え込んだ。「マタドールがもたらす死は自らの死である」と言った。そして鏡と釘、一匹の子牛を若者に与えた。「明日の夜、裁きを実行しよう」と言うと、長老たちは考えを巡らした。

若者はわかっていなかった。小屋に帰った彼はしばらく遊びを見物していた。そこに彼の父親が帰ってきた。父親は何が起きたのか質問した。若者は父親にすべてを説明した。若者の父親は黙っていたが、やがて話した。若者はほほ笑みながら、父親の話聞いた。

翌日、夕暮の空が黄金色となり、灰色の夜の帳が木々の樹冠を覆っていった。若者は共同体を離れ、子牛を連れてセイバの木の根元に行った。母なる木の根元に着くと、子牛を殺し、心臓を取り出した。鏡を粉々に砕き、その破片を血で心臓に貼りつけた。その後、心臓を開け、そのなかに釘を詰め込んだ。心臓を子牛の胸に戻すと、子牛が活着ているように立たせ、杭を使って骨組みを作った。若者はセイバに木の頂に登ると、そこでじっと待っていた。天上では、夜の帳が木々から地上にまで降りていた。

「マタドールがもたらす死は自らの死である」という父の言葉を若者は思い出した。

下の世界が完全に夜になった頃、ライオンがきた。子牛に近づき、一撃を加え、八つ裂きにした。心臓を舐めたとき、ライオンは血が乾いているのが気になった。だが、鏡の破片でライオンの舌は傷つき、出血した。自分の口の血は子牛の心臓の血であると、判断したライオンは、興奮して一気に心臓にかぶりついた。釘でさらに出血はひどくなった。ライオンは自分の口についた血は子牛の心臓の血だと思った。何度も噛んだので、ライオンはさらに傷ついた。さらに大量の血が流れ、ライオンは嘔みつづけた。ライオンは嘔みつづけ、出血で死んでしまった。

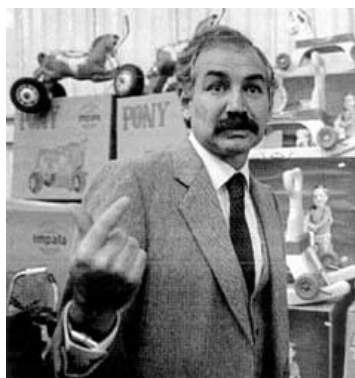
若者はライオンの爪を首飾りにして戻ってきた。彼は共同体の最長老にライオンの爪を示した。長老はほほえみながら、「ライオンの爪を勝利の記念杯ではなく、鏡として保管すべきである」と、若者に助言した。

このように老アントニオはライオンが死んだお話をしてくれた。彼は小さな鏡だけでなく古い単発式猟銃をいつも身につけている。彼はほほ笑みながら片目でウィンクして、「ライオンが歴史を知らないのは当然である」と、言った。

次は、ラ・マールが付け加えたものである。ライオンだけでなく、オリベ [アドルフォ・オリベ、1970年～80年代前半に影響力のあったプロレタリア路線指導者、セディージョ政権内務省特別顧問に就任] もね



死肉をあさるソピローテ



アドルフォ・オリベ

10 水のなかの魚 (1998/7/17)

老アントニオは、元左翼の元毛沢東主義者や元急進主義者でありながら、現在は右翼の犯罪者たちの輝かしき顧問になっている連中（棘あるサボテンのように話してたくせ、今では身を隠すためにダチョウの真似をしている）について話してくれた。それとともに、こうした革命家連中と大衆の関係に関して、水のなかの魚にたとえ、独自の解釈を展開した。同時に、慌てふためく政府の顧問が推奨する「魚から水を奪え」という反乱鎮圧作戦の戦略についても持論を展開した。老アントニオは共同体の最長老たちがしたお話をしてくれた。それは次のような内容である。

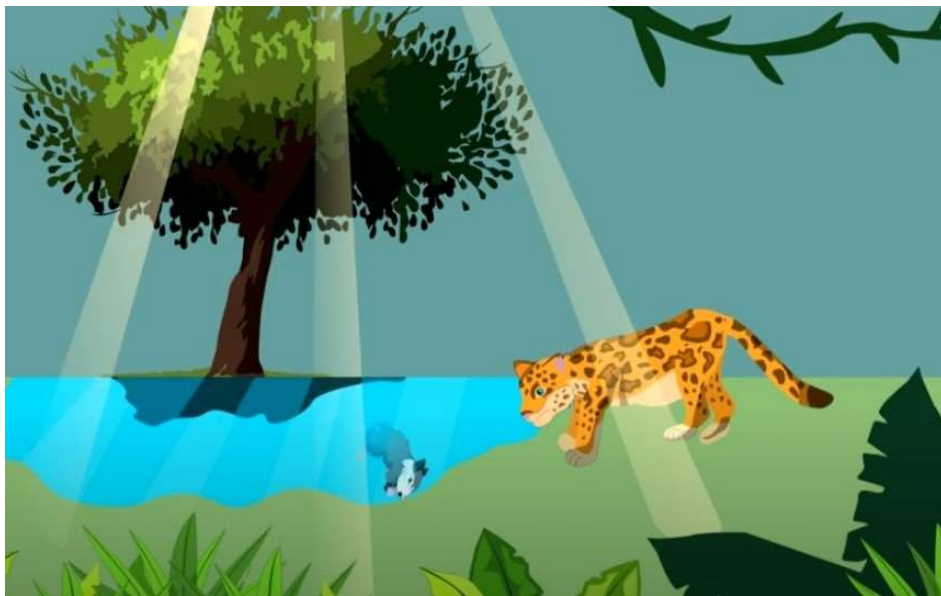
水のなかの魚

むかし、川に一匹のとてもきれいな魚がすんでいた。それを見たライオンはその魚を食べたくなった。ライオンは川に行った。しかし、ライオンは泳げなかったので、魚を攻撃できなかった。

ライオンはオポッサムに支援を要請した。

オポッサムはライオンに、「それは簡単なことです。魚は水がなければ動けません。あなたが川の水を飲み干せばいいのです。そうすれば魚は動けなくなり、あなたは魚を攻撃し、食べられます」と、助言した。ライオンはオポッサムの助言に満足して、彼の王国のポストを割り当てた。

ライオンは川岸に行き、水を飲み干しだした。腹が水で一杯になり、ライオンは死んだ。オポッサムは職を失った。タンタン。



オポッサムを食べようと、水を飲み干すトラ（ジャガー）

11 記憶の容器のお話 (1998/8/28)

ラ・マールは自分のお腹にいる私の夢をみていた。そのとき、数日後、下から発生するものすべてがそうであるように、最初は小さかったが、しだいに成長していった運動の 20 周年をドニャたち [政治犯釈放や行方不明者究明を要求し 1978 年 8 月 28 日からハンストを始めた女性たち、ロサリオ・イバラはシンボリック的存在] が祝うことを私は思い出した。20 年前、(権力からみれば) 頑固で厄介な女や男たちが、政治犯の釈放と行方不明者の所在解明を要求し、ハンストを開始した。

われわれ、そして現在は歴史をもたないほかの人たちも、この強固な慈愛に満ちた女性たちに多くのことを負っている。唯一ではないが、そのひとつは明日のことである。ドニャたちのように、記憶は休息も降伏もしないし、尊厳には年齢とか大きさは関係ない。われわれはそのことをよく知っている。そのことを明日は自分自身とわれわれに約束している。

老アントニオはラ・マールに贈り物を携えてきた。お話をするためだけにお話をした…。



1978年創設の『エウレカ』のドニャたち



記憶の容器のお話

われわれの最長老たちは次のように語った。いちばん最初の神々、この世界を誕生させた神々は、世界を歩む男女に記憶を分配した。いちばん偉大な神々は、「記憶はいいものだ。記憶は現在を理解し、未来を約束するのを手助けする鏡である」と、言い聞かせた。

いちばん最初の神々は、記憶を分配する容器をヒカラで作った。すべての男女が記憶の容器を受け取りにきた。だが、一部の男女はほかの男女より大きかった。記憶の容器はすべての人々にとって対等でないように思われた。より小さき者は自分の記憶の容器を完全に輝かせていたが、より大きな者の容器はくすんでいた。小さき者のあいだで、記憶はいちばん大きく強固になる。逆に、強大な者のなかで、記憶を見いだすのは困難である。男女は老いるにつれてますます小さくなる。それは記憶をより輝かせるためである。最長老たちの任務は、記憶を偉大にすることと言われる。尊厳とは生きている記憶であると言われている。そういうことだ。

12 ハリケーンと誕生に合意した言葉のお話 (1998/11/20)

ここ [11月20～22日、市民社会とEZLNの出会いの集会が開催されたサンクリストバル市] にくる前、副司令マルコスには、老アントニオがラ・マールにしたというお話をしてくれた。副司令がわれわれにそのお話をしたのは、われわれがそのお話を覚え、皆さんに話して聞かすためだった…

皆さんがハリケーンとかサイクロンと呼ぶ湿気と閃光をもった巨大な風が襲来している最中だった。老アントニオは慣れたやり方で、トウモロコシの包葉でまいたタバコに火をつけた。そして、両手を小さくまるめて炎を囲むとともに、彼の口を熱くする言葉も囲み込んだ。そして、これから皆さんが聞くお話を話しはじめた。

ハリケーンと誕生に合意した言葉のお話

われわれの最長老たちが話してくれた。先祖の偉大な先祖たちは、世界は言葉から生まれたと言った。しかし、その言葉は自分、つまり内にむかって話すだけの独り言ではなかった。

偉大なる先祖は言っている。

ひとりである二人が夜の闇のなかで出会ったという。お互いに相手に話しかけ、お互い瞑想したという。それは言葉なしに話すための方法のひとつである。もっとも古い先祖が言うには、二人はテペウとグクマツと呼ばれる。二人であるひとは七つの人格をもつという人もいる。

つまり、創造の母と形成の父であるツァコルとビトルである。

育てる母と世話する父であるアロムとカオロムである。

朝の母と夜の父であるフンフナプー・ブッチとフンフナプー・ウティウである。

祖母の母と祖父の父であるスキ・ニマ・ツウとスキ・ニマ・アックである。

闘い勝利する母とよき統治する父であるテペウとグクマツである。

母なる海と父なる天の心であるウ・クシュ・パロとウ・クシュ・カシュである。

母なる大地と父なる天であるアフ・ラシャ・ラクとアフ・ラシャ・ツェルである。



D・リベラ作画の『ポボル・ウーフ』の世界創生の誕生シーン



テペウとグクマツ

いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々は、二つでひとつ、それが七回だった。この二人でひとりの神は、七回にわたって合意し、言葉や考えをもち寄った。そして、世界を誕生させることに合意し、それを試みた。もっとも偉大なる先祖たちは言った。ひとりが七回の二人は、お互いにフラカンと呼び合うようになった。それは「天空の心」の別の名前である。

もっとも昔の人たちは、世界を誕生させることは簡単ではなく、いろんなものが必要になると言った。言葉は世界を作る道具や材料となる。そして、言葉が誕生するのは、フラカンのときである。言葉によって合意が生まれ、合意によって世界は目覚める。だから、もっとも昔の人たち、われわれの先祖のもっとも古い先祖は言った。天空の心は、カクルハー・フラカン、またはフラカンというものによって創られた。光を発する湿気を含んだ風のなかで、フラカンの新しい世界を誕生させる計画が練られている。

こんなことを老アントニオが言ったのは、われわれが、われわれの大地と天空を濡らしている苦悩を携えながら、サイクロンやハリケーンの時を歩いていく方法を習得し、実行できるようにするためだった。それとともに、今、カクルハー・フラカンが贈っている光のもと、われわれが皆さんと話し合い、言葉を記憶し、きわめて単純なこと、つまり別の世界、よりよい世界、もっとよい世界を誕生させようと試みるためでもあった。



天空の心、フラカン



ハリケーン・ミッチはホンジュラスに最も大きな被害

その世界では、われわれ全員が他者になる。そうしたすべての他者のための空間、他者を尊敬しようとする心、他者の声を聞こうとする耳、他者の声が存在している。だから、まさにハリケーン [中米やメキシコに多大な被害をもたらしたミッチ] が襲来しているとき、この集会が開催され、皆さんがここに到着し、われわれもここに到着した。こうして、われわれは出会うことになる。

13 ひとつとすべてのお話 (1998/12/11)

内容が異なるいくつかの挨拶を受け取りください。サンクリストバルでの会合での取り決めにもとづき、われわれサパティスタは、会合で提出された解決案、さまざまな発表や参加者の意見を考慮しながら、インディオの人々の権利の認知と殲滅戦争の停止に関する協議の招請状 [1999年3月実施] を作成する指令を任務として受け取った。

そのことで、私は老アントニオが話してくれたことを思い出した。皆さん、老アントニオを覚えていますか。彼が語ったお話は、招請状、動員、協議やそのほかの意見表明に加わり、賛同者を増やすという目的にとっても、適切と思われる。



それは12月の夜明けだった。12月、山の夜明けは寒く、雨がちになる。霧が木々にまとわり、木々は今までに見たこともない形や影をもつ。私はパイプから出る一筋の渦巻き状の紫煙を眺めていた。すぐに霧が来て、唇から生まれたこの雲に切れ間を作ると、私は予測していた。

そのとき、なかば霧、なかば影のような姿が近くの本の木から剥がれるように現われた。疲れきったような歩みで、私のそばまで来ると、「知恵とは多くのことを知っているとか、あることについて多く知っていることではない」と、言った。

私は体が震えた。少しは寒さや霧のせいもだが、大部分は先ほど耳にした内容のせいである。何よりもトウモロコシの包葉で巻いたタバコにさっとマッチで火をつける老アントニオの姿を見てびっくりしたからである。このような場合にいつもする動作を私はすることにした。膝を擦りあわせ、パイプを噛み、思慮深いふりをしながら、「ウム…」と、つぶやいた。老アントニオは私の横に座り、口の左側に巻きタバコをくわえ、つぶやくように…お話に形と色と熱を与えた。

ひとつとすべてのお話

時間がない時代があった。始まりの時代だった。夜明け前のようなだった。夜でも昼でもなかった。時間はどこにも行かず、どこからも来なかった。そこにあるだけだった。光も闇もなかった。その時代、もっとも偉大な神々、世界を創った神々、最初の神々がすんでいた。

われわれの最長老たちは言っている。この最初の神々は七つで、それぞれが二つである。われわれの最年長の老人たちは言う。七はすべての数字でいちばん古くから存在する。そして、歩むことができるように、いつもひとつで二つである。だから、いちばん最初の神々は、ひとりで二人であり、それが七つあると言われている。

このもっとも偉大な神々は、知恵と偉大さを備えた者として誕生したわけではない。彼らは小さな存在であり、多くのことを知らなかった。だからこそ、彼らは多くを語り、話した。これらの最初の神々は根っからのお喋り者だった。多くの者が同時に喋った。そのため、お互いに言っていることが耳に入らなかった。これらの神々は多くを話したが、知っていることは少なかった。

しかし、どのように、あるいは、なぜかを知るため、全員が同時に黙ってしまうという瞬間があった。その後、神々はひとりずつ話し、誰もが口々に言った。誰かが話しているとき、別の者は話さないほうがよい。そうすれば、話している者は自分の話に耳を傾け、話していない者はその人の話に耳を傾けることができる。やるべきことは皆が順番に話すことだった。

ひとりで二人の七名の意見が一致したのである。われわれの最長老たちは、これが歴史で最初の合意と言っている。すなわち、話すとともに耳を傾けるという合意である。

神々は、まだ昼も夜もなく、男や女もおらず、動物や事物もなかったこの夜明け前の隅々を眺めた。眺めているうちに、神々は気づいた。この夜明け前のあらゆる一片が真実を語っている。ひとりではすべての隅々が語っていることに耳を傾けられない。

そこで、神々は夜明け前の言うことに耳を傾ける仕事を分担した。こうして、まだ世界とはいえないが、そのときの世界が、神々に教えようともっていたことのすべてを神々は理解することができたのである。ひとつが必要である。理解し、働き、生き、愛するため、ひとつは必要である。そのことを最初の神々は理解した。同時に、ひとつでは不十分なことも知った。あらゆるものが必要である。世界を歩ませるため、すべてが必要である。それを理解した。

こうして最初の神々、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々は、すばらしい知恵者となった。これらの神々は話し、耳を傾けることを知った。そして知恵者となったのである。多くのことを知っていたからでも、ひとつのことについてたくさん知っていたからでもない。ひとつとすべてで、やっと必要で十分なものになる。そのことを理解したからである。

老アントニオは立ち去った。私は待ちつづけた。あたかも、ラ・マールや小麦の髪の毛を待つように。彼がくるのを知っていた。彼は立ち去ったのではない。

第4部 トウモロコシの人間



第4部 1999～2000年 トウモロコシの人間 (*は老アントニオが登場しないお話)

- 1 音楽について
- 2 紙とインクの橋
- 3 暦のお話
- 4 天の川のお話
- 5 誰もが忘れた。だが、全員ではない*
- 6 視線のお話
- 7 夜のお話
- 8 偽の光、石、トウモロコシのお話*
- 9 後に続くわれわれはたしかに理解した*
- 10 大地から生まれた
- 11 明けの明星のお話*
- 12 夜明け前の狩人のお話*
- 13 民族抹殺の機械*
- 14 夜の空気のお話

1 音楽について (1999/2/20)

老アントニオ（音楽家だったら、ブルースを歌っただろう）は言った。

「音楽は、ものごとを知っている人だけが歩ける道を移動している。そして、踊りとともに、いくつもの架け橋を作りだす。ほかの形では夢でも見ることができない複数の世界に、あなたは音楽を通じて近づくことができる」



ギターを奏でる叛乱兵士



サパティスタの女性バンド

2 紙とインクの橋 (1999/4/24)

あなたに認めているこの文章 [不当な死刑判決で1983年から収監されている黒人ジャーナリストのムミア・アブ・ジャマルの誕生日の手紙] が提起する内容について話すのはとても難しい。メキシコの政府や権力者にとって、先住民であること（あるいは先住民に似ていること）は、軽蔑、嫌悪、不信、憎悪のきっかけだと、あなたに説明できるだろう。メキシコの権力者のいる宮殿に住みついている人種差別主義は、何百万もの先住民族に対する殲滅戦争、民族抹殺の極みまで達しようとしている。その人種差別主義は、米国の権力者がいわゆる「有色人種」（アフリカ系アメリカ人、チカーノ、プエルトリコ人、アジア人、北米インディオ、そして味気ないお金と同じ色でない全人類）に対して展開するものと似ている。あなたはそれに気づいていると思う。

われわれも「有色人種」（米国で生活し戦っているメキシコの血をもったわれわれの仲間と同じように）である。われわれはコーヒー色をしている。それは大地の色で、われわれは大地から歴史、力、知恵、希望を汲み取っている。

だが闘うため、われわれは、自分たちのコーヒー色に別の色、つまり黒色を加えている。われわれは、自らを表現するため、黒い目出し帽を使っている。そうしないと、われわれの姿は見えず、声は聞き入れられない。黒色が体現するものについて、われわれに説明してくれたひとりのマヤ先住民の古老の助言で、われわれは覆面の色を黒色にした。

この知恵のある先住民の名前は、老アントニオである。彼は1994年3月、サパティスタの反乱する大地で亡くなった。彼は、両肺と呼吸を嚙み取っていた結核の犠牲になった。

老アントニオは、黒色が光となり、黒色から世界の天空を彩るすべての色が誕生したことをわれわれに語ってくれた。ずいぶん昔（時間がまだ勘定されていなかった時代）、いちばん最初の神々が世界を誕生させる任務を引き受けたというお話をわれわれに語ってくれた。最初の神々が集まったある会合で、世界が生命と動きをもつためには何が必要なのかわかった。そのためには、光が必要だった。そこで神々は太陽を創ろうと思った。そうすれば、日々が動き、昼と夜ができ、

闘う時間と愛し合う時間ができ、昼や夜とともに歩けば、世界も歩みだすだろうと考えた。

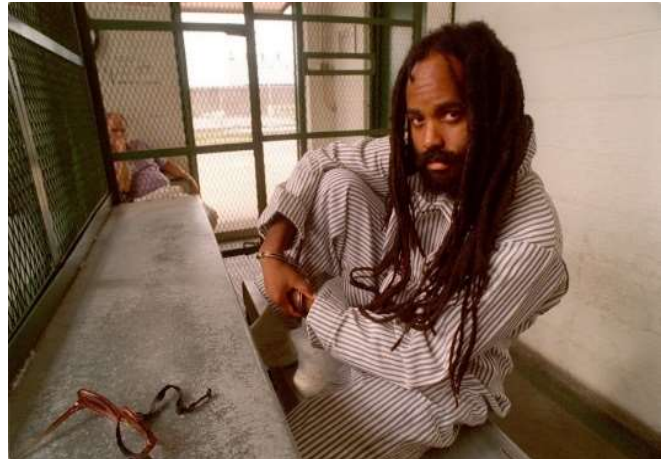
とても大きなたき火を囲みながら、神々は合意をえるための会合を開いた。自分たちの誰か一人が自ら犠牲となって、たき火に飛び込み、火に変身し、天空まで翔け昇らねばならないことがわかった。神々は、太陽になる仕事は黒色の任務であると考えていた。黒色は用意ができていと言うと、火に飛び込み、太陽になった。それ以来、光と動きが存在するようになった。闘う時間と愛し合う時間ができた。肉体は、昼のあいだは世界を創るために働き、夜になると暗闇から光を取り出すために愛し合う。

老アントニオはこのようなことをわれわれに語ってくれた。

これが、われわれが黒色の目出し帽を使っている理由である。われわれは、コーヒー色であると同時に黒色である。しかし、われわれは黄色でもある。なぜなら、この大地を歩き回った最初の人々は、真の人間となるためにトウモロコシで創られたと、われわれに語ってきたからである。そして、われわれは、尊厳ある血が命ずるように赤色でもあり、われわれが翔ぶ空のように青色でもあり、われわれの棲家であり要塞でもある山のように緑色でもある。そして、われわれは、自らの未来の歴史を書き記すための紙のように白色でもある。

われわれは七つの色をしている。世界を誕生させた最初の神々が七つだったからある。

これは、かつて老アントニオがわれわれに語ってくれたことである。今、メキシコ南東部の山中からあなたのもとへ延びているこの紙とインクの橋がもたらすものをあなたにわかっていただくため、私はこのお話を語っている。



米国刑務所に収監中のムミア・アブ・ジャマル

3 暦のお話 (1999/5/10)

今は5月、まだ夜明け前だ。今日も暑くなり、赤々と陽が照りつけそうだ。しかし、これからお話するのは、この5月の夜明け前ではない。5月の夜明け前だが、10年前のことである。

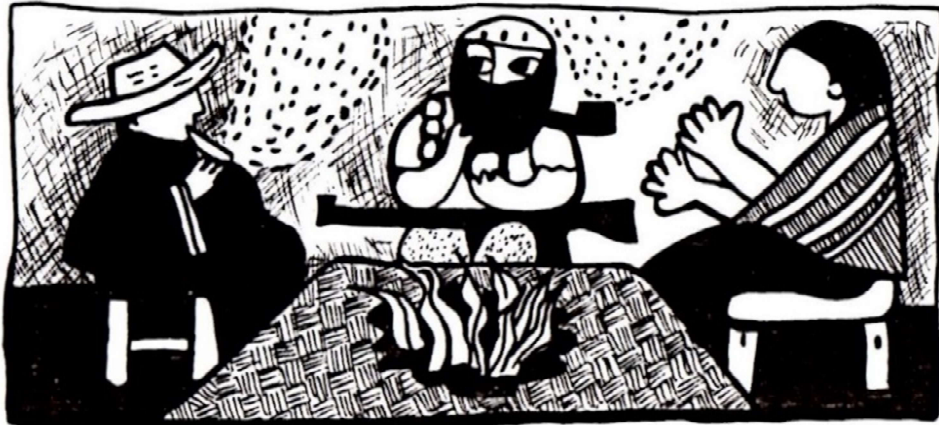
カマドの光で、老アントニオの小屋の壁に光と影が描きだされた。しばらく前から、老アントニオはドニャ・フアニータだけを見ている。彼女は一言も喋らず、自分の両手を見ている。私は彼らの脇にあるコーヒーの入った壺の前に座っていた。ほんの少し前、私は着いたばかりだった。鹿の皮をもってきた。老アントニオが鹿の皮をなめす方法を知っているのだから、なめせるかどうかを知りたかった。だが、老アントニオは鹿の皮など見ずに、両手を見つめるドニャ・フアニータを見まもっていた。

二人は何かを待っていた。つまり、ドニャ・フアニータをずっと見つづけていた老アントニオは何かを待ち、両手をずっと見つめていたドニャ・フアニータも何かを待っていたのである。パイプをくわえ、私も待つことにした。だが、そこで何かを待っている者のなかで、何を待っているのか知らないのは、私だけだった。

突然、ドニャ・フアニータが大きいため息をついた。顔を上げ、老アントニオを見つめ、「もうじき、水が出るわね」と、言った。

「ああ、水がくる」と、老アントニオはあいづちを打った。

彼はトウモロコシの包葉を取り出すと、おもむろに巻きタバコを作りはじめた。それが何を意味するのか、私はよく知っていた。私も急いでパイプにタバコを詰め、火をつけた。そして、今これから私が話すお話に耳を傾け、記憶するため、私は楽な姿勢になった。



暦のお話

われわれの村の最長老たちは語った。

いちばん最初の時代、時間はまったくでたらめにつまずきながら歩いていた。その様子はサンタクルス [5月2・3日に行われる祝祭] の酔っぱらいにそっくりだった。男と女たちは多くのものを失い、道に迷った。時間が滑らかに歩かなかったからである。

時間はせつかに急いでいたかと思うと、足の悪い老人のように足を引きずり、ゆっくりと歩くこともあった。太陽が大きくなり世界を覆っていたかと思えば、別の時には、上も下も中間も水と、すべてが水浸しになることもあった。以前には、雨は、上から下にだけでなく横からも降り、下から上に向かって降ることもあった。つまり、何もかもドンチャン騒ぎだった。種を播き、狩猟し、小屋の屋根をサカトンで葺き、細枝や泥で壁を作ることはできなかった。



マカビル



サカトン

神々はこの様子はずっと見ていた。これらの神々、いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々は、時間に好きなようにさせていた。だから、時間はあちこちへ出歩き、川でマカビル〔ピラニア科淡水魚、10kg、1mに達する〕を捕まえ、サトウキビ〔16世紀に伝わったので先スペイン期にはない〕を嚙んでいたかと思うと、時にはトルティーリヤを作るためトウモロコシの粒をはずすのを手伝ったりしていた。これらの神々、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々はその一部始終を見ていた。神々は考えを巡らすことにした。しかし、急ぐことはなかった。ずいぶんゆっくりと考えた。これららの神々はあまり身軽ではなかった。だから、轟音をたてて大地を歩んでいる時間を見るのに、神々はかなりの時間を要した。ずいぶん時間がかかったが、神々は考えを巡らした。考えるだけでも相当の時間を要する神々は考えを巡らした。

その後、神々はイシュムカネーと呼ばれる母親を呼びだして、次のように言った。

「ママ・イシュムカネー、よく聞け。大地を歩んでいるこの時間はうまく歩けない。飛び跳ね、駆け、引きずっている。それだけではない。前に進むかと思うと、後に進むこともある。だから、まったく種を播けない。見てのとおり十分に収穫できない。ここにいる男女は悲しんでいる。われわれもマカビルを見つけようとずいぶん苦闘した。われわれがおいた場所にサトウキビもない。

だから、おまえに言いたい。ママ・イシュムカネーよ、おまえが何を考えているかは知らない。しかし、時間がこのようにしか歩けないのはどうもよくない。いつ、どこを歩むべきかに関して時間を導くものは、誰もいないし、何もない。ママ・イシュムカネーよ、われわれの考えは以上である。おまえに教えたこの問題について、おまえがわれわれにどう返事するのか。それはわれわれにはわからない」

かなり長い時間、ため息をついた後、ママ・イシュムカネーは言った。

「時間が手綱のないロバのように歩き、ものを壊し、よい人全員を壊すのはよくない」

「そうだ。たしかによくない」と、神々は言った。

神々はしばらく待った。ママ・イシュムカネーはまだ話し終えておらず、話しはじめたばかりである。神々はそれを知っていた。

それ以来、話が終わったと思われるとき、母親はわれわれに話しだすようになったという。

しばらくため息をついた後、ママ・イシュムカネーは言った。

「時間が従うべきお話は、上の天空にあるのですね。次に、何が、どのように、いつ、どこで起きるか。それを誰かが読み取って、時間に伝える。このように時間はなっているのですね」

「そう、お話は天空にあり、時間はそうになっているのだ」と、神々は言った。

ため息をついていたママ・イシュムカネーはやっと言った。

「時間が真っすぐ歩くように、お話を読んできかせたい。だけど、私の目はよくない。天空を見ることはできない。私にはできない」

「できないのか」と、神々は言った。

ママ・イシュムカネーは言った。

「私ができると思ったのですね。時間を真っすぐにしても、ここからは天空を見ることも、読むこともできない。私はそんなに目がよくない」

「フーム」と、神々は言った。

「フーム」と、ママ・イシュムカネーも言った。

こうして「フーム」と言うだけで、時間が過ぎた。

ふたたび考えを巡らした末、神々はやっと言った。

「いいか。ママ・イシュムカネー。おまえが何を考えているかは知らない。しかし、われわれが天空をここにもってくればいい。われわれはそうのように判断した。天空がすぐ近くにあれば、おまえはそれを見て、読める。時間の歩む道を真っすぐにできる」

大きいため息をつきながら、ママ・イシュムカネーは言った。

「だけど、天空をどこに？ダメ。ダメ、ダメ。私の小屋がとっても小さいの知らないの」

「ダメ。ダメ、ダメか」と、言うのと、神々は、しばらく「フーム」、「フーム」と唸っていた。

ふたたび考えを巡らし、神々は言った。

「いいか、ママ・イシュムカネー。おまえが何を考えているかは知らない。しかし、われわれが、天空に書かれているものを書き写して、地上までもってこれればいと判断した。それを書き写せば、読める。そうすれば、おまえは時間の歩む道を真っすぐにする事ができる」

「それなら、かまわない」と、ママ・イシュムカネーは言った。

神々は天空まで昇ると、天空が語っているお話をノートに書き記した。もう一度降りてくると、帳面をもって、ママ・イシュムカネーと会った。そして彼女に言った。

「いいかい、ママ・イシュムカネー。ここに天空が語っているお話がある。われわれはこの帳面にお話を書き取った。しかし、それはいつまでも続かない。だから、おまえは、時間の歩む道が真っすぐになるお話がずっと続く別の場所へ書き写さねばならない」

「はい、わかった。そうする」と、返事をした。

ママ・イシュムカネーは、「両手にそのお話を書き写す。時間のために歩む道を真っすぐにする。そうすれば、時間は真っすぐ歩み、足の悪い老人のように歩くことはない」と、言った。

そこで、時間の歩む道を真っすぐにするため、神々は天空で語られるお話をママ・イシュムカネーの手のひらと甲に書いた。だから、ものごとをよく知っている母親たちの手には、数多くのしわがある。そして、彼女たちはしわで暦を読む。時間がまっすぐ進み、歴史が記憶に播いたものを収穫することを忘れないよう、彼女たちは注意を払っている。

老アントニオは黙った。ドニャ・フアニータは両手を見て、「時間通り、水が出るわね」と、繰り返した。



『マドリー絵文書』にあるイシュムカネー

皆さんにお話したことは、10年前の5月の夜明け前の出来事である。今日、5月10日の夜明け前、われわれは、この集会 [1999年5月8～10日の第2回市民社会とEZLNの出会いの集会] に参加している人々、そしてこの集会に参加していないが、われわれとともにいた人たちのグループに挨拶したい。私が言っているのは、政治犯と政治的行方不明者の母親たちのことである。この5月10日、われわれ、彼女たちの新しい子どもたちは、彼女たちを祝福したい。尊厳のある記憶をわれわれにもたらし、歴史が種を播いた明日を収穫するためのお話をわれわれに思い出させるため、ママ・イシュムカネーは彼女たちをともなって戻ってきた。

このものごとをよく知っている母親たちよ、お元気で。記憶を失わない人がいることをわれわれに保障している女性たちよ、お元気で。

仲間の皆さん

われわれと出会うためここまできたすべての皆さんに感謝の意を表したい。この数日間、われわれは、先住民族の権利認知と殲滅戦争の終止に関する協議というジグソーパズルを再構築できた。皆さんが持参したものと、われわれがもつものすべてを合わせれば、われわれ、すなわち皆さんとわれわれは、すべてのピースを手に入れている。だが、この運動が有する形に関するおおよその理念は、まだ完成していない。だから、まだ繰り返す必要がある。しかし、協議というジグソーパズルの裏側で、われわれは、隠されたまま、謎の解明を待ちつづける別のより偉大で強力な像を想起する手助けとなる別のピースを見つけることになった。

聖典『ポポル・ウーフ』は言っている。もっとも古い神々は、人々や土地を支配する尊大な領主たちの攻撃や欺瞞に対抗しなければならなかった。尊大な領主たちの欺瞞を何度か受けた後、



皮に虎、鷲、蜂を描く

神々は、自分たちの強さと力を知ってもらうため、尊大な領主たちに三つの贈り物をした。それは美しく描かれた三つの皮だった。ひとつの皮には力強い虎、もうひとつには勇敢な鷲、三つ目の皮には数多くのマルハナバチやスズメバチが描かれていた。

尊大な領主たちは、これらの贈り物を喜び、征服しようとする神々の力がどれほど強大であるかを試そうとした。恐る恐る虎の描かれた皮を被ったものの、何の問題もなかった。虎の描かれた皮はとても美しいものだった。描かれた虎が何の問題もないことがわかって、尊大な領主たちの心はとても喜んだ。彼らが征服しようとした神々の力はたいしたものではないと、彼らは判断したのである。そして、二番目の鷲の描かれた皮を体につけたが、鷲は彼らに何の危害も及ぼすことはなく、鷲の皮はとても光り輝いていた。彼らの心はさらに喜び、描かれた皮など何の役にも立たないので、もうすぐ力のない神々を征服できると喜んでいた。

何も恐れることなく、尊大な領主たちは、何千匹もの色とりどりのスズメバチやマルハナバチが描かれた三枚目の皮をまとった。その瞬間、マルハナバチやスズメバチが生きかえり、領主たちに激しく襲いかかった。領主たちのその刺された痛みは激烈なもので、彼らは神々の知恵と力に屈することになった。

この第二回会議で合意した内容で、われわれはこの国が必要とする素晴らしい肌の色を塗り終えることができるだろう。それをわれわれは期待している。

それでは、お元気で、良い旅を。

4 天の川のお話 (1999/6/24)

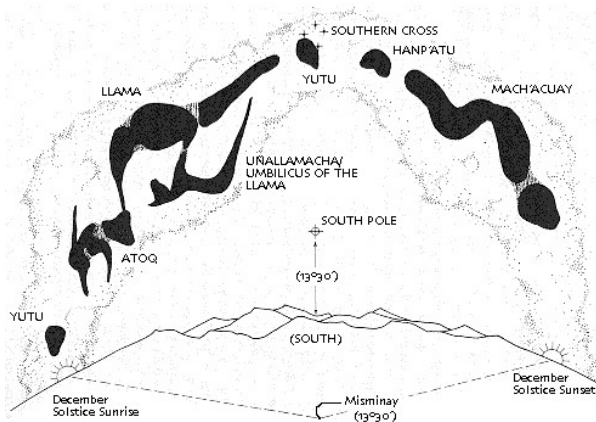
1999年6月24日。メキシコ南東部の山中では、サンフアン〔ほぼ夏至の日に対応する6月24日の祝祭〕の夜のとぼりが広がっている。お決まりのように、雨は降りつづいている。記憶の小箱が、海風に乗ってこのセイバの木のとっぺんに運ばれた。小箱の開いた口の継目のひとつから、光の蛇が抜け出した。それといっしょに歴史も抜け出した。夜の雨のように、老アントニオはお話のなかに登場した。いつものように、巻きタバコ、そして記憶につける火を貸してくれと、私に言ってきた。ナイロン製の天幕に降り注いでいる雨は、太鼓を打つように騒がしい。老アントニオのお話をする言葉は、その雨音を越えて、記憶と輝く蛇のように立ち上がる。

天の川のお話

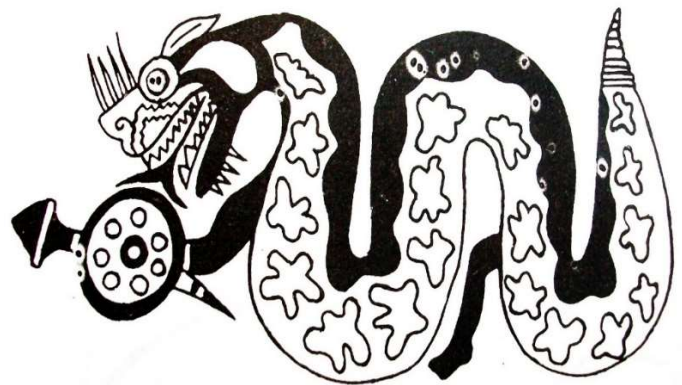
雨が山々を洗い流し、裸にしていく前、山の上ではほこりだらけの光の長い道が見えていた。こちらから向こう側までと、手振りをしながら、老アントニオは、その光の道は向こう側から始まり、こちら側まで到達していると言った。その長い道は「天の川」、「サンティアゴの道」と命名されている。それは無数の星でできているという。なぜかはわからないが、その無数の星は、小さいものがいっしょになって、自分で穴をあけている天空に裂け目と小さな道を作っている。しかし、そうではないとも言われる。われわれの長老たちの最長老のお話では、あの天空に見えるのは傷ついた動物である。

老アントニオはひと呼吸ほどおいた。「傷ついた動物ですって」という質問を彼は待っていたようだったが、私はたずねなかった。

ずいぶん昔のことだ。いちばん最初の神々はすでに世界を創造し終わっていた。神々はゴロゴロとして過ごしていた。男や女は大地を耕作したり、放棄したりしながら暮らしていた。そんな時代のことだった。



アンデスの人々の天の川に隠れた動物イメージ：
狐 (ataq)、リヤマ、大蛇 (Mach' acuary)



先スペイン期アンデスの蛇のモチーフ

ある日、ある村に男を食べる巨大な蛇が出現した。その大蛇は、男性だけを食べ、女性を食べることはなかった。大蛇は、村の男全員を食べ尽くすと、別の村に行き、そこでも同じことをした。村の人々は、自分たちの身に降りかかった驚くべき出来事について、早急に連絡しあった。この大蛇に対する恐怖が人々の口からつぎつぎ語られた。

その大蛇はとても太くて長いので、村全体を取り巻くことができた。大蛇に壁のように囲まされると、人々は出入りできなくなった。その後、男全員を差し出さないなら、誰も外には出さないと、大蛇は宣告した。降参する者もいたが、大蛇と闘う者もいた。しかし、大蛇の力は強大で、つねに勝利をおさめた。巨大な蛇が自分たちの村を襲撃し、男全員を食べ尽くす日がいつくるかと、村の人々は恐怖を抱いて暮らしていた。こうして、蛇は村々の男全員を呑み込んでいった。

だが、ひとりの男が大蛇から逃れることに成功した。男は大蛇に攻撃されたことのある共同体に避難した。その共同体には女しかいなかった。男は大蛇のことについて話した。大蛇がこの大地にもたらした被害は甚大で、大蛇を倒すため闘わねばならないと主張した。

しかし、女たちは口々に言った。

「女なのにどうして戦えるというの？」

「男なしでどうやって大蛇と闘うというの？」

「大蛇は男を食べ尽くし、村に男はいない。蛇はもうここに来ない。どう攻撃するの？」

女たちは落胆し悲しくなり立ち去った。ひとりだけ残っていた女は、男に近づき質問した。

「どうすれば大蛇と戦えると、考えているの？」

「どうすればいいか、わからない。だが、方法を考えないと」と、その男は答えた。

こうして、男と女はいっしょになって考えを巡らし、計画を練った。そして、その計画を伝えるため、残りの女たちを呼びにいった。女たち全員がその計画に合意した。

そこで、恥ずかしがることもなく、男は村の中央で計画を説明しはじめた。その様子を遠方から大蛇が見ていた。大蛇はとても目がよく、遠くからでも見ることもできたのである。

やがて村まできた大蛇は、その長い体で村全体をぐるりと取り囲んだ。そして、この辺りを歩いていた男を引き渡せと、女たちに言った。男を引き渡さないなら、誰も出入りできないようにすると、大蛇は脅した。女たちは次のように言った。

「いいです。男を引渡します。だけど合意を得るため、会合を開かねばなりません」

「かまわない」と、蛇は答えた。

女たちは男を囲むように輪になった。女の数が多く、輪はしだいに大きく広がった。やがて、村を取り巻いている大蛇の身体が作っている輪と同じ大きさになった。

そのとき、「これでいい。私は降伏することにしよう」と、男は言うのと、大蛇の頭の方に歩いていった。大蛇は楽しそうにその男を食べはじめた。

そのとき、女たち全員が鋭い刃のついた棒を取り出し、大蛇の体中を突き刺しだした。女の数はとても多く、大蛇の体のいたるところに女たちがいた。呑み込んだ男で口を塞がれていたため、大蛇は棒の攻撃から身を護ることはできなかった。弱い者たちが、そのような形で身体のあらゆる箇所を攻撃することなど、大蛇はまったく考えていなかった。

「許してください。殺さないでください」と、大蛇は言った。

「ダメだ。おまえを殺す。おまえは数多くの悪事を働いた。私たちの男を全部食べたではないか」と、女たちは咎めた。

「ではこうしよう。私を殺さないと言ってください。そうすれば、皆さんの男をお返しします。皆さんの男たちはまだ私の胃袋にいます」と、大蛇は提案した。

女たちは考えた。大蛇を殺さないのはいい。しかし、巨大な蛇がこの土地で暮らしつづけるのはよくない。だから、この土地から大蛇を追放すべきである。

「私はどこに行けばよいのですか。何を食べればよいのですか。その取り決めができていません」と、大蛇は言った。

村の女たちはこの厄介な問題に直面した。そのとき、最初の女は、この村にきた男がどう考えているか、たずねるべきだと主張した。そして、大蛇にむかって言った。

「さきほど食べた男を吐き出さない。私たちに何ができるかについて考えをもっているか。それを彼に確かめることにします」

蛇はなかば死になかば生きている男を吐き出した。男はどうか話すことができた。

「何ができるのか、最初の神々にたずねるべきです。私はなかば死になかば生きているので、最初の神々を探しに行くことができる」

こうして出かけた男は、最初の神々を発見した。彼らはセイバの木の下で寝ていた。彼は神々を起こすと、懸案になっていることを説明した。神々は集合し、考えを巡らせ、よい合意を引き出すことにした。神々は蛇と勝ち誇っている女たちを会いに行くことにした。女たちの意見を

聞いて、「悪いのは大蛇だ。大蛇は罰されねばならない。呑み込んだ男たちを返しなさい。男たちを死なせてはならない」と、神々は宣告した。

大蛇はすべての村々の男たち全員を吐き出した。すると、神々は言った。

「大蛇はここを立ち去り、もっとも高い山で暮らすのだ。ひとつの山に入るのだが、世界でいちばん高い二つの山を使いなさい。一方の山に尻尾、別の山に頭をおくのだ。太陽の光を食べなさい。闘う女たちが大蛇に作った数千の傷跡が閉じないようにしろ」

こう宣告すると、神々は行ってしまった。その蛇、大蛇は、悲しみにくれ、高い山に登った。大蛇は、頭をひとつの山、尻尾を別の山に載せ、その長い体を天空に横たえることになった。



人を飲み込む蛇



それ以来、大蛇は、昼間には太陽の光を食べている。夜には、大蛇は身体の傷跡にある穴から光をまくようになった。大蛇は青白く、昼には見えない。夜しか、大蛇の身体から落下する光は見えない。翌日、太陽が食料となる新たな光を発するまで、大蛇の身体は空っぽである。夜、はるか天空で輝いている長い線は、傷ついた動物である。

私が理解できたのは、天の川は昼間に食物を食べ、夜に出血する長い光の蛇ということである。

このサンファン夜の雨も、やっとやんだ。天空は明るい褐色になった。こちらから向こうへ、そしてこちらから向こうの地平線へといたる、何千もの傷をもった太い形の天空からぶら下がっている光の蛇が見えるようになった。銀色の房はふんわりとセイバの木のとっぺんに降りている。

セイバの木の下では、別の雨の雫がさらに下の方に向かって落下している。雨をいとわない顔のない鏡から、輝きが跳ね返り、さらに遠方まで到達し、この片隅にまで届いている。その影の後に見えるのは…

5 誰もが忘れた。だが、全員ではない (1999/7/31)

これは自由なものたちの木である。

大地という木、雲という木、パンという木、矢という木、拳という木、火という木。

夜を迎えたわれわれの時代の荒れ狂う水は木を水没させる。

しかし、木の幹は権力の回転のなかで均衡を保っている。

—パブロ・ネルーダ『大いなる歌』—

最古者たちが話している。セイバの木の高い樹冠に置かれている世界は、つねに忘却という深淵の直面している。最初の神々、いちばん偉大な神々は、世界を母なる木の上に置いた。最初の神々は、色と言葉、歌で世界を創った。世界が誕生させ終わったとき、世界をどこに置けばいいのか。神々は何も知らなかった。彼らは歌や踊りに出かけたかった。というのも、これらの神々、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々は、音楽や踊りが大好きだったからである。夜がこちらから向こうへ横切っていく光でできた長いマリimbaは、もう準備されていた。いちばん最初の神々は、世界をおく場所を発見できなかった。

合意を導き出すため、神々は集会を開いた。ずいぶん時間がかかったが、誰もそれに気づかなかった。世界は誕生したばかりで、時間はまだ時間として始まっていなかった。最初の神々は合意を導き出したので、母なるセイバの木を呼び出した。セイバの木のでっぺんに世界を載せるためだった。セイバの木は一言も言わなかった。たくさんある腕で世界を抱え、いちばん高い樹冠に載せた。そして、世界が驚かないように、セイバの木はじっと静かにした。

皆さんに話したことが起きたのはずいぶん昔のことだ。男と女はそのことを忘れてしまった。そして、学校で世界の場所を説明できないことを恐れるあまり、黒い星、「ビッグ・バン」、太陽系、銀河系、宇宙、さらにどの学校でも採用されている地理の本に満載されているばかげたお話が発明された。

誰もが忘れた。だが全員ではない。

最初の神々はものをよく知っていた。世界がどのようにして誕生し、どこに置かれていたか。しかし、誰もがそのことを忘れてしまった。そのことを神々ははっきりと知っていた。だから、神々は世界がどのように創られたかという歴史をすべて書き記した。世界はどの場所にあるかをはっきりさせるため、地図も作成した。いちばん偉大な神々、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々は、自分の学校の覚書帳に何もかも書き記していた。

まず、神々は覚書帳を保管する場所を探そうとした。その覚書帳には、世界がどのように創造されたかというお話、世界がある場所の地図が記されていた。神々はずいぶん論争した。覚書帳はどこにでも保管できる代物ではなかった。合意を引き出すために、神々はまた会合を開いた。

そこで、神々はトウモロコシの男女、真の人間を呼び出した。そして、彼らに世界がどのように創造されたかというお話を話し、その世界がある場所について説明した。彼らが忘れても思い出せるように、神々は紙に覚書をしたためた。そして、その紙をアコーディオンのように何度も折り曲げ、セイバの木の樹皮にある傷跡に保管した。

最初の神々は、踊りと歌に出かけた。マリimba、ギター、タップの響きが消えてから、かなりの時間が経過した。しかし、母なるセイバの木はしっかりと立ち、世界が墜落しないように、本来の場所にあるように、世界を支えていた。それ以来、世界は今ある場所にある。最悪の死の夜、もっとも恐ろしい夜、つまり忘却という夜から離れたところで、セイバの木は世界を支えている。

世界は母なるセイバの木の上でじっとしている。しかし、歴史のなかで何度も、上から吹きつける風は、世界を絶望の暗い闇に墜落させようと、世界を押しやった。

世界が壊滅する瀬戸際まで追い詰められたことも少なくない。権力の風はあらゆる方向から世界に襲いかかっている。戦争、大惨事、危機、独裁者、新自由主義の方式、教員組合指導者、腐敗した政府、政府高官の暗殺、大統領候補の偽装犯罪、制度的革命党、北大西洋条約機構、民営テレビ放送などが襲いかかる。何千もの悪夢は、あらゆる方向から、恐怖を吹きつけ、世界を母なるセイバの木の高い樹冠から墜落させようとしている。

しかし、世界は抵抗してきた。まだ墜落していない。世界を構成しているすべての世界の真の男女は、母なるセイバの木にくっつき、幹、枝、葉、根となった。世界が墜落せず、抵抗し、新たに成長し、そして新しいものになるためである。

上と下の戦い、権力者ともたざる者の戦いは熾烈なものである。この衝突の理由や原因につい

て、数多くのことが書かれてきた。実際、誰もが同じ理由をあげている。つまり、権力者はセイバの木が支えている世界を崩壊させようとする。下の者たちは世界と記憶を堅持しようとする。なぜなら、記憶こそ、明日が成長しはじめる場所である。権力者は人間性を打ち壊そうと戦っている。もたざる者は、人間性のために闘い、そして夢見る。

これは真のお話である。小学校の教科書に出ていないとしたら、上の者たちがまだ書いていないからだろう。それに対して、下の者たちはすでに歴史を書いている。公式の研究計画の一部にはなっていない。しかし、世界の誕生のお話、世界がどこにあるかを説明する地図は、母なるセイバの木にある傷跡に保管されている。

共同体の最長老たちはサパティスタに秘密を託した。いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々が、記憶が消えないよう残した書込帳がどこにあるのか。山中でサパティスタに語って聞かせた。だから、個人としての顔、名前、過去をもたずに誕生して以来、サパティスタは大地が教える歴史を学ぶ生徒だった。記憶を記した古い覚書を参照しながら、世界がどのように誕生したかを教え、世界がどこにあるかを示すため、サパティスタは 1994 年の夜明けに教師になったのである。それゆえ、サパティスタは生徒であると同時に教師でもある。尊厳が生きている何千もの略号のもとにサパティスタであることが隠されている。それゆえ、教師はサパティスタである。

ラ・レアリダーのアグアスカリエンテスの隅に一本のセイバの木が鎮座している。男女が目まぐるしく行き来するのを見守り、励まし、保護している。この地では、誰も歩かない日もある。だが、翌朝になると、あらゆる色、大きさ、そして話し方をする男女が姿を現わす。彼らは笑い、心配し、踊り、歌い、話す。彼らは話し合い、いつもではないが合意する。そのため、彼らはいつも出会っている。

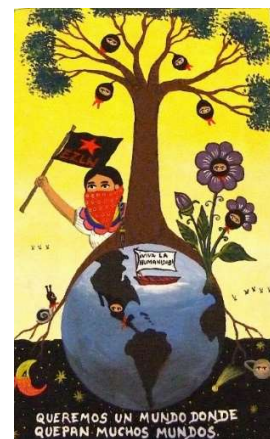
ラ・レアリダーの孤独な夜明け前、いくつかの雲は湿り気を絞りだし泣きだした。上や下で雨が強く降っているとき、影のなかにひとつの影を見ることができよう。つねに顔をもたない影は、母なるセイバの木に近づき、歴史の書かれている湿った折り目に一枚の小さな紙を探している。小さな紙を見つけ、震えながらそれを開け、読み、もとの場所に返している。

その小さな紙には、何か書かれている。それは、担ぐ者を自由にするという巨大な重荷にほかならない。それは、仕事、使命、課題、何かすべきこと、歩くべき道、植えつけ、育てるべき木、夜を撤して見るべき夢である。おそらく、その小さな紙は、すべての世界を含み、拡張する世界のことを話している。つまり、その世界においては、色、文化、大きさ、言語、性、歴史の違いは、排除し、迫害し、分類するために役立つことはない。世界の多様性は、現在われわれの首を絞めている灰色の世界を完全に打ち砕くために役立つことになる。

そんなことは誰も知らないって？誰かがその小さな紙をもっている。それが目の錯覚か、メキシコ南東部の山中にたくさんある視覚的な幻想のたぐいなのか。私にはわからない。だが、この影はほほ笑んでいる。輝くようにほほ笑んでいる。そのことを誰もが約束しているからである。



ラ・レアリダーの一角にあるセイバの木



6 視線のお話 (1999/8/11)

数年前である。ひとりの年老いた先生がこの山中でまだ生きていたときである。彼の名はアントニオである。彼といっしょに過ごし、彼のことを理解した後、私は彼を「老アントニオ」と呼ぶようになった。この土地の最古参の先住民の老アントニオは 1994 年初めに亡くなった。老アントニオの肺を噛みつくように奪った結核で、ある夜明け前、彼は動かなくなった。

だが、老アントニオは死んだと多くの人に思い込ませることに首尾よく成功した。彼の遺体はこの山中でもっとも大きく力のあるセイバの木の根元に埋葬された。しかし、埋葬された場所から脱出し、私と出会うための狡猾さや才覚を老アントニオは十分に備えていた。トウモロコシの包葉で作った永遠の巻きタバコにつけるための火を求め、生徒であると同時に先生であるこの人物の心や肌を歩いているお話にも火をともしという口実で、彼は登場する。

老アントニオは教育学を勉強したことはない。小学校も出ていない。老アントニオはこの最初の神々といっしょに読み書きを勉強したのではと、私は思っている。

最初の神々はお話を植えつけた。そのお話によって、老アントニオはわれわれに重みや責任だけでなく、気晴らしや慰みを与えてくれる。昔も今も、老アントニオはひとりの先生、しかもよい人たちの先生である。皆さんもそれに同意すると私は考える。いずれにせよ、私は確信する。国立教育大学の歴代当局が担ってきた役割は、悲しく哀れむべきものである。それに比べて、老アントニオははるかによい役割を果たしただろう。

これから皆さんに老アントニオのことをお話する。なぜなら、メキシコ南東部の山中に雨を降らせている 8 月に顔を出し、混乱を起こしているこのような夜明け前、まさに老アントニオが私のところにやってきたからである。

私は座ったままパイプに何度か火をつけ、数日前の牧場主による大学生への攻撃に対する憤りの気持ちを抑制しようとした。何気なく、私は自分のまわり全体を見つめた。夜を撤してラ・レアリダーを歩んでいる数多くの影の片隅に潜む質問を察知しようとしたのかもしれない。

そのとき、老アントニオはトウモロコシの包葉で作った形がよくない巻きタバコにつける火を求めてきた。当然ながら、老アントニオは黙ってやってきた。彼の言葉も姿も青白かった。しかし、タバコの煙が唇から昇りはじめると、同じように大きなお話や小さなお話も、彼の唇から紡ぎ出された。

それらのお話は、今、私が皆さんに話しているものである。私が見ることを見ていたとき、老アントニオが私にしてくれたお話である。私の記憶によれば、お話の題は…

視線のお話

老アントニオの口からタバコの煙の渦巻きがゆっくりと昇る。彼はそれを見つめる。紫煙は身振りや言葉に形を与えだした。その紫煙と視線を追いかけるように、老アントニオの言葉が続く。

いいか、隊長さん（皆さんにはっきり言明すべきである。老アントニオと知り合ったとき、私は反乱歩兵隊第二隊長だった。当時、われわれは 4 人だけだった。サパティスタ独特の皮肉である。それ以来、老アントニオは私を隊長と呼ぶ）。よく注意して聞け、隊長さん。

ずいぶん昔のことだ。誰も見ていない時代があった。この大地を歩いていた男や女たちに目がなかったからではない。彼らには目があった。しかし、彼らは見ていなかった。いちばん偉大な神々、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々は、多くのものを誕生させた。しかし、いかなる目的、どのような理由で、誕生させたのかをはっきりさせていなかった。それぞれのものごとがやるべき理由、すべき仕事ははっきりと決まっていなかった。本来、それぞれのものごとは自分が誕生した理由をもつべきだった。

世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々は、いちばん偉大な神々だった。それぞれのものごとがどのような目的と理由で誕生したかについて、彼らはもともとよく知っていたはずである。

彼らは神々だったからである。しかし、最初の神々は自分たちの仕事でとても忙しかった。神々は、あらゆることをお祭り、遊び、踊りのようにやっていた。だから、最初の神々が集まる時には、必ず一台のマリンバが必要になることを、最長老たちは知っていた。神々の会合の最後には、歌や踊りの時間があつた。だから、マリンバが手もとにないと会合はできないないとも言われた。神々はいたるところで、腹を引っ張ったり、冗談を言ったり、悪ふざけをしていた。

さて問題となったのは、最初の神々、いちばん偉大な神々、世界を誕生させた神々が、それぞれのものごとが生じた目的や理由をはっきりさせなかったことである。そのひとつが目である。目は見るために誕生した。そのことを神々は言わなかったのか？そう、言わなかった。だから、ここを歩いていた最初の男女は、つまずいたり、殴ったり、倒れたり、お互いにぶつかり、不要なものをつかみ、欲しいものを手放しながら、そこらを歩き回っていた。それは、今でも多くの人がするのと同じである。不要のものや害をもたらすものを手にし、必要なものやよくなるものをつかみ損ねている。転げたり、お互いにぶつかったりしながら、歩き回っている。

最初の男女はもともと目をもっていた。しかし、彼らは見ていなかった。最初の男女がもっていた目のタイプは多種多様だった。あらゆる色、あらゆる大きさ、さまざまな形状の目が存在していた。丸い目、切れ上がった目、楕円形の目、大・中・小の大きさの目、黒・青・黄・緑・茶・赤・白色の目があつた。

かつてあることが起きなかったら、われわれの時代まで何もかもそのまま続いただろう。その当時、最初の神々、世界を誕生させた神々、いちばん偉大な神々は、自分たちの踊りを踊っていた。8月は記憶と明日のための月だった。そのとき、見ていなかった男女の一部が、神々がお祭りをしている場所に出かけた。そこで彼らは神々とぶつかった。マリンバとぶつかって壊した者もいる。祭りは大騒動になった。音楽は止まり歌も止まった。踊りも中断し、大騒ぎになった。

どうして祭りが中止になったのか。その理由を知ろうと、最初の神々はあちこち見回した。すると、見ていなかった男女は、転んだり、お互い同士、あるいは神々とぶつかったりした。彼らは当分のあいだ衝突や転落、雑言や悪態の渦のなかにいた。

やがて、いちばん偉大な神々は気づいた。この混乱はあの男女たちが到着してから始まった。神々はその男女を集合させ、話しかけ、質問した。

「どこを歩んでいるのか、おまえたちは見ていないのか？」

「もとから見てない。だから何も見てない」と、いちばん最初の男女は答えた。

「見る」とはどのようなことなのか、神々にたずねた。

世界を誕生させた神々はやっと気づいた。目は何のために存在するのか？目が存在する理由は何か？目は、どうして何のためにあるのか？こうしたことについて、神々は彼らにはっきり説明していなかった。いちばん偉大な神々は、最初の男女に見るとはどのようなことかを説明し、見ることを教えた。

この男女は他者を見ることができるようになった。見るものが何であり、何が存在しているのか、他者とは何であるかを知った。こうして、彼らは他者と衝突したり、密着したり、踏みつけたり、転んだりしなくなった。また、他者の内側を見つめ、他者の心が感じていることを彼らは理解できた。いつでも唇から生まれる言葉によって、心にあることが語られるとはかぎらない。心は、肌や視線、話される歩みとともに語られることもある。また、彼らは、自分自身を見つめる人、つまり他者の視線に自分を見いだそうとする人を見ることができた。彼らは、自分たちが見ているのを見ている他者を見ることができた。最初の男女は、あらゆる視線を習得した。彼らが習得したもっとも大切な視線は、自らを見つめ、自らを知り、自らを熟知しようとする視線である。他者を見つめ、自分を見つめながら、自分を見ている視線である。まだ生まれていない道や明日を見る視線である。まだ歩まれていない道であり、生まれていない夜明け前である。

それを習得することができたので、世界を誕生させた神々は、転んだり、ぶつかったり倒れたりしながら到着したこの男女に任務を託した。その任務は、ほかの男女にどのように見つめるのか、何のために見るかを教えることだった。こうして、いろんな人々が見ること、自分を見つめ

ることを習得した。だが、全員が習得したのではない。すでに世界は歩きだしていた。男と女は転んだり倒れたり、他人とぶつかりながら、いろんな場所をうろついていた。しかし、男と女の一部はきちんと習得した。見ることを習得した男女は、トウモロコシの男女、真の男女である。

老アントニオはじっと黙っていた。私は彼を見ている私を見ている彼を見つめた。そして振り返ると、この夜明け前の隅から隅までを見渡した。老アントニオは私が見ていたものを見つめた。そして何も言わず、トウモロコシの包葉で作った巻きタバコの火のついた吸い殻を手のなかで振り動かした。突然、老アントニオの手にある光に呼び出されたかのように、一匹のホタルが夜のいちばん暗い隅から飛び出した。光にみちた短い紙テープを携えて横切り、老アントニオと私が座っている場所まで近づいてきた。老アントニオは指でホタルを捕まえた。ふっと息を吹き掛け、そのホタルに別れを告げた。何も喋らない光を話しながら、ホタルはどこかへ行ってしまった。

しばらく、下では暗闇の夜が続いた。突然、何百ものホタルが光を発し乱舞しだした。下の暗闇の夜でも、突然、数多くの星が誕生した。それは、メキシコ南東部の山中の8月がまとう天上の明るい夜の星と見紛うものだった。すでに立ち上がっていた老アントニオは私に言った。

「見つめるため、そして闘うため、視線、忍耐、努力をどこに向けるべきか。そのことを知るだけでは不十分である。ほかの視線と出会うため、呼び掛けを開始する必要がある。そうすればほかの視線も別の視線と出会うため、呼び掛けを開始するだろう。

こうして、他者からの視線を見ながら、多くの視線が誕生した。よりよくなれる世界を見ている。それは、すべての視線がはいることのできる場所のある世界である。そして、他者であり、お互いに異なっているが、まだ存在していない歴史を歩みながら、見ている視線を見つめ、自らを見つめている人たちのための世界である」

老アントニオは立ち去った。私は夜明け前までずっと座っていた。私がもう一度パイプに火をつけると、下にある何千もの光が視線に明かりをつけた。下には光があった。下こそ、光と数多くの視線があるべき場所である。



7 夜のお話 (1999/8/13)

これは、どうして、すべてのものが中断し、静かになり、沈黙したのかというお話である。

なぜ、すべてが動かず、黙ったため、天空の広がり空っぽになったのかというお話である。

これは最初の物語、最初のお話である。人間、動物や鳥、魚やカニ、樹木、石、洞窟や溪谷、草や森はまだ存在していなかった。天空だけが存在していた。大地の表面はまだ現われていなかった。静かな海とずっと広がる天空だけがあった。いっしょになって世界を創るものはなかった。天空には、動いたり、騒いだり、騒音をたてるものはなかった。立っているものはなかった。静止した水、静かで穏やかな海だけがあった。存在性を備えたものはなかった。

暗黒と夜には、不動と沈黙しかなかった。創造主にして形成者であるテペウ、グクマツ、先祖だけが、明るさで囲まれた水のなかにいた。これらは緑と青色の羽毛の下に隠されていた。そのためグクマツと呼ばれた。偉大な知恵者、偉大な思索者がその特性だった。こうして、天空、そして天空の心が存在した。このように語られる。

そこに言葉がやってきた。テペウとグクマツはいっしょに暗黒と夜にやってきた。テペウとグクマツはお互いに話し合った。つまり、お互いに相談し、瞑想したりしながら、彼らは話し合った。彼らは合意し、お互いの言葉と考えを合わせることにした。

夜が明けると人間が登場するように、彼らは構想した。そのうちに、明るくなった。それから、彼らは樹木と蔓の創造と成長、生きものの誕生、人間の創造に着手した。このように、ウラカンと呼ばれる天空の心によって、夜の霧のなかで着手された。 — 『ポポル・ウーフ』 —



リベラによるポポル・ウーフの挿絵

世界のどこでも8月の夜は長い。メキシコ南東部の山中の別の8月、老アントニオはゆっくりと両刃のマチューテの刃を磨いている。カマドの火は、老アントニオが手にもっている鉛色した細長い鏡から、オレンジ色と青色の輝きを引き出している。ドニャ・ファニータはトルティーリャをコマルから一枚、二枚と引き離している。私は部屋の隅に座り、タバコをふかしながら待っている。その夜、われわれは老アントニオと狩りに出る予定だった。

われわれのためにトルティーリャとポソールを用意してほしいと、老アントニオはドニャ・ファニータに頼んだ。だから、彼は夜明け前まで山に留まるつもりでいると、私は考えた。ため息を何度もつきながら、ドニャ・ファニータはトウモロコシを粉に挽いた。そして、トウモロコシの練粉を平らに延ばし、できたての大きなトルティーリャを山積みにした。火でなめ尽されたカマドでは、小さなポットのコーヒーが温めなおされた。マチューテの両刃をヤスリで研磨するリズムカルな音、ドニャ・ファニータの作るトルティーリャの匂いに誘われ、私はついウトウトとした。突然、老アントニオは立ち上がり、「じゃあ、行ってくる」と言った。

「そう、じゃあね」とドニャ・ファニータが言った。彼女はバナナの葉っぱで大きなポソールの玉を包み、トルティーリャと一緒、老アントニオの小さな雑嚢に入れた。コーヒーを古いプラスチック製ビンに注意深く注ぎ、そのビンをポソールとトルティーリャの脇に入れた。

私はぱちりと目を覚まし、立ち上がった。家の門の横木を通り過ぎたあと、私は老アントニオが古い単発式猟銃をもっていないことに気づいた。

「銃を忘れていますよ」と、言った。

「いや、忘れていない。今夜は、単発式猟銃は不要だ」と、老アントニオは立ち止らず答えた。

われわれは夜に向かって出発した。この「夜に向かって出発する」という表現が比喩的な意味で使われていることを私は知っている。しかし、この場合、それ以上の意味をもっていた。老アントニオの小さな家にわれわれがいたとき、マチューテを研ぎ、コーヒーを加熱し、トルティエリヤを調理する儀式に招かれなかったように、夜は家の外で待機していた。小さな家の古ぼけた門は開いていたが、夜は室内に入ってこなかった。夜は入口の際までやってきていた。だが、室内は夜のための場所ではなく、ほかものの場所であることを知っているかのように、夜は家の外側に留まった。われわれは、老アントニオの小屋を出て、夜に向かって出発したのである。

かなり長い間、われわれは踏み分け道を歩いた。雨はやんだばかりで、ホテルは木の枝や蔓に蛇のように光を巻きつけながら、また遊んでいた。とはいうものの、八月は水たまりや泥土をあちこちに点在させていた。われわれは、膝まで泥にまみれながら歩かなくてすむ道が始まる十字路をすぐには発見できなかった。そこで、われわれは、いつもは通ることのない、あまり泥が多くない古い森の小道の迂回路をたどった。その辺りには、高木林が広がっていた。木々は大きく葉も繁っていたので、われわれはひとつの夜から抜け出したが、また別の一層暗い夜、夜のなかの夜に入り込んだようだった。

われわれが何を探しているのか。老アントニオが単発式猟銃を村においているのに、いったい何を狩ろうとしているのか。私は何も知らなかった。しかし、老アントニオと出かけると、最初に不思議なこと（太陽が山の肩にひっかかり始めると、夜明け前であることがわかるように、行程が終了するとき、やっとその謎が解明される）が起きるのは、けっして初めてではなかった。だから、私は何も言わずに、黙って老アントニオのあとをついていった。

森の小道が終わったのは、真夜中過ぎだった。やがて（人や暴風で作られた傷跡を閉じた状態にする）木々の高さが増し、小道はなくなった。しかしわれわれは歩き続けた。時に応じ、とくに蔓が壁のように塞がっていると、老アントニオはマチューテで道を切り開いた。

私はずっと自分の探照灯を使っていた。老アントニオはときおり自分の探照灯をともすと、ほんの一瞬、何かを探すかのように光の束をいろんな場所に向けた。突然、老アントニオは立ち止まったかと思うと、長い時間、ランプをじっと地面に向けた。私もその方向を照らしたが、何も特別のものは見えなかった。風で飛び散った数本の枝、蔓、草、小さな植物、地面から節やこぶを覗かせている根が見えただけである。

「ここだ」と老アントニオはつぶやき、数秒前に照らした場所から 10mほど離れた所にある木の下で、木の方向をむいて座った。われわれは何かを待ちながら、その場所にじっと座っていた。老アントニオを見ると、彼は巻きタバコを作りはじめた。それで、私は三つのことを悟った。ひとつは動物を待っていないことである（タバコの匂いは動物を遠ざける）。もうひとつはタバコを喫えることである。三つめは老アントニオがお話を始めるということである。

私はパイプとタバコをとりだし、老アントニオの巻きタバコに火をつけた。私はパイプに火をつけ、大きく煙を吐き出した。それで蚊を追い払い、老アントニオがお話をもってくるのを手伝おうとした。そのお話は何度かラ・マールに話したもので、これから皆さんに話すものである。

夜のお話

ものごとを知らない人は言う。夜には数多くの大きな危険が隠されている。夜は泥棒の隠れる洞窟、影と恐怖の潜む場所である。ものごとを知らない人はこんなふうに言う。しかし、おまえは知らなければならない。もはや、悪と邪悪な存在は、夜の黒い帳の背後に隠れて歩き回ったり、巣に潜んだりしない。そんなことはしない。悪と邪悪な存在は、白昼堂々と歩き回り、咎めだてされず、歩いている。悪と邪悪な存在は、権力という大きな宮殿に住んでいる。工場や銀行、大商店を所有する。上院議員や下院議員の服を着ている。この大地で悲しい思いをしている複数の共和国で大統領になっている。悪と邪悪な存在は、何千もの色の下に灰色の悪夢を隠している。彼ら自身が命令したモードを流行らせる。



—老アントニオは輪の形をしたタバコの煙を吐き出しながら言った。

そのとおりだ。もはや、悪と邪悪な存在は隠れようとしない。今や、表に現われ、政府まで作っている。しかし、ずっとそういう状態だったわけではない。以前には、悪と邪悪な存在が昼に出歩かない時代があった。しかも、誰も昼に出歩かなかった。というのは、まだ昼は作られていなかったからである。そのときはすべてが夜と水の時代だった。あらゆるものが夜のなかにいた。何も誰も夜から出ることはなかった。

最長老たちは語っている。万物は夜のなかに留まり、ある岸から別の岸へと夜を歩くだけだった。しかし、向こう側に到達することはなかった。向こう側に到達することを望まなかったからではない。まだ向こう側は存在しなかった。大きな夜だけが沈黙のなかに横たわっていた。

さらに、最長老たちは語っている。もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々が最初に集まったのは夜だった。ある人が言うには、神々が最初に導きだした合意は昼を創ることだった。昼ができ、夜にその後が続けば、とてもすてきである。神々はそう考えた。しかし、実際はそうではなかった。違っている。最初の神々が導きだした合意とは、夜から悪と邪悪な存在を追放することだった。最長老たちは語っている。夜という家から悪と邪悪な存在を追放する。それを決定するため、最初の神々は多くの重要な理由を思いついた。

最長老たちが言うには、あらゆる戦いの勝者であるテペウは、次のようにはっきりと語った。神々が誕生させるべき夜や世界は、悪と邪悪な存在が住むための場所ではない。だから、いくら長い時間がかかろうとも、万物から悪と邪悪な存在を除去するために、戦わねばならない。もっとも偉大な物知りの鳥、ケツアル鳥の羽毛をまとい長い身体をしたグクマッツは言った。夜はよい家を作るためのものだ。しかし、悪と邪悪な存在が邪魔をしている。

最初の七つの神々、もっとも偉大な神々、ひとつでふたつの神格をもつ七つの神々は多いに語った。ついに神々はひとつの合意を導き出した。それは悪と邪悪な存在を夜から追放し、どんな記憶も届かないはるか彼方に放置することだった。もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々は合意に達した。その最初の合意が導き出されたとき、世界にまだ昼も何もなく、すべてが夜で、黒い水が音もたてずに横たわっていた。

最長老たちは語る。共同体はそれぞれの過去の歴史を長老たちのなかに書き記している。トウモロコシの男女は、後になって喋る箱のように、万物がどのように、何のために創られたかというお話を村の最長老たちは保管している。最初の合意の後に、最初の問題が発生したと、最長老たちは語る。悪と邪悪な存在を追放する場所がなかったのである。時間がなかったこの時代、すべてが夜と水だった。何も完成せず、何も創られていなかった。すべてが自分の時間を待っていた。



テペウとグクマツ

そこで、ふたたび、最初の神々は集まった。まず、事物と場所を創るべきである。そうすれば、悪と悪しき存在を追放する場所を確保できるだろうと、神々は理解した。かくして、万物が造られ、夜から昼が誕生した。同じようにして、トウモロコシの女と男、鳥や動物、魚が創られた。大地、大洋と天空が動きはじめ、世界は歩みはじめた。誕生したばかりだが、世界はゆっくりと歩みだした。その長い行程が始まるとともに担うことになる積荷があまりにも多かった。

最初の神々は何となく疲れてしまった。彼らが誕生させたもの、つまり世界が多かったからである。その世界には、もともと、お互いに異なる別の世界がたくさんあった。とはいうものの、それらは世界にある多様な世界であった。もっとも偉大な神々はとても消耗していた。そのため、悪と悪しき存在を夜から追放し、どんな記憶も思い出も届かないはるか遠方に放置するという合意を忘れていた。最初の神々は忘れていたことを思い出した。そして、自分たちの偉大な力で悪と悪しき存在を追放するため、悪と悪しき存在を探した。神々は、夜の間ずっと探したが、見つけられなかった。夜のあらゆる場所を個別に点検したが、悪と悪しき存在はどこにもいなかった。

最長老たちは語っている。悪と悪しき存在は、すべてが初めて誕生している混乱に付け込んだ。悪と悪しき存在は、昼に逃れるため、隙間を潜り抜け、夜から逃亡した。統治者の振りをして、昼に隠れた。時間が歩んだ長い時間の経過とともに、悪と悪しき存在は自らが権力や政府であることをやめなかった。同じものでありながら、ほかのものに見せるように衣装を変えてきた。

今、夜という家は、縁や出入口、窓までも備えている。夜は独自の生命を生み出し、夜の暗いスカートにぶら下がる光を造りだした。たしかに、夜は自分の影をもっている。しかし、影の影たち、山のなかで夜に生き、夜を守る男女は、独自のきらめきをもち、独自の光を放っている。

最長老たちは語っている。彼らの話では、今も、最初の神々は悪と悪しき存在を探しながら、夜を撤して歩き回っている。そして、何かの石を積み上げ、気怠そうな雲を集め、月をくすぐり、星をかき集めている。そのような神々の姿をしばしば目撃できるという。それは、悪と悪しき存在がその辺りに隠れていないかを確認するためである。

また、最長老たちは語っている。最初の神々は、探すことに疲れると集まった。そして、数多くの星を山の黒いカマドの上に集めた。青色と真珠のような色の光にあわせ、神々は踊りあかし、歌いあかした。神々が奏でる骨と木と光でできたマリンバは、メキシコ南東部の山中に生まれる夜を充たした。悪と悪しき存在は踊りや歌が大嫌いである。この大地に楽しいことが組織されると、悪と悪しき存在は遠くに逃げだす。それを知らせるため、神々は踊りあかし、歌いあかす。

最長老たちは話している。最初の神々は男女の集団を選んだ。悪と悪しき存在を世界中で探し、発見し、はるか彼方に追いやるためだった。また、最長老たちは話している。誰もそのことを知

らないようにするため、神々はこの男女の偉大さを小さな身体に隠した。そして、彼らの身体を褐色に塗った。夜に恐怖感をもたずに出歩き、昼に大地の一部と同化するためだった。夜は、最初の神々の母であり、すべての始まりであり、家と場所である。そのことを忘れないようにするため、神々は彼らの顔を黒く覆った。彼らが顔を隠した存在であっても、昼のあいだ、夜のかげらを記憶に止め、携帯するためだった。こんなことを最長老たちは話している。

—老アントニオはこう言って新しい巻きタバコを作った。火をつけ煙を吐き、言葉をかきたてた。

しばしばお話に登場するこの男女は真の男女と呼ばれる。最初の神々とともに、彼らは夜に潜んでいる悪と悪しき存在を探しだした。時には、悪と悪しき存在を探し発見するため、昼にも、出かけねばならない。昼から始め夜になるまで、彼らはよりよい門、夜明け前を求めるだろう。

老アントニオはじっと黙っている。天空では、夜明け前が疲れを知らない太陽の一行に席を譲りはじめている。その最後のため息とともに、最後の暗がりも溶けていく。あの丘の肩に夜明け前の爪痕を残しながら、太陽はいちばん高い丘へ昇っていく。

老アントニオは立ち上がり足を伸ばし、マチェーテの両刃を点検し、「さあ、出発だ」と言った。「出発ですか？」と、私はたずねた。「狩猟が何かのため動物を待ち伏せしていたのでは？」

老アントニオは立ち止まらず、「そうではない。動物を狩っていたのではない。悪と邪悪な存在が現われなかと、われわれは徹夜で警戒していたのだ」と、答えた。

われわれは帰りを急いだ。丘の中腹の放牧場を通り過ぎる頃には、昼の光は溪谷全体を包み込み、雨の最後の一滴も終わっていた。何羽もの雄鶏は、歌というより警戒の声を出していた。

老アントニオはしばらく立ち止まり、西のはるか遠方を指差して言った。

「今は、悪と邪悪な存在が統治している時間だ。もう連中は隠れようとしな。連中は白昼堂々と歩き、匂いを発し、触るものすべてを腐らす。だが、夜になると、状況はちがう。夜は…夜はわれわれのものである」

老アントニオは黙っていた。われわれは小屋までの最後の5キロを何も喋らずに歩いて帰った。われわれが家に着いたとき、ドニャ・ファニータも背中に薪の束を担いで帰ってきたところだった。薪の束を下ろしながら、「じゃあ、何もでなかったのね？」と、彼女はたずねた。

「何もでなかった」と答えると、老アントニオはドニャ・ファニータがメカパルを頭からはずし、小屋の壁に薪を積み上げるのを手伝った。



メカパルで薪を運ぶ

「徹夜しなければ」と、言って、ドニャ・フアニータはまだ橙色のオキを集め、火にくべた。

「そうだ。徹夜しなければならない」と、言う、また老アントニオはマチューテの両刃をヤスリで研ぎはじめた。

朝の光は、老アントニオの小屋に入らず、外にうずくまっていた。小屋の内側で、老アントニオが悪と邪悪な存在を徹夜して探していたことを知っているかのようにだった。ドニャ・フアニータが維持するカマドで、新しい別の日、別の朝が形づくられるのを恐れているかのようにだった。

8 偽の光、石、トウモロコシのお話 (1999/8/13)

私は戦争の花を撒き散らす／ニコニコ顔をした私／戦争とともに来たかのような
私はケツァル鳥／飛んでやってきた／困難な歩みのなか
私は戦争とともにきた／私は美しい赤首ツグミ
飛んでやってきた／花に変身するために／私は血を流すウサギ
私を見よ／私は真剣だ／脇腹をきつく締めよ
私はウィンクし笑いながら歩む／私は花が咲き乱れる中庭からきた
私を見よ／私は真剣だ／脇腹をきつく締めよ
私は花に変身する／私は血を流すウサギ

—ナウアトルの詩—

いずれにせよ、前の夜、そして積み込んだ記憶は、触ることのできない現在よりも現実的である。旅の前の夜は旅のもっとも素晴らしい一部である。

—ホルヘ・ルイス・ボルヘス—

また8月、そして夜明け前。ラ・マールは眠り、疲れた雲は白い小さな尻尾を山の上に横たえる。雲が飛行を再開した。その落ち着きのない羽ばたきで、星々も眠れなくなる。はるか上の天空では、ちりばめられた青い光のなかに横たわる大きな蛇が血を流している。月は顔を洗ったばかりの貴婦人ようである。表に出ようか留まろうかと、戸惑いながら、バルコニーから顔を覗かせる。下の世界では、一本のロウソクのそばで、ひとつの影が夜と記憶を監視している。別の影がその影に近づいた。一瞬の炎の閃きが、顔をもたないふたつの顔、影のなかの影を照らした。飛行を開始した雲は少し遅れ、光の蛇の輝くしずくは留まっている。真夜中の太陽は、はるか彼方に係留し、窓にある月は動かなくなった。墜落していた星は下降も上昇もしない。すべてがじっとして動く気配はない。



皆さん [1999年8月13~16日ラ・レアリーダーで開催された文化財産防衛全国集会参加者]、注目！よく聞いてください！これからは言葉が支配する時である。

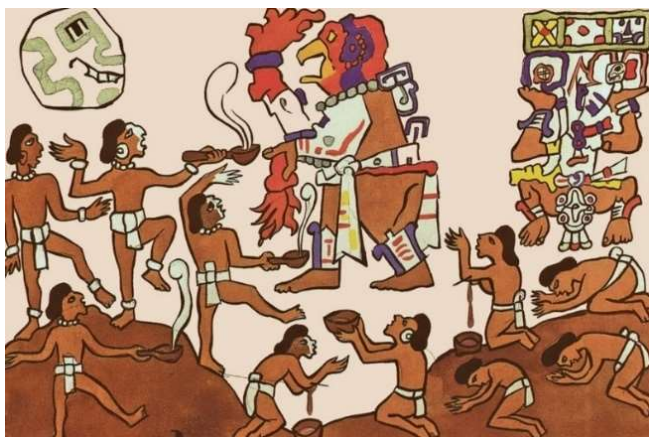
到着すると、老アントニオは、自分の肺のなかを歩む「さようなら」という言葉で挨拶をする。いつも同伴している咳にめげず、われわれは持参したタバコに火をつける。彼はトウモロコシの包葉の巻きタバコ、私は口にくわえるパイプである。こうして架け橋が始まった。この地では言葉をこう呼んでいる。一本のロウソクの踊る光線がわれわれを照らした。つまり、光、太陽、明日に関するお話である。それは……

偽の光、石、トウモロコシのお話

そう、ずいぶん昔のことである。時間が時間を創るための時間をまだ内包していた時である。もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々は、もとからしていたように、そのときも、競走したり、急ぎ立てられたりしながら、歩き回っていた。この最初の神々は踊りや歌にずいぶん時間をかけた。月と太陽を創る作業もずいぶんゆっくりとしていた。これらの神々の仕事は、非常にゆっくりと歩む世界に光と影を与えることだった。

そのとき、ブクブ=カキシユ、最初の七つの色を七度も守る神は、自分が太陽であり月であると思い込んでいた。その神が身にまとう色の光はとても多く美しかった。その神が空高く飛翔すると、姿ははるか彼方からでも見えた。だから、誰でも自分の姿を目にすると、彼は思っていた。

そのとき、すでに地上では、男や女が歩き回っていた。しかし、男や女はそれほどたくさん残っていなかった。最初の神々はすでに何度も男や女を創っていた。だから、神々にとってよい男と女だけが残っていた。自分たちが学びながらやってきたように、もっとも偉大な神々は世界を汚しながら、自分が誕生させた男と女を創り、修正していた。トウモロコシの男女、つまり真の男女を完成させる時間はなかった。いつも通り忙しかったので、いちばん最初の神々は、ブクブ=カキシユがしたことを知らなかった。その輝く光によって、全員が自分を崇拝することを望んでいる。このようにブクブ=カキシユは触れ回っていた。



権勢を誇るブクブ=カキシユ (D. リベラ)



ブクブ=カキシユの図

そのことを知ったもっとも偉大な神々は、とてもすばらしい考えを思いついた。ブクブ=カキシユの代わりに据えるため、二人の若い神と二人の年老いた神を呼びつけた。若い神々はフンアフプーとイシュバランケーという名前である。この名前をもって、夜明け前の狩人は歩んでいる。年老いた二人の神々とは、サキ・ニン・アックとサキ・ニマ・ツィースという名前のひと組みの創造者だった。

ファンアプーとイシュバランケーは、偉大なる光と自惚れていた偽の太陽＝月の口を豆鉄砲で傷つけた。ブクブ＝カキシユが感じた痛さは、とほうもないものだった。しかし、天空からは墜落しなかった。次に、年老いた神々が出かけ、口の傷を治そうと言った。そして、その美しい歯を抜き、トウモロコシの歯と入れ替えた。年老いた神々は、ブクブ＝カキシユの顔に覆いかぶさり、両目を見えなくした。こうしてブクブ＝カキシユは偉大な存在になるという野望を忘れた。昔からそうだったように、無秩序に飛行するコンゴウインコとして今はこの山を飛んでいる。

もともとそうだった。自分を太陽や月と考え、偉大で力のある光を気取っている人間は、昔も今も、人々のなかにいる。彼が道や目的として設定しているものは、黄金、お金、政治権力である。その光で、人々の目を見えなくし、人を変え、偽りのものを確かなものと信じこませる。その二重の顔の後に真実を隠そうとする。お金が地上に嘘だらけの神を造ったとき、その嘘が続くように、偽の司祭たちは政府や軍隊を創設したのである。実際、このようなことが起きている。



老人たちによるブクブ・カキシユの歯の治療

歴史は痛みを抱えながら、待ちつづける。若者と老人が力を合わせ、お金がもつ嘘だらけの口を傷つけ、血にまみれた犬歯を折るだろう。石とトウモロコシを武器に、若者と老人は権力を丸裸にするだろう。石は石のなかに、男と女はもともとから大地を歩いていた男と女のなかに、帰ることになる。この戦いは、告発であれ、嘘の暴露であれ、はるか上を支配する虚ろな偽の光を消すことであれ、戦争と呼ばれよう。

老アントニオはじっと黙った。「もうきたよ」と、私の手をとって別れの挨拶をした。そして立ち去った。私の手を握ったとき、老アントニオは私に小さな石と一粒のトウモロコシを渡した。夜の長いスカートに包まれ、何千もの光が待っているのは…。

9 後続くわれわれはたしかに理解した (1999/8/16)

私がこの山中に最初に来たのは 15 年前である。あるゲリラの設営地で、いつもどおり夜明け前に、私はそれより 15 年前のお話をしてもらった。つまり、今、われわれを濡らす 8 月から 30 年も前のお話である。

今、私の口から生まれたばかりのように、こうしたお話を。おそらく、それが昔とまったく同じ言葉でないからだろう。しかし、そのお話をしてくれたひとりの人物と同じ気持ちになっ

て、私が皆さんにお話していることは確かである。そのとき、その人物は、私の哀れな様相と着ていた道化師風のズボンを冷やかし、私にEZLNによろこそ！と言った。

後続くわれわれは理解した

その人物がお話をしてくれた。ある村に、生きるために一生懸命に働く男女がいた。一日中、男も女もそれぞれの仕事に出かけていた。男はトウモロコシ畑に出かけ、インゲン豆を栽培した。女は薪採りや水汲みに出かけた。時には男女が同じように集まってする仕事もあった。たとえば、コーヒー収穫期には、男女はいっしょにコーヒー豆を収穫した。こんなふうには彼らは働いていた。

しかし、そうしない男が一人いた。たしかに彼は働いていた。しかし、トウモロコシ畑を耕作せず、フリホール豆を栽培することもなかった。枝のコーヒー豆が赤く稔ってもコーヒー畑に近づけなかった。そうではなく、この男は山に木を植える仕事をしていた。この男の植えた木々が急成長することはなかった。木が成長し、その枝や葉が完全に揃うには数十年もかかる。ほかの男は誰もがこの男を大いに笑い、批判した。

「どうして、おまえは自分で結果を見られない仕事をするのだ。数か月で収穫できるトウモロコシ畑を耕作したほうがいい。おまえが死ぬ頃、やっとなくなる木など植えないほうがいい」

「おまえはバカか。気がふれている。おまえは無駄な仕事している」

その男は弁明した。

「それはたしかだ。これら木々が大きく成長し、枝や葉をたくさんつけ、鳥がたくさん棲みつく。その様子を私は見られない。この目で木々の木陰で子どもが遊ぶのを見ることもないだろう。だが、われわれ全員が現在や直後の明日のためだけに働くとしたら、避難、慰め、楽しみを手にするため、われわれの子孫が必要とする木々をいったい誰が植えるのだ？」

誰もこの男の言うことを理解できなかった。バカで気の触れた男は、自分が目にできない木を植えつづけた。真面目な男女は、自分たちの現在のために作付けし、働いた。

時が過ぎ、誰もが死んだ。子どもたちが彼らの仕事を引き継いで働いた。その子どもたちを引き継いだのは、こどもの子どもたちだった。ある朝、少年少女のグループが散歩に出かけ、大木が茂っている場所を見つけた。木々には何千羽も鳥が棲みつき、大きな樹冠は暑さを和らげ、雨避けとなった。そう、あらゆる場所に木々が生えていた。

少年少女は村に帰ると、このすばらしい場所のことを説明した。集まった男女はとても驚き、その場所にずっと立ちつくした。

「誰がこの木々を植えたのだろうか」と彼らは自問した。

だが、誰も知らなかった。年長者に相談したが、彼らも知らなかった。一人の老人、共同体の最年長の老人だけが男女に説明できた。彼らにバカで気の触れた男のお話を話してきかせた。

男女は集り会議を開き、討論した。彼らの先祖がバカで気の触れた男とみなした人物のことを知り、彼のことを理解した。男女はその男のことをとても賞賛し、好きになった。記憶はずいぶん遠くまで旅することができる。誰も考えたり、想像できたりしない場所まで到達する。そのことを知っている男女は、大きな木々のある場所へ赴いた。中央にある一本の大木を取り囲み、色のついた文字で、その木のための標識を作った。

その後、お祭りになった。最後の踊り手が寝に帰ったとき、ほとんど夜は明けていた。大きな森はひとりぼっちになり、静かになった。雨が降り、そして雨はやんだ。月が出ると、ふたたび天の川はその曲がった身体を横たえた。不意に月の光が中心に聳える大木の大きな枝や葉のあいだへ潜り込んだ。沈み込んできた光で、大木に掛けられた色つきの標識が読めるようになった。そこには次のように書いてあった。「最初の人たちに。後続くわれわれも理解した。お元気で」

皆さんにお話したこのお話が私に語られたのは15年前である。そのとき、私に語られたことが起きてから、すでに15年が経過していた。おそらく、言葉で表してもきっと無駄だろう。われわれは事実をもって言いたい。「そう、後続くわれわれもたしかに理解した」

そして皆さんにこのお話しをしたのは、最初の人たちに挨拶するためでも、失われ忘却されたような記憶の一断片を皆さんに紹介するためでもない。それだけではなく、われわれサパティスタが何を望んでいるのかという皆さんの質問に答えるためである。

明日の木を植えること。われわれが望んでいるのはそのことである。われわれは、現実主義的な政治が展開し、掲げた旗印は意味を失い、民主主義を代行する世論調査が横行し、隠したものを与えて食べさせていると称するキャンペーンが展開される犯罪的な新自由主義の時代であり、カメレオンのように変貌する熱狂的な時代であることを知っている。そんな時代に、明日の木を植えたいと言うことは、愚かで気の触れたことのように聞こえ、いずれにしても、それは奇をてらったフレーズ、あるいは時代遅れのユートピアにすぎないことを知っている。

それは承知している。だが、われわれは明日の木を植えたいと願っている。それだけでなく、それはわれわれの実践していることである。この世界を構成する数多くの世界で、われわれと同じように「自分のやりたいことをやっている」と言える人はどのくらいいるだろうか。われわれはその数はかなり多いと思っている。世界を構成する多くの世界には、それぞれの明日の木を植えている気の触れたばかり者であふれている。やがて、「地球」と呼ばれているこの世界の中腹が、いろんな色をした樹々で満たされ、多くの鳥が棲みつき、とても気持ちのいい憩い場となる日がくる。だが、おそらく、誰も最初の人たちのことを覚えていない。なぜなら、今日、われわれを悲しませるすべての昨日は、古くなった歴史の古くさい本の古い一頁に過ぎないからである。

その明日の木とは、すべての人がいて、ほかの人が別のほかの人たちを知り、尊敬している空間であり、偽りの光が最後の戦いに負ける空間である。より正確に言うとするなら、民主主義、自由、正義のある場所である。それが明日の木である。

これはわれわれサパティスタが望んでいることである。曖昧な返答かもしれないが、そうではない。私はこんなにはっきりと話したことはない。いずれにせよ、これらの言葉が受け入れられる時代がくる。三つの言葉は、長く抱擁しあい、互いに耳を傾け、保全し、成長していく。そのためにこそ言葉がある。同時に言葉を歩む人たちのためである。



10 大地から生まれた (1999/9/30)

かなりの時間が経過し、昨日は年をとり、世界の片隅でひとりぼっちになっていた。もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々が眠りについてからも、しばらく経っていた。神々は、踊ること、道を作ること、お互い質問することで疲れ切っていた。だから、最初の神々は眠りこけていた。神々はすでに真の男女たちと話しあい、誰もが「歩き続けるしかない」という合意に達していた。なぜなら、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々はやがて、歩くことは世界が生きていたあり方そのものだからである。

「われわれはいつまで歩きつづけるの」と、トウモロコシの男女は自問した。

「それで、いつから始めるの」と、真の男女たちが答えたのは、質問には必ず別の質問で答えることを最初の神々から学んでいたからである。

大地から生まれた

しかし、最初の神々はしばらくして起きた。もっとも偉大な神々、世界を生んだ神々は、質問を聞くと眠れなくなるからである。神々は目を覚ましマリンバ演奏を始め、いくつかの質問で歌を作り、踊り歌った。「われわれはいつまで歩きつづけるの？ それで、いつから始めるの」

「踊りや歌など、もうたくさんです。われわれがした質問に対する回答をお願いします」と、真の男女たちが腹を立てて言わなかったら、神々はそこで踊ったり歌ったりしつづけたらう。やがて、最初の神々は真剣に、次のように言った。

「われわれがトウモロコシから創った男女は質問があるという。どうやら、これらの男女はあまり知識がないように思われる。彼らは自分の外側に答えを探している。自分の後ろや目の前にすでに答えがあることにまったく気づいていない」

「これらの男女は、柔らかいトウモロコシのように、知識が少ない」と、最初の神々は言い放って、ふたたび踊りと歌を始めた。またも真の男女たちは怒りだし、「バカにするのもいい加減にしてほしい。自分たちの前と後ろに答えがあるというのはどういうことか」と、詰め寄った。

最初の神々は、彼らの後ろと視線のなかに答えがあると、真の男女たちに言った。トウモロコシの男女はお互い顔を見合わせた。彼らは、誰も何もわかっていないことを知っていた。彼らが黙っていると、もっとも偉大な神々は彼らにこう言った。

「背中から、トウモロコシの男女は始まった。というのは、彼らは横になって生まれたからだ。トウモロコシと同じように大地から誕生したのである。背中から、トウモロコシの男女は歩きだした。その背中には、いつもその歩み、あるいははじっとしているたたずまいより後ろ側にある。その背中には始まりであり、その歩みの過去である」

真の男女はこのことをよく理解できなかったが、始まりはすでに始まり、昨日はすでに過ぎ去っていたので、何も気にせず、「われわれはいつまで歩きつづけるの？」と、繰り返し言った。

「そんなことは簡単にわかる」と、世界を生んだ神々は言った。

「自分の視線が、自分の背中を見られるようになるときだ。ぐるぐると歩き自分に追いつけば十分である。かなり歩いて遠くからでも自分の背中を見ることができれば、終わりだ。小さな兄弟姉妹たちよ」と、言いながら、最初の神々は眠り始めた。

自分の背中が見えるまで丸く輪になって歩けばいいとわかり、真の男女はとても喜んだ。かなり長い時間をかけ、自分の背中を目指して歩いたが、やがて、なぜ歩き終わらないのか考えるため、立ち止まった。そして、自分に向かって言った。

「終点に到達するための出発点に到達することは難しい。この歩みはまだ終わっていない。われわれの歩みを終えるための出発点にいつ到着するかと考えるだけで、とてもしんどくなる。やがて、終点に到達するための出発点に向かう歩みは終わることがないので、一部の人は徐々に落胆し、ただ座って怒りをぶちまけていた」

老アントニオとの別れ

しかし、ほかの男女は熱心に歩き続けた。彼らは、終点に到達するための出発点にいつ到達できるかと考えるのをやめ、自分たちが今まで歩いていた道のことを考える方がいいと思うようになった。そして、まるで輪になるように、回転するごとにより良い道にしたいと思い、回転するたびに自分の足取りが良くなった。そして、彼らはとても満足し、この歩くという行為自体がとても楽しくなった。彼らは長いあいだ歩き、歩みを止めることなく、お互いに言った。

「われわれがなっているこの道はとても快適である。われわれはその道をさらに良くするために歩んでいる。われわれは、ほかの人たちが一方から他方に向かって歩くための道である。誰にとっても道には始まりと終わりがある。しかし、道には始まりや終わりはない。われわれにも、始まりや終わりはない。すべては皆のために、われわれは何もいらない。道であるわれわれは、歩きつづけなければならない」

そして、忘れないように、大地にひとつの円が描かれ、すべての人々は丸い形で歩んでいた。そして真の男女が歩いている。道をより良くするため、自分自身をより良くするための闘いが終わることはない。だから、後の世の人々は「地球は丸い」と信じるようになった。

しかし、なんの意味があるというのか。世界というこの球体は、真の男女の闘いと道のりにほかならない。道が彼らの歩みのなかで最良のものとなるよう望みながら、彼らはつねに歩んでいる。いつも歩いている彼らにとって、その歩みには始まりも終わりもない。真の男女は飽きることはない。しかし、彼らはつねに自分に追いつこうとする。自分の道の出発点を見つけ、自分の歩みの終着点に到達するため、後ろから不意うちしようとする。しかし、彼らはそれを見出すことはない。彼らはそのことを知っているし、気にすることもない。彼らにとって唯一重要なことは、つねにより良くなろうとする良い道であることだ…

老アントニオは沈黙しているが、雨はそうではない。この雨はいつやむのかと聞こうと思ったが、始まりと終わりに関する質問にはふさわしくない雰囲気のようなのである。私は老アントニオに別れを告げる。私は雨に向かって夜のなかに踏み出した。探照灯に新しい電池を入れたが、お互いを見分けられない。ぬかるみを踏む私の靴音で、老アントニオの別れの言葉は聞こえない。

「自分の道がいつ終わるかという質問に疲れるな。明日と昨日が会おう場所で終わるから」
歩きだそうと決意するのはとても難しかった。この先にある泥で私が滑るのはわかっていた。わかっている、転びながら歩かねばならない。これからも同じことが起きるだろう。歩くことはつまり転ぶことである。これは老アントニオではなく、山が教えてくれたことである。

私の言葉を信じてください。その試験は簡単ではなかった。

11 明けの明星のお話 (1999/10/31)

皆さん [1999年10月31日～11月1日にラ・レアリーダーで開催されたEZLNと地域接触調整委員の会合参加者] の忍耐につけ込み、今も続いている軍の警戒飛行を利用する形で、私が皆さんにお話することを認めていただきたい。そのお話とは、七、犠牲、先祖、大地、言葉と関連するものである。

これから私が皆さんにするお話は、ずいぶん遠くから来ている。私が遠いと言っているのは、距離や時間ではなく、深さのことである。なぜなら、われわれを誕生させたお話は時間や空間を歩みはしない。そこにずっと留まっている。われわれを誕生させたお話は、時間や空間を歩かない。そこにじっと止まっている。じっとそこにいて、その上を人生が通り過ぎ、皮膚はその上でしだいに厚くなる。なぜなら、人生や世界はこのようなものである。お話はそこに止まるために着込んでいる皮膚のようなものである。こうして、ひとつのお話が別のお話の上に積み重なり合い、いくつものお話が合流していく。だから、いちばん最初のお話はずいぶん遠くにあり、最深

部に止まる。皆さんにするお話はずいぶん遠くからきている。このように私が言う場合、キロメートルとか、年や世紀のことを話しているのではない。

われわれの村の最長老たちは、遠くからきたいくつものお話を話すとき、大地を指し示す。大地の内部に真実が歩んでいる言葉があると教えるためである。大地は褐色である。最初の言葉、真の言葉が休息する棲み処は褐色である。だから、われわれのいちばん最初の父母は褐色の肌をしていた。だから、責任をもってお話を持参する者たちの顔は夜の色で出歩いている。

この世界を創っているいくつもの世界のお話しはずいぶん遠いところから来ている。本からぶらさがったり、木に描かれたりする状態で発見されることはない。川が流れたり、雲が飛ぶように出歩いたりすることもない。われわれそのものであるいくつもの世界のお話は、暦をめくるように読むことはできない。われわれがどのように誕生し、何をしているかというお話は、文字や紙の背後に隠されてはいない。

そうではない。お話はずいぶん遠くにある。つまり、ずいぶん深い所、最深部にある。しかし、私が皆さんにお話しするのは、多くの世界が歩んでいるこの世界のお話ではない。ひよっとしたら、そうかもしれない。すべてのお話は、いちばん最初のお話、いちばん遠くにあるお話、いちばん深いお話、いちばん真実のお話のこどもであり、母親である。

この山中に住んでいる最長老たちは語っている。昼が存在する以前から、この世界で多くの男女が暮らしていた。その数はとても多く、すべてが夜と水だった。天空は寝ているようだった。もともとそうだった。偉大な神々、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々は寝ていた。この最初の神々は長いあいだ働いた。当然、新しい世界を創ることで、神々はとても疲れていた。だから、もっとも偉大な神々は寝ていた。天空は寝ている神々に付き添った。夜と水の寝床で、いちばん最初の神々は夢見ている。



水と大地の引き離し



片足のウラカン

すでに山はできていた。山は神々が水から引き出した最初の大地である。いくつかの山は平らになり、ほかの山はひび割れていった。こうして山や谷、断崖ができた。最初の大地は山だった。だから、われわれの最年長の老人たちは言っている。山のなかで、いちばん最初のお話、もっとも遠くにあるお話が生きている。

水と夜ばかりであることに飽きてしまい、男女は激しく抗議し、どなり散らしはじめた。ずいぶん大勢の男女が大喧嘩をした。世界を歩き回ったのは最初の男女だった。彼らの肌と言葉を彩る色もたくさんだった。あまりにも騒音が激しく、いちばん最初の神々、もっとも偉大な神々は目を覚ました。そして、世界を生きている男女がどうしてそんなに叫んでいたのか、神々は質問した。すべての男女が、同時に喋り、叫び、取り乱したように言葉を発していった。そして、誰がいちばん強力に喋ったかをめぐり、彼らは口論を始めた。こうして、ずいぶん時間がかかった。

最初の神々、偉大にして世界を誕生させた神々は事情がよくわからなかった。男女が何を望んでいたのか知ることができなかった。話し合いなどなく、雄叫びと口喧嘩しかなかったからである。最初の神々は眠れなくなった。そこで、トウモロコシで創られた男女、真の男女を呼び出し、起きたことを説明してほしいと言った。トウモロコシの男女は言葉の心をもっていた。男と女を抱くために言葉が歩くには、叫んだり口論していたりしてはだめである。彼らはそのことをよく知っていた。なぜなら、言葉の花が誕生したとき、もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々はこのトウモロコシの男女の心に花を植えつけた。真実こそ、言葉が誕生し、成長するための肥沃な大地である。しかし、それは別のお話である。

トウモロコシの男女は最初の神々と話し合いに出かけた。

「ここに参上しました」と、彼らは言った。

「どうして、この男女は激しく叫び、いさかいをしているのだ？おまえたちがたてる騒音がひどく、寝られないのがわからないのか？いったい何が欲しいのだ？」と、神々は質問した。

「光が欲しいのです」と、真の男女はいちばん最初の神々に言った。

「光だと」と、最初の神々は聞き返した。

「光です」と、真の男女は繰り返した。神々はお互いに顔を見合わせた。神々が汗で濡れているのがはっきり見えた。光の本質が何かに触れたからだろう。だが、神々は何も言わなかった。

「しばらく待て」と、もっとも偉大な神々は真の男女に頼んだ。そして、彼らは会議を開催するために立ち去った。そして、ずいぶん時間がたった。遅れたのは、偉大な合意を導き出すのに時間はかかったからである。光は光であり、その量は少なくなかったからである。

やがて、神々は戻ってきた。

「光はもともと存在している。だが、ここにはない」と、真の男女に言った。

「光はどこにあるのですか？」と、トウモロコシの男女はたずねた。

「あっちの方だ」と、言って、神々は世界のある場所を定める七つの点のひとつを指した。世界を画定している七つの点は、前と後、こちら側とあちら側、上と下、そして、中心である。中心は七番目の点であり、最初の点でもある。神々はそれらのひとつを指しながら、言葉を続けた。

「光はとても重く、もってこられなかった。光はあっちに残っている。最初の神々であるわれわれも、光を担いでもってこられなかった。光はあっちに残っている」

最初の神々は恥じ入り、黙り込んでしまった。もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々でありながら、光を運んでこられなかったからである。光は男と女が世界を構成する複数の世界を歩むために必要なものだった。神々でいちばん恥じ入ったのは、フラカンだった。彼はカクルハー・フラカンとも名乗った。それは「片足の稲妻」、または「雷」という意味である。とてつもなく強大だったが、光を担いでもってこられなかった。彼には片足しかなかったからである。

トウモロコシの男女、真の男女はずっと考えた。しかし、ほかの男と女がもち込んだ叫び声あまりにも大きかった。そこで、彼らは山に登り、言葉を探すため、黙ることにした。静かにしていた彼らは言葉を見いだした。言葉は彼らに向けて話しはじめると、次のように言った。

「必要なことは、光を担げるように何かすることである。光はとても重い、それを世界のこちら側までもってきて、世界の向こう側に留まらないようにすべきである」

真の男女は言った。

「そうか、もう光はあるのだ！必要なのは、光を担ってここに運ぶため、何かすることだ」

「そうだったのか」と、トウモロコシの男女は繰り返した。

光を担ぎはるか彼方からこちら側までもってくるには、どうしたらよいか、彼らは考えはじめた。トウモロコシの男女は何を使ったらできるかを考えた。土が最適であることがわかった。しかし、土はもろくて崩れ、一瞬しか固まってはいなかった。そこで、土に水をかけると、ちよっとのあいだ固まっていた。しかし、乾燥すると、また崩れた。そこで、大量の土をかき集め、少量の水を注ぎ、それを火に近づけた。すると、しばらくのあいだ、それは堅く、頑丈になった。

しかし、すぐに火の熱で壊れてしまった。火に掛けるあいだ、それに空気を吹きつけることを思いついた。すると、水と火と風に助けられ、土はかなりのあいだ固まっていることがわかった。

このようなことがあって以来、土器は物を担いだり、容れたりする役には立っている。真の男女はとても満足した。はるか彼方にある光を担ぐ容器を作る材料が手に入ったからである。

引き続いて、彼らはこちら側の光を運ぶためのものをどのような形にしようかと考えはじめた。そこで、この世界にあって歩き回っているあらゆるもののことに思いをめぐらした。いちばんいい形をしているのは人間だった。そこで、光をすべての人の世界に運んでくるため、光を担ぐものを人間の形にしようと考えた。そこで、そのものにひとつの頭、二本の腕と二本の脚を取りつけた。トウモロコシの男女はとても満足した。はるか彼方から光を担いでくる台車が実質と形をもったからである。

しかし、そのものはとても暗かったので、道に迷うことになるのは確実だった。もともと、すべてが夜と水だったためである。真の男女はとても悲しい気持ちになった。そこにやってきたのが天空の心であるウラカンである。雷、雷鳴、暴風は天空の心と呼ばれていた。フラカンは一本脚で歩き、とても強力に光り輝いていた。

そして、天空の心、フラカンと呼ばれるものは、自分の一本しかない輝いている足につけるため、暗いものの表面を研磨した。天空の心は、その表面をずいぶん研ぎ、削り落とした。ついにその暗いものは輝きだした。しかし、そのものは、ひとつの頭、二本の腕、二本の脚という形ではなくなってしまった。あまりにも研ぎすぎたので、五つの尖った先端だけになった。ひとつの先端は頭のあった所、二つは腕のあった所、二つは脚のあった所である。この五つの尖った先端のあるものは、いつも何かしら輝いていた。それを見て真の男女は大いに満足した。その輝きがあるため、はるか彼方にあるとても重い光を担いでもってくるために出かけても、道に迷うことがないからである。こうして、準備万端、整ったように思われた。

しかし、そのものは動かなかった。たしかに輝き、五つの先端があり、とても力強くきれいに見えた。しかし、少しも歩かなかった。真の男女は一生懸命それを押した。しかし、そこに止まり、ピクリともしなかった。

「今度は、どうしてだろう？」と、トウモロコシの男女は自問した。

「よく調べよう」と、言いながら、いい考えが浮かばないかと頭を掻いた。それ以来、わからない場合、頭に考えがへばりつき、眠っていないかを確認するため、男と女は頭を掻くようになったとされる。だがいくら頭を掻いても、いい考えは見つからなかった。

トウモロコシの男女は共同体の長老たちにたずねに行った。

「それが歩かないのは心がないからだ。心をもつ者だけが歩くのだ」と、村の最長老は言った。

真の男女はとても幸せだった。自分たちの作ったものが歩かない理由がわかったからである。そこで、「われわれが作ったものに心を取りつけよう。そうすれば歩くようになる。そうすれば、はるか彼方にあるとても重い光をもってこられる」と、彼らは言った。

だが、このものの心がどのように何でできているか、彼らは知らなかった。そこで、彼らはそれぞれが胸にもつ心を取り出した。それらすべてをひとつにまとめ、とても大きな心を作った。彼らは自分たちの作ったものの五つの先端の中央に大きな心を据え付けた。すると、そのものは歩きはじめた。トウモロコシの男女はとても幸せだった。自分たちの心は取り外されたが、そのものを動けるようにできたからである。

しかし、そのものは、あちこち動き回り、行ったり来たり、回転したり、ぶつかったりした。彼らはそのものを押しやり、とても重くはるか彼方にある光を取りに行くために歩いていくべき方向を指し示した。そのものは、進路をとることはなく、きっぱりと道を選ぶこともなかった。真の男女はずいぶん長く頭を掻いていたが、少し絶望的になった。そして、もう一度、村の最長老たちに質問するため、彼らは出かけた。

「われわれが心を取りつけたので、もう動いている。だが、あちこち出歩き、われわれが望むよい道をとろうとしない。どうしたらいいのか？」と、トウモロコシの男女は質問した。「心が

あるものは動く。だが考えがあるものだけが動きに方向、歩みに目的地を与えられる」と、最長老たちは答えた。「われわれが作ったものが方向と目的地をもつにはどうすればいいか。われわれは知っている。われわれがそれに感情を与えた場所のことを考えさせればいい」と、トウモロコシの男女は大いに満足して言った。

こう言うと、彼らはそのものの胸からよい言葉、真の言葉を取りだした。言葉とともに動き回っているそのものにキスをした。すぐにそのものは静かになった。そのものは話しだし、「どこに行くべきですか？何をすべきですか？」と、質問した。真の男女は拍手した。彼らは光りを担ぐものを誕生させたからである。

その光は重すぎた。世界の男女全員を照らすために連れてくるには、光はあまりにも遠くにあった。とても大きく強力なものができた。それは七つの要素で構成されていた。土、水、火、風、雷、心、言葉である。それ以来、新しくよい世界を誕生させ創る要素は、七つとなった。トウモロコシの男女は拍手し、そのものに向かって、通って行くべき場所、すべき事柄を伝えた。役立つかもしれないメカパルも与えた。トウモロコシの男女は光がとても重いことをよく知っていた。もっとも偉大な神々、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々もそれを担げなかった。

ものごとはこのように進み、かなり時間を要した。真の男女は山に腰掛け、かなりの時間、あちら側、向こう方を見つめた。そこには夜があり、何ひとつ動く気配はなかった。トウモロコシの男女は失望せず、静かにしていた。なぜなら、彼らは光がひとりでに到着することをよく知っていた。そのため、トウモロコシの男女は、光を担ぎ、運ぶことになる者に心と言葉を与えたのである。光はるか彼方にあり、とても重いことなど、大きな問題ではなかった。



最初の光の到来

いくばくかの時間が経過し、遠くから、そのものがゆっくりとやって来ているのが見えだした。一步一步、天空を歩みながら、光はこちら側までやって来た。光が到着し、しばらくすると、光の到着した後には、太陽と昼が存在していた。世界の男女は楽しくなった。光を使って知るべきことを探しながら、彼らは自分の道を歩んでいった。もともと、それぞれが何かを探している。しかも、全員が何かを探している。

以上が、皆さんにお話したかったお話である。光がこの世界にどのようにして到達したかというお話である。おそらく、皆さんは、これはメキシコ南東部の山中に住んでいる人々の単なるお話、伝承だと考えているでしょう。たぶんそうかもしれない。

しかし、皆さんがわれわれの大地を抱きしめる夜を一晩中見まもっているなら、夜明け前の東の空にある星を見ることができよう。ある人はその星を「明けの明星」とか暁星と言っている。科学者や詩人は金星と呼んできた。われわれの最長老たちはイコキーと呼んだ。それは「肩で太陽を運ぶ星」、「太陽を背負って運ぶ星」という意味である。われわれは「明け方の星」と名づけている。その星は夜が終わり、朝がくることを告げているからである。トウモロコシの男

女、真の男女が創ったこの星は、気もちと考えを携えて歩き、いつも通り夜明け前にやってくる。私が皆さんにこのお話をしたのは、皆さんを楽しませるためではない。この集会と関連するすべてのことを見通すのに必要な時間を皆さんから奪うためでもない。そうではない。私が皆さんに話したのは、遠くからきたこのお話が、探すことに役立つ光がもってくる様子を考え、感じていることをわれわれに思い出させるからである。われわれは、心と頭を使って、架け橋になるべきである。その架け橋で、あらゆる世界の男女が夜から昼に向かって歩くようにすべきである。

12 夜明け前の狩人のお話 (1999/11/1)

カネックは心では思っていたが、口に出さなかった。だが、彼のまわりにいたインディオたちはそれを推測した。攻撃に際し、最前列のインディオは、敵の発砲を待たねばならなかった。そうして後衛のインディオは、倒れた死者を乗り越え、徒歩で前進した。

—アブレウ・ゴメス『カネック、マヤの英雄の歴史伝承』—

今日、この山中のわれわれの村ではどこでも、死者たちがわれわれのもとに帰るために歩んでいる。死者はわれわれと再会し、話し合い、耳を傾ける。どの小屋や設営地でも、狭い敷地におかれた供物がわれわれの死者に歓迎の挨拶をしている。死者を招待し、食事し、笑い、タバコを一服し、コーヒーを飲み、踊る。そう踊るのである。なぜなら、われわれの死者はとても踊りが好きである。われわれの死者は、踊りだけでなくお喋りも大好きである。彼らはわれわれにお話をする。われわれのいちばん最初の先祖たちが道を歩くことを教え、習得したように、死者はお話をする。われわれの死者も同じことをする。だから、死者であるわれわれも同じようにしたい。

われわれの山中では、死者の日は花の日である。昨日、皆さん [1999年10月31日～11月1日にラ・レアリダーで開催されたEZLNと地域接触調整委員との会合参加者] にお話したのは、光と星と夜明け前のお話だった。今日は、光と花と夜明け前の話をすることにしたい。

われわれの共同体の最長老たちは語っている。われわれのいちばん最初の祖先たちも反乱の戦いのなかで暮らしていた。だが、権力者が彼らを征服し、殺してからずいぶん時間が経った。権力者がそうしたのは弱者の血を吸うためである。こうして、弱者はますます弱くなり、権力者はさらに権力をもつようになった。しかし、もうたくさんだ! と叫んでいる弱者がいる。彼らは権力者に反抗し、権力者を太らすためではなく、弱者を生かすために、自らの血を捧げている。こんなことが起きたのはずいぶん昔である。



ポポル・ウーフの6つの処罰の家



シバルバーの領主たち

それ以来、反乱者がいる。それ以来、権力者が反乱者を罰する罰がある。現在では、反乱者を罰するための監獄と墓がある。以前は罰の家があった。以前、反乱者を罰するための罰の家は七つだった。今も七つあるが、別の名前である〔ポボル・ウーフでは六つの家が言及〕。われわれの最初の先祖がいた時代にあったという七つの罰の家は、次のものである。暗闇の家の内部には、光がなかった。暗闇の家は完全に暗闇で空っぽである。そこに着いた者は方向を失い、道に迷い、戻ることも行くこともできなかった。道に迷って死んだ。

寒冷の家では、凍てつく強風が吹いていた。そこに入るものすべてを凍らした。だから、人間のなかでもっとも人間的な人を殺していた。

ジャガーの家には、空腹の狂暴なジャガーが閉じこめられていた。ジャガーは家に住む者の魂に入り込んだ。その魂をあらゆるものへの憎悪で充たした。彼らは憎悪にかられ、憎悪しながら、人を殺していた。

コウモリの家には、キーキーと泣き喚き、噛みつくコウモリがいた。その家に入る者に噛みつき、信じる心を吸い取った。だから、人はまったく成長せず、何も信じず死んでいった。

ナイフの家には、よく切れる研がれたナイフがたくさんあった。そこに入った者は、頭、自分の考えをはねられた。そして何も考えず死んだ。ものごとを理解する力が死んでいった。

苦痛の家には、大いなる苦痛が住んでいた。苦痛はあまりにも激しく、大いなる苦痛によって、この家に住む者はおかしくなった。苦痛のため、ほかのちがうものがあることを忘れた。忘れたため、死者は記憶を失ったまま死んでいった。

無欲の家の内部には、虚空が広がっていた。その虚空は、家に入った人の生き、闘い、愛し、感じ、歩くという意欲を食べ尽くした。人は生きているが死んでいるという虚ろな状態になった。意欲なしに生きることは、死んだ状態で生きることである。

以上が、反乱者、動かずにじっとしていることを受け入れない者を罰する七つの家である。彼らの血は権力者を太らせるが、彼らの死は死者の世界に生命を与えている。

フンアフプーとイシュバランケーと呼ばれる二人の反乱者がやってきたのは、ずいぶん昔である。彼らは夜明け前の狩人とも呼ばれていた。悪はシバルバーという深い穴に住んでいた。そこからよい土地に到達するにはずいぶん登らなければならなかった。巨大な悪の館に住む悪の領主たちに反乱したのが、フンアフプーとイシュバランケーだった。フンアフプーとイシュバランケーを悪の領域まで降りてくるように、悪の領主たちは策略で二人を連行するように命じた。

夜明け前の狩人たちは、騙されて悪の領域までやって来た。悪の領主たちは二人を暗黒の館に閉じ込めた。そして、彼らに一本のたいまつと二本のタバコを手渡した。悪の領主たちは二人に対し、暗黒の館で一晩過ごし、翌朝、一本のたいまつと二本のタバコをもとの完全な形で返すように命令した。監視人が一本のたいまつと二本のタバコの火が夜のあいだも灯っていることを監視することになっていた。翌日、たいまつとタバコがもとの形で残っていなければ、フンアフプーとイシュバランケーは死ぬことになった。



タバコの先の光となったホタルとたいまつと二本のタバコがもとの形で残っていなければ、フンアフプーとイシュバランケーは死ぬことになった。

二人の夜明け前の狩人は何も恐れていなかった。悪の領主たちの言うとおりで構いませんと言うと、二人は進んで暗闇の館に入った。そこで、二人は考えを巡らし、すべての色を身体に保管している鳥のコンゴウインコを呼び出した。そして、コンゴウインコに赤色を貸すようお願いした。二人はたいまつ先端を赤色で塗った。遠くから見ると、火が赤々と燃えているようにした。次に、フンアフプーとイシュバランケーはホテルを呼んだ。二人は二匹のホテルにいっしょにくるように依頼した。そして、二本のタバコの先端にホテルを飾りつけた。こうして遠くからだと、二本にタバコに火がついているように見えるようにした。

こうして夜が明けた。一晩中、たいまつ火は燃え、夜明け前の狩人たちはタバコをたくさんすっていたと、監視人は悪の領主たちに報告した。これを聞いた悪の領主たちはとても満足した。フンアフプーとイシュバランケーが一本のたいまつと二本のタバコをもとのままの形で返すという約束を破ったので、二人を殺す口実ができたからである。やがて、夜明け前の狩人たちは暗闇の館から出てきた。彼らは一本のたいまつと二本のタバコをもとのまま手渡した。悪の領主たちはとても腹を立てた。フンアフプーとイシュバランケーを殺すためのいい口実がなくなったからである。悪の領主たちは言い合った。

「この反乱者はとても頭がいい。殺す別の口実を探そう」「そうしよう」と、彼らは言った。

「今度は、ナイフの館で寝ろと命令しよう。考えを切り刻まれ、二人はなすすべもなく死ぬ」

「いや、それでは不十分だ」と、別の悪の領主が反論した。

「この反乱者どもはとても頭がよい。やり遂げられない重労働を二人に課せばよい。それができないなら、ナイフが二人を殺すことになる。そうすれば、連中を抹殺するいい口実になる」

「それはいい考えだ」と、悪の領主たちは賛同した。

彼らはフンアフプーとイシュバランケーのいる所へ出かけ、二人に言った。

「二人とも休んでいい。明日話し合うことにしよう。だが、ちゃんとと言っておきたい。明日の夜明け、われわれに花を贈ってほしい」

悪の領主たちはほくそ笑んだ。悪の領主たちは、夜間、花を切るために誰も花園に近づかないようにし、近づく者がいたら攻撃し殺害せよと、花園の監視人たちに指令していたのである。

「いいです。皆さんに贈る花は何色が希望ですか？」と、夜明け前の狩人はたずねた。

「赤、白、そして黄色だ」と、答え、悪の領主たちは付け加えた。

「はっきりと言っておく。明日、おまえたちが赤、白、黄色の花を贈れなかったら、われわれへの重大な攻撃とみなし、殺すことになる」

「ご心配には及びません。明日、赤、白、黄色の花を持参します」と、二人は言い返した。

こうして、夜明け前の狩人は、ナイフの館に入っていった。ナイフはフンアフプーとイシュバランケーをばらばらに切り刻もうとした。二人はナイフを押し止め、話し合うことを提案した。ナイフは立ち止まり、耳を傾けた。夜明け前の狩人は提案した。

「われわれを切り刻んでも、肉の量はほんの少しです。われわれに何もしないなら、われわれは皆さんにあらゆる動物の肉を提供します」

ナイフは提案を受け入れ、フンアフプーとイシュバランケーに危害を加えなかった。それ以来、ナイフは動物の肉を切る道具になった。人間の肉を切るナイフも存在している。その場合、ナイフの犯した罪を償わせるため、夜明け前の狩人はどこまでも追跡するのである。

こうして、ナイフの館でも、フンアフプーとイシュバランケーは、何ひとつ欠けることなく穏やかに過ごすことができた。彼らの頭も冴えていた。二人はつぶやいた。

「さて、どのようにして、悪の領主たちが望む花を手に入れようか？彼らが見張り番に指令を出したのはわかっている。庭園の花に近づいたら、連中はわれわれを殺すにちがいない」

二人の夜明け前の狩人はじっと考えていた。やがて、ほかの小さなものたちの手助けが必要であることがわかった。そこで葉切り蟻を呼び出して依頼した。

「仲間の葉切り蟻さん。皆さんにお願いしたい。反乱しているわれわれを支援してください。悪の領主たちはわれわれの戦いを圧殺しようとしている」

「よく、わかりました」と答え、葉切り蟻たちは質問した。

「悪の領主に対する戦いを支援するため、何をすればいいのですか？」

「皆さんにお願いしたい。庭園に行って、赤、白、黄色の花を切って、もってきてください。われわれを攻撃せよという命令が見張り番に出されているので、われわれは庭園に行けない。だが、あなたたちは小さいので、見張り番には見えないし、気づかれぬだろう」

「よく、わかりました」と、蟻たちは言った。

「われわれは準備ができています。悪の領主たちがいかに偉大で強力であろうとも、小さいものは悪の領主と闘う方法をもっている」

こうして葉切り蟻たちは出かけた。その数は多かったけれど小さいので、葉切り蟻たちは庭園に入れた。見張り番はその様子を見ていなかった。蟻がとても小さかったからである。蟻たちは花を切り、担ぎはじめた。ある蟻は花を切り、別の蟻は花を担いだ。ある蟻は赤色の花を切り、担いだ。別の蟻は白色の花を切り、担いだ。黄色の花を切り、担いだ蟻もいた。あっという間に花を切り、夜明け前の狩人たちが待つ場所に担いでいった。花が届いたのを見て、ファンアプーとイシュバランケーはとても満足した。そして、葉切り蟻たちに次のように言った。

「仲間の皆さん、ありがとう。あなたたちは小さいけれど、その力はとても強いです。皆さんに心から感謝します。皆さんの数が多いので、強大なものでも皆さんを絶滅できない」蟻はがまん強いと言われる。攻撃するものがいかに強大でも、蟻を打ち負かせない。



ナイフの館



蟻たちの活躍

翌日、悪の領主たちがやってきた。二人の夜明け前の狩人は、悪の領主たちが欲しがっていた花を手渡した。二人はナイフで切り刻まれていなかった。それを見た悪の領主たちは驚いた。だが、ファンアプーとイシュバランケーから手渡された赤、白、黄色の花を見たとき、それ以上にびっくりした。怒り狂った悪の領主たちはさらによい口実を探して、夜明け前の反乱する狩人たちを殺そうとした。

仲間の皆さん。

以上が、われわれの死者たちがもち寄り、われわれに語っているお話である。われわれが言葉の指し示す道を歩めるように、死者たちは彼らの言葉をわれわれにもち寄る。もともと、われわれは自分たちの死者の上を歩いているからである。彼らのお陰で、われわれは初めて前進できるのである。

だから、私は確信している。われわれのいちばん最初の先祖が話してくれたこのお話、つまり、死者の日である今日、皆さんにしたお話はいろんな形で歩むことができる。われわれ小さきものたちは誰でも、このお話の中に自分の姿を見いだせる。

われわれは夜明け前の狩人となることもある。権力の嘘に抵抗するさまざまな手法を工夫しながら抵抗するため、われわれはほかの小さきものたちがもつ多様な光を自分の手元にもち寄る。われわれはコンゴウインコとなることもある。抵抗を彩るため、われわれは自分たちがもってい

る多様な色を提供する。われわれはよき理解者となることもある。本来の敵は別でありながら、われわれをライバルと思っている人たちと話し合い、その考えを直すためである。われわれは蟻となることもある。小さい存在でありながら、死に直面している人のために強固な戦いと支援を展開することができる。

私は確信している。われわれ、つまり皆さんとわれわれ全員が、色、光、よい言葉である。人を説得して、直すことができる。いっしょに大きなものとなる小さな力である。

13 民族抹殺の機械 (1999/11/20)

日が暮れた頃、ラモン・バラムとドミンゴ・カンチェは近道をたどって村まで着いた。二人は白人によるインディオの虐殺から逃れていた。マチューテで切りつけられたバラムは、背中から血を流していた。ハシント・カネックは彼に次のように言った。

「昔の五人の預言者の一人、ナワ・ペチの預言は、すでに実現している。白人たちは、自分たちの財産や、戦争で分捕ったものだけではけっして満足しないだろう。また、われわれに悲惨な食事や住宅を押しつけてくるだろう。白人どもはわれわれに対する憎悪を掻き立て、われわれは山奥や人里離れた場所へと避難しなければならなくなるだろう。

われわれは蟻のように隊列を組み、害虫を追いかけ、植物の根、ミヤマガラス、カラス、ネズミ、風のイナゴなど、酷い食べ物を食べるようになる。この腐りきった食物によって、われわれの心は恨みで満たされ、戦争が起きるだろう」

「インディオどもが謀反を起こした」と、白人たちは叫んだ。

—エミリオ・アブレウ・ゴメス『カネック、あるマヤの英雄の歴史と伝承』—



メリダ市にあるハシント・カネック像

14 夜の空気のお話 (2000/3/8)

以下、私がラ・マールに贈った思い出を添付しておきたい。こうして第6書簡eは、二つの翼を獲得し、すべての書簡に必要となる飛行にとりかかれる。では、どうぞ。

不安な夜のためのお話

私はラ・マールに言いたい。私が理解できない何らかの理由で、老アントニオはドイツの哲学者エマヌエル・カントの著作の一部を読むことができた。外国嫌いに扇動されることなく、老アントニオは、受け入れ可能なものすべてを世界中から取り出している。それを生み出した土地を気にしない。他国のよい人たちのことに言及するとき、彼は国際主義者という用語を使用する。そして異邦人という用語は、彼の心に相容れない人物だけ使われた。人の肌の色、言葉や人種が何であろうと問題にしなかった。パスポートのばかげた愚かさを説明するため、「同じ血の人間のなかに異邦人がいることもある」と、老アントニオは言ったことがある。

しかし、私はラ・マールに言いたい。この民族性のお話は別のお話である。今、私が思い出しているのは、夜と夜の歩む道のことである。

3月が錯乱した使命を保証しているこの夜明け前のことである。午前中、七つの角がある鞭のような太陽が照りつけた。だが午後には、灰色の曇り空となった。夜には、冷たい風で黒い雲が集められ、徹夜している内気な月に次々と近寄っている。

今、巻きタバコに火をつけるのと同じぐらいの速度で、老アントニオは朝や夕方の方の時間の歩みを進めてきた。一瞬、一匹のコウモリがまわりを飛びまわった。老アントニオが巻きタバコにつけた火の光で混乱したのだろう。ツオツのように、いきなり夜の真ん中に現われたのは…

夜の空気のお話

いちばん偉大な神々、世界を誕生させた神々、最初の神々は、これからすることをどのように、何のためにするのかを考えた。そのとき、彼らは会議を開催した。会議では、自分の言葉を知り、それをほかの神々が知るため、それぞれの神々は各自の言葉を引き出した。いちばん最初の神々は、それぞれひとつの言葉を引き出した。そして、その言葉を会議の場の中央に投げ入れた。そこから、その言葉は飛び跳ね、もうひとりの神の所まで行った。その神はそれをつかむと、その言葉を跳ね返した。こうして、誰もがその言葉を理解するまで、言葉はボールのように、こちらから向こうへと跳ねて行った。そこで、もっとも偉大な神々、われわれが世界と呼んでいる万物を誕生させた神々は、彼らなりの合意を導き出した。

神々がそれぞれの言葉を引き出すときに見いだした合意のひとつは、それぞれの道にその道を歩く人がいて、それぞれの道を歩く人にはそれぞれの道があるというものだった。こうして、ものごとは完全な形で誕生した。それぞれがそれぞれにふさわしいものをもつようになった。

こうして、大気や鳥が生まれた。最初から大気が存在し、その後に大気を歩む鳥が存在したのではない。最初に鳥が創られ、その後に鳥を飛ばせる大気が創られたのでもない。水と水中を泳ぐ魚、大地と大地を歩きまわる動物、道と道を歩く足に関しても、同じことが起きた。



大気と飛ぶ鳥、水と泳ぐ魚、大地と歩く動物

だが、鳥のなかには、大気に強く抵抗しようとした鳥がいた。大気が邪魔しないなら、もっとうまく早く飛べるはずだ。このようにその鳥は言い張った。その鳥はぶつぶつ不平を言った。その鳥は敏捷でとても速く飛んでいた。しかし、もっと速くうまく飛びたいとその鳥はいつも思っていた。それができないのは大気が邪魔をしているからである。こんなふうにその鳥は言った。神々はその鳥があまりに口汚いことばかり吐くのに嫌気がさした。その鳥は大気中を飛んでいるくせに、大気の悪口ばかり言っていた。罰として、神々はその鳥から羽毛と目の光を奪った。裸にして夜の寒いところに追い出した。鳥は目の見えないまま飛ばねばならなくなった。それ以降、以前は淑やかで軽やかだった飛び方はメチャクチャでぎこちなくなった。その鳥は何度もぶつかったりつまずいたりした。そのため、その鳥は耳で見るコツをつかんだ。いろんなものに話し掛けながら、その鳥、つまりツォツは、自分の道を探り当てた。その鳥は自分だけが聞こえる言葉で答える世界を知るようになった。コウモリは、身を飾る羽毛がない。目が見えず、神経質でそそっかしく飛びながら、コウモリは山の夜を支配する。暗い大気の中をコウモリよりうまく歩む動物はいない。

話される言葉、考えることの音に重要で有効な意味を与える。そのことを真の男女はこの鳥、ツォツ、つまりコウモリから学びとった。夜は数多くの世界を閉じ込めている。それらの世界を引き出し開花させるには、世界の声に耳を傾けねばならない。そのことも真の男女は学んだ。言葉とともに、夜がもっているいくつもの世界が誕生した。音をたてて光が作り出された。だが、光は多すぎるため、すべてを大地に収容することはできない。多くの光が天空に横たわる。だから星は地上で誕生すると言われる。

いちばん偉大な神々は男と女を誕生させた。一方がもう一方の道になるためではない。互いに相手の道、そして自らの道を歩む人になるためである。いっしょにいるため男と女を違ったものにした。男女が愛し合うため、いちばん偉大な神々は男と女を創った。だから、夜の大気は飛翔し考えを巡らせ、言葉を交わし愛し合うのに最適である。

かつての3月、老アントニオのお話は終わった。今の3月、ラ・マールは、夢の世界を漂っている。夢のなかで、言葉と身体は裸になる。いくつもの世界は衝突することなく歩み、愛は不安を抱くことなく飛んでいる。ひとつの星が大地に空白の場所を見つけ、この夜明け前の夜空に一瞬の引っ掻き傷を残し、あっという間に落下した。

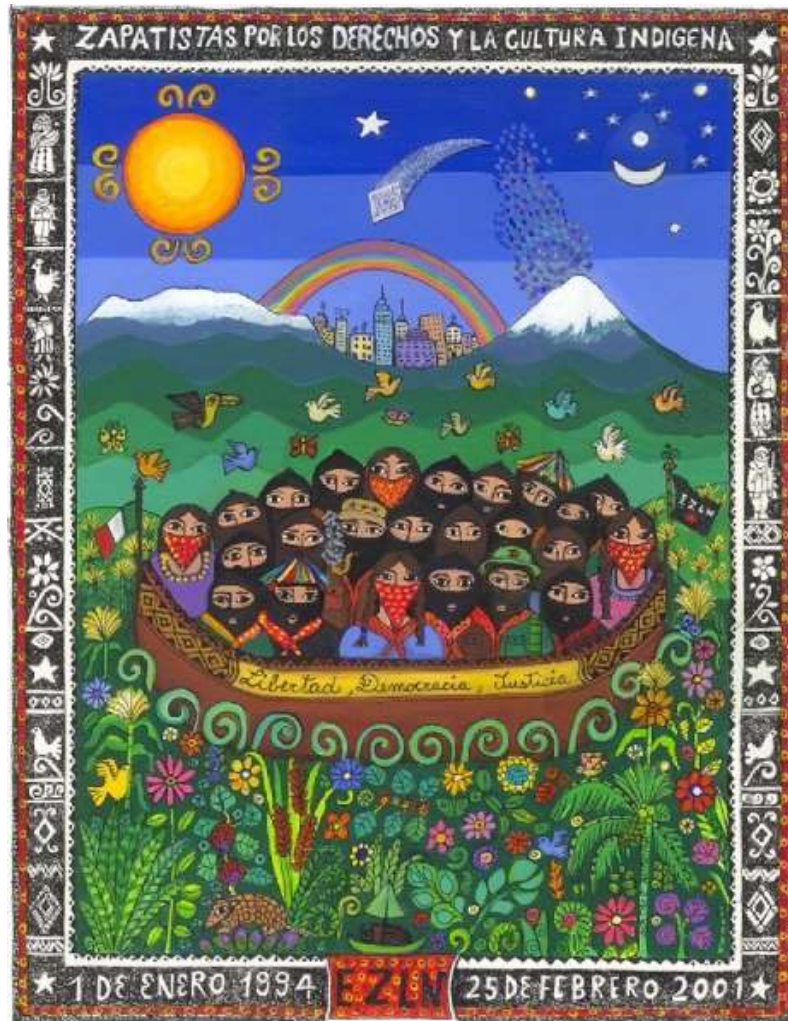
カセットからは、誰もがご存知のウルグアイ人、マリオ・ベネデティの声がする。

「あなたたちは行ってもいい。だが、私は残る」 [a la izquierda del roble の最後のフレーズ]



マリオ・ベネデティの詩『榎の木並木の左側』の最末尾

第5部 大地の色の行進とカラコル創設



『大地の色の行進』のポスター

第5部 2001～2004年 大地の色の行進とカラコル (*は老アントニオが登場しないお話)

- 1 尊厳という最初の花
- 2 最初の言葉のお話
- 3 鳥だった人間*
- 4 ものごとはよくも悪くもなる*
- 5 今は言葉の時間である*
- 6 何も恐れる必要はない
- 7 探ることのお話
- 8 一番目の石碑*
- 9 二番目の石碑*
- 10 四番目の石碑*
- 11 渦巻、カラコル
- 12 天空の支持者のお話
- 13 光を運ぶメカパル*
- 14 三つの肩

1 尊厳という最初の花 (2001/2/24、チアパス州サンクリストバル)

われわれのなかの最長老たちは次のように語っている。

この大地のいちばん最初の人々は、ツル、つまり強大な権力者がこの地に到来し、われわれに恐怖を教え込み、花を萎れさせたことを目撃した。自分の花を目立たせるため、権力者はわれわれの花を傷つけ、飲み込んだ [チュマイエルのチラム・バラムの書にある言葉]。



『チュマイエルのチラム・バラム』

われわれのもっとも昔の人たちは言っている。権力者の生命は萎れている。権力者の花の心は死んでいる。権力者はすべてのものを引きつけ壊す。権力者は他者の花を傷つけ飲み込む。

われわれのいちばん最初の人々は語っている。この土地、大地に咲いている最初の花には色があった。死なないようにするためだった。小さい花だったが、抵抗した。大地である心を通じて、ほかの世界が誕生するための種を自らの心の奥底に保管した。ほかの世界とは、いちばん最初の世界ではない。権力者が萎びさせた世界でもない。それとは異なる別の世界である。新しい世界である。よい世界である。

「尊厳」、それが最初の花の名前である。

その種が、すべての心と出会うには、ずいぶん歩かねばならない。そうすれば、あらゆる色が存在する偉大な大地に、誰もが「明日」と呼んでいる世界が芽生えるだろう。

今日、われわれが手にしている旗は尊厳にほかならない。

今まで、その旗のなかに大地の色をしたわれわれの場所はなかった。今まで、われわれは、その旗のもとにあるほか人たちが庇護し、その旗でたなびく歴史はわれわれのものでもないと受け入れることを期待してきた。われわれメキシコの先住民は、先住民族でありメキシコ人である。われわれは、先住民、そしてメキシコ人でありたい。

しかし、多くの言葉を操っているが、ほとんど聞く耳をもたない領主たち、われわれを統治する連中は、われわれに嘘をつき、旗を提供することはなかった。

われわれがとった対応は、先住民の尊厳を守るための行進である。大地の色をしたわれわれの行進、大地の心のすべての色を備えた全員の行進である。

七年前、先住民の尊厳は、この旗にあるべき場所を求めた。われわれ大地の色は、砲火をもって語った。それに対して、ツル、権力者は、虚言と砲火で応えた。連中の色は、大地を汚染するお金に由来する。

だがその時、われわれは別の多くの声を目撃し、別の多くの色を聞いた。これら別の人たちは、昼を襲い、夜を冒し、喉をひねり、言葉を語る口を緩めることなどはしなかった。

仲間とは、さまざまな色でわれわれと仲間になっている人たちである。今日、彼らとともに、様々の色をした仲間とともに、大地の色は歩んでいる。尊厳をもって歩き、尊厳をもって、旗の中の自分の場所を探している。権力者は自分たちの政府をもっているが、その王たちは偽物である。彼らの喉は歪み、統治し、命令している連中の口は緩んでいる。ツル、権力者の語る言葉には真実はない。

2 最初の言葉のお話（2001/2/25、オアハカ州フチタン）

ずいぶん昔のことだった。そのときから、地球は太陽に求愛しながら、その執拗にまわりを18回転した（当時、EZLNは一握りの男女で構成されていた。その数はわれわれの手の指の数より少なかった）。腹が減ったので、われわれは狩猟に出かけざるをえなかった。

私一人で出かけたわけではない。老アントニオは古ぼけた猟銃を携帯し、地面を見つめ、大地にある痕跡や密林の物音を細かに調べながら、注意深く道を歩いていた。老アントニオの説明では、発情期のキジの喉を鳴らす音、センソントリの歯を打ち鳴らす音、サラグアトの囁れた唸り声、クモザルの騒々しい喚き声が聴き分けられたという。



400の声を持つとされるセンソントリ



サラグアト（ホエザル）



クモザル

正直に言おう（われわれの仲間のあなた方 [オアハカ州フチタンの集会に参加した人々] に話しているのだから、今は正直に言うべきだ）。狩猟に出かけたのは老アントニオで、私は同行しただけである。そのときの私は、メキシコ南東部の山は初めて踏み入れた土地で、転んでばかりだった。私の限られた経験では、どの音も同じで、何を意味するのか、皆目わからなかった。唯一完全にわかったのは私の腹がグルグルと鳴る音である。意味はよくわかる。腹ペこだった。

老アントニオは言った。

「よい狩猟者とは射撃がうまい人ではない。むしろ、よく聴きわかる人である。なぜなら、どんな人でも物音は聞こえる。だが、聴くことは、それぞれの音が何を意味するかを発見することである」

ひとこと言っておくべきだろう。この時、日はとっぷりと暮れ、夕闇が迫り、近くにある丘の残り少ない地平線も、容赦なく忍び寄る夜に包囲されつつあった。そのとき、われわれは一本のセイバの木の根元に座っていた。老アントニオによれば、それは「母なる木」であり、「世界を支える木」である。そこでは、トウモロコシの包葉で巻いたタバコと老アントニオの言葉に点火された明かりで、遠く過ぎ去ったいくつもの昨日が照らしだされていた。

老アントニオは、私がパイプに火をつけるのを待っていた。二人で作った煙のなかから必要な記憶を取り出しながら、老アントニオは、「この大地の最初の言葉のお話」を私にしてくれたのである。

最初の言葉のお話

われわれの村の最長老たちは話している。最初の神々、いちばん最初でない神々、世界を誕生させたのではない神々、いちばん最初でないが、最初に近い神々は、少しばかり怠け者だった。いちばん最初の神々とともに、とてもできのよい世界は誕生した。さらにトウモロコシの男女、真の人間が創られた。

だが、くだんの神々はとても怠け者であった。仕事をせず、とにかく遊び、踊ることしかしなかった。この神々はふらつき回り、すれちがうたびに、風を起こし、女性のスカートをめくり上げ、人々の足にまとわりつき転倒させた。

トウモロコシの男女、真の人間はとても怒っていた。この問題を検討するために会合をもった。トウモロコシの男女は、くだんの神々、いちばん最初ではないが最初に近い神々をその会合に呼び出した。命令を下す者は、人々の意志に基づいて命令すべきであると、トウモロコシの男女は考えた。だから、くだんの神々を呼び出したのである。

その場にいた神々の側も、集団の合意を尊重しなければならなかった。皆の役にたつように全員でおこなった合意は、集団の合意と呼ばれた。こうして、くだんの神々は会合にやってきた。彼らはいちばん最初の神々ではなかったが、少しばかり最初に近い神々であった。彼らは悪戯ばかりしていたが、会合でそのことを叱責された。それ以来、くだんのふらついていた神々は静かになり真剣になった。

まず、トウモロコシの女たちが話した。彼女たちはとても憤っていた。くだんの神々が風を起こし、彼女たちのスカートをめくり上げたからである。

つぎに、トウモロコシの人間たちが話した。彼らもずいぶん憤りを感じていた。くだんの神々は、蛇のように地面を動き回り、彼らの足にまとわりついていた。そのため、トウモロコシの男女、真の人間は倒れそうになった。その会合で、くだんの神々の犯罪はつぎつぎと露見した。

会合の結果、彼らは、集団所有の牧草地にある石を取り除くべきだという合意に達した。これらの神々は、石を取り除くために牧草地へ出かけた。だが、彼らは不平を言った。

「どうして？いちばん最初ではないが、われわれだって神々のはずだ」

彼らは本気で腹を立てていた。大きな石をつかんで、トウモロコシの男女、真の人間の家に赴き、家を破壊した。トウモロコシの男女は、最初の言葉、聴くことができれば、後も前も見られる言葉をその家に保管していたのである。

この大災厄が起きた後、いちばん最初の神々ではないくだんの神々は、ずいぶん遠くまで遁走した。自分たちがとても多くの災厄を起こしていたことをよく知っていた。自分たちに降りかかったこの大災厄にどう対処するかを考えるため、トウモロコシの男女は会合を開いた。皆で協力すれば大災厄を解決できるのを彼らは知っていた。

最初の言葉がなければ、トウモロコシの男女は、自分たちの歴史に耳を傾けず、自分たちの明日を見つめることはなかった。なぜなら、いちばん最初の言葉は、過去に結びつく根であり、歩むべき道に通じている窓だからである。

いずれにせよ、会合に集まったトウモロコシの男女、真の人間たちは何も恐れず、自分たちの考えを探し、それを言葉にした。言葉とともに、新たな考えや言葉が誕生した。だから、「言葉は言葉を生み出す」と言われる（サポテカ語では「デイチャ・リベエ・デイチャ」）〔フチタン出身学生が1930年代に出した雑誌 Neza に所収されていた昔のサポテコの諺のひとつ〕

こうしてトウモロコシの男女は、自分たちの記憶を大事に保管しようという合意に達した。そして、自分たちの言葉を言語にすることにした。しかし、その言語が忘れられ、誰かがその記憶を奪うことを考え、トウモロコシの男女は記憶を石に刻み、自分たちの考えを教えてくれる場所にその石を大事に保管することにした。ある者は記憶を刻んだ石を山に保管し、ほかの者は海に守るように委託した。



サポテカの詩人ナタリア・トレドの文学創作ワークショップ『言葉は言葉を生み出す』ポスター



フランシスコ・トレドの『糞のお話し』所収のイラスト金は、マヤ語ではタキン（太陽の糞）、ナワ語ではコスティク・テオクイトラトル（神聖なる黄色の糞）

こうしてトウモロコシの男女たちは満足した。

しかし、くだんのいちばん最初でない神々は、かなたの地で道に迷っていた。そこで、自分たちの歩むべき道を見つけるかわりに、自分たちがした悪戯のことを固まった糞でできた偽りの神々に話した。それ以降、その固まった糞は、お金と呼ばれている。

やがて、その偽りの神々がやってきた。トウモロコシの男女、真の人間たちの大地に悪をもたらすためだった。そして、トウモロコシの男女がいちばん最初の言葉を忘れるようにするため、いろんな策略が実行された。トウモロコシの男女は自分の歴史に耳を傾けないようになった。その状態はそれから忘却と呼ばれるようになった。また、トウモロコシの男女は自分の明日を見ないようになった。その状態はそれから道に迷って歩くと呼ばれるようになった。

偽りの神々は、トウモロコシの男女が自分の歴史を忘れて道に迷えば、彼らの言葉、言葉とともに彼らの尊厳も徐々に死ぬことを知っていた。固まった糞、お金という偽りの神々は、いろんな暴力や策略を使ってきたし、今も使っている。われわれのいちばん最初の人々の言葉を破壊するため、連中はあらゆることをした。

だが、偽りの神々の企みはつねに失敗した。トウモロコシの男女、最初の間は、歴史が刻まれている石が言ったことを読み取るため、山や海に出かけたからである。こうして、最初の間は人間たちはお金という偽りの神々の攻撃に抵抗したのである。それゆえ、われわれ先住民は自分のすぐ近くに山や海をもつ。それは、われわれが記憶を失わず、道に迷わず、明日をもつためである。

老アントニオはお話を終えると、トウモロコシの包葉で巻いた七本目のタバコを地面に投げ捨てた。そこで私は、「その後、その二番手の神々はどうしたのですか？」と、質問した。

老アントニオは叱りつけるように言った。

「くだんの神々は二番手の神々ではない。二番手の神々は、今君臨している神々、お金と権力である。くだんの神々はいちばん最初ではないが、最初に近い神々である」

さて、くだんの神々についてはほとんどわかっていない。くだんの神々がまた悪戯を始めるのではないかと、先住民はいつも考えている。それ以来、風でスカートがヒラヒラしないように、女性はスカートの丈を長くし、スカートの下の部分をしっかりと閉じている。それ以来、男や女たちは、自分が踏みしめる道によく注意を払いながら、ゆっくりと歩くようになった。

だから、われわれ先住民は下を見つめながら歩いている。われわれが敗北したからであるとか、われわれがわれわれでなくなったため、われわれは下を向いて歩いていると、ものごとをよく知らない者たちは言っている。それはまちがっている。われわれは敗北などしていない。われわれがこうしてここにいることが、その証拠である。われわれはわれわれであることを止めていない。

たしかにわれわれは下を見ながら歩いている。転ばないように、忘れないように、道に迷わないように。すなわち、われわれは自らの歩む道をよく見つめながら、歩いているのである。

3 鳥だった人間 (2001/2/27.プエブラ州テワカン)

われわれの大地の先住民たちは語っている。はるか大昔、人間は人間ではなかった。いろいろな色をもち、多くの唄を歌い、空を高く飛ぶ鳥だった。この鳥は多くのことをした。

たとえば、この世界にある様々なものを手にし、自分の体にある色で塗った鳥がいた。最初の世界は灰色だった。色をこの世界に贈ったのはその鳥だった。また、あらゆる場所で歌った鳥がいたという。歌がうまかったので、その鳥はほかの鳥に変身しながら、あちこち飛びまわり、唄を生み出す唄を歌った。最初の世界は口がきけず、喋れなかった。音楽を贈ったのはこの鳥だった。また、道を作るためあちこち歩き、方向や目的地を見失わないように道に変身した鳥もいた。最初の世界は目的地も方向もなかった。別の鳥は沈黙を生みだし、沈黙を破った。彼らが音と言葉を与えた。最初の世界には、音も沈黙もなく、騒音しかなかった。

世界を色で塗り、道を作り、沈黙と音を定めながら、この鳥たちは人間になった。その鳥たちが世界を塗った何千もの色を見るため、方向と目的地をもった道を歩むため、沈黙を語り、聞くため、考え、感じるために音と言葉を生きるためである。われわれの最古者たちによれば、言葉は生きる音であり、あふれる騒音ではない。

仲間の皆さん(プエブラ州テワカンの集会参加者)。われわれは先住民である。先住民はいたい誰なのかと、多くの人にたずねられることがある。われわれ先住民は歴史を守っている人間である。われわれはすべての色、道、言葉と沈黙を自らの記憶のなかに保存している。われわれは記憶が生命を輝かすために生きている。生きることにより記憶は保たれる。われわれ先住民は、われわれ自身である大地の色を基盤にしている。世界で生きている多くのものに最初の色を塗ったのが、われわれ先住民である。すべての色で構成されているわれわれ先住民は、あらゆる人々の共通の目的地となるべく、やってくる明日を指し示している。

われわれ先住民とは誰かとたずねられたなら、われわれ全員で答えよう。われわれ先住民は道を歩むものであり、道でもある。メキシコが失われることのないように、いつの日かすべての人々とともに、あらゆる色をもち、多くの歌を歌い、高く飛翔する国民となるため、われわれはいま歩んでいる。それがわれわれ先住民である。

4 ものごとはよくも悪くもなる (2001/2/27、プエブラ州テワカン)

先住民の最古者たちは、世界の昔の出来事について多くのお話をしてくれる。そのひとつによると、最初、つまり時間がまだ時間として勘定されなかった時代には、闇、暗がり、沈黙、悲哀が世界中を支配していたという。だが、その時代の人々は、そんな世界での生活に慣れていて、

その後、時間が歩きだし、太陽と音楽が誕生する時代が到来した。それ以来、太陽は寒くないように毛布を被るようになった。太陽の毛布には多くの穴が開いていたので、光の破片が点のように描きだされていた。

われわれのもっとも古い先祖たちは、太陽が何もまとも歩んでいる状態を昼と命名した。一方、寒さから身を守るために身につけた穴だらけの毛布を夜と命名した。夜を点描している数多くの穴を星と命名した。

昼と夜ができるとともに、音楽が登場した。同時に喜びもやってきた。

われわれのもっとも古い先祖たちは、こんなことが起きたと話してくれた。

こんなことが起きたとき、とても恐くなり、深い穴を掘って、大きな石で自分を囲んだ人たちがいた。闇や暗がり慣れた目が、光で傷つくのを恐れたからである。悲哀がもたらす騒音に慣れた耳が、音楽の作り出す喜びで痛くなるのを恐れたからである。

われわれのもっとも古い先祖たちは、この人たちのことを次のように語っている。穴に閉じこもり隠れたため、悲しみのあまり死んだ者がいた。身体を護るはずの大きな石が自分の身体に落ちたため、死んだ者がいた。

一方、新しくないし、もともと存在していたが、よいものを見たり、聞いたりできる人もいた。ものごとには、よいも悪いもなく、対応の仕方によって、よくも悪くもなる。そのことを世界は教えている。新しい人間は、実際は古い人間そのものである。しかし、尊敬の気もちで対応すれば、ものごとはよくなる。

5 今は言葉の時である (2001/3/3、ミチョアカン州ヌリオ)

私の口から EZLN の言葉を話したい。昨年7月半ば過ぎ、メキシコ南東部の山中では雨がしだいに優勢になっていた。われわれは、最長老の人たちと話しあいに出かけ、次のように話した。

彼の地では、永遠に不動といわれていたもの [PRI 一党支配体制] が崩れ去った。打倒したのは仲間たちである。名前も顔もあるが、小さいゆえに名前も顔もないように見える仲間である。われわれと同じように、大地の色と同じくあらゆる色が歩んでいる人たち、下の世界にいてわれわれと同じく明日を否定されている人たちである。倒れたものがいた所には、別のものがあるが、別人どころか同じ人にしか見えない。彼の人物 [新大統領ビセンテ・フォックス] はよく喋り、すべてが変わったと、言っている。しかし、われわれの負債は清算されず、これらの大地のもっとも最初の人々とその歴史は、新旧の政府の未解決の問題として積み残されている。



2000年12月大統領就任のフォックス、隣は前大統領セディージョ

ほかの土地の多様な言語をもつ仲間は、注意深く聞き、寛大で親しみやすい言葉を持っていることをわれわれは理解しよう。あまり聞かず、耳を傾けず、多く喋る人が、小さいと見せかけているその人たちの心は、今日はとても大きなものである。

われわれは、「あなたたちに命令を出している人たちにわれわれは何をしたらいいのですか」と、仲間である指導者たちに質問した。

「それはいい」と、われわれの長老たちは言った。

「われわれは、われわれの最古の人たちに聞くことにする。いつもどおり、マチェーテと言葉、つまり希望を研ぎながら、ここで待ちなさい」

われわれはさほど待つことはなかった。長老たちはすぐに戻ってきた。彼らはマチェーテと言葉の刃がよく研がれているのを確認すると、こう言った。

「われわれはわれわれの最古者たちと話し合った。最古者たちは、何を、どのように、どこで、なぜ、という言葉を知ってくれた。だから、われわれの戦士たち、サパティスタの男女、われわれ人民の守護者であり心であるわれわれのボタン・サパタよ、その心を開いてほしい」

そして、われわれの最古参の長老たちは、われわれに言った。

「今は言葉の時間である。マチューテをしまうのだ。だが、希望を研ぎつづけるのだ。山を七回巡り、山を流れ下る川を七回巡るのだ。われわれの七回の死を通じて、語るのだ。七回も船で海に出るのだ。七回もおまえのテントを閉じるのだ。七回も大地の色を見るのだ。七回も言葉を見守るのだ。もう七が来ている。七はそれを強く感じている人にとってはカラコルである。もう渦巻が来ている。それが内向きの道や、外向きの道になり、道や希望となる。

それらが終わったら、われわれが与えたあなたの足を準備し、われわれであるあなたの目や耳を注意深く開くのだ。ふたたび言葉をわれわれのものにするのだ。もう、あなたはあなたではなく、今では、あなたはわれわれである。たくさん話す人が言っていることで、悩む必要はない。それはただの雑音、調律されていない音楽でしかない。何もわれわれにもたらさない。われわれのために闘うというものではない。われわれにとっては何の贈り物でもない。われわれが着手していないものは、われわれの家のものにならない。われわれが戦って獲得したものでなければ、何もわれわれのなかで生きられない。だから歩くのだ。他者の大地、われわれと同じように大地の色をしている他者の大地、われわれを含め大地のすべての色をしているものの大地を歩くのだ。

歩いて、歩いて、語るのだ。われわれの顔を自らの顔とするのだ。大地からは色と言葉を身につけるのだ。われわれの声を自らのものとするのだ。われわれの視線を歩ませるのだ。他者からの言葉を聞くため、われわれの耳を自らのものにするのだ。すでに、あなたはあなたではなく、今はわれわれである。山から降りて、この世界を歩く大地の色を探しなさい。七日間も歩けば、大地の色が昇ってくる。大地の色と対話する他の色を探しなさい。他者のなかを歩んでいる心を話すことを学びなさい。弱い人の前では小さくなり、その人とともに大きくなりなさい。権力者の前では大きくなり、あなたの足元に広がるわれわれへの屈辱を黙って認めてはならない。

慎ましい人には謙虚な態度でいなさい。高慢な人に対しては、嘲笑であれ、嘘であれ、けっして同意してはいけない。自分の使命を忘れてはならない。そして、あなたを払いのけるものからは常に距離を保ちなさい。集合色であり、メキシコ全土を歩んでいるわれわれに向かって、そのことを話しなさい。大地の色とともに歩んでいるすべての色のための場所を作りなさい。

言葉が他者の仲間であるなら、境界を忘れるのだ。よくしゃべる人を信用するな。黙している賢者にはよく耳を傾けなさい。われわれとともに、偉大な国家が求めている集団となるよう呼びかけなさい。夢と苦悩を寄せ集め、明日を引き寄せながら歩みなさい。インディオの大地で沈黙するものの強大な共鳴盤となりなさい。

どんな痛みも他人事として黙るのではなく、自分のものとして話しなさい。相手には自分の兄弟姉妹であると伝えなさい。大地と希望の色が成熟している場所を探しなさい。偉大なる仲間であり、素晴らしい同志的偉大さを持つプレペチャの家に行きなさい。そこでは、敬意を払いながら、言葉を使いなさい。



ヌリオで行われた全国先住民議会の集会

そうした大地で人々の意思に従って統治する人たちに挨拶しなさい。大地の色に誇りを持っていてすべての人々に抱擁を捧げ、敬意を持って、彼らに発言の許可を求めなさい。許可がない場合は、頭を下げて黙っていなさい。許可があれば、頭を下げて話しなさい。彼らの本心に向けてそのことを語りなさい。そこで庇護と宿泊を求めなさい。そこには、支援を受けられ、色や明日においてわれわれともいえる人たちと出会うことができる。

七日目となり、大地の色から立ち上がった共通の尊厳を探しなさい。七回を七回重ね、苦悩と希望が加わる。七回にわたり、大地と希望の色をした者の言葉が語ることに耳を傾けなさい。必要であれば、七回を七回分、叫び、七回を七回分、黙りなさい。そして心を開きなさい。その開かれた心で、他の言葉に耳を傾けなさい。その時、われわれ大地の色をしたわれわれの言葉を語りなさい。われわれがあなたに言うことについて、ある人話し、ほかの人黙る。これは、都市と呼ばれる上に伸びる大地で言われていることである。

そして、おまえの口を通して語るわれわれがいったい誰なのかをその人たちに伝えなさい。それが終われば、次に来る言葉が続くだろう。明日という言葉。大地と希望の色をもつ者にふさわしい場所を探す言葉。それは、誰のものでもなく、誰も傷つけないもののために闘うことを皆に呼びかけるものである。大地と希望の色をしたわれわれのための尊厳ある場所である。



ヌリオでの第3回先住民議会（2001年3月3日）

仲間の皆さん

われわれは先住民であり、7年前、最高政府に対して武装蜂起した EZLN を代表している。EZLN はすべてのメキシコ人のための民主主義、自由、正義をその旗印として掲げている。われわれは闘う先住民族のひとつである。われわれの中を流れている血は、古代マヤ人からのものである。われわれを生かし造っているものは、その血である。われわれは戦士である。われわれは、集団的な委託によってわれわれ人民の守護者にして心となってきた男女の世代の最後の存在である。戦士としてのわれわれは、剣と言葉という存在である。剣と言葉によって、われわれは、われわれ人民であるという記憶を護らなければならない。それによって、われわれ人民が抵抗し、より良き明日を切望することができる。われわれは、戦士として、科学と芸術、栄誉と戦争、苦悩と希望、沈黙と言葉を準備してきた。われわれは守護者である。われわれは人から何かを奪うことはしないが、誰かがわれわれから何かを奪うことは決して認めない。われわれに向かって叫ぶなら、われわれは叫ぶことになる。静かにわれわれに話しかける人には、われわれも静かに対応する。攻撃されたら、われわれは防衛する。侮辱し、脅迫する人はわれわれの軽蔑を受け、われわれは剣として言葉を研いでいる。われわれが誇りをもって仕えているわれわれに命令をし

ている人たちによると、われわれは戦士として、その人たちのためにわれわれは生死を捧げている。その人たちはわれわれに顔を与えてくれた。われわれの名前を命名してくれた。われわれにこの地までやって来るように言ってきた。日陰で今でも語っているが、われわれの力の源である。

われわれは大地の色のなかで歩んでいるすべての色が命令を下している存在である。われわれはもっとも小さき存在である。われわれはサパティスタと呼ばれる。われわれ戦士のために、あなた方のなかでの場所を認めてほしい。耳と言葉のための場を認めてほしい。

6 何も恐れる必要はない（2001/3/5、メキシコ州テモアヤ）

テモアヤのオトミ祭祀センターにて。メキシコ州の先住民の仲間、テモアヤの人々へこの場所にわれわれを迎え入れていただいたオトミ、マサワ、マトツインカ、トラウイカ、ナワトル、メシカナの仲間の皆さんに感謝したい。

ずいぶん昔だが、われわれの最古老たちは、「上へと成長する大地の溪谷に入るべき日がいつかくる」と、われわれに言っていた。

「もし、われわれの存在と同じように、われわれの大地が水平だったら、われわれは何をすればいいのだろう」と、われわれは最古老たちにたずねた。

われわれの最古老たちは答えた。

「死が勝っていると思われる所で、生命を担ぎ、死を打ち破ろうとする仲間がいる。その仲間たちは、オトミと呼ばれ、名乗っている。マサワと呼ばれ、名乗っている。マトラツインカと呼ばれ、名乗っている。トラウイカと呼ばれ、名乗っている。ナワトルと呼ばれ、名乗っている。彼らに助けを求めなさい。溪谷を守っている七つの鍵のひとつを与えてくれるだろう。男女の仲間たちが、おまえとともに溪谷に入ってくれば、すべての人々の声はより強力になる」

われわれの最古老たちはこうに言った。だから、われわれはテモアヤまで来た。みなさんの支援、その鍵と力をお願いする。オトミの男女の仲間たちよ。



テモアヤにあるオトミ祭祀センター

男女の仲間たちへ

今日からメキシコ市に向けてメッセージを送ることにする。七つのメッセージがある。つまり、1つのメッセージごとに意味がある。つまり、1+2で、また別の意味となる。1+2+3でまた別の意味となる。こうして七つ目まで続くことになる。七番目のメッセージが届くとき、われわれはメキシコ市に入ることになる。

メキシコ市に向けての七つのメッセージの1番目は、「何も恐れる必要はない」である。

われわれと聞いたり話したりするのに、耳や口を塞いでいる人たちは、いったい何を恐れているのか。そんなことでは、居場所を失ってしまうことになる。声なき者が声を取り戻し、顔なき者がついに顔を手にする様子をなすすべもなく見守ることになる。そうなると、征服者、副王、帝国を創ろうとした保守派 [1864~67年のマクシミリアーノ皇帝の在位期]、ポルフィリオ・ディアス統治期 [1884~1911年の大統領] の大農園主、カルロス・サリナス・デ・ゴルタリ [1988~94年の大統領]、エルネスト・ゼディージョ [1994~2000年の大統領] を模倣しているポーズは何の価値もなくなってしまう。今挙げた連中はもう誰もいない。だが、私たち、私たちがここにいる。

歴史にはそれぞれ固有の場所がある。その場所を引き受けることもあれば、放棄することもある。その差し引き合算は、「はい」と「いいえ」の合計ではない。そこには沈黙も含まれている。

民主主義を！自由を！正義を！ メキシコ州テモアヤから

7 探ることのお話 (2001/3/31、オアハカ州フチタン)

夕刻が迫り、夜は甘美ないやしさを覗かせる。母なる木、世界を支える巨大なセイバの木から、長い影が下がっていた。自分の秘密を横たえるため、いくつもの影はあらゆる場所へ伸びる。夕刻が迫り、3月も終わろうとしている。今日、多くの人々と歩み、われわれを驚かせたものはもういない。別の昼下がり、別の時代、別の大地、われわれの大地のことを話そう。

老アントニオはトウモロコシ畑の雑草を刈り取り、小屋の入口に座っていた。小屋では、ドニャ・フアニータがトルティーリヤと言葉の準備をしていた。トルティーリヤと言葉は、老アントニオに手渡された。彼はトルティーリヤを口に入れ、言葉を口から引き出した。老アントニオはトルティーリヤをもぐもぐと噛みながら、トウモロコシの包葉で巻いたタバコを喫っていた。

探ることのお話

われわれのもっとも古い物知りたちは語っている。いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々は、万物を創造したといってもいいが、全部を創造したわけではない。いくつかのものを創造する仕事は、男女の役目であることを知っていた。というわけで、世界がまだ完全に完成していない段階で、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々は立ち去った。世界の創造を完了しないまま、神々がいなくなったのは、ものぐさだったからではない。いくつかの仕事は自分たちが始めるが、それを完成させるのは全員の役目であると、神々は知っていた。

われわれの最古のなかの最長老たちは、次のように語っている。

いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々は、自分たちの仕事の途中で放棄されたやり残しのものが詰められている小さな袋をもっていったという。その仕事を神々が後で続けるためではなく、男女が不完全な状態で誕生した世界を完成させるという時に、いったい何を登場させるべきかを記憶として保持するためであった。こうして、世界を誕生させた神々、いちばん最初の神々は立ち去った。夕刻が立ち去るように、自分で姿を消し、影で身体を覆い隠し、ここに実際にいたはずなのに、もともたらいなかったかのように、これらの神々はいなくなった。



多くを望んだウサギに対する神々の処罰

ある時、少し暗かったので、ウサギは気づかずに神々の小さな袋を齧った。というのも神々が（サル、ジャガー、ワニとの）約束を実行したが、自分を大きくなかったことにウサギは腹を立てていた。ウサギは小さな袋すべてをかじろうとした。しかし大きな音がしたので、神々はそれに気づいた。神々は犯した犯罪を罰するため、ウサギを追いかけはじめた。ウサギは脱兎のごとく逃げ出した。だから、ウサギは罪を犯しているかのようにモゾモゾとまわりを気にしながら食べ、誰かの姿を見かけると、すぐさま急いで逃げ出すといわれている。

ことのしだいは次のとおりである。ウサギはいちばん最初の神々の小さな袋を完全に壊せなかったが、穴をあけるのに成功した。そのため、世界を誕生させた神々が立ち去った時、懸案となっていたものすべてが、小さな袋の穴からこぼれ落ちてしまった。しかし、いちばん最初の神々はそれに気づかなかった。そこに風と呼ばれるものがきて、息を何度も吹きつけた。すると、やり残しのものは、あちこち散らばってしまった。夜だったために、世界を完成させるために誕生すべきものだったやり残しのものが、どこに行ったのか、誰にもわからなかった。

この混乱に気づいた神々はパニック状態に陥り、とても悲しくなり、泣きだすものもいたという。だから、雨が降りだす時、まず天空が大きな音を発し、その後雨がやってくるという。トウモロコシの男女、真の男女は悲鳴のような甲高い声を耳にした。神々がはるか遠くで泣いていたが、その泣き声は自然と聞こえたのである。トウモロコシの男女は、何が起きたのかを確かめに出かけた。すると、いちばん最初の神々、世界を誕生させた神々が泣いていた。神々はむせび泣きながら、何が起きたかを話した。

「もう泣かないで。なくなったやり残しのものを私たちが探しに行きます。やり残しのものがあり、すべてが完成し落ち着くまで、世界は完全でないことを知っています」と、トウモロコシの男女は慰めた。さらに、トウモロコシの男女は続けた。

「最初の神々、世界を誕生させた皆さんにたずねます。皆さんがなくなったやり残しのものについて、何か少しでも覚えていますか？私たちがこれから発見するものが、やり残しのものなのか、それともすでに誕生している何か新しいものか、知っておきたいからです」

いちばん最初の神々は、何も答えなかった。というのも、キーキーという甲高い悲鳴をあげつづけていたため、神々は話すことができなかったからである。やがて涙を拭うため目をこすった後、「やり残しのものは、それぞれが会うものである」と、神々は言った。

だから、われわれの最長老たちは次のように言っている。われわれはすべてを失った形で誕生する。われわれは成長するにつれ、自分を探し求めるようになる。つまり、生きることは探すこと、われわれ自身を探すことである。

少し落ち着くと、世界を誕生させた神々、最初の神々は言葉を続けた。

「世界で誕生するあらゆるやり残しのものは、先ほどおまえたちに言ったこと、それは各個人が会うものであることと関係している。おまえたちは了解するだろう。おまえたちが会うものが自分を見出すために役立つなら、それは世界に誕生するはずのやり残しのものである」

「わかりました」と、真の男女は言った。そして、世界で誕生すべきもの、自分自身に出会うのに役立つというやり残しのものを探すため、あらゆる場所に出かけることにした。

老アントニオは、トルティーリヤ、巻きタバコ、そして言葉を終えた。しばらく夜の片隅をじっと見つめていた。数分して、口を開いた。

「それから、われわれは自分を探しながら、それを探しつづけてきた。働き、休み、食べ、眠り、愛し合い、夢見る時も、われわれは探しているのである。生きているとき、われわれは自分を探しながら探している。死のうとしているときも、われわれは自分を探しながら探している。自らを見いだすため、われわれは探している。自らを見つけるため、われわれは生き、そして死んでいくのである」

「どのように、自分自身を見いだすのですか？」と、私は質問した。

老アントニオは私をじっと見つめ、トウモロコシの包葉で新たにタバコを巻きながら、言った。

「一人のサポテコの古老の賢者が、どのようにするかを私に言ったことがある。おまえにそれを教えよう。ただし、スペイン語である。というのは、自らを見いだした人たちは、自分の言葉の花であるサポテカ語しかうまく話せなかったからである。

わしの言葉はひとつの種でしかない。ほかにある言葉は、幹や葉、果実となる。こうしてこそ、完全なものに出会うことになる。

『おまえは、自らを見いだす前に、まず大地のすべての民族の道のすべてを歩くことになる（ニルササルーグイラシシネサグイジラーティガンダグイヂェルーリイ）〔フチタン出身学生が1930年代に刊行の雑誌Neza所収のサポテコの諺のひとつ〕』と、かのサポテコの父親は言った」

3月と昼が終わったあの夕刻、老アントニオが言ったことを私はメモした。

それ以来、私は多くの道を歩んできた。すべての道ではない。私は、言葉の種、幹、葉、花、果実である顔を探してきた。すべてのものによって、すべてのもののなかで、私は完全な存在になろうと自らを探してきた。

頭上に広がる夜空では、下方に広がる影のなかに自分を見出だしたかのように、光が笑っている。3月はもう終わる。しかし、希望はやってきた。

8 一番目の石碑 (2003/1/3)

オアハカ、一番目の石碑（新旧PRIにもかかわらず、歴史は死に抵抗する）。

石碑：浅浮き彫りの石で、人物像、日付、名前、事件…そして予言が刻まれる。

時は1月。1月は過去、現在、未来が結びつく。場所はオアハカ。昨日と今日が明日の根源となる土地である。1月のオアハカ。

太陽は先スペイン期の建築物が楕状に並んでいる切りたった丘に差しかる。この丘には時代ごとに別の名前が付けられてきた。セロ・デル・ティグレ（虎の丘）、セロ・デ・ピエドラ・プレシオサス（宝石の丘）、セロ・デル・パハロ・プロ（鳥の丘）と言われてきたが、現在はモンテアルバンと呼ばれている。モンテアルバン。その山麓では、州都のオアハカ市の見事なまでの混乱ぶりがきわだって輝いている。メキシコのほかの都市と同様、ハリケーン、地震、偽りの支配者によって苦境に陥ったとき、あるいは耐えがたい貧困によって武装反乱という道が続くときだけ、オアハカ市はニュースになる。下の世界の人々の敗北、絶望、不幸について語るときだけ、歴史は重要なものとなり、基本的なものである「抵抗」を忘れていく。

太陽は進むべき道を歩みつづける。同じように東から飛来したコンゴウインコは、トラコルーラ盆地の上空を飛び、エトラ盆地の上空で旋回し、四方向を巡回した後、サーチラ盆地からモンテアルバンへと向かった。

すべてが南北方向を向いて建っている建築群の上をコンゴウインコは滑空している。ただひとつ矢の形をした建物が矢先を南西に向け、想定される全体の調和を乱すように建っている。メソアメリカ考古学の複雑なジグソーパズルに適合する場所がないピースのように、その建物は天文学的、視覚的、聴覚的な点を指し示すように思われる。同時に、切り捨てられたもの、空間、何よりも時間について考えさせるものである。その建物は、注意の喚起、明白な秩序のなかに突如現れる不条理のように思われる。そのイメージがふさわしくないかのように、警戒し庇護するようなコンゴウインコの飛翔が下に見える。モンテアルバンの南側基壇にある七番目の石碑の前で、すべての洞窟の源であるひとつの洞窟からきたお話しと…再会することになる。



モンテアルバンの石碑



モンテアルバンの矢型の建築 J

先住民の血は、大地にはすべての時代を生み出す豊饒な子宮が隠れていることをよく知っている。サポテカ先住民の知恵者は、時間と生命が困難に満ちた旅を始めたのは、ある山の中だったと語っている。それが始まる前、考えが及ぶことのない存在、コキ・シェーは洞窟で眠っていた。その洞窟は時間のない時間の洞窟だった。そこには始まりも終わりもなかった。やがて、世界を動かそうとする意志が、コキ・シェーの心のなかに湧いてきた。そこで、月を見えないように隠し、自分の内面を見つめた。こうしてコサナとショナシを生んだ。古代サポテカ人はそれぞれを光と闇と呼んでいた。やがて、光と闇の足で、世界は最初の一歩を踏み出した。始まりのない存在、理性では触れることのできない存在であるコキ・シェーは新しい月として誕生し、夜の世界の長い歩みの一歩を踏み出した。しかし、昼間にはミへの大地にあるセンポアルテペトルで休息していた。

夜の主であり、太陽を生む火の主でもあるコサナは、大地を歩むために亀となり、ショナシの手によって人間が作られることになった。ショナシは、コンゴウインコになって天空を飛翔し、男女を世話し、人間がうまく生まれるのを見まもった。

夜空を飛びながら、ショナシは、自分の道を見失わないように、光で描いていた。その砂のような光の軌跡は、今は「天の川」と呼ばれている。

光と闇の抱擁、天空と大地の抱擁から、稲妻であるコシホが出現した。コシホは、よき父、よき大地の形成者であり、大地を耕し食物を作り出す人々の導き手である。

健康をもたらし、病気を治すとともに、戦争と死の主でもあるコシホは、「13の花」を旗として掲げ、四つに分かれて生まれ、世界を測る四基点に鎮座する。死と苦痛を名付けるため、身体を黒く塗り北側にいる。幸せを呼ぶために、オレンジ色の衣装をまとい、東側にいる。西側では、運命を記すため白いマントを着た。戦争を布告するため、青色の衣をまとい、南を歩む。

われわれの父である稲妻のコシホは、花と蛇で飾られたウィピルを着た女性、「13の蛇」と呼ばれるノウィチャナと結婚した。われわれの母である彼女は、女性の胎内、川床や湖、雨のなかで生命を生み出している。誕生から死まで、男女の手を携えて歩む彼女は、昔も今もこの土地の色に彩りを与えるものにとって良き女王である。

それを知りながら、黙している人たちは、次のように語っている。雷と雨がやってくるたびに、



コキ・シェー



コサナ



ショナシ



コシホ



ノウィチャナ

愛と人生も戻ってくる。どんな女や男たちにも、不条理が障害として立ちはだかるものである。しかし、それは彼らの視線のなかを歩んでいる輝きを増すものでしかない。

もとからそうであるように、最初のうち、先住民の大地に数多く存在している洞窟のなかで、生命は液体の状態で歩んでいたのはおそらく確実である。また、洞窟は、最初の神々が自らの力で誕生し、形成した腹である。そして、洞窟は開花した生命が大地に傷跡のように残した穴でもある。すなわち、過去だけでなく、明日につながる道を読み取れるのは、大地のなかである。

この1月、一組の創造主コサナとショナシは大地の腹を抱きしめる。大地を柔らかくし、実り豊かな苗床に変えるためである。それは、集団的な反乱の闘いが、腹部で蘇るためだけではない。たしかに集団的でなければ反乱者にはなりえない。同時に、大地の色をしたわれわれの色をした夢が腹で生まれるためでもある。今、歴史は押し黙っている。いつだって話すよりも沈黙することが多い。沈黙…。

上空では、コンゴウインコの毅然たる飛翔に、一陣の暴風が、雷鳴をとどろかせながら、挨拶している…。その下方には、宗教施設全体の単調さを打ち壊している矢の形をした建物群が並んでいるモンテアルバンが広がっている。われわれが目当たりにしたものを理解するには、まだピースが足りないと警告している。欠けているもの、見ていないもののほうが、より偉大で素晴らしい。そのことをわれわれに思い起こさせる。

9 二番目の石碑 (2003/2/1)

2月、プエブラである。テワカン上空で、小さな雲は、太陽がいつも固執する西向きでなく、北向きに飛ぶよう仕向けている。ミステカ高地の真ん中で、谷に囲まれた丘が見える。丘には、抵抗を継続するために用意された場所かと思わせる城壁が聳える。テペヒ・エル・ビエホのようだ。そこをナワは「二股の岩」、ポポロカは「小さな山」と呼んでいた。



『メンドサ絵文書』のテペヒ



『トラスカラ絵文書』のテペヒの戦闘シーン

太陽が雲にお話する間、両者は思い切りはしゃいでいる。雲が照れくさくなるそのお話とは…

古代ミステコ人は、2本の大木の結合から世界が生まれたと語っている。その木はアチウトル川の洞窟のもとにある寂しいアポアラにあった。同じ根から生えている2本の最初の木は、最初のミステカの夫婦を生み、そのこどものこどもから、ヤコニョーイ、太陽の矢が生まれた。

古代ミステコ人は語っている。ヤコニョーイは小柄な戦士だが、勇敢で大胆だったという。彼はどんなに偉大で強力に見える相手でもまったく恐れなかった。この知恵ある先住民たちが言っている。人の大きさは心に反映される。外見が小さくても、大きな人は存在する。大きさは、心の大きさに存在する。だから、頑丈で力強く見えている人が、実際には小心者で、か弱いことはよくある。

また、次のようにも言われている。「世界は大きく、途方もない驚異に満ちている。なぜなら、身体の小きな人が、自分のなかに大地を偉大なものにする力を見つけられたからだ」

また、語られている。その当時、時間は人類の暦の最初の月々を歩いていた。ヤコニョーイは、労働と言葉で大地を大きくできる新しい大地を探しに出かけた。彼は新しい大地を見つけたが、そこでは、太陽は自分の光が照らしているものすべてを独占する強大な存在だった。当時、太陽は、自分と異なるものの生命を奪い、自分を模範として押し付け、途方もない偉大さに敬意を表し、貢物するものだけを受け入れた。

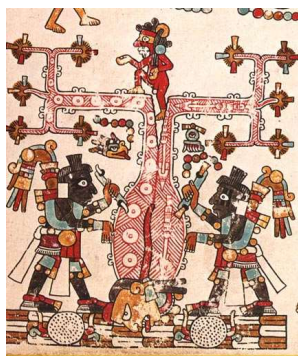
さらに言われている。これを見たヤコニョーイは、太陽に挑戦して言った。

「あなたはその力でこの大地を支配しているが、どちらがより偉大で、大地に偉大さをもたらすことができるか、私はあなたに挑戦する」

自分の力と強さに自信がある太陽は、ほくそ笑みながら、地上から挑んできた小さな存在を無視した。再度、ヤコニョーイは太陽に挑んで言った。

「あなたの光の強さなど怖くない。私の心のなかで成熟する時間を武器としてもっている」

そして弓を引き、傲慢な太陽の中心に矢を向けた。ふたたび太陽は、ほくそ笑み、熱を発する真昼の炎の帯をぎゅっと締めて反乱者に向け、小さな存在をさらに小さくした。



『ピドボネンシス絵文書』
のアポアラの絵文字



ヤコニョーイの伝承を描いた写本

しかし、ヤコニョーイは盾で身を守り、昼から午後になるまで耐えた。時間が経つにつれて太陽の力が弱まり、太陽は無力になることがわかった。小さな反乱者は、そのまま盾で身を護り、抵抗しつづけ、弓矢を使う時を待っていた。

夕暮れとなり、太陽が弱くなってきたのがわかり、ヤコニョーイは避難場所から出て、弓で矢を放ち、大きな太陽を七回にわたって傷つけた。たそがれ時になり、空全体が赤く染まり、致命傷を負った太陽はついに夜の大地に落下した。

ヤコニョーイはしばらく待った。夜には太陽が戦えないことを知り、次のように言った。

「私が勝ったのだ。私の盾でああなたの攻撃に抵抗した。私は、時間とあなたの傲慢さを味方につけた。必要な時に備え、私の力を蓄えていた。私が勝ったのだ。これから、大地は偉大なもの

を手にするだろう。それは、私の人々の心が、大地の懐に植え付けるものである」

そして、語られる。翌日、力を取り戻した太陽は、土地を再征服しようと戻ってきた。しかし、すでに遅すぎた。夜の中に、ヤコニョーイの人々は植え付けていたものを収穫していた。こうして、天空での闘いに勝利を収めたことで、ヤコニョーイは「太陽の射手」と呼ばれ、ミステカの人々は「雲の住人」と呼ばれるようになった。

それ以来、ミステカの人々はヤコニョーイの勝利をヒカラやテコマテに描いてきた。勝利を誇るためでなく、偉大さは心に宿り、抵抗は闘いのひとつの形態であることを記憶するためである。

雲は、テペヒの空からプエブラ・デ・サラゴサ市へと向かっている。歴史を知ったせいで流れる涙を雨でごまかしながら、都市の顔を洗い流し、都市全体を覆い隠している。



ミステカのテコマテ



ヤコニョーイ創建のティラントングにある銅像

10 四番目の石碑 (2003/2/1)

4月：ふたたび驚は青みがかった雲となり、トラスカラ州の大地の上空を移動。雲は、マトラレウエイトル火山（別名マリンチェ山）から入り、アピサコ・シャロストロック・ウアマントラという産業回廊に沿って移動し、工業都市シコテンカトルまで北上。アトロンガ湖で南に方向を変え、マリンツィ産業回廊まで南下し、パンサコラ産業回廊を経由し、カカシュトラに到着。

カカシュトラにて、雲は丘の上で一休みし、目を細めて、物語に心を開いていく。そのお話では、叛乱と尊厳が、過去と現在の暦のなかで入り混じっている。

4月。トラスカラ。1975年の暦では、サンミゲル・デル・ミラグロの町の住民は、カカシュトラの遺跡で発掘し、黒色の顔をした人物の壁画を発見した。それはマヤの影響を強く受け、目出し帽をかぶったマヤ先住民の恰好をしていた。まるで、未来と過去が混在しているようだった。

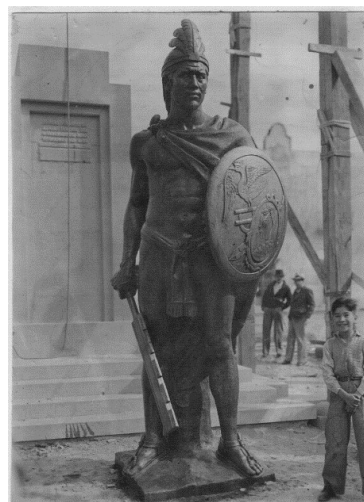
スペイン征服の暦で、先住民シコテンカトル・アシャヤカツィンは、スペイン人到来はケツァアルコアトルの帰還でないとして、「浮いている城は人間の活動の所産である。今まで見たことがないから賞賛されているだけだ」と言った。トラスカラの主要な四名の領主に、「外国人を祖国や神々に対する暴君と見なすべきである」と、提案した。最終的に、トラスカラ統治者たちの決定は、シコテンカトルの考え方を退けるものだった。その後、シコテンカトルは、モクテスマの死後に即位したクィトラワックと同盟を結ぶよう人々を説得した。エルナン・コルテスはシコテンカトルを味方にしようとしたが、叛乱する先住民はそれを拒否し捕らえられ、絞首刑となった。



カカシュトラの壁画



戦士トラウイコーレ



シコテンカトル・アシャヤカツィン

昔の暦では、「花の戦争」の最中に、強靱な力を持つテコアク出身のオトミであり、トラスカラの戦士だったトラウイコーレは、自分の民を抑圧した者たちの許しを得るよりも、戦って死ぬことを選んだ。

その後の時代の暦の 1847 年、チャプルテペック城に配属されたメキシコ軍部隊のひとつは「サンブラスの現役大隊」と呼ばれ、トラスカラ人のフェリペ・サンティアゴ・シコテンカトルの指揮下にあった。1847 年 9 月 13 日、米国の侵略部隊との戦闘で、シコテンカトルとその大隊のほぼ全員が戦死した。

トラスカラは、「トウモロコシのパンの土地」という意味という。しかし、雲が旅の途中で目撃したように、新自由主義にとっては「マキラドーラの土地」を意味する。トラスカラ州住民の 62%がマキラドーラの居座る地域で働き、生活している。

11 渦巻、カラコル (2003/7/21)

さて、われわれは何か手がかりが見つけれられるかもしれない…だが、私にはどこを探せばいいのかわからない…私は、その方法は、耳で見て、目で聞くことだと思う。はい、かなり煩雑なことは承知しているが、今はそれ以外に考えられない。さあ、われわれは歩きつづけよう。

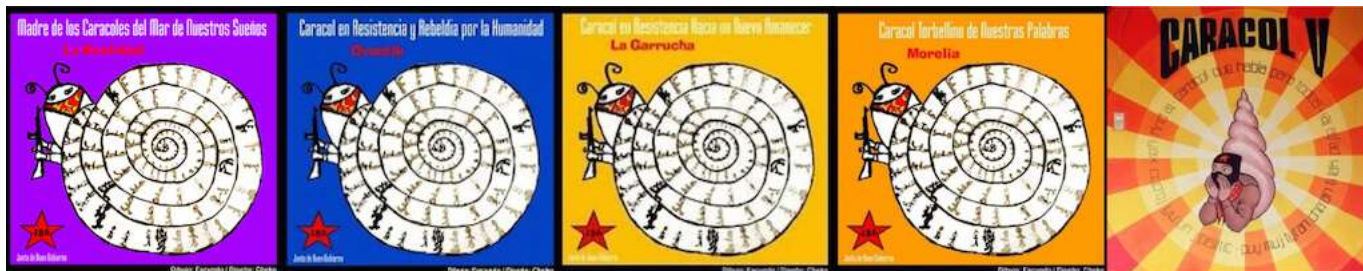
ほら、あそこで、小川の流が渦となり、その中心では、月が歪んだような踊りを繰り返しながら瞬いている。渦巻か…それともカラコルか。

ここでは言われている。もっとも古い人たちが言うには、ほかのもっとも前の人たちは、この大地のいちばん最初の人たちがカラコルの形をすごく尊重していたと、言っていたという。

いちばん最初の人たちは、カラコルは心のなかに入ることを表していると言っていた。最初に知識を得た人たちは、カラコルをそう言っていた。さらに、カラコルは、世界を歩くため心から外に出ることを表しているとも言っていた。それを最初の人たちは、生命と呼んでいた。

それだけではなく、カラコルを使って集団に呼びかけ、言葉がお互いに交わされ、合意が成立するようにしたと言われる。また、カラコルのおかげで、はるか彼方の言葉まで耳で聞き取れるようになったと言われる。

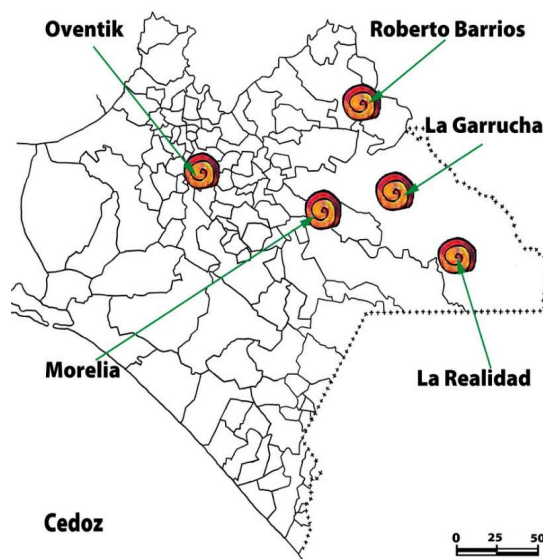
そんなふうに使われていたという。だが、私にはわからない。私はあなたと手を携えて歩きながら、私の耳が見たもの、目が聞いたものをあなたに教えることにしよう。私はカラコルを見たり聞いたりする。それはここらの言葉 (ツォツィル語) でプーイ (pu'y) と呼ばれている。



当時の5つのカラコル（ラ・レアリダー、オベンティック、ラ・ガルルーチャ、モレリア、ロベルト・バリ奥斯）



モレリアのカラコル：我々の言葉のつむじ風



12 天空の支持者たちのお話（2003/7/21）

こうして、私一人だけとなり、寒さにブルブルと震えていた。だが、頭上の雨はやんでいた。今度はパイプの受皿を上側にし、火をつけ直そうとした。しかし、私のマッチは湿っており、火がつかなかった。

「クソッタレ！パイプに火がつかない。私のセックス・アピールは地に落ちてしまう」と、私はつぶやいた。（相当数ある）ズボンのポケットをあちこちまさぐり、カーマストラの小冊子ではなく、乾いたマッチを探した。

そのとき私のすぐ近くで炎がついた。その火のむこうにある老アントニオの顔に気づいた。私はパイプの受皿をマッチに近づけ、一服大きく喫うと、「寒いですね」と、彼に言った。

「そうだな」と、彼は答え、別のマッチでトウモロコシの包葉で巻いたタバコに火をつけた。マッチの明かりのもと、老アントニオは私をじっと見ていた。そして、天空を見つめた後、また私を見つめた。だが、彼は何も言わなかった。私も黙ったままだった。老アントニオも、私と同様に、メキシコ南東部の山中にある不可解なことには慣れ切っていたからに違いない。

一陣の風が吹き、マッチの炎は消えた。われわれのまわりには、長く使ったため刃が摩滅した斧のような月の光だけが残った。そして、暗闇のなか、タバコから昇る一筋の煙がかすかに見えた。われわれは倒木の幹に腰をおろした。われわれはしばらく黙ったままだったと思う。しかし、私ははっきりとは覚えていない。

だが、そのとき、私の気づかないうちに、老アントニオは私にお話をしていた。

天空の支持者たちのお話

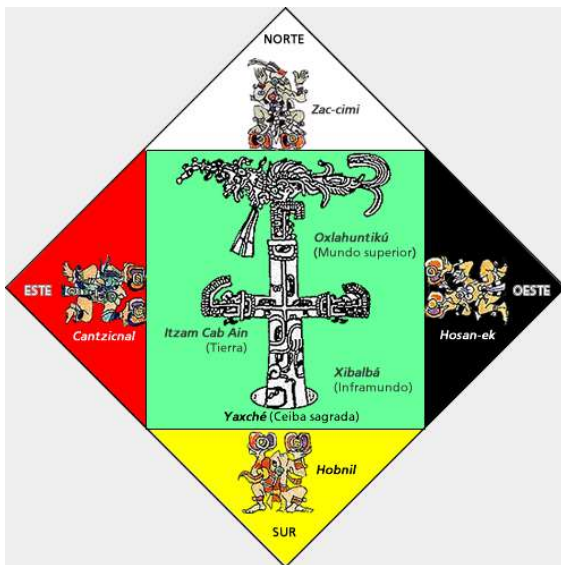
われわれのいちばん昔の人たちによると、天空は墜落しないように支えておかなければならないという。つまり、天空は堅固なものではなく、とてもか弱く、すぐ気を失い、木から葉が落ちるように倒れることがあるからである。だから、天災はいつでもやってくる。邪悪なものがトウモロコシ畑を襲い、雨がトウモロコシ畑を台なしにし、太陽は大地を罰するかのようにはりつけることがある。命令するのは戦争、勝利するのは嘘、闊歩するのは死であり、考えることはすべて苦悩となる。

われわれのいちばん最初の人たちは言っている。そうなったのは、世界を創造した神々、いちばん最初の神々が、世界を創ることに熱中しすぎたせいである。世界を創った後、最初の神々は、天空、われわれの棲み家の天井を創る余力が残っていなかった。神々は、思いついたものだけを天空に据えることにした。だから、ビニール製の天井のように、天空は大地の上に被せられた。そのため、天空はけっして堅固ではなく、あちこちと漂うこともある。

だから、おまえは、いつ、こうした事態が起き、風や大水が破壊をおこない、火が不安を呼び起こし、大地がたち上がり、落ち着く場所を見いだせずに歩きだすか、知らなければならない。

それゆえ、われわれより前に、四つの神々が到達したと、言われている。お互いに異なった色をした四体の神々は、世界に戻ると、巨大な身体になって、世界の四隅に立った。それは、天空が墜落しないように、じっと静かに平坦でいるように、天空を繋ぎ止めるためだった。太陽や月、星や夢が、苦勞せずに天空を歩けるようにするためだった。

しかし、この大地で最初の歩みを印した者たちは、次のように語っている。ときおり、バカブ、すなわち、天空の支持者の誰か一人が夢の世界に入り、眠りこけ、別の雲に気を取られると、世界の天井、つまり彼が支えている天空の部分がうまく張られなくなる。すると、天空、つまり世界の天井は漂いだし、大地に墜落しそうになる。そうなると、太陽と月は自分が歩むための平坦な道をもてなくなる。星々も同じである。



マヤの4方向の天空の支持者



ラ・ガルーチャの集会所に描かれたカラコル

最初から、こんな事態が起きていたのである。だから、最初の神々、世界を誕生させた神々は、天空の支持者の一人一人に委託したのである。天空を読み、いつ天空が漂いだすかを予測するため、彼らはつねに待機しなければならない。ひとりの天空の支持者は、別の天空の支持者に話しかけ、別の天空の支持者が目を覚まし、自分が担当している天井の部分をきちんと張りなおし、すべてがうまく行くようにすべきである。この天空の支持者たちはけっして眠らない。いつも警

戒体制をとり、邪悪なものが大地に舞い下りた場合、ほかの天空の支持者を起こすために待機しなければならない。

いちばん昔に歩みだし、言葉を発した人たちは言っている。この天空の支持者たちは胸にカラコルをぶら下げている。すべてが正常に回っているか確認するために、そのカラコルで世界の騒音と沈黙を聞き取っている。眠らないように、目を覚ますように、ほかの天空の支持者にそのカラコルで呼びかける。

いちばん最初の人たちは言っている。眠らないようにするため、この天空の支持者は、胸にある道を通じて、自分の心の内側と外側を行き来している。昔の教える人たちは言っている。この天空の支持者は男と女に言葉と書記法を教えたという。というのは、言葉が世界を歩むなら、邪悪なものが静まり、この世界が正常になるからである。こんな風に言われる。



天空の支持者バカブ

それゆえ、眠らない者、邪悪なものが起こす悪事に備えて待機している者の言葉は、一方から他方へ直線的に歩むものではない。心の中にある針路にそって、自分の内側にむかって歩み、理性の針路に従って外にむかって歩むという。

昔の知恵者たちは言っている。男と女の心はカラコルの形をしている。よい心と考えをもつ者はこちらから向こうへと歩む。世界が正常であるようにつねに待機するため、神々や人間を起こして回っている。だから、ほかの人たちがいつ眠っているかを見守っている人たちはカラコルを使っている。カラコルを使う目的はたくさんあるが、何よりも忘れないようにするためである。

最後の言葉とともに、老アントニオは一本の枝で地面に何かを描いた。老アントニオはいなくなり、私もその場から去った。東の地平線から太陽がちょっと姿を現した。あたかも、ちらっと覗き、見張りをしている者が眠っていないか、世界が正常に回るために待機している者はいないか、チェックしているようだった。

ポソールを飲む時間となったので、私はその場所に引き返した。太陽によって、もう大地も私の帽子も乾いていた。倒木の幹の傍らの地面に、老アントニオが描いた図面があるのが見えた。それは、きっちりした線で描かれた螺旋、つまり、カラコルだった。

私が委員会の会合に赴いたとき、太陽はすでに道の半ばまで歩んでいた。その前日の夜明け前、すでにアグアスカリエンテスの死が決定されていた。今回の委員会では、断末魔のアグアスカリエンテスがもっていた機能だけでなく、別の機能を有するカラコルを誕生させることが決定された [5つのアグアスカリエンテスをカラコルに模様替え]。

そう、カラコルは、共同体に入るため、共同体から出ていくための門のようなものである。内側に向かい自身を見つめるため、そして外を見るための窓のようなものである。ほら貝のように、われわれの言葉を遠くまで投げ出し、遠くにある者の言葉を聞くためのものである。しかし、なんといっても、われわれが見守り、世界に数多くある世界が正常であるように待機すべきことを忘れないようにするためのものである。

13 光を運ぶメカパル (2003/11/17)

仲間の皆さん

われわれの EZLN 創設 20 周年にあたる本日、2003 年 11 月 17 日、今、われわれはお祭りをしている。20 年前、1983 年の今日と同じような日、ひと握りのメキシコ人の男女のグループ、3 人のメスティソと 3 人の先住民がわれわれの組織作りに着手した。私の言葉を聴いている多くの同志は、その時まだ生まれていなかった。この祭りに参加している同志の大多数も、その日にサパティスタという名前を聴いたことはない。今や、EZLN という言葉は、すべての溪谷部、チアパス州のすべての行政区、メキシコのすべての州、メキシコというわれわれの国にあるすべての農村や都市、さらには全世界で耳にすることができる。

しかし、20 年前、われわれの闘いの言葉を誰も聴いていなかったと思われる。20 年前、われわれの言葉は孤立し、上手く成果を得ることなく死んでしまうと思われた。だが、この言葉を聴き取り、歩き始めた者たちがいた。それは、われわれの死者たちである。われわれの最古参の先祖たちである。メキシコ南東部のこの山岳部で、その心と記憶は生き続けている。それは、われわれのはるか昔からの父母たちである。彼らは、5 百年前から、メキシコ人のための民主主義、自由、正義を求めて闘う新しい言葉を耳にすることを待ちわびていた。われわれのもっとも昔の先祖たちである。彼らは、大地の色をした男女、トウモロコシの男女、先住民の男女に対する尊敬と尊厳を求めて闘う言葉が到来するという希望を抱いていた。

5 百年にわたり、われわれ先住民は、蔑まれ、辱められ、酷使され、搾取されてきた。大農園主や統治者どもは、われわれを犬のように扱い、その食卓で余ったものをわれわれに施し、われわれを足蹴にしてきた。われわれの生命は、一羽の雌鶏の価値以下だった。われわれ先住民は、生活に希望を見出せないの、金持ち連中から、全国連帯計画[PRONASOL]、教育保健食糧計画[PROGRESA]、エヒード土地私有化登記計画[PROCEDE]など、とるに足らない施しものが配られるのを待っているだけだった。われわれの生活はこのようなものだった。じっと、死を待つだけのものだった。こんな生活が身に染みていた。われわれはそのことをよく分かっていて。

わずかばかりのクレジットや支援金を獲得するため、われわれは組織することはできたかもしれない。政府のクレジットや支援金を申請する組織の指導者たちもいた。彼らは全員、手数料と称して協力金を要請し、集めた人々のお金で、酔っ払い、オコシゴに豪華な家を建てると、腐敗しきった輩であることをわれわれは知っている。

先住民は生活がよくなることもなく、空腹、無知、病気、抑圧などに苦しみながら、一日が過ぎるに任せるだけだった。ここ溪谷部ではこのような状態が続いていた。そのことを皆さんはよく知っている。サパティスタの言葉は、メキシコ南東部の山岳部で孤立していた。

しかし、このサパティスタの言葉を聴いた人たちがいた。それは、われわれの祖先たち、すでに亡くなっているが、記憶を保ちながら山岳部で生きているわれわれの先祖たちである。われわれの死者は、サパティスタの言葉はよい言葉であり、それが示す道は素晴らしいと考えた。そこで、われわれの死者たちは、サパティスタの言葉が彼らの心をつかみ、それをより大きなものにした歴史を、サパティスタの言葉で語ることになった。そうして、われわれのいちばん昔の父母たちは語ることになった。

昔のことだが、とても長い期間、男女は不安を抱きながら生きていた。その男女の心はとても悲しいので、大いに泣いていた。その当時はお祭りや楽しみなどなかった。心や男女の歩みを楽しいものにする音楽も踊りもなかった。その当時は、昼間というものがなく、完全な闇夜がずっと続き、すべたがとても暗いままだった。そのため、男女の心には、不安と悲しみが満ちていた。

しかし、ごく少数の男女が、はるか水平線の彼方に、とても大きく陽気な光があることを耳にしていた。そこで、その男女は、自分たちがそこに赴き、その光を持ってくると言って、はるか遠方まで出かけることにした。彼らには、長い距離を歩まなければならないとしても、雨とか汗でびしょ濡れになるとしても、空腹や病気に見舞われようとも、途中で死ぬことになるとしても、

それは大した問題ではなかった。苦痛など大した問題ではなく、彼らは歩き始めた。

やがて、光のある場所に到着した。そこにある光は、確かにとても大きく陽気で、音楽にあふれていることがわかった。彼らの心はとても満足し、気のむくままに踊りだした。しかし、自分たちの村にとても悲しく絶望している男女がいることをすぐさま思い出した。そこで、村の誰もが楽しく満足し、音楽を聴き、歌い、よい考えのもと踊ったり働いたりできるように、この光を自分たちの村まで運ぶ必要があると言い出した。その男女はそんなことを言っていた。

しかし、運ぼうとする光は、とても大きく、とても重いことに、彼らは気づいた。みんなで押そうとしたが、とても重いのでびくともしなかった。全員で担ごうとしたが、やはり重すぎて、無理だった。そして、とても大きなこの光を運ぶには、メカパルが必要だということになった。しかし、光はとても大きく重たいので、どんな大きなメカパルも役に立たず、光を入れるとどんなメカパルでも壊れることに気づいた。そこで、特別のメカパルを作らなければならないと言ったものの、どのように作ればいいのか分からなかった。そこで思いついたのは、自分たちの村のすべての男女に協力してもらうことだった。

そこで自分の村に戻り、すべての男女を集めて会議を開き、みんながどのように思っているか、どんな合意を得ることができるかを知るため、考えていた計画について話した。村人との会議の場で、男たちのなかから、その計画はとても労力が必要なので役にも立たず、今の心配と悲しみを抱えた生活を続けるほうがいいという意見が出た。たくさんの輝きを持ち、陽気で、音楽に満ちたこの光を運んでくる計画には、当然ながら参加しないと、彼らは言い放った。

一方、その会議の場にいたほかの男女は、計画は素晴らしく、苦労など問題ないと言った。なぜなら、誰もがずっと無駄に苦しんできたのだから、どうしようもない悲しみに苦しむより希望を抱いて苦しむ方がまだいいと考えたのである。そこで、計画に賛成した男女全員が集まり、大きな光のある場所に赴いた。

一方、光を運ぶのを手伝いたくなくて留まった者たちは、出かけた人たちをばかにしだした。光を運ぶために出かけた人のやる気をそぐように、光を運ぶことなどできないし、あくせく働いても徒労に終わるだけで、言っていることは無益でとてもばかげていると、言い放った。しかし、光を運びに出かけた人たちは、挫けることなく道を歩み続けた。その道は、10年以上も、空腹や苦痛を重ねながら、光明の見えない闇夜のなかを歩き続ける続くものだった。

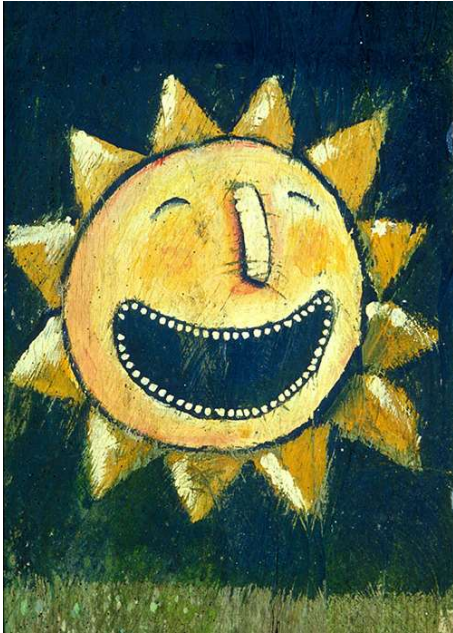
とても大きく重たい光のある場所に到着すると、途方もなく重い光を運ぶには、どうすればいいかを全員で考えはじめた。途方もなく重いこの光を運べるように、とても大きなメカパルを作るということを考えた。こうして、自分たちがこのメカパルになろうと考え、男女は互いに手を取りあい、巨大なメカパルを編み出し、光を捕まえると、少しずつ自分たちの村へ運んだ。

こうなったのは、この男女が良き言葉を持っていたためで、その言葉を実行したからである。光を携え、村まで戻りたかったが、光を村に運ぶ道中で亡くなったものもいた。しかし、光とともに、音楽や踊りもやって来た。光、そして音楽や踊りがあったので、計画に反対し、悪口を言っていた村の人たちも、とても満足していた。

みんなが、踊り、歌い出した。光を運んできた男女はとてもうれしかった。光を運んできたこととても満足していた。ほかの人たちが言っていたことが本当だったので、悪口を言っていた人たちは自らを嘆き、恥ずかしくなった。

山々のなかに自らの考えを生かし続けているわれわれのはるか昔からの父母たちは言っていた。このことが起きてからずいぶん時間が経った。このとほうもなく大きく重い光は、太陽と呼ばれている。山々のなかに自らの心を持っているわれわれの死者たちは言っていた。夜に東の空に、青い光が見える。その光は太陽を引っ張っている星で、その星は、次の日には太陽が東から昇ることをわれわれに知らせている。

われわれのはるか昔の先祖たち、父母たちは言っている。その星は、はるか昔に、みんなに太陽を運んでくるために、はるか彼方まで赴いたあの男女たちのシンボルである。さらにこう言った。サパティスタの言葉は、光を担いで、人々のもとに運ぶメカパルのようになるべきである。



「笑う太陽」オベンティクの壁画



荷を担ぐメカパル

メキシコ南東部の山中に、その心と考えを播きつづけてきたわれわれのはるか昔からの父母たちは、このようなことを言っていた。

こうして、われわれサパティスタは、20年間、活動してきた。いちばん最初、われわれは先住民の男女のための闘いの言葉として誕生したのである。私の言葉に耳を傾けている同志の皆さんは全員、それこそがわれわれの歴史であることを知っている。

闘うべきだと言った時、そんなことは何の役にもならず、労力を要するだけで、何も得るものはないと言い張る人たちがいることは、誰もが知っている。しかし、われわれはよく知っている。ほかの人たちは、闘うべきであり、闘いは多くの労力を要し、やさしいことでないが、金持ち連中や政府のわずかな施しで、中味のない人生が過ぎてゆくのを何もせずに座視するよりも、闘う方がよいと言っていた。

われわれ全員が、われわれサパティスタ賛歌の「すでに地平線は見えている」という歌詞をよく知っている。すなわち、世界のすべての男女に喜び、音楽と踊りがもたらされるように、すべての人のために光をもたらすため、今も、われわれは光を担いでいるのである。



「すでに地平線は見えている」ラ・レアリダーの壁画

14 三つの肩 (2004/8/22)

夜の肩に月が顔をのぞかせたが、それも一瞬のことだった。雲が幕を引くように別れ、夜の体はその光の跡を見せはじめた。そう、欲望に駆られ、落ちるのか昇るのかわからないときに、肩に残る齒の跡のように。

20年前、メキシコ南東部の山々に分け入るため、最初の丘を苦勞しながら登った後、私は道の曲がり角に腰を下ろしていた。その時間は？正確には覚えていない。しかし、夜が、「もうコウロギの声など聞きあきた。寝るとしようか」という時間帯だった。太陽を昇らせる人がまだいない時間帯だった。つまり、早朝だった。

呼吸と鼓動を落ち着かせるため、もっと気楽な職業を選んだ方がよかったかなと、私は考えていた。つまり、私に来るまで、この山は、私抜きでも楽しく過ごしていたのだから、私がいなくても寂しくはないだろう。

断っておかねばならないが、私はパイプに火をつけなかった。それどころか、動くこともままならなかったのである。軍の規律に従ったわけではない。当時の美しい身体じゅうが痛かったのである。今も鉄の規律で続けている習慣に従って、私は自分がトラブルに巻き込まれる能力を呪いはじめた。

このような状況、つまり、不満を言いくるというスポーツをしていた時、丘の上をトウモロコシの袋を背負った男が通り過ぎるのを見た。袋はとても重そうで、男は猫背で歩いていた。

私が行進に遅れないように、坂の途中で、同志たちは私の荷物を取り上げてくれた。私の人生が重かったのであり、リュックが重かったわけではない。とにかく、どれくらい坂の途中に座っていたかはわからないが、しばらくして、男が荷物なしで丘のふもとにいるのを目撃した。だが、その男は相変わらず猫背で歩いていた。

「クソ」、「こうして時の経過とともに、私の男らしさは失われ、セックス・シンボルとしての私の未来は、選挙と同じように不正まみれになる」と、自分で妄想していた（それが全身の苦痛を感じないですむ唯一の方法だった）。

実際、数ヶ月経つと、私の歩き方は疑問符のように猫背になってしまっていた。しかし、リュックが重かったからではなく、枝や蔓で自慢のデカ鼻に引っかき傷がつかないようにするためだった。

それからほぼ1年後、私は老アントニオに出会った。ある夜明け前、トスターダとピノーレを受け取るため、私は彼の小屋に行った。当時、われわれは人々の前に公然とは姿を見せず、一部の先住民だけがわれわれを知っていた。

老アントニオが設営地まで行くと行ったので、荷物を二つに分けて、ひとつは彼のメカパルに乗せた。メカパルをもっていない私は袋をリュックに入れた。ランプをとると、森林が始まる牧草地の端まで、われわれは少しだが歩いた。小川の前で立ち止まり、われわれは夜が明けるのを待った。



トスターダ



ピノーレ

私が何を話したのかは、よく覚えていない。しかし、老アントニオは、先住民が、荷物を担いでいないのにいつも腰を曲げて歩いている理由を説明してくれた。先住民は、ほかの人の財産までもその双肩に担いでいるからである。

私はなぜそうなのかたずねた。最初の神々、世界を誕生させた神々は、トウモロコシの男女を集団で歩くようにしたと、老アントニオは私に語った。集団で歩くことは、他者、仲間のことを考えるという意味であると言った。

『だから先住民は腰を曲げて歩く。その双肩には自分だけでなく、全員の心が載っている』
そんなに重いのなら、双肩では足りないだろうと、私は考えていた。時間が経過し、いろんなことが起きた。闘う準備を怠っていたわれわれは、まず初めにこの先住民たちに敗北した。彼らもわれわれも、腰を曲げて歩いてきた。われわれが担いでいたのは傲慢という重さだった（われわれはそれに気づかなかった）。しかし、彼らはわれわれも担いでいた。こうして、われわれは彼らに、彼らはわれわれになった。この重みは双肩では支えきれないのがわかっていたので、われわれは腰を曲げいっしょに歩きはじめた。

こうして 1994 年 1 月 1 日、われわれは武装蜂起したのである。われわれが歩くこと、つまり存在することを助けてくれる三番目の肩を探すためだった。

三番目の肩

メキシコ国家の起源に関して、サパティスタの先住民共同体の現代史は、その創設に関する伝承をもつことになるだろう。それは、この地に暮らすものは、今や三つの肩をもっているというものである。サパティスタは、すべての人類に共通している二つの肩に加えて、国内外の市民社会という三番目の肩をもっている。

この「貴重な」ビデオの後半のパートでは、サパティスタの共同体にとって達成された進歩についてお話しするつもりである。そうすれば、われわれが夢にも思っていなかったような素晴らしいものであることがわかるだろう。でも、今、伝えたいのは、それができたのは、「誰か」が肩を貸してくれたからだということである。

...

サパティスタの闘いの三番目の肩は、多くの色を持ち、多くの言語を話し、多くの目を見て、多くの人とともに歩んでいる。

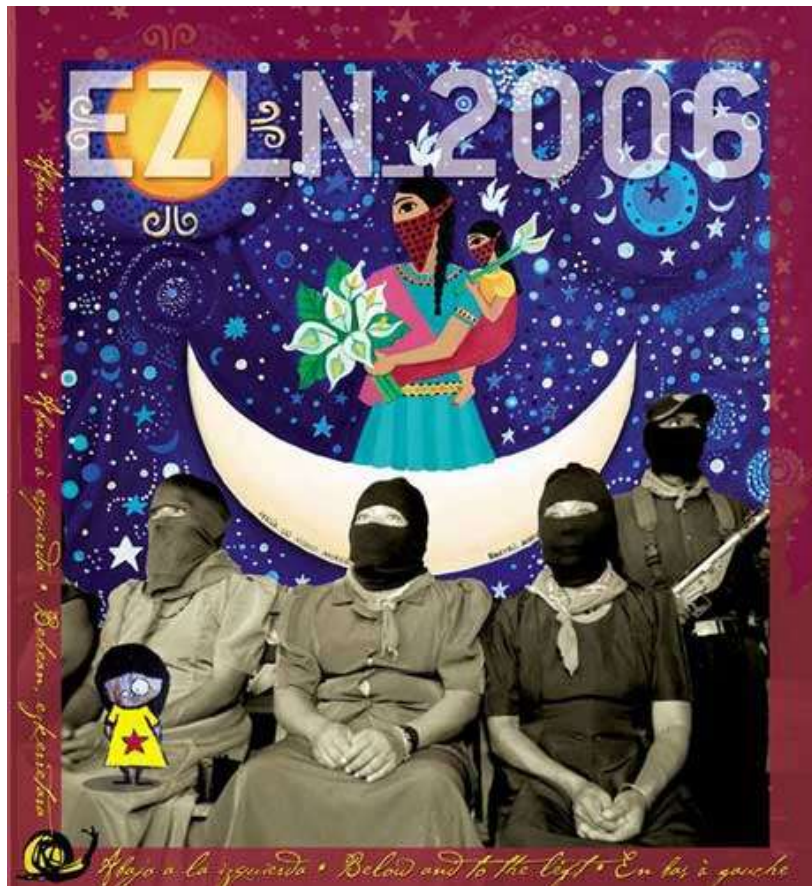
...

たとえ沈黙していることが、方向性の喪失、混乱、内部抗争、失踪、あるいはこの時期に流行しているどんな噂を示唆しているとしても、ここで闘われていること（そしてその方法と時間）を理解しようとする注意深さと意欲を持ち続けている人々に言及しなければ、「第三の肩」の言及は完全ではないだろう。相手が話すこと、そして何よりも相手が黙っていることに耳を傾けることは、道と時には重荷を分かち合う者同士でなければできないことである。

...

そして、「市民社会」のすべての皆さん、そしてカラコルと善き統治評議会（JBG）の誕生日、おめでとう。そして、三番目の肩にも、感謝したい。

第6部 先祖たちの語り(別のキャンペーン)



第6部 2006～2007年 先祖たちの語り (*は老アントニオが登場しないお話)

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 ラモナ司令官の軌跡 | 14 戦士の神とヨリ* |
| 2 マヤの人は歌うように話す* | 15 セイバ、記憶の木* |
| 3 黒いフリホール豆の鉢* | 16 任務は覚醒させること |
| 4 悪い夢と良い夢 | 17 墜落する星* |
| 5 「私」と「われわれ」という言葉の誕生 | 18 クカパの太陽と月の起源* |
| 6 もう一度、昼と出会うまで* | 19 叔母と甥と怪獣* |
| 7 大地は恐怖を感じている* | 20 光についた傷* |
| 8 良い夢を守る* | 21 でんぐり返し |
| 9 カラコルの戦士* | 22 光と影のかなわぬ愛 |
| 10 石と夢* | 23 人喰い* |
| 11 考え* | 24 監視人たち* |
| 12 心のない人々* | 25 天空を読む* |
| 13 私とわれわれ* | 26 ソンブラ(影)は月の追い立て役* |

1 ラモナ司令官の軌跡（2006/1/16、キンタナロー州プラヤ・デル・カルメン）

この会場にいる人たちの大多数は、われわれが今いるキンタナロー州プラヤ・デル・カルメンの人々ではないようだ。そこで、この会場で発言されたこと、この会場にわれわれが集まっていることに関連して、皆さんに話したい。

私がラカンドン密林に到着してからずいぶん年月が経った。22年前のことだが、私は一人の賢者に会った。彼のことをわれわれは老アントニオと呼んでいた。あるとき、彼とお喋りをしていた私は、次のようにたずねた。都会からきた私は、多くのことを知らなかったからである。

「マヤ先住民—われわれはマヤの先住民である—は、数多くの戦争、とてつもない征服や破壊の野望の対象になり、とても長い年月が経過したのに、どうして抵抗を継続できたのか？」

彼は私に次のように答えた。

「その秘密は大地にある。人を次々と破壊することはできるかもしれない。しかし、大地があるかぎり、木々や水、つまり大地とか自然として認識されているものは、自らの力で栄養を取りこみ、何度でもトウモロコシの男や女たちを育て、産んでいく」

すなわち、われわれサパティスタにとって、さらには「別のキャンペーン」に参加する多くの人にとっても同じと確信するが、大地の防衛は関心の問題ではない。…なんと表現したらよいかわからないが…スノッブな趣味の問題ではなく、生き残ることと結びついた問題である。この文化として、インディオの諸民族として生き延びることは、自然が生き延びることと深く結びついている。その意味で、われわれは皆さんがわれわれに言ったことをよく理解できるし、われわれの側には問題をよく理解する最良の生徒がいる。

われわれは、「別のキャンペーン」、第六宣言委員会に皆さんをお招きしたい。「別のキャンペーン」のなかで、皆さんが掲げた諸要求に関する解決策を発見できると、皆さんにお伝えしたい。

だが、嘘をつくことはわれわれにはなじまない。皆さんは解決策を見つけるどころか、さらに問題を抱えることになるだろう。皆さんがわれわれに説明したような、大地や自然の傷、痛み、苦痛などに遭遇するだろう。おそらく、もっと恐ろしく、同じぐらい犯罪的なものかもしれない。だが、皆さんは、学び、知り、何かをしたいと思っている別の人々に出会うことになるだろう。

皆さんが諸要求の解決策を探しているのなら、われわれサパティスタのそばにいる必要はない。皆さんがそのことを習得し、理解し、ほかの場所の傷についてもよく知り、そのことに関心をもっている皆さんのような別の人々と出会い、いっしょに闘おうとする人々を探しているのなら、われわれはここにいる。

まず、われわれサパティスタたち、そして共和国の別の場所から今ここに来ている同志の皆さん、メキシコのほかの場所にいる同志も、代替的な通信メディアやよく知られた報道機関を通じて、皆さんがこの場で発言したことに耳を傾け、理解している。そのことをよく考えてほしい。

この空間は構築されるためのものであると、われわれは考えている。皆さんは、その空間、つまり自然を防衛、保存、そして管理する—すでに存在するものを保存するとともに、さらに発展させるために管理することを目指す—ための場所を構築できるだろう。これがその空間である。

こうして構築された場所は、全国レベルではほかにないだろう。政党は、地域の事情や獲得票を考慮して、環境というテーマを取り上げるかもしれない。しかし、結局は解決策を提示することはない。なぜなら、この会場で皆さんが的確に説明されたように、自然破壊、自然に対する侮蔑、軽視、乱開発といった政策は、政党の色合いとは無関係であり、どれも同じだからである。

われわれは次のように考える。皆さんが実践してきたように、つまり諸政党から独立し、われわれの独自の力で、さらに調査、科学技術などの日常活動で、ほかの人々と何かを創りだせるという道理に基づいて、ものごとを構築すべきである。しかも、皆さんが指摘されたように、われわれ全員がくる前、ホテルや道路ができる前から、すでにこの地にいた人たち、つまりこの場合、チアパスからユカタン半島までわれわれを結びつけるマヤ民族から、学びつづけねばならない。



1996年10月 メキシコ市に向かうラモナ
司令官に付き添う副司令マルコス



素顔のラモナ

以上がこの問題について皆さんに伝えるべきことである。これからは別のことを話したい。この場所に、皆さんが同志ラモナ司令官のために作った供物が持参されているからである。

老アントニオの場合と同じように、かなり昔のことである。私がラモナを知ることになったのは、おおよそ 15・16 年前である。われわれの闘争の状況を説明するため、集落のひとつに彼女を派遣することになった。われわれがどのように世界、国、われわれの闘争、われわれ人民を考えているかについて、われわれは機会をとらえて、われわれの側にいる人々に説明していた。その時、その集落までの行進を先導する役割が、ラモナに当たったのである。

彼女はとても陽気で、冗談が好きだった。彼女しか道を知らないで、われわれを先導する役割が彼女に当たったのである。そのとき、「私たちの戦いはいいものだわ。だって女性が先頭を歩くのはこの戦いが最初だわ」と、彼女は冗談まじりに言っていた。さらに、冗談めかして次のようにも言った。

「もし、私たちが勝利したら、私たち女性の後を歩いているあなたたち男性も、私たちに追いつけるわよ。そうすれば、私たちが築きあげたい新しい世界では、私たちはお互いに連れだって歩けるようになるわ」

彼女は冗談めかしてこう言った。なぜなら、先に歩くのは男性で、女性はその後をついて歩くというのが、その当時の共同体の慣習だったからである。

ラカンドン密林では、私が歩くたびに転ぶことは伝説になっている。近いうちに、国のほかの地域でも伝説となるだろう。私が何度も転ぶので、彼女はつねに私のはるか前方を歩いていた。彼女はとても小柄で背が低く、歩く様子は幼児のようだった。だが、彼女は、ゼンマイが巻かれ、猟犬に追いかけているように速かった。だから、私は彼女に追いつけず、当然ながら、道に迷うことになった。

重い荷物を抱え、下を向いて歩きながら、彼女の足跡を追かける術を私は習得した。私のブーツだったが、彼女は裸足で歩いていた。彼女の足跡だけがくっきりと残っていた。彼女は自分の足跡を残して歩いていた…。そう、彼女がずいぶん前を歩いている時、私は彼女の足跡を追いながら歩くことになった。…やがて、この場所のように地面が硬い場所に到達することになった。私は何も気にせず、彼女の足跡を見つけていた。硬い地面のある所で、私は休息のため立ち止まった。呼吸は上がりパイプが恋しくなったからである。つまり、私はまったく耐えられなくなったのである。

その時のことある。硬い場所を歩いているのに、どうしてラモナの足跡が残っているのだろうか、私に疑念が湧いた。地質の問題についてはよく知らないが、たぶんその種の問題だろうと私は考えていた。振り返ってみると、私はブーツを履き、体格はラモナの倍だったが、私の足跡は残っていなかった。彼女は足跡を残しているのに、私の足跡が残っていない理由が、まったく分からなかった。

かなり先にいる彼女になんとか追いつき、「あなたが歩いた足跡はあるのに、私の足跡は残っていないのに気づいた？」と、私はたずねた。

「そんなの、最初から、そうよ」と、彼女は答え、ふたたび歩きつづけた。

その時には、私は彼女の言っていることがまったく理解できなかった。その後、たしか、特異な気候であるためよく霧が発生するチアパス高地だったと思うが、ラモナは雲があちこちと漂っているのじゃれ合うのがとても気に入っていた。つまり、霧が山の上に完全に横たわるようになると、われわれは、まるで雲の上を歩いている気分になれたのである。

その後、私は密林地帯に戻り、老アントニオに会った。そして、ラモナのエピソードを彼に話した。二人は会合ですでに知り合っていたのである。すると、老アントニオはほほ笑みながら、「われわれのもっとも古い先祖たちが語っているお話をお前にしよう」と、私に言った。

われわれインディオの諸民族のいかなる物知りといえども、最初の日々、偉大なる男女が選ばれ、彼らが偉大になったことについて、説明することはなかった。なぜなら、彼らの任務は偉大だったからである。皆さんなら、巨大というだろうが、彼らは偉大という言葉を使っていた。この男女に課せられた任務は、その後続く人たちが、ずいぶん遠くの場所からでも、地上を覆い隠す木々があっても見えるように、大きな身体を駆使して、道筋を刻むことだった。最初はそれが実行されていた。しかし、ほかの人たち、小さな人、つまり小さき人々のあいだに、そのことに対する嫉妬や腹立ちが発生してしまった。やがて、そのことは深刻な問題となった。

そこで、世界を誕生させた最初の神々は集い、次のように発言した。

「どうも、ここでわれわれは問題を作ったようだ。一現在の統治者と違って、最初の神々は、悪いことをしたときは、それを自覚していた一さて、この問題にどう対処したものだろうか？」さらに、次のように言った。

「この男や女たちの偉大さを別の形のなかに隠さなければならないようだ」

そこで、最初の神々は彼らを小さな存在にすることにした。ところが、彼らは、もともとは背丈が低いどころか、とても大きな巨人だった。ところが、論争していたはずの最初の神々は、マリンバに合わせ踊りだした。そのため、陽気で踊り好きな神々だった最初の神々は、彼らの抱える問題の詳細について忘れてしまっていた。こうして、最初の神々は、巨人たちの背の丈を変えた。だが重さを変えることはなかった。それ以降、巨人だったこの男や女たちの背丈は小さくなった。しかし、巨人と同じような重さをしていて、それゆえ、足跡が残るようになったのである。

老アントニオは語っている。マヤ先住民の様式を学ぶため、つねに学ばねばならなかった。下を見つめることを学ばねばならなかった。さらに、異なる色、異なる名前、異なる民族性のカシラン、異邦人ツル、征服者、長い年月にわたりわれわれを抑圧してきたメキシコ人たちは、次のように吹聴していたという。屈服や服従の証しとして、われわれ先住民はいつもうつむいている。だが、老アントニオは次のように反論する。

「そうではない。われわれがうつむくのは、深い足跡を探しているからである。つまり、われわれは、下を見つめることを学ばなければならない。お前は誰かの後をたどることになる。その人の残した刻印を追いかけ、後についていけ。それを見失わないようにしろ。なぜなら、上の世界ではそれを見出せないからだ」

そこで、私は老アントニオに、「その後、いったいどうなったの？」と、たずねた。

結局、この巨人たちが死んだ後は、神々は皆が考えている問題を調整することはなくなった。巨人たちはみんな死んでしまったが、彼らを収容できる墓はなかった。なぜなら、身体は小さかったけれど、背丈は大きかったからである。

さらに、老アントニオは私に次のように説明した。

「だから、セイバの木があるのだ。この男女は横向きには埋葬できない。立ったままで生き、そして死ぬことになる。われわれが立ったままであることを止めた後、彼らははじめて休息できるのである。この人たち、この男女は、死んだ時、大きな母なるセイバの木の一部分になった。セイバの木は、彼らを優しく包んでいる」

その後、現在まで長年にわたって、私は自分の歩みを見つづけてきた。だが、私の足跡はまだない。だが、ラモナやわれわれを導いてくれたほかの同志たちの歩みを私はいつも思い出している。大地が硬く乾燥していても、あるいは都市に出かけたときのように地面が舗装されていても、彼らは深い足跡を残している。

そのことを私は見つづけてきた。その足跡を見失わないように、私はいつも執拗に下を見ている。その足跡、われわれを導いてくれた同志たち、すべてマヤ先住民の足跡とともに、われわれはここマヤの土地に到着した。このあとも、国中を行脚するつもりである。

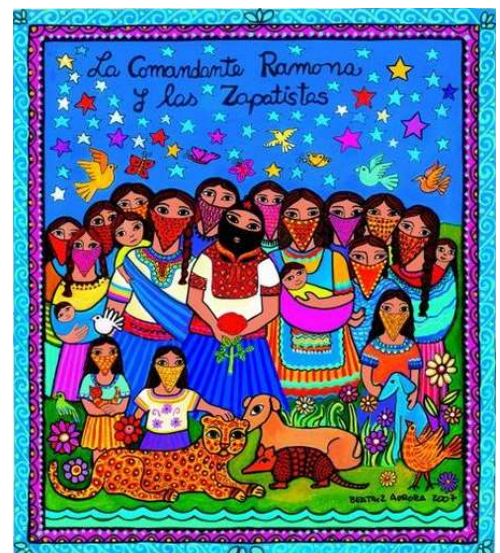
さて、皆さんは気にしないほうがいいだろう。私が下を見ているのは、皆さんが履いている靴を批判するためというのは、よくない考えである。しかし、実際には、足跡の奥底にあるものを私は見ていたのである。われわれが現在まで見てきたことは、深く、確実で、奥深いものである。皆さんといっしょにいること、この国に何かよいもの、現在あるものより正当で、自由で、民主的なものをいっしょに構築するため、皆さんの後からついて行くことは、われわれにとおて、きわめて栄誉なことである。そのようになった国では、誰を最初に殺害するかをめぐって、自然と人間が抗争することはない。

以上が、皆さんに話したかったことである。皆さんがラモナのために作った追悼記念品の一部は、帰ったときに彼女の家族に手渡すつもりである。残りはセイバの木の根元に安置したい。われわれが宿営している場所で、いつも彼女のことを思い出さう。

ありがとう、男女の同志の皆さん。では、おやすみなさい。



サンアンドレス・サカムチェン共同墓地に眠るラモナ司令官



ラモナ司令官とサパティスタ女性たち

2 マヤの人は歌うように話す (2006/1/18、ユカタン州メリダ)

われわれの先祖たちが語るには一私も同じように語る。なぜなら、われわれはマヤの土地にいて、われわれインディオの民はマヤの末裔だからである。われわれのもっとも古い先祖たち、人々の歴史を語り護っている古老たちは語っている。

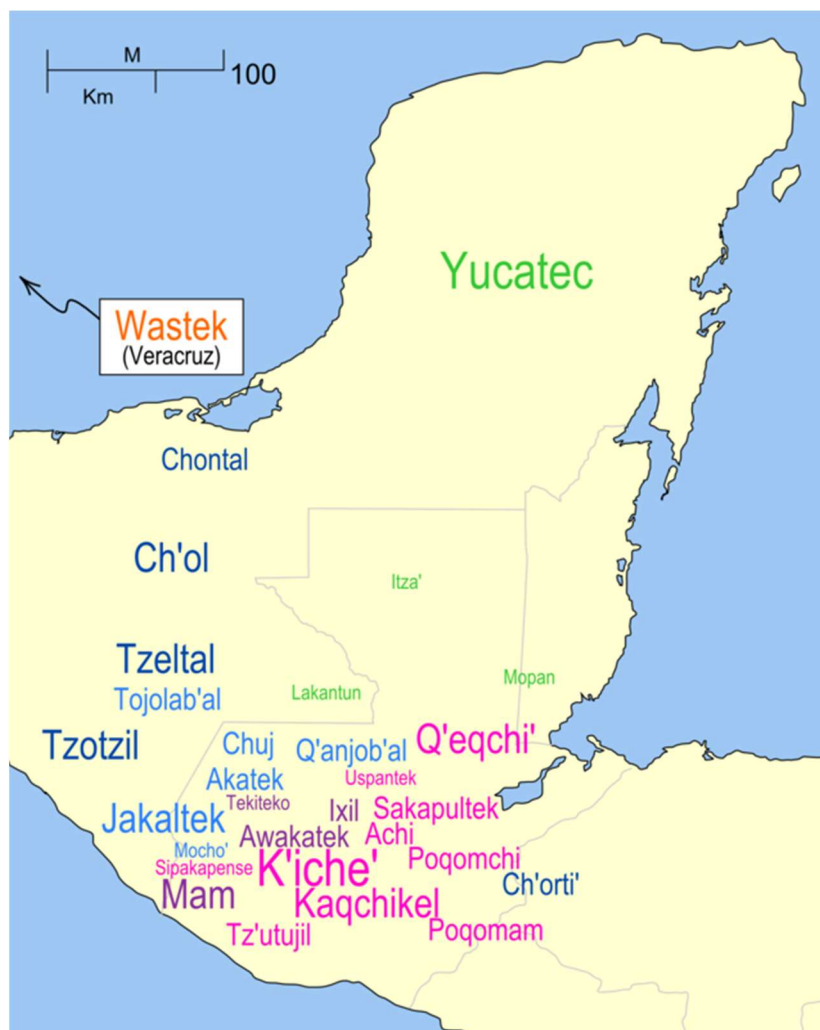
最初の神々は、世界を創造する際に、歌いながら創ったという。だからマヤの人々や末裔たちは、歌いながら言葉に特別な意味を与えるようになった。言葉は、ものごとを創り出し、それに外見を与える力をもっていた。

それ以来、マヤの子孫であるわれわれサパティスタは、ものごとは、それについて話した瞬間に、存在することになるという考え方が身についてきた。

また、次のようにも言われる。

こうした考えに基づき、マヤの人々やマヤ系言語は、小さな歌を歌うように話すという。それゆえ、世界が、多くの形と色を備えた完全なものとなったのである。こうして、最初の神々の歌の産物として、世界は生まれたのである。最初の神々がトウモロコシの男女に与えた遺産として、そのような話し方のトーンが生まれたのである。その起源が何であるかを理解していない人々は、そのトーンについてバカにしたように嘲り笑っている。

この歌うような話し方、世界に向かって歌い、世界を描こうとするやり方は、われわれの最も古い先祖たちに世界がどうなっているかのシグナルを与えていたものである。



マヤ系諸言語の分布

3 黒いフリホール豆の鉢 (2006/1/23、カンペチェ州シュプヒル)

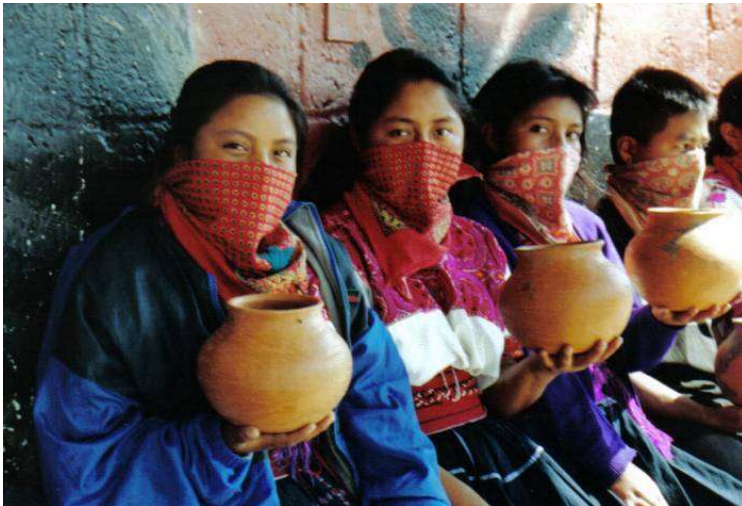
われわれの最古参の指導者、チョルの年配の人々―われわれのチョルの指導者―が語る伝承、お話がある。そのお話によると、世界が始まったとき、すべての人々は、平等に働き、おたがい一生懸命に働き、誰もが平等だったという。つまり世界には上下がなく、平らだったというのである。

そしてある日、最初の男女であるチョルの人々は、手に入れたすべての富を集めると、すべてを大きなテーブルに並べた。そのテーブルには、果物、肉、野菜など、とてもいい食料が山盛りとなって豊富にあった。

すると、皆がまだ働いている最中に、数人が抜け出し、テーブルのある家に入り、できのいいものを全部手づかみし、めいっぱい食べだした。そして、胃袋に収まりきらなかった物をほかの場所に隠してしまった。

こうも言われている。

最後にわれわれチョルの親たちが到着した時、テーブルには黒いフリホール豆の鉢しかなかった。なぜ食べ物がなくなったのか、協力して作ったものはどこにいったのか、チョルの親たちは、ほかの人に訴えた。すると、ほかの人たち、つまり泥棒、物を隠していた人たちは、フリホール豆の鉢をつかみ、家の中に逃げ込んだ。



チョルの女性たち



黒いフリホール豆

われわれの最古参のチョルの人々は語っている。

そのため、われわれは茶色の肌であり、われわれの肌の肌はその状態のままである。しかも、それ以来、われわれには何もなくなったが、われわれに残されたのは、われわれの仕事、大地に種をまき、トウモロコシやフリホール豆など、今も食べているすべてのものを育てる能力である。

もともとラカンドン密林第六宣言が説明しているように、神のご加護で資産家になったわけでも、運が悪く無産者になったわけでもない。資産家は盗んだのである。つまり、われわれが分かち合った労働の成果を盗んだのである。そして無産者は何も無い状態にされてしまったのである。

「あなたたちは自由だ」と、権力者たちは言うてきたが、所有するものがないので自由であり、雇ってくれる人を探しつづけねばならないという意味で、自由である。われわれの労働で生計を立てる連中は、ユカタンではアシエンダ経営者、チアパスではフィンカ経営者と呼ばれてきた。

このことは、ラカンドン密林第六宣言のなかで説明している。われわれが今抱えている問題は、悪い神がわれわれに呪いをかけたとか、運が悪いとか、あるいはそうなったから仕方がないということではない。われわれがこのような貧困と困窮の状況にあるのは、連中がわれわれから盗み、奪い、そして毎日、われわれの労働を収奪しているからである。



19世紀後半のユカタンのアセンダード



チアパス高地フィンカ経営者家族

それが真実である。酒飲みが多いからとか、金持ちは頭がよくよく働くから、金があるのだと言って、誤解する人がいる。だが同志よ、そんなことはない。金持ちは、より多く働くのでより多く持つというのは、間違いである。それどころか、金持ちは少ししか働かず、まったく働かないものもある。また、知能が高いというのも、本当ではない。また、肌の色も関係ない。褐色の肌をしたひどい連中もいれば、善良で白い肌の人もある。そのことをわれわれはよく知っている。

ここで問題なのは、肌の色や言語ではなく、誰が富を持ち、誰がそれを生産しているかということである。富を生産するのは農民、労働者、漁師、農村部や都市の労働者であり、そして富を保有しているのは金持ちである。当然、われわれチオルの先祖は、人々はそれほど模範的な存在ではなく、「それに同意できない。自分たちのものを守るために組織化しよう。テーブルのものはわれわれ全員で作ったもので、たくさんあったはずだ。どこに隠された？」と語っている。一方、独り占めした人は、必要なときに取り出せるよう隠しておいた。

こうして、われわれがよく知っている問題が起きたのである。その問題とは、農民や労働者が生産しても、それが自分たちのものではないことである。だから、富を所有するためには買わなければならない。つまり、われわれの国の至る所で、農民が食料を生産しているが、それは彼らのものではなく、金持ちのものである。なけなしの給料、少しばかりのお金をまとめ、それで自分たちが生産した食料を買うことになる。都市部の労働者も同じである。服や靴、車両、薬などのわれわれの日用品は、労働者が生産するが、労働者もそれを購入しなければならない。

こうして起きたことは完璧なものとは言えず、人々は自分たちの手で組織化をはじめだした。すると、その金持ちや権力者たちは、「彼らの方が人数も多く、力も強いので、われわれは連中に勝てそうにない。そこで、彼らを分裂させよう」と、言った。こうして、それぞれに悪い考えを注入することにしたのである。つまり、俗に言う噂をばらまくようになった。つまり、あなたは不細工だ、あなたはとてもデブだ、とか言うようになったのである。そして、自由と正義のために戦っていたはずの人たちは、怒りを爆発させ、お互いに争うようになった。

4 悪い夢と良い夢 (2006/1/30 ベラクルス州ハルティパン)

老アントニオが私に語ったお話を皆さんにすることにしよう。そのお話しを記述することで生じるかもしれない叱責や緩慢な分析を抜きにして、まずお話しを記憶から呼び起こしている。たしか、とても寒かった1月の夜明け前である。サンクリストバル市を占拠した年から10年前、この皆さんの前に到着した今からだと、12年、いや22年前の1月である。



1994年1月1日、EZLNのサンクリストバル市占拠

いつかは忘れたが、あるとき老アントニオと出会った。そのとき、私はラジカセで音楽を聴いていた。私は、背後に老アントニオがいるのに気づいた。そこで、そのままでは不適切と判断し、私は少しばかり音量を下げることにした。老アントニオが話しだすのがわかっていたからである。おもむろに、私はドブラドルのタバコ巻紙がないので、われわれはトウモロコシの包葉で巻いたものをこう呼んだーに火をつけた。老アントニオは私からタバコを奪いとり、自分がついていた巻きタバコに火をつけた。そして、これから私が皆さんに話すよい夢と悪い夢のお話しをしてくれた。

老アントニオは語っている。

「世界には悪い人がいる。とても悪いので、その悪いことは外に拡張し、妖怪のように出歩きだしていた。よい人が悪い夢、つまり悪夢を見るようになるのは、自分の夢を見ているからではない。自分と関係ない夢を夢見ているのである。だから悪夢を見ても、なにも怖がる必要はない」
このように老アントニオは指摘した。

「われわれが理解すべきは、そのような悪夢はわれわれの夢ではないことである。その意味で、われわれがその当時いた世界は、まさに悪夢そのものだった」

さらに、老アントニオは言った。「そうした悪い夢、つまりわれわれが抱えている悪夢は、自分たちとは無縁の夢で、自分の夢を外に放り出したままにしている他者の夢である。寝ている時、われわれはそのことに気づかず、その夢を捕まえ、自分の夢のなかに取り込んでしまう」

一方、「よい夢もある」と、老アントニオは語った。「いくつかの夢はよい夢である。だが、われわれはその夢を現実のものに変えるまで、その夢を覚えていない」

老アントニオは言った。

「たとえば、われわれは何度も自由を夢見てきたことがある。自由を夢見るとき、われわれは他者を夢見て、その人に語りかけた。われわれが語る言葉や耳を傾けること自体を恐れる必要はなかった。われわれの夢のなかでは、われわれは何の問題も抱えることなく、異なった存在のすぐそばにすることができる。われわれはお互いを知り、それを通じて、対立や衝突を生じさせることなく、本来のあるべきものになれる。夢の中では、命令する者も従属する者もいなくなる」

そして、「このよい夢は自由と呼ばれる。そうした夢を獲得したことに気づくことも、気づかないこともある。闘争の中で自由を獲得したときだけ、われわれはよい夢を記憶する」と、老アントニオは言った。さらに老アントニオは語った。

「正義という別の夢がある。ある人は正義のことを夢見ている。それは、世界が対等で、平らになることである。食卓に光が注ぎ、言葉が生きる糧がある世界である。人々は笑い、歌い、踊ることになる。世界が、上も下もない、本来のあるべき姿になっているからである。この夢は連続しているので、われわれ、つまり慎み深く、気取りのない人は、ついそのことを忘れてしまう。だから、正義が実現することを目の当たりにするまで、それを思い出さなかった」

さらに、老アントニオは言った。

「われわれはよき存在になろうと夢見ることもある。よりよき人間、個々の場合に応じて、よりよき男や女でありたいと、われわれは夢見る。その夢の中で、ある人は、自分が完全ではないが、数分前、前日、前年より、よくなっていると感じていた。より完成したものになったと感じていた。なぜなら、他者の声に耳を傾ける力が大きくなったからである。他者に贈る言葉がよきものだったからである。自分が孤立していないことがわかったからである。夢の中では見つけられたが、自分の外側に実際にあったこの大地という同じ場所で、同じ問題をめぐって、自分のために戦ってきた他者がいたことを知っていたからである」

さらに、老アントニオは言っている。

「われわれがよりよき存在となっているこの夢では、存在していた色や音楽はより豊かなものだった。夢はしばしば音楽となった。われわれがよりよい存在になる夢においては、われわれの頭や夢から抜け出し、われわれが目覚めているかを監視しているのは、音楽である」

老アントニオは立ち去る前、私に次のように言った。

「よき存在になりたいという夢は、多くの場合、お前が聴いている音楽と同じようなものだ」
こう言って、老アントニオは姿を消した。



ベラクルスのハローチョのバンド

私が話していることを理解し考えている人たちは、私がある時に聴いていた音楽がソン・ハローチョであることを知っているだろう。ソン [ベラクルス州中部の民衆音楽] とウアパンゴ [ベラクルス州北部などワステカ地方の民衆音楽]こそ、私をはじめて音楽や音楽家たちをのぞき見るようにしてくれた二枚の扉だった。その後、本格的に扉を開いてくれたのは、ロックである。

おやすみなさい、同志の皆さん。ありがとう。

5 「私」と「われわれ」という言葉の誕生 (2006/2/3、ベラクルス州オリサバ)

われわれの同志である一人の指導者がわれわれに話してくれた。彼はアントニオという名前だった。われわれは彼を老アントニオと呼んでいた。

われわれの大地にあるあの土地で、われわれの戦いを指導しているのは、年齢を重ねた男女の先住民である。われわれは彼らを年長者、そしてあなた方は老人、または年寄りと言っている。老アントニオと呼ばれた人物—すでに亡くなっている—は年取った指導者の一人だった。22年前、そして今と同じ1月、つまり 22 年前の1月、彼はわれわれに話してくれた。いくつかの言葉の由来について話してくれた。



オリサバ市での集会

この「別のキャンペーン」のこの場所で、ここで、われわれが耳を傾けている人々、つまりこのオリサバの地で発言した人々、さらにはベラクルス州の南部や北部、そして今われわれが滞在しているベラクルス州の中部の都市や共同体で発言した人々とともに、われわれはそうした一連の言葉の意味を理解できるだろう。

「別のキャンペーン」とされるわれわれの運動は、この集会室でも、何らかの形で表現されている。われわれは、上の世界にいる連中によって蔑まれてきた。彼らはわれわれを迫害し、搾取し、嫌がらせを行ない、投獄し、殺害してきた。

われわれに言葉の歴史を話してくれた老アントニオは、「私」という言葉がどのように誕生したかについて話した。老アントニオは、「この大多数の人と同じように、この大地にいた最初の男女は先住民だった」と、言った。

さらに、「最初にこれらの男女が行なった仕事は、すべての人々に分配できる組合せをつくることだった。そこに権勢家や金持ちが登場し、皆の仕事を独占するようになった」と、言った。

すると、われわれの最初の先生、年長の先生たちは、「こうして、われわれの大地、つまり現在、われわれがメキシコと呼ぶ大地を駆け巡る苦悩と闘争に関する歴史は始まった」と、言った。

さらに、先生たちは言った。

「まず一人が話しました。自分の苦悩、苛立ち、憤慨を命名するに当たり、彼は『私』と言いました。そして、『私は苦しんでいる』、『私は苦悶している』、『私はこんな問題を抱えている』と、言った。それによって、仲間として自らを認知することを習得するようになった。『私』が登場する前には、何も存在していなかった。生まれた『私』が登場する以前には、搾取も悲惨な生活もなかった。人が『私』という場合には、一個人として発言しているのであり、集団として発言しているのではない」

そして、老アントニオは次のように言った。

「われわれが『私』という時、われわれは自分たちの歴史を命名しているのである。それを契機にわれわれはほかの言葉を習得する。われわれは、見ることや聞くことを通じて、自分たちとちがう他者を認知できるようになり、そうした存在を『彼』や『彼女』と命名する。だが、ほかの存在から切り離された一個人のなかに、われわれはとどまり続ける。聞く耳を持ち、言葉を聞くことではなく、心を開くことで、われわれははじめて、『彼』や『彼女』なかに、こうした同じ苦悩や苦痛が存在することを認知できる」

「『彼』や『彼女』と出会うとき、『私』は彼らの抱える苦悩が自分のものと同じことに気づくことになる。そして、構築することも成熟させることも難しい言葉、つまり『われわれ』という言葉構築することになる」と、老アントニオは言った。

「『私』、『彼』、『彼女』、そして『お前』—十分に信頼できる時の呼び方—や、『あなた』—敬意を払っている兆候—は、『われわれ』に変容するのである。『彼』や『彼女』、『お前』

や『あなた』を命名した『私』を命名することになった苦悩や苦痛は、歓喜に包まれ、『私』を変革させる機会を手にするようになる」と、老アントニオは言った。

「いくつもの苦悩が集まるときがくる。私と彼、彼女、お前とあなたがいっしょになり、この苦悩、この苦痛の責任はいったい誰のものだろうかと尋ねだした。まず責任を負うべきは個人、その後、家族、さらにいっしょに仕事をした集団全体ということになった。やがて、話し、耳を傾けていると、こうした事態の責任を負うべきは、上の世界の連中であることに気づいた。こうして『彼ら』という言葉が誕生した」と、老アントニオは話した。

「『彼ら』や『彼女たち』と言っているとき、人は上を見つめる。上の連中は、われわれの貧困と引き換えに自分の富を形成する。われわれの不幸と引き換えに、自分の幸福を作りあげる。われわれの現在や過去と引き換えに、自分の未来を作りあげる」と、老アントニオは言った。

「下の人たちについて語ることは、とても心地のよいものだろう」と、老アントニオは言った。

「われわれが教えられたことは、ある段階になると、われわれは『私』を放棄しなければならないことである。そして、彼や彼女という存在を確認できるようになるべきである。彼らと協力し、われわれの祖国が必要とする『われわれ』を構築すべきである」と、皆にむかって言った。

「大いなる苦痛をともなう恐ろしいことかもしれないが、われわれは自身から自己を切り離さねばならない。われわれは他者を見つめることを習得すべきである。それこそ、インディオである民族として、われわれが他者とはどのような存在であるかを心で理解できる唯一の方法である」と、老アントニオは言った。

そして、われわれに向かって言った。老アントニオは次のように言った。

「インディオの諸民族がお互いを知り、われわれとして発言することを習得すべき時が到来するだろう。だが、われわれを搾取し、辱め、軽蔑している連中、『彼ら』や『彼女たち』が、さらに増えていくことも間違いない。だから、それだけでは十分とは言えない。インディオの諸民族として、われわれは他者の心に耳を傾け、他者の心に出会う方法を習得しなければならない」

6 もう一度、昼と出会うまで (2006/2/13、プエブラ州サンミゲル・ツィナカンパン)

長い間、悪しき政府と話し合ってきた結果、われわれはインディオ人民である自分たちの権利や文化が認められていないことに気づいた。そこで別の道を探すことにした。今、われわれはその道を歩んでいる。ここに向かう前、われわれの指揮官である100%の先住民で、100%のメキシコ人である司令官たちは、彼らが集まっている場所に私を呼び出した。そして、私にひとつの話をするから、これから立ち寄る場所で、その話をしてほしいと言った。そのなかには、われわれの指導者で、1ヶ月前に亡くなったラモナ司令官という先住民ツォツィルの女性もいた。男女の同志たちは言った。われわれ全員を集め、私が皆さん方に今話しているこの話を語り始めた。

われわれのはるか昔の祖先、最長老たちが言うには、最初に神々が世界を作ったとき、神々はそれを正しく作らなかったという。神々は、世界を本来あるべき姿にしなかったという。そして、世界が本来あるべき姿になるまでに、とても長い時間が必要だった。そして、最初の神々は、自分たちが創造した男女77人を集め、彼らと呼ばひ、これから起きることを伝えた。これらの神々は、自分たちが世界を作ることに十分な注意を払わなかったため、大地の色をしたわれわれを迫害し、辱めてきたのだと。

聞いていた男女は、神々にこれから何が起こるかをたずねた。「とても長くて苦しい夜がやってくる。われわれの人々は泣くだろう。彼らは苦しむだろう。そして、彼らの心と頭の中には忘却が訪れるだろう」と、神々は言った。

それらの男女はとても悲しくなった。「われわれを歩かせる言葉はどうなるのか、われわれを

踊らせる音楽や歌はどうなるのか、われわれの踊りはどうなるのか、われわれの色はどうなるのか」と、泣きながら神々に質問した。すると神々は、「何も知らない、ここまでが私の仕事の範囲だ。あなたは、夜を追いかけて歩き、ふたたび昼を見つけるまで」と、言った。

そして、最初の神々は守護者たちを配し、昼を見つけることができるまで、夜の道を探して待つように命じた。そして、彼らの中に「コウモリの男女」を意味するツォツィルを配し、コウモリが夜を歩くように、夜を歩くことを教えた。彼らに対して、言葉は行き来しなければならないことを教えた。インディオの人々が夜から脱出できるようなドアや窓を見つけるまで、たずねたり聞いたりしなければならない。

指揮官である男女の同志たちが、私にこの話をしてくれた。そして、歩いて、われわれと同じような女性の同志を探せと言った。われわれの色、大地の色で顔を覆い、夜の家に住む仲間を探しなさい。コウモリが飲むもの、歩くのに必要な水を探しなさい。そこに着いたら、それらの男女がもっている言葉に耳を傾けなさい。聞くと同時に、われわれの言葉も伝えなさい。

彼らと一緒に、彼らの歌のなかに、彼らの音楽の中に、彼らの踊り、文化、痛みと反抗の中に、われわれは昼を垣間見るドアと窓を見つけることを始めるでしょう。そして、その昼が来たとき、あなたがこれらの男女と出会ったとき、夜の家があるところ、コウモリが水を飲み、渴きを潤すところで、このお話を語り、われわれがそのドアを開けなければならないことを、男女の同志に伝えなさい。われわれは夜に窓を開け、昼を垣間見ることができるようになるべきである。それは、最終的にインディオの人々として、自分たちの権利や文化を認めてもらうためである。そうすれば、言葉、音楽、歌、踊りが、もう一度、太古の昔と同じように喜びのものとなる。

そして、われわれが歩かなければならないその時間、その夜の間、言葉、音楽、歌、ダンスは、われわれが自分自身を忘れないための方法だと伝えなさい。そして、昼の扉を開け、夜を残す窓を開けることができるようになったとき、われわれが何者であるかの認識は、すでに地球上にふたたび人口を増やしている他の人々とともに、ふたたび生まれてくる。

このように私の男女の同志たちは私に言った。今、私は、夜の家、コウモリが水を飲む場所に到着し、皆さんに話すように言われたお話をしよう。

7 大地は恐怖を感じている (2006/2/23、トラスカラ州サンペドロ・トラクアパン)

われわれは、メキシコ南東部の山中、かのチアパスにいる先住民である。ここトラスカラの皆さんも同じように先住民である。会場のほとんどが先住民なので、すでに高齢に達した人々、われわれが長老とよぶ人たちが、皆さんに話せとわれわれに託したお話を語ることにする。

われわれの長老は語っている。ものごとの最初はどのようなものだったか、世界はどうだったか。最初、土地には所有者はいなかった。分配された区画や私的な所有権も何もなかった。しかし、男女が土地を耕し、そこから生きる糧を得ていた。

一人の若者が来て、一人の長老にたずねたと、長老たちは語っている。

「なぜ、われわれはこのように歌うように、小さな歌を歌うように話すのか？」

先住民の言葉はそんなふうに話されていたと、ひとりの老人、長老は若者に語った。当時、神々、世界を創った神々は、先住民の言葉を話す男女はそのようにすべきであると言っていた。男女は歌うように話すと、大地と語るできるようになったという。

そして、それらの男女は、大地、水、樹々、丘、動物たちに語りかけるため、独自の文化を作らなければならなかった。というのも神々が言うには、それらは一体となって存在していたからである。言い換えれば、われわれが男女としてもつ生命は、大地、大気、水などに何もかも依

存している。しかも、大地、大気、水も、われわれに依存しながら存在する宿命となっている。だから、このように愛情をもって大地に語りかける方法である歌として、先住民の言葉は作られたと言われていた。

「そうか。なぜ歌うように話すのかはわかったが、後はどうなったの？」と、若者は言った。

「その後、金持ちがきて、大地や水や大気を独占する時が到来した。そのお金持ちはすべてをお金に変えようとする。土地、食料、大気、湧泉、井戸をお金に変え、さらには人までもお金に変え、売買しようとする」と、神々は言った。

「なぜ、そんなことが起きるの？」と、若者は言った。老人は神々の言葉を若者に伝えた。

「それは何をしなくも起きる。金持ちは満足することを知らず、やりたいことを続ける。破壊しようが殺そうが、何も気にかけない。金持ちがしたいのは金を稼ぐことだからだ」。

「そうだとすると、われわれはそうはさせない」と、若者は言った。

「しかし、われわれはそれをとどめられない。金持ちの計画では、われわれを分断し、分離し、われわれをほかの人から引き離し、われわれは分離される。こうして分離されると、金持ちはわれわれを打ち負かすことができる」と、老人は言った。

「では、われわれはどうすればいいの？」と、若者はたずねた。

「つまり神々が言うには、われわれが大地に語りかけるように、大地もわれわれに語りかけている。われわれはその声を聞けるようにならなければならない」と、老人は言った。

「でも、どうやって聞けばいいの？大地が話していても、私には聞こえない。唸り声をたてて動物が話すのは聞こえるし、樹々を通り抜ける風の音も聞こえる。泉の湧き出る音も聞こえるが、大地の声となると聞こえない」。

「先住民が大地の声を聞けるように、神々は別の方法を考えた。神々は、肌で音を聞くようにと言った。つまり、両腕、顔、両手や身体の肌で、聴けと言った。それを忘れないように、神々は先住民を大地と同じ色にしたのである。いつ先住民に話しかけるべきか、大地がわかるように」と、老人は言った。

「でも、どうだろう？自分の肌の言うことも聞こえないのに」と、若者は問いかけた。

「神々はこう言った。時に応じて、大地は肌にメッセージを残す。男女の人生で経過する時間に応じて、メッセージは合体し、いわゆる皺になる。だから、大地からのメッセージをより多くもつ人は、歳を重ねた人、年長者である。顔、手、身体に皺があると言われるが、それは皺でなく、大地が語るメッセージ、この男女に刻み込まれたメッセージである」と、老人は言う。

「で、何が起きるのか？」と、若者は言った。

「齢を重ねたこれらの男女は、自分の皺に人々の歴史、大地の歴史、大地が発するメッセージを秘めている。やがて、大地が恐怖を感じ、重大な危険、とほうもない破壊が起きると感じる日が来る。その時、大地は褐色の肌色をした男女、より年配の人、古老たちと話さなければならない。大きな不幸が到来するので、目を覚まし警戒すべきだと、人々に伝えることになる。

若者は何が起きているかわからないかもしれないが、より齢を重ねた人たちはその事態に気づく。なぜなら、齢を重ねた人々がかつての状況、大地が体験したあらゆる災厄を知っている。土地を失う痛みを良く知っている。そうすると、共同体まで失うことになるからである」

その老人は、若者に説明するように言う。

「これから次のようなことが起きるだろう。大地が壊れ、危険な状態になると、男女は自分たちの共同体が破壊されることに気づく。ある者はこちらの方向に向かい、ある者はあちらの方向に向かう。ある者は立去り、土地を捨てる。そうして、土地は、世話をする人を失うことになる。金持ちや権力者が到来し、土地を独占できるようになる」

そして、その脅威、大地が抱える痛みは、メキシコ南東部の山岳部にいるわれわれのもとに到着している。また、われわれチアパスのサパティスタ（われわれの大多数は先住民）と同じように先住民で、齢を重ねたわれわれ仲間のもとにも到着した。そして、われわれの統率者である男女が、われわれを呼び集め、次のように言った。

「われわれは、大地、われわれの母なる大地、山岳部に重大な危機にあると感じている。風、水、動物や樹々は、うめき声をあげている。大地はあらゆる苦悩のうめき声を集めている。われわれのもとにやって来て、何かをすべきだと言っている。そして、これらの先住民族の男女の長老であるわれわれは、この苦悩はここチアパスだけではなく、メキシコ全土でも同じことが起きていると考え、感じている。だから、われわれのようなほかの仲間、つまりほかの言語を話しているが、大地に歌いかけるため「歌の口調」で話している先住民の仲間を探しに行かなければならない。彼らの肌は、われわれと同じ色をしている。われわれはいかに闘うべきであるか、という大地からわれわれへのメッセージであるシワが、その肌には刻まれている。

だから、彼らは私を派遣し、次のように言った。「われわれと同じような男女の同志を探し出し、同じメッセージを受け取っているかどうか、彼らに尋ねなさい」

8 良い夢を守る (2006/3/22、ハリスコ州トウспан)

良い夢を保管する箱

われわれの最古老、われわれを導く人、われわれの先祖、齢を重ねた人、高齢の人たちは語っている。最初の神々、世界を創った神々は、世界をほぼ完璧なものにして創ったという。すなわち、平等でむらのないようにした。上に立つ者も下に立つ者もいなかった。土地には所有権はなく、土地を支配する連中はおらず、土地を分割する書類も、土地を駄目にするお金もなかった。

さらにわれわれの最古老は語っている。最初の神々は、最初の男女、つまりトウモロコシの男女を創った。それ以来、トウモロコシはこの土地に最初に住んだ男女にとって神聖なものとなった。しかし、われわれの最古老が語るには、最初の神々は疲れたので、引退することにしたという。世界を創り、完璧にしようと懸命に働いたので、休息することになったのである。そして次の順番として、別の神々が来て、さらに別の神々が次々と登場した。一方、世界はもともとから歩むように、下に向かって歩み続けた。

また、次のようにも語っている。ある日、この世界を創った最初の神々ではないが、その後に来た最初の神々が、何かに出くわしたと、大騒ぎしながらやって来た。そして、トウモロコシの男女に集会を開き、会議をするように呼びかけた。

男女が集まると、神々は「ひとつ問題がある。われわれが直面する問題がある」と、言った。つまり、最初の神々、この世界を創造させたもっとも最初の神々は、トウモロコシの男女にあることを伝え忘れていた。この大地に欺瞞が住みつく時代が到来することを伝え忘れていた。

これらの神々、もっとも最初ではないが重要な神々は、トウモロコシの男女に説明しだした。お金がきて、それとともに権力が大地の隅々まで欺瞞を植え付ける時が到来すると、説明しはじめた。これらの神々が言った。

「その時になると、夜が何年、何世紀も続くようになる。欺瞞とお金が大地に住み着き、すべてが見かけとは異なるようになる。欺瞞が横行し、それが真実に見えてしまう。自分はこの土地のもともとの住民であると称して、権力者におもねる者が出てくる。われわれの歌、言葉、衣装を使う者も出てくるだろう。お金にわれわれが屈服していると見せかけるためである。夜が夜であるだけでなく、昼までもが夜になってしまう。しかも、欺瞞によって、そのように変わったと、われわれに信じ込ませる。

「そして、お金という権力が植え付ける最大の欺瞞は、昔からこうだったので、これからも変わることはない、われわれを信じ込ませることである。そして、われわれ、この大地の先住民族と称する人々、トウモロコシの男女は、この欺瞞のなかで長く過ごすことになる。－ウィチョ

ール山地で育つトウモロコシが様々な色であるように、民族や人の肌は様々な色をしている。しかも、この欺瞞はすべての人を支配し、誰もが嘘を真実であると信じるようになってしまう。この状態は長く続き、われわれの先住民の苦悩はとてつもなく大きく、われわれ女、男、年配者、子どもはおおいに泣くことになる」

トウモロコシの男女はみんな黙って、こう警告した神々がさらに何か言うのを待っていた。しかし、神々は、何もできないと言ったきり、黙ったままだった。トウモロコシの男女の会議では、混乱と騒動が始まった。さて、何をすればいいのか。欺瞞が大地に蔓延し、トウモロコシの男女の苦悩や苦痛が始まる日がいつ到来するのかをどうすれば知れるのか。神々は、その日がいつ来るかは知らないし、大地に到来するこの悪からどうすれば解放されるか分からないが、何かすることはできると言った。



会場のウィチヨールの古老



会場にいたマリチュイ

「われわれはトウモロコシの男女と話をした世界に住んでいた神々は、計画と提案をした。その欺瞞の日が到来し、夜が長く、日が偽りであるときは、日が疲れ、太陽が眠りこけていることを意味するので、太陽を目覚めさせねばならないだろう」と言った。太陽を起こすためには、良い夢、良い記憶、闘争心が必要である。

神々は言った。「われわれができるのは、その日が到来したとき、何をすべきかわかるよう、あなた方を助けることである。そして、これらの土地の先住民であるトウモロコシの男女の集会の合意において、その夜が来たときのために、自分たちが守護者、監視者になるという取り決めが結ばれた。

「問題なのは夜ではない」と、神々は言った。

「問題は騙されないこと、けっして終わることのない永遠のものだと信じないことだ。そのためには、良い夢を保持しなければならない。ふたたび太陽が生まれ、ふたたび日が成長するという夢である。今度は真実を伴って。そうなれば、世界は平等なものになる」と、彼らは言った。

「で、あなたはどうするの?」と、トウモロコシの男女はたずねた。

「お前たちの中から、もっとも強靱で、勇敢で、賢い者を選ぶことにする。そして、そのような夜が到来したら、その者たちに明日の良い夢を託すことにする」と、神々は答えた。

すぐに、集会に参加していた男たちは、「俺だ」「いや、私だ」と言って、誰がもっとも勇敢で、堅固で、賢いかを知るために、お互い争いはじめた。

集会の場でしばらく争わせておいた神々は、最後にこう言った。

「もし、チャンスを与えてくれるなら—なぜなら、その神々はもっとも追い詰められていた—もし機会があるなら、おまえたちのなかで誰がもっとも強く、勇敢で賢いか、教えられる」

集会では合意に至らず、「よし、神々に教えてもらおう」と、いうことになった。

そこで、これらの最初の神々、いちばん最初ではないが、ある意味で最初の神々は、年老いた男女を選んで、次のように言った。

「二人は、この共同体でもっとも強く、賢く、勇敢である。だから、二人の皮膚に夢を保管してもらおう。覚醒すべき日の到来がいつであれ、トウモロコシの男女は、世界がどうあるべきかを忘れないようにするために」

老人と老婆は神々のもとに赴き、良い夢をリュックに入れようとしたが入らなかった。ズボンやキャミソールのポケットに入れようとしたが、無理だった。手で運ぼうとしたができなかった。新たな夜明けを迎えることができる良い夢をどのように保管したらいいのかわからなかった。

そこで、神々は、夢を保管する場所は皮膚の中だとして、「これからは、老人と老婆が、太陽が昇る時のための良い夢の記憶を持ち歩くことになる」と、言った。そして、そんな場所によい夢があると、誰も気づかれないように、良い夢を収容できる顔や両手、身体全体の皮膚にはめ込みだした。こうして高齢者には、しわが出てくるようになった。実際に、顔や手、身体にあるしわは、その良い夢を忘れないよう保管している。

最初の神々や集会に集まった人々は、いろいろ議論している際、それだけでは不十分で、いつ覚醒すべきかを知る必要があると言いだした。神々は、誰か良い記憶を保つための要員を出してほしいと言って、集会参加者の中のもっとも勇敢で、賢く、強い者を見つけてほしいと言った。男たちは誰が優れているかを確かめるため闘いだしたが、合意には至らなかった。そこで、神々に、誰がもっとも優れ、勇敢で、強く、賢いのかをたずねた。

すると、神々は一人の女性を選び、「この者こそ、あなた方の中でもっとも勇敢で、強く、賢い人物だ」と、言った。そして、覚醒すべき記憶の夢がやって来るように、女性たちは夢を髪につけた。昔の人たちによると、トウモロコシの女と男は、三つ髪の先住民女性の中にもっとも賢明な人がいることを知っている。この覚醒すべき夢が保管されているのは三つ編みの中である。

別れが間近になったとき、最初の神々は、すでに先住民の長老や女性たちに、世界を再生させるための良い夢を保管する箱を委託していた。神々は、何が起きるのかを話していた。

どのように権力者どもがやって来るのか。その肌の色は何か。何をするのか。どのように偽りの種をまくのか。われわれ先住民の多くがどのように自分の魂を売るのか。大多数はどのように毅然とした態度をとるのか。それぞれの未来と生命がある大地をどのように世話すべきか。さらなる欺瞞を提供するため、権力者はどのようにして来るのか。われわれは昔からこのような存在だったと言いくるめようとやって来るのか。われわれに物を売りつけ、われわれの誰もが物を買うようになったのか。インディオの人々であるわれわれは、少数で、賢くなく、強くなく、有能でなく、下劣な、まるで動物のような存在であると、言ってくるのか。

その日が到来すると言われたが、それはスペイン人がこの地を征服したときにやってきた。その時から、独立、革命があったが、われわれインディオの人々は、われわれの言語、肌の色、背丈、存在様式を軽蔑されて扱われ続けてきた。また、インディオの人々の一部は、上の連中に自らを売りつけ、自分たちとその魂とともに、われわれの踊り、色、祝祭、言語までを売っている。

この時期、われわれは、メキシコというわれわれの祖国の道を歩んできた。われわれは、先住民族、最初からの住民たちと会い、それぞれの苦悩の話を伝え、聞こうとしてきた。われわれは、どの場所でも、同じこと、同じ憤慨、同じ憤怒と出合ってきた。それは、われわれの権利や文化が尊重されていないためである。しかし、今はほかの新しいことも起きている。われわれは、われわれの大地の土地の破壊、われわれに帰属するもの、守り世話するためにわれわれに与えられたものの略奪に直面している。

一部の地域、この国の山岳部では、もっと年輩の男女が宣言している。夜は終わらなければならない。三つ編みの髪を解かなければならない。皺をかき集めなければならない。今こそ、良き夢について語るべきである。連中がわれわれに売りつけた欺瞞の夜を終わらすべきである。夜明けが来るべきだという。自分の順番が来たら目覚め、寝るという正常な日々が来るべきである。

それが起きないなら、長い夜が決定的となり、所有する土地、世話をする土地、愛する土地もなくなるだろう。われわれが、連中が売りつけた欺瞞の悪夢から覚醒しないなら、もう闘うべき大義はなくなってしまう。

9 カラコルの戦士 (2006/4/3、ミチョアカン州シラウエン)

シラウエン共同体の皆さん。こんばんは。歓迎していただいたことに感謝したい。

かなり昔のこと、先住民のなかに一人の戦士がいて、その戦士の盾と戦争と強さの印が巻貝だったと、昔の人々は言っていた。それによると、その戦士が強かったのは、巻貝で他の戦士を召喚し、自分たちの脅威となっているものをともに打ち負かすことができたからである。やがて、巻貝は先住民の共同体で人々を会議に呼び出すために使われた。いろいろな場所にいる人たちが集まり、集団で解決すべきことを集団で議論しだした。こうして、巻貝は、われわれのように集団や共同体コミュニティが、問題に向かい合い、解決するために呼び掛ける手段となった。

さらに語っている。巻貝の戦士、マヤ戦士の伝説は、スペイン人、異邦人たちがこの大地を征服するようになった時代にも伝わっていた。以前は、脅威となっていた他の部族や共同体に立ち向かうため、巻貝で戦士を召喚していたが、やがて異邦人と対決するため、巻貝を使うようになった。また、われわれが敗北し、征服されたと言われるが、それは、巻貝の呼びかけに応じない民族や人々がいたからである。

われわれはこの地にやって来たのは、エフレン・カピスの思い出、エミリアノ・サパタ共同体成員連合 (UCEZ) の尊厳ある闘い、シラウエン共同体の尊厳ある闘いのためだけではない。われわれがここまで来たのは、メキシコ南東部の山中まで、シラウエンのカラコル [2003年10月、マルコス・パスが、「叛乱の噴火、シラウエンの青い湖」として中学校に創設したチアパス州以外で最初のカラコル] の呼び掛けが届いていたからである。われわれが聞いた呼び掛けは、危険な状況ということだけではなく、それに対決するために断固と抵抗しているものだった。われわれは、メキシコ南東部の山中から、サパティスタの先住民共同体のメッセージを携えてきた。皆さんは孤立していないことを知ってもらうためである。われわれは皆さんとともに戦っている。われわれにとって、このカラコルはわれわれの一部である。われわれにとっては、この共同体とカラコルに対する攻撃はすべて、EZLN 支持基盤のサパティスタ共同体に対する攻撃にほかならない。



シラウエンでの集会参加者



エミリアノ・サパタ共同体成員連合



UCEZ 創始者エフレン・カピスの横断幕

10 世界を支える生命の樹 (2006/4/10、モレロス州クエルナバカ)

われわれの最も昔の人々これらの土地の最古の先祖たちは、ツィツィメ、骨だけの者、偽りの心を持つ者、人を食い尽くす者たちが、ケツアルコアトルとマヤウエルに迫害したものの、二人は世界の屋根を支える樹になったことを語っている。こうして、巻員のシンボルを持つ者の良い風が吹き、崩れた世界をその頂で保持するため、樹が作られた。

今日、赤い茨の木 [ポチョーテ] がそびえ立っているここメキシコ南部、ナワやマヤの人々が「太陽の左側」と呼んだ南部の地で、われわれの将軍エミリアノ・サパタの生命、闘争、尊厳の樹を思い出している。



ボルボニクス絵文書のマヤウエルとエエカトル (風の神ケツアルコアトル)



マリアベキーノ絵文書のツィツィメ

トラネパントラ、テテラ・デ・モンテ、オコテペック、テテルシゴ、クアウトラ、アネネクイルコ、テコマルコ、サカテペック、トラキルテナンゴ、ホフトラ、バランカ・デ・ロス・サウセスだけでなく、国民行動党の間抜けなセルヒオ・エストラダ・カヒガルが悪政を敷くモレロス州の全域で、今まさに起きていることをわれわれは見聞してきた。

なぜなら、大地は息絶え、それとともに世界を支えている樹々も死んでいることを、この天空の下でわれわれは耳にし、感じてきた。PAN 州政府によって破壊されようとしているのは、クエルナバカのアカパツィンゴ地区にあるバランカ・デ・ロス・サウセスの樹々だけではない。



モレロス州トラヤカオアンにあるポチョーテの木



バランカ・デ・ロス・サウセスでの抗議行動

連中は、自然とともに、われわれすべての男女である樹々を殺そうとしている。われわれは、新しい人食いども、つまり銀行、産業、商業、土地、水資源の大所有者、彼らとその召使である上層の政党などが壊した世界を私たちの闘争で構築しようとしている。

われわれの敵である連中は、われわれ農民から土地を奪ってきた。エヒード土地私有化登記計画 [Procede] や共同体土地私有化登記計画 [Procecom] といった欺瞞的プログラムで、農民や共同体成員、エヒード農民の土地を奪っている。われわれが畑から産み出している作物を安く買いたたいている。同じ連中が、遺伝子組み換え種子、肥料や殺虫剤で、大地を汚染している。農村部の貧困化をもたらした連中は、尊厳ある仕事や適正価格の不在により、われわれを都市部や米国に移住させてきた。農民、農業労働者、日雇い労働者、エヒード農民、共同体成員、小規模生産者、インディオ人民であるわれわれを搾取している。

これらの敵に抵抗し、対峙し、打ち負かすため、われわれ全員が団結すべきである。農村部の生産者だけでなく、都市部の労働者、大金持ちに蔑まれ辱められ抑圧されるすべての人々と団結すべきである。

われわれは団結し、金持ちが資本主義の深淵に投げ込んだ世界を持ち上げるのに役立つ一本の樹として、われわれ自身を再植しなければならない。

われわれは、エミリアノ・サパタの血をわれわれの血管のなかで、今一度、たぎらすべきである。彼を倣って、権力を掌握するのではなく、下から立ち上がるべきである。謙虚で虚飾のない人々とともに、悪い支配者を打倒し、資本主義の泥棒どもからわれわれの祖国を浄化し、別の祖国、別の国、別のメキシコの建設を始める運動を育てなければならない。

今日、われわれは反抗的で尊厳のあるモレロスの土地にいる。自然への敬意、土地の共同体への返還、先住民の文化と権利の尊重、公正な価格、土地と自由のために闘うモレロスである。

今日、別のキャンペーンとしてわれわれは伝えたい。われわれの歩みとともに、エミリアノ・サパタが歩みださねばならない。金持ちやその奉公人に対して立ち上がらなければならない。われわれのものである土地、工場、店舗、銀行、医療、教育をわれわれの手で取り戻すべきである。

今日、われわれは闘い続けなければならない。もはや孤立してではなく、下と左にいるわれわれ全員が団結すべきである。われわれは、世界を立ち上がらすための樹である。しかし、今はもう別の世界、われわれ男女、別のキャンペーン、われわれの生命である樹を立ち上げる時である。

もうひとつのモレロスにあるクエルナバカのバランカ・デ・ロス・サウセスから、悪しき PAN 政府が目論んでいる強制退去との闘いに備えながら、われわれの総司令官エミリアノ・サパタ・サラサールに挨拶を送りたい。

11 石と夢 (2006/4/30、メキシコ市マグダレナ・コントレラス)

私は、山、山々の上、まさに山の頂で生まれた。われわれは、そこにアグアフリアというキャンプを設営していた。私はそこで生まれ、マルコスという名前が付けられ、そう名乗っている。やがて「叛乱副司令官マルコス」と命名されたが、長すぎるので副司令と呼ばれるようになった。

さて、私が生まれたのは山の中だということは言ったよね。そこには多くの木や湧泉、大小の動物がいる。例えば、たくさんのクモがいて、多くの種類がある。とても小さいものから私の手のひらほどの大きさのものまでいる。とても毛深いものは、君たちはタランチュラと呼んでいるが、われわれはチボーとか、イエルバ [草] と呼んでいる。このクモは髪の毛で巣を作る。例えばわれわれが寝ているとき、音を立てずに近づき、美容師のように髪の毛、あるいは足毛のある馬の毛を切り、巣を作る。

副司令になる前、私は馬だった。そう私は悲しげな目の馬だった。その後、私は副司令になったが、鼻はそのままだったので私の鼻は大きい。というのも悲しげな眼をした馬だったからだ。

さて、私が馬だったころ、小さな女の子に出会った。このくらいの小さい女の子だった。その子は、11月生まれだが、ディシエンブレと名付けられた。わからないかもしれないが、「割れたフルーツ」という別のお話で説明した。とても小さな女の子は悲しそうだった。都会の人がチピル [ぐずりっこ] という状態だった。つまり感情が溢れ、しゃっくりのようなため息を一日中ついていたー (副司令はため息)。なぜそんなに感情に溢れているのか分からなかった。かつて馬だったが、私はもともと女性を理解できない。ディシエンブレのように小さくても、ドニャ・ファニータのように年配でも。



タランチュラ



デカ鼻副司令

ドニャ・ファニータは、アントニオというとても物知りの人の連れ合いだった。われわれは彼を「老アントニオ」と呼んでいた。老アントニオは、山々やわれわれの先祖に関するお話をたくさん知っていた。私に先住民の言葉や山で生きる方法を教えてくれた。天空を読み、風の匂いを嗅ぎ、人の心の中を見る方法を教えてくれた。

老アントニオは多くのことを教えてくれたが、一部は習得できたが、残りは私の脳みそに張り付いたままである。つまり、私ときたら、馬どころかロバ程度で、まったく習得できなかった。だが、老アントニオはがまん強く、教えが私の頭に入るまで、繰り返し何度も説明した。

さて、私はディシエンブレというとても小さな女の子に出会ったと話したが、彼女は11月生まれだ。ある村の近くにある小川に水を汲みに行ったときに出会った。彼女は岩の上に座り、水に足をかけ、とても悲しそうにため息をついていた。私が水を汲んでいる場所に彼女がいたので、ちょっとずつ近づいたが、彼女は気づかなかった。彼女に振り向いてもらおうと、少し咳をした (副司令は咳払い) が、彼女はため息をつくだけだった (副司令はため息)。さて、どうしたものかと、私は考えた。

私は気を取り直し、女の子に「こんにちは」と、言った。もう昼過ぎだったからである。4月なのでかなり暑く、喉が渇いた私は水を飲みたかった。その女の子 (つまりディシエンブレ) は、私がいつも水を汲んでいた所にいた。

返事がないので、「こんにちは」と、繰り返した。

するとディシエンブレ、つまり女の子は、私を見て、「ハイ、お馬さん」と、言った。

馬が「こんにちは」と言ったのに、女の子が怖がらなかったのが嬉しかった。しかし、こどもたちは、すでにわれわれ馬でも読み書きし、地理や数学ができることを知っている。さらに、学校で教えられていることや、馬が大地で読んで学習するのを知っている。なぜなら、ほとんどいつも、…だから、いつも馬は頭を下げて歩いている。それは、大地に書かれた教訓を学習しているからだ。

そんなわけで、水を汲みたいのですがと、女の子—つまりディシエンブレ—に言わなければならなかった。彼女はいつも私が水を汲む場所にいた。彼女は脇によってくれたが、その前にため

息をついた（ふたたび副司令のため息）。タンクを満タンにした後、彼女に名前を尋ねると、11月生まれなのに、ディシエンブレなのと答えた。もともと、私は不思議なことをする人間のことを理解できなかった。だから、11月生まれなのに、ディシエンブレ [12月] という名前がついたのか、詮索する気にならなかった。

私はその女の子に、どうしてこんなにため息をついているのかたずねた。悲しいのか、お腹が痛いのか、何なのか、病気だったのではないかとたずねた。彼女は何か言いたかったようだが、ただため息をつき、こどもたちが感情一杯になったときに出るしゃっくりをし始めた。

フーム、ところで、どうすればいいのか？

私が馬ではなく小さな風だった頃、老アントニオがした話を思い出した。そして、老アントニオが風に向かって語りかけたように、私は唇に雲を乗せ、小さな女の子に石と夢のお話をした。

われわれの最年長の祖父母は語っていた。最初の神々、言葉で世界を生んだ神々は、とても無頓着で、創ったものをあちこちに放置していた。世界の最初の昼と夜に、トウモロコシの男女、この大地の先住民、トウモロコシと言葉で作られた人々は、あちこちで神々がゴミ捨て場に放置したものに出くわしていた。



大地を耕す堀棒コア

トウモロコシの人間たちは、サンダル [ワラチェと思われる]、あるいは鍬、コア（われわれが種まきに使う棒で、それで地面に穴を開け、トウモロコシの種を播く）などよく出くわしたという。そして、「道の真ん中に転がっているこのサンダルはいったい誰のもの」と尋ねていた（だから、お母さんたちも同じように聞かぬ。そうじゃない。「このサンダルは誰の？」そうじゃない。「下着を散らかしたのは誰？」など）。そして、トウモロコシの人間たちは、道の真ん中に放置されたサンダルは誰の？と聞いた。そうなる。じゃない。一怒るとそうなる。だよ。このサンダルは誰の？」本当だよ。もち。われわれはそれをよく知っている。

「このサンダルは誰の？」…うーん…もう、私は失くした…うーん…すぐにわかったのは、それが誰のでも、トウモロコシの男女のものでもないことだった。なぜなら、彼らはほんのわずかだった。つまり世界にはあまり人がいなかった。なぜなら、男女が心地よい疲労感で充たされるため、種をまき、生まれくる生命で腹が濡れるには、まだ多くの夜明けが必要だった。

なくなったサンダルは誰のものでもなかった。だから、サンダルがないので、どこかの神様がびっこのように歩いていたことがわかった。神様は、自分のサンダルを探すかわりに、『捨てたサンダルなど拾わない』と、歌い始めたので、誰が失くしたのか、わかった。そして、サンダルは捨てられたままだった。神々から落ちたのは、サンダルだけでなく、夢も落ちこちた。

最初の神々、世界を誕生させた神々は、ハンモックで寝ていた。世界を創造した最初の神々は、とてもよく歩き、いつも雑囊一買い物バッグに似ているが、それより小さい一を背負い、ポソールやトルティーリャ、ハンモックを運んでいたのも、疲れていた。腹が減ったら、どこでも立ち止まり、小川の脇に座り、ポソールに水を混ぜ、トルティーリャとともに食していた。

最初の神々は、眠くなると、2本の木を探し、つるでハンモックを吊るし、難なく眠りにつき、良いことの夢を見ていた。しかし、その後、なかなかしっくりといかず、寝る場所がないかのよ

うに、寝返りばかり打っていた。こうして、神々から夢が落ちだした。しかも、ハンモックは編まれているので、夢は地面に落ちこた。神々が目を覚ますと（最初の神々はよく寝ていたので、すぐに起きられなかった）、ハンモックをまとめて雑嚢に入れ、さあ、行くのだ！と歩き続ける。

その夢は同じではなく、色を違えば、形もちがう夢がたくさんあった。また、落下した際に割れ、多くの破片になったものもある。こうして、大地一つまり世界一は、さまざまな色や形でいっぱいになった。最初の男女はこれらの様々な形や色の夢を石と名付けた。そして、石一つまり夢一で、その小屋一小さな家一を飾ると、とてもにぎやかになった。というのは、夜になると、石と名付けられた神々の夢が小さな光のように見えたからである。

大きな石、ふつうの石、小さな石があった。こどもたちは、その小石を拾い、マタテナ [投げ玉]、アビオン、ベベレチェ [ケンケンパ] をして遊んでいた。小石で夜に輝く小さな道を作った。すると石だった夢も歌いだし、その歌は良いことを歌い、人生、喜び、平和を語った。また、最も小さい小石の中には、大地の茶色い耳に歌うように、愛を語るのではなく、呟くものもあった。



マタテナ [投げ玉]



ベベレチェ [ケンケンパ]

そして、権力者一金持ちとその悪い政府一がやって来て、トウモロコシの男女、この大地の先住民に、多くの害を与えるようになった。この善良な人々は、金持ちが神々の石でできた夢を盗まないように、石をつかみ、遠くに届くよう勢いよく上に投げた。すると、その石は世界の屋根一つまり天空一に張り付き、くぼみ一穴が開いて一ができてしまった。だから、夜になり、太陽が眠りにつき、夜の毛布で体を覆うとき、われわれの山中では、それらの星を見ることができる。というのも、夜一太陽が眠るために被った毛布一は、穴だらけだった。

しかし、最初の神々から落ちた夢、石になった夢のすべてが、天空に隠すように上に飛び上がったわけではない。多くは地上に残り、あちこち散らばった。長い時間の経過とともに、ほこりにまみれ、灰色、黒色、黄色、赤色、青色のまま、輝きを失った。

トウモロコシの男女、この大地の先住民は、この話を自分のこどもたちに語った。そのこどもたちも自分のこどもたちにその話を語り、多くの暦が過ぎていった。だから、われわれの人々、インディオの人々は、地面を見て歩いている。石でできた夢を探して歩いている。そして、隠された輝きが潜んでいるかを占う。それが壊れた夢であることを確かめる。小さな小石を拾い集め、世界にある道に散らばったピースでジグソーパズルをするように、未完成の夢の断片を探し続ける。

壊れて不完全だった夢を完成させたとき、歌になった神々の言葉を聞き、心が喜ぶ。だから、われわれ人々は他の人たちの話を聞くために闘うことはない。石の声を聞くことができるように、沈黙に耳を傾けることができる。それは、生まれる前に壊れた言葉である。われわれインディオ人民が持つ集合的な心に、沈黙の声をまとめる方法を知らなければならない。

ここで私のお話は終わった。ふと見ると、ディシエンブレ、小さな女の子は眠っていた。夢が落ちないように、彼女を適切な場所に横たえ、私は去った。母親がいつも怒っているように呼び方一名前を覚えていない一呼び方をしてしていると聞き、ディシエンブレの母親は、1月から年の月を言い始めた。12月までまだ数ヶ月あったが、私は、「こどもの日」の4月の時点で、その場を立ち去った。私はゆっくりと山に向かい、インディオの人たち集合的な夢の小さな断片を地面で探した。この夢は完全にそろった時、「尊厳」と言い、歌う。

そして、皆さんに話したこの物語や話があったのは、私が副司令でなく馬だったときで、すべてが簡単だった。別に今、私が副司令だが、それはそれで混乱している。なぜなら、サパティスタの同志は、謙虚で素朴な人々の心の声を聞くため、国中を歩き回らなければならないという考えを持っていた。老人、大人、若者、少年・少女であるかは関係ない。私は雑嚢を背負って歩き、あちこちに連れて行かれる。市民からは「あそこでは、ここだけでいい」と、言われ、私がどのドアから入ればいいのか、通りや街区がどこなのか、知らないことに気がついていない。

しかし、私が生まれた祖国では、自分がどこにいるか知っている。この木がどこにあるのか、この木がどこにあるのかを知っている。また、空や地面には、私たちの仲間の方向性が読み取れる。そして、時には小石を見つけて、歩き続ける力を与えてくれる夢を教えてくれる。たとえ、別の方法、別のキャンペーン、別の世界、つまり、より良く、より公平で、より自由な世界に行かなければならないとしても。

タンタン。



集会参加のこどもたち

11 考え (2006/8/26、カンペチェ州カンデラリア)

このマヤの大地で、われわれが思い出すのは、母なるセイバと、その体に抱かれた考えのお話しである。そこで、われわれの統領でマヤ先住民の尊厳をその血に宿していた人物の言葉で、その考えを伝えることにしたい。それは、「考え」のお話しである。

われわれの祖先のもっとも昔の人々、われわれ先住民の知恵ある古老たちは語っている。

もっとも偉大な神々、世界を誕生させ、歩みださせた神々は、後にその道を歩くわれわれのため、すべてを完了させなかったという。神々が完了しなかったのは、怠け者だったからでも、踊ることに夢中だったからでもない。それがもともとの構想であった。なぜなら、完了し出来上がったとされる世界は、金を神とし、今のように嘘で固めた政府を作っている人間の愚かさを祭祀者とする人々が、上から押し付けたものである。

だから、もっとも昔の神々、道を誕生させた神々が、創った最初の世界には、やりかけのものが多くあった。例えば、考えは、神々の中で生まれなかったと言われる。つまり、考えは、現在、われわれが知っているようなかたちで生まれたのではない。そこにおかれた一粒の種でしかなく、誰かがそれを手にし、芽生えさせ、形や様式、道や行く先を与えるものである。

それから、たくさんの考えが生まれてきた。ひとつや二つではなく、われわれが存在してきた世界を彩っている色の数だけある。例えば、一人の男、あるいは女という個人の考え方が重要であり、集団的な考え方は無意味で、考えるに値せず、集団的な悪など無視して、個人的な善を追求すべきだというという考えがある。

現在、支配している考えは、まさにこれであり、われわれインディオの大地に押しつけられている政府と真実である。これは、われわれをそっくりそのまま抹殺しようとする考えであり、われわれの歴史、文化、土地、尊厳を商品に変えようとする。

だが、この考えは、自分の悪癖を欺き隠すため、いろんな服をまとっている。時には、自由の服をまとって嘘をつく。時には正義のドレスをまとって嘘をつく。時には、民主主義のマントをまとって嘘をつく。上に立っている者は平等と言う。それは、われわれの苦痛みで自分たちが豊かになるからである。そして、連中が約束する自由は、われわれの血で商売するために、連中が追い求めるものである。連中が守ろうとする正義は、自分たちを免責し、降参しない下の世界の者たちを迫害するものである。連中が宣言する民主主義とは、われわれから盗み取り、搾取し、軽蔑し、迫害している権力そのものの多様な姿を前に諦めてしまうことである。

しかし、昔も今も、別の考えがある。われわれの血を吸って生きている上の世界の人と、自分の労働で世界を歩ませる下の世界の人とは平等ではないことを知っている考えがある。それは下の世界で辛酸をなめながら展開してきた闘争の歴史を知っている。別のもの、別の世界を築こうとする考えである。

目に見えるもの、耳に聞こえるものでよしとするのではなく、見えず、音のしないものを、見聞きしようとする考えである。アテンコで囚われの身となっているわれわれの男女の同志たち [2006年5月] を励ましている考えであり、不正や忘却に抵抗するための考えである。

抑圧する悪しき政府から自由になろうと闘っているオアハカの男女の同志たち [APPO] が高く掲げている考えである。われわれを蔑んでいる上の世界を目指し、憧れ、嘆息することのない新しい政治のあり方を自分のものにした人たちのなかを歩んでいる考えである。インディオ人民として、EZLNのサパティスタとして、われわれは闘っているという考えである。

男女の同志の皆さん

世界の支持者である母なるセイバは、その根を地下世界に深く伸ばし、それを基盤にすくと聳え、天空を支えているというマヤ先住民の伝説は、われわれの過去の歴史を見つめるとともに、われわれや他の人々の歩みがたどる未来で、われわれが何者であり何者になるかを示している。

12 心を持たない人々 (2006/10/21、マグダレナ・キノ)

われわれはサパティスタ、このメキシコという国の南の片隅に住んでいる。われわれは、ツェルタル、ツォツィル、トホラバル、チョル、マムというマヤをルーツとする先住民族である。他の先住民族と話をするとき、物語や伝説を用いた象徴的な言葉を使うのが、われわれの習慣である。われわれの歴史や目標について話すことがある。今回、オーダム、ナバホ、チェロキーに向けたメッセージをわれわれは持参している。われわれの同志が皆さんに語るように託したメッセージを伝えるにあたり、われわれはその方法を用いたい。

われわれのもっとも年寄りの人々、われわれの指導者は語っている。

神々は世界を創り、最初にトウモロコシの男女を創ったという。そして、その男女にトウモロコシの心を入れたという。しかし、トウモロコシがなくなったので、一部の男女には心が届かなかった。さらに、大地の色も失ってしまった。そこで、ほかの色を探しだした。こうして、白、赤や黄色の人にも、トウモロコシの心臓が与えられた。だから、先住民のように褐色ではないけ

れど、トウモロコシの心を持つ人たちが、ここにはいる。

われわれの最古参の人たちは言っている。

その後、心を手にはできなかった人たちは、隙間をお金で充たした。その人たちは、何色であっても気にすることはなく、ドル札と同じ緑色の心を持っているという。

われわれの昔の人たちは語っている。

大地は、自分たちのこども、トウモロコシの男女を守ろうとする。そして、夜がきわめて困難になる時になれば、大地は疲弊してしまう。そこで、トウモロコシの男女は、大地が生きるのを助けなければならない。



マグダレナ・キノでの集会

13 私とわれわれ (2006/10/23、ソノラ州ソノラ大学)

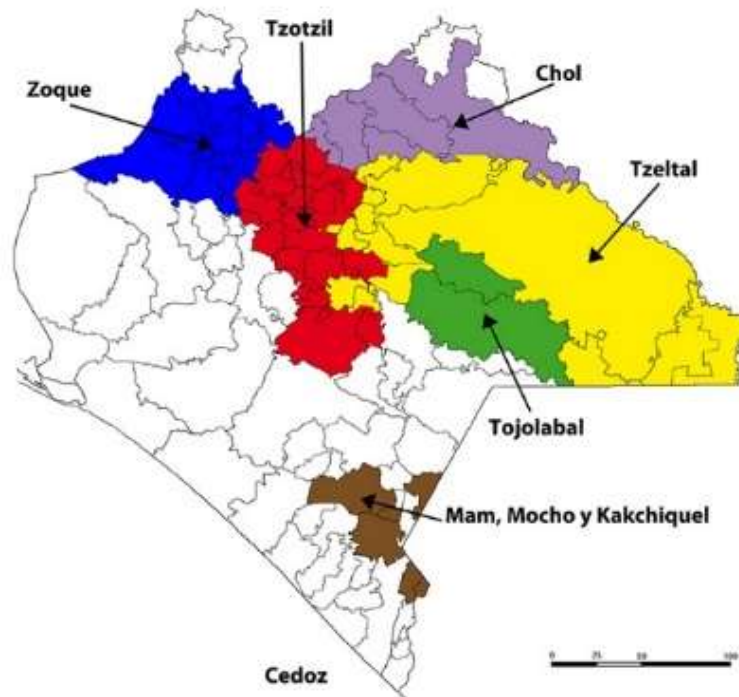
私はツォツィル、ツェルタル、チョル、トホラバル、ソケ、マメという民族の先住民共同体を代表して話しに来た。われわれはメキシコ南東部の山中で暮らしている。今のたびの私の役目は、サパティスタ共同体の耳と言葉を持参することである。

われわれの文化的伝統によれば、世界はいろんな神々によって創造された。踊り好きの神々、やたらに飛び跳ねる神々（とわれわれは言う）は、世界を完全なものとして創らなかった。やり残したもの、あるいはうまくできなかったものもあった。そのひとつは、男も女も完全なもの、つまり全員をよき心の持ち主にしなかったことだ。その代わりに、このあたりでは、悪い魂やひねくれた心の知事とか、大統領がでるようになった。他人を犠牲にして生きている男女がいるという不公正に神々は気づき、トウモロコシの男女を何とか助けようと思った。

この国のインディオの人々を助けようとした。彼らを助けるために、神々は彼らからひとつの言葉を奪った。インディオの言葉から、「私」を奪った。

先住民、マヤにルーツを持つ人々、この国の多くの先住民に、「私」という言葉はない。その代わりに、「われわれ」を使っている。われわれのマヤ諸語では、「ティック」を使っている。集団や集合性を指す「ティック」という語尾は、しばしば繰り返して使われる。

どこにも「私」が登場する場はない。「われわれは闘って死ぬのは怖くない」と、われわれは言う。われわれは単数形で話すことはない。われわれの言語で、繰り返して使われる「ティック」は、国の恥、侮辱、あるいは嘲笑や施しの口実としてではなく、この国を構成する一員になるため、到達したいと望んでいる時計のティック、タックという音のようなものとなる。



チアパス州の先住民族

14 戦士の神とヨリ (2006/10/27、ソノラ州プンタ・デ・ラグナ)

われわれを受け入れてくれたマヨ・ヨレメの長老、伝統的権威者、戦士の統率者、この民族の男女の皆さんに、われわれは感謝したい。メキシコ南東部チアパス州の山中のマヤをルーツとする先住民共同体の男女の統率者からの挨拶を持参している。

われわれは、皆さんに話したいお話も持参している。それはひとつの伝説である。伝説は、歴史の部分と創作の部分がある。どこまでが真実で、どこからが創作か、われわれは知らない。

われわれの昔の人たち、いちばん最初の古老、われわれの大地に一番初めに到来した人たちは、言っていた。世界が生まれたとき、神々はわれわれ先住民を組織する方法を教えたという。なぜなら、この地にヨリが到来する前は、水は飲むものであり、生命を与え、樹々は成長し、土地は実を結び、売買されるものは何もなかった。男女が売買されることはなかった。

さらに、自分たちで組織を作り、誰かに善き統治を委託するよう指示したと言われる。われわれの昔の人たちによると、善き統治とは、人々に従うものであり、命令するものではない。そして、人々が指揮すべき人は誰かを知るために、その人物を示す指揮棒や指揮棒を与えたとされる。だから、誰が従うべきか、誰が命令すべきか、誰が人々の意思を実行する責任者かを人々は知っていた。

こうして、インディオのあいだでは権威杖が生まれた。それは、それぞれの民族が、命令すべき人が誰かをわかるようにするためだった。一方、世界を創ったこの神々は、個人的な命令はありえないと言っていた。権威杖、指揮棒を持つ者が従うようにする唯一の方法は、人々が結集し、皆の声をひとつにまとめ、集団的なものとして意思を伝えることである。そして、その権威杖を持つ人物は、集団的意思を実現しなければならなかった。

このことは、ヨリ、金持ちが、この大地を征服に来る前の起きたことである。



アクテアルの CIG 代議員の就任式



ラ・レアリーダーのカラコルの新規役職者の就任式

われわれの昔の人たちは、こんなお話もしている。これらの神々の中には、自分たちがしたことを忘れ、遠くを見通す能力がないものがいた。唯一の例外である戦士の神だけが、次に何が起きるか見通す能力を持っていた。

そして、この戦士の神は、この土地に生命をもたらした太陽の世話をしていたという。しかも、そのために鹿に変身したという。そして、太陽が、水のシートに包まれていた時、つまりヨレメの人々の前の海の中にある時、鹿はマヨ川で水を飲んだ後に走り出し、メキシコ南東部の山中を流れるハタテ川まで行った。その後、セイバー母なる木の下で、鹿は水を見て、飲み、太陽が完全な形でふたたび昇るのを確かめているという。

そして、毎日、毎晩、戦士の神である鹿は、一方からもう一方へ、つまりヨレメとマヤの村を往来し、太陽がいつ休み、いつ昇るのかを見まもっていた。鹿は、歩くたびに、自分の足跡、歩んでいる道を次々とマークしていたので、鹿はどんどんと深みにはまっていた。ほかの神々は、戦士の神を嘲り笑い、行き来するたびに、ますます深みにはまり、埋まってしまおうぞと言った。すると、戦士の神である鹿は、「私は埋まっているのではない。芽を出しているのだ」と言った。そして、起きていることがいったい何なのか、誰も理解できなかった。

やがて、ヨリ、お金持ちが到来し、われわれの世界をひっくり返した。権威杖を持っていた人物—つまり政府—を悪しき政府に変えた。そして、悪しき政府が支配するようになった。そして、人々、メキシコという国のすべてのインディオに服従することを強要した。しかし、以前はそんなことはなかった。その金持ち、悪しき政府は、たくさん持っている人に奉仕する一方で、この国のインディオ人民、インディオの人々、インディオの男女を傷つけ、痛めつけた。

神々は物事がうまくいかないのを見て、「何が起きているのか？われわれはわからない。なぜこの人たちは、外来者が自分たちに指図することを受け入れるのか？」と、言った。メキシコのインディオの人々はどうしたらいいのか分からず、ずいぶん昔になるが、集合し、合意に到達した。それは、自分たちは完全ではなく、身体、心臓、血液に何か欠けていることだった。



マヨの鹿の踊り



セリの鹿の踊り



ヤキの鹿の踊り

そして、太平洋岸にいるインディオの民族のひとつに、対処法を探すよう依頼することになった。彼らはどのようにすればいいか考え始め、必要だったものがわかった。それは、尊厳、自分への敬意、人種への敬意、そして異なる人々への敬意である。その血を集め、できるだけ多くの人々に配るべきという合意が成立し、ヨレメ（マヨ）、プレペチャ、ウィチョール（ウィシヤリカ）、タラウマラ（ララムリ）、オーダム（パパゴ）、コムカック（セリ）、ピマなどが立ち上がり、自分たちの復権を要求することになった。

インディオの諸民族の太平洋の領域から一本の矢が放たれ、太陽を傷つけた。その時、一日中歩き疲れ切って、まさに寝ようとしていた太陽の脇腹に矢が刺さり、出血しだした。血は集まり、ひとつの大きな雲となり、やがてメキシコの国中の領土、山々の上空に、ぎっしりと隙間なく並べられた。そして、血潮—尊厳という名—は下の世界のすべての人々に飛び散りだした。

しかし、その血潮はすべての人に届いたわけではない。尊厳の血潮で身体を塗れたのは、一部の男女だった。それゆえ、ヨリの心を持つヨレメがいること、ヨレメの心を持つヨリがいることを、あなた方もわれわれもよく知っている。反抗しようとする人、尊厳を持つ人は、その血に染まった人たちである。

その時が来た。われわれのもっとも昔の人たち、齢を重ねた人たちは言っている。

「ヨリが世界をひっくり返し、働く者を下に、怠け者を上にするようなことがあるなら—自分たちが金持ちになり—、ふたたびわれわれは世界をひっくり返し、正しい状態にすべきである。そして、人々が上になり、政府が下になるようにする。命令する人々が上になり、従う政府は下になるべきである。そして、ふたたび世界がひっくり返ったことで、戦士の統率者、鹿の長は、大地に沈まず、浮上していこう。」

以上が、われわれに語られたことで、われわれが持参したメッセージである。

今こそ、使者、われわれが認める偉大な使者、すなわち、この国に住んでいる 62 の先住民族すべての血を備えている先住民全国会議に、われわれは結集する時がやって来た。マヨ川とハタテ川、セイバの樹とコムカックの聖地ティブロン島、オーダムの岩だらけで木の生えていない山々とピマの山やヤキの川などを一体化する手助けをしてくれる時がふたたび来た。そして、われわれがともに立ち上がり、逆立ちしている世界をひっくり返し、その動きで、上にいる人たちを一気に落とすことができる。

われわれの昔の人々、古老たちによると、世界に変化が起こるたびに、ひとつの種族が消えるが、現在まで、それはいつもインディオの種族だったという。しかし、今回の変化で消えなければならない人種は、われわれが生きていけるようにするためにも、政治家と金持ちの人種である。

ヨレメとマヤを結び付けたこの最初の使者たちのなかに、それぞれの標識が残されていた。しかし、その標識は消えつつある。マヨ川も、ヤキ川も死にかけているし、ティブロン島は商品化され、オーダムのむき出しの岩は売り払われ、マヤのセイバの樹は殺されそうになっている。その標識が消えれば、われわれが歩むために持っていなければならない標識が消えれば、われわれは、話し、食べ、歩き、寝ていても、まるで死んだように失われた残りの人生を歩むことになる。

サパティスタ、マヤの闘う先住民であるわれわれがヨレメの戦士にお願いしたいのは、先住民全国会議にわれわれとともに結集することである。ともに組織して、土地を取り戻すようになることである。それは生命を取り戻すことになる。ヨレメの土地は、他の誰でもなくヨレメによって統治されるべきである。ヨレメが所有する果実や富は、他の誰でもなくヨレメのものでなければならない。これがこの大地を救済するために、われわれに残された最後の機会である。われわれがこの大地を守らなければ、今、われわれの目の前にあるもの、われわれの祖先が持っていたもの、こどもたちが持つはずのもの、すべてなくなる。

以上が、われわれが持参したメッセージである。同志の皆さん、ありがとう。

15 セイバ、記憶の木（2006/11/17、ヌエボ・レオン州モンテレー）

われわれがしたかったのは、ジグソーパズルのようなお話しである。おそらく、皆さんはそれを組み立て完成させねばならない。今日かもしれないし、数年後かもしれない。

われわれはマヤをルーツとするチアパスの先住民族である。また、われわれ先住民族は、その言語によって呼ばれている。ツェルタルは、その言語ツェルタル語に因んでそう呼ばれる。ツォツィル、チョル、トホラバル、ソケ、マメ、そしてメスティソを加えた7つの先住民族は、われわれの民族、サパティスタ民族を構成している。

われわれの理解によれば、言葉、言語の中で話すのは、頭ではなく心である。このようにわれわれは言っている。また、われわれの言語はとても豊かで、スペイン語や英語、あるいは他のヨーロッパや西洋の諸言語には翻訳できない言葉がたくさんある。悲しいと言うには、心が痛い、われわれは言う。幸せだと言うには、心が歌っていると、われわれは言う。このように、他の多くの言葉で、われわれが何を感じ、どのように世界を見ているかを語る。

われわれの昔の人々が伝えるお話がある。自然、大地、樹々、涌泉の中に男女の歴史があると、われわれは確信する。それは過去に起きたことだけでなく、これから起きることでもある。

われわれの最長老は語っている。神々が世界を作ったときは、あなた方のドンチャン騒ぎと同じように、お祭り騒ぎだった。誰もが大騒ぎし、物事は思い通りに完成しなかった。世界は本来あるべきものにならなかった。まあ、おおよそ、こんな具合だった。

男も女は働いて、平等に暮らしていた。命令する人も従属する人もいなくて、何もかも合意に基づき行われていた。それから何が起きたかという、外部から余所者がこの大地に到来し、征服、破壊する時が到来すると言った。そこで必要になったのは、他の国々が存在する前に、これらの土地の先住民族が記憶を持つことだった。そこで、神々は彼らに一本の木を与えた。われわれマヤ人の聖なる木はセイバである。その頭の上で世界を支え、大地が崩れ落ちないように根で支えている。あれは記憶の木であると、これらの神々は言った。

征服者たち、スペイン人征服者たちが到着したとき、彼らは、後にメキシコとなる全領域で自衛していたインディオの人々に勝てないことに気づいた。さらにその木、セイバ、記憶の木から、インディオたちは力を得ていたことを知った。そこで、征服者たちは、セイバの木を倒し、燃やそうと火をつけた。だが、雨で火が消え、破壊できなかった。セイバの木を破壊するには、切り倒さなければならないと考え、征服者たちは、斧、槍、剣でセイバの木を地面に切り倒し、さらに何も残らないよう木っ端みじんにした。そこに、とても強い風が吹きつけ、樹々の枝や葉、木っ端を巻き上げ、メキシコ的全領域にまき散らした。

われわれの昔の人たちは言っている。大地に戻ってきた木っ端から、ふたたび発芽したのが、インディオの民族、約60、あるいは60以上とされるインディオの民族である。

そして、われわれの昔の人たちは言っている。これらのインディオの民族のすべき仕事は、この国がそのルーツとなっているものを思い出すために、記憶を保つことである。

16 任務は覚醒させること（2006/11/17）

下の世界のある夜明け前、EZLN 調査委員エリアス・コントレラスがマグダレナに EZLN の起源について語ったこと

そう、マグダレナの声が聞こえてきた。われわれサパティスタの先住民共同体のもっとも古い賢者たちは、今も昔も、天地では奇妙なことが起きることを語っている。それはまるで、最初の神々、いちばん最初に世界を創造した神々は、いくつものやり残したこと、忘れ去られた不思議

を整理しないまま、風が吹いてむき出しにされるまで、片隅に放置していた。つまり、われわれのいちばん昔の統率者たちが言うように、この最初の神々は非常に散漫で、神々の本来の仕事に集中できず、何も気にせず、思いつきで物事を行っていたという。

「もともと世界は、とてつもない不思議、影に隠された光、恐ろしい謎、計り知れない財宝に満ちている」と、われわれの指揮者たちの最長老たちは言っている。

そして、彼らがそれに同意すると、遠くから見ているわれわれの導き手たちから多くの不平不満が出てくる。彼らが不平を言うのは、神々は自分の仕事をいい加減にしていないことを知っているからである。つまり世界は完璧なかたちになるべきである。川や溪谷、海や山は対等であり、男女も対等である。つまり、命令ばかりする者は存在せず、上も下もない世界である。

そうなれば、土地、住宅、仕事、食料、健康、教育、情報、文化、独立、民主主義、正義、自由、平和のために、われわれは闘うこともないだろうと、長老たちは言う。

そして、われわれサパティスタは、平和裏に、大地の胎内にトウモロコシを撒き、それぞれ夜…あるいは昼に、それぞれの相手と事情に応じて、子どもたちの種を播くことになる。

言われるように、世界は未完成だが、それを完成するには必要なものがある。そういうことだ。それをうまく探し、見つけ、上手に当てはめるという問題は、それ自体で喜び、踊り、歌、色、味などを醸しだしている。

その素晴らしいほかのものは、隠されているため、見えず、感じず、聞くこともできない。人は、状況や事柄によって、ただ歩くだけで、何もわからず、世界はこのようなもので、変えられないと思込んでいる。つまり、世界をほかのもの、完璧にはできないと思込んでいる。

しかし、たまに風のようにくる人がいる。風というより、どこから来るか、われわれにわからない空気のようなものである。大地からスカートが持ち上がったかのように、そこから男女が出てくる。すべての男女のように見えるが、そうではなくほんの一部の男女でしかない。外見も内面もほかの男女と同じように見える。われわれすべての男女と同じように、彼らにも腹がる。

だが、その男女の考え方は別のものであることがわかった。もともと持っていたのか、どこかでこのまったく異なる考え方を身につけたのか、われわれにはわからない。

その後、これらの女や男が自らに特別な仕事を課していることがわかった。それは副司令が言う特別任務である。それゆえ、私は与えられた特別任務を持つことになった。サパティスタ司令部が私に与えた仕事は、悪や悪人を探し、「じっとしろ」、「静かにしろ」と言うことである。

しかし、それが問題である。私がお話している男女は、司令部から任務を与えられたわけではない。われわれサパティスタのように司令部や統率者がいるのか、誰も知らない。

しかし、これらの女や男たちは、一人ずつ、独自の仕事、特別任務を与えられた。彼らは果たすべき使命に囚われ、昼夜を問わず、特別任務は、あそこに、ここにとあると、動き回り、疲れ果て、調子を悪くし、倒れることもある。なぜなら、今では、後に言われるように、男女は、特別任務でとてもクタクタであるという。しかも、その男女はとても粘り強かったという。このように、特別任務を果たすため、男女は生れ、闘い、そして死んでいく。

私あまり歳をとっていないとき、一人の老人に聞いたことがある。彼はすでに高齢で、私はさほど歳をとっていないかった。少なくとも多くもない年月しか生きていなかった。そして、その老人にくだんの特別な仕事、つまり特別任務とは何かと聞いた。当時、私は「特別任務」といわれたものの意味を知らなかったもので、それとはちがう別の特別な仕事と言っている。

そして、「ところで、ドン・アントニオ」と言った。その老人がアントニオと呼ばれていたからである。そして、彼は亡くなっているので「呼ばれていた」と言う。人が死んでいないときは「呼ばれる」と言う。どこで習ったかは覚えていないが、以前、以後、現在で動詞の時制は変わる。動詞、すなわち歩いている言葉の活用は、私は、まあ過去形だと思込み、あとは未来形で解けるのを待つしかない、と言う。

さて、私は彼にこう言った。「ところで、ドン・アントニオ。そして、この男女、まったく異なる男女が身を捧げていた特別任務とは何ですか」

すると、当時はまだ死んでいなかった故ドン・アントニオはすぐには答えなかった。遅れたのは、ドブラドル、つまりトウモロコシの包葉で、タバコを巻いていたからである。ドン・アントニオが、いつになったら答えてくれるのか、私はひたすら待っていた。彼は燃えている木片でタバコに火をつけると、私の方を見つめた。何も言わず、ただ私をじっと見ている。

そして、私がかたずねたことを忘れていたのではないかと思い、もう一度彼に言いました。

「ところで、ドン・アントニオ、この女や男たちの特別任務は何だったの」

すると、「覚醒させることだ…」と、彼は私にこう言いました。

私はすぐには分からなかったが、ずいぶん後に、はっきりと分かった。なぜなら、マグダレナ、それがサパティスタの特別任務である「覚醒させる」とわかったからだ。

では、ごきげんよう。

われわれは喜んで任務を遂行する。なぜなら、われわれは孤立していないからである。



メキシコの覚醒者の第1号

17 墜落する星 (2007/1/3)

一歳から百歳までの女の子のためのお話 (われわれは入学試験を受ける権利を保留する)
—メキシコ・チワワ州フアレス市の行方不明者たちの母親委員会のママ・コラル、メキシコの先住民の女の子、そしてメキシコと全世界の女の子に捧げる—

EZLN 調査委員エリアス・コントレラス、墜落する星のお話をラ・マグダレナに語る。

「星はもともと墜落してはいない。墜落しているように見えるけど、実際は墜落していない」

エリアス・コントレラスはラ・マグダレナに言った。ラ・レアリダーの夜明け前、二人はサパティスタのラ・レアリダーのまわりにある丘のひとつに座り、ひと筋の光を見つめていた。その光は、夜明け前の真っ暗な闇を切り裂くように、いきなり飛び込んできた。その時、ラ・マグダレナはエリアスといっしょだった。悪と悪者を探索するため、二人はメキシコ南東部の山中に分け入っていた。その後、エリアスはそのお話を私にしてくれた。



ママ・コラルを囲むサパティスタ

しかし、私はそのお話をずっと忘れていた。下のメキシコの北西部にあるコムカーク、つまりセリの大地に来て、降るような星空の下にいたとき、そのお話をふいに思い出した。

セリの大地はまだ夜明け前だった。「別のキャンペーン」を展開している EZLN 第六委員会がおこなった最初の全国ツアーの途中、われわれは、コムカーク国、つまりセリという名で知られるインディオ人民が住んでいる危機に直面した土地に至った。セリ民族の統領の一人と話しながら、われわれは、誇り高きセリ民族の中心的シンボルであるティブロン島〔カリフォルニア湾に浮かぶ最大の島〕の雄大な姿が望める海岸に沿って歩いていた。

セリ民族は戦闘的な人々である。いくたの強欲な徒党連中によって、何世紀も追いまわされ、苦しめられ、迫害されてきた。いちばん最近の無頼の徒党は、連邦政府やソノラ州政府や自治体政府が使っているブランド服をまとっている。この連中は、ティブロン島をわが物にすることを画策し、島を高級観光休暇センターに変えるつもりである。今では「近代性」を装っているが、これまでずっと続いてきた野望に対して、セリ民族は抵抗し、自分たちの領域、文化や歴史を防衛している。

ときおり、より合わさった針金のような光が天空から降りてくる。そして、一瞬だが、ティブロン島の南側のシルエットを照らし出している。セリ民族の統領と私は、われわれ人民の苦悩について話し合っていた。われわれの言葉と同じように、雷鳴はだんだんと広がっていった。やがて、夜の影のなかでも、われわれのあいだにも、沈黙がやってきた。われわれ人民の苦悩がもたらす影がそこにとどまっているようだった。

それを否定するかのように、突然、ひとつの星がいつもの指定場所から離れた。そして、大地とキスをしたかのように、われわれのいる下の世界まで落ちてきた。最初の星に続き、別の星も、次々と落ちてきた。ほんの数秒もしないうちに、すべての星が家出し、別の天体、つまり下にあるわれわれの天体に引っ越したかのように思われた。



セリの統領



ティブロン島遠景

セリ民族の統領と私は何も喋らなかつた。じっと黙ったまま、われわれはそうした兆しを眺めていた。私はパイプに火をつけた。セリ民族の統領は言葉の火をともし、「『時が来たようだ』と、われわれの先祖は言っていた」と、つぶやいた。

夜明け前が朝に席をゆずり、暗闇に沈んでいた島は、その巨大な心を海の真ん中に見せるようになった。セリ民族の統領は踊り、部族の女性たちは唄った。その歌や踊りはわれわれのためではなかつた。大地、母なる存在のためだった。「われわれはあなたを大事にします」という約束のメッセージである。「われわれはあなたを防衛します」と約束を伝えたのである。

セリ民族の女性たちが歌う戦士の歌を聞き、先住民の統領の踊りを見ながら、私は、数年前、EZLN 調査委員 エリアス・コントレラスが話していたことを思い出していた。



セリの女性の戦闘の踊り

おそらく、私の話を聞いている人の中には、何年か前、サパティスタ領域にあるトホラバル地区にある小高い丘に座っていたエリアス・コントレラスとラ・マグダレナがどんな人物であるか（あるいは、だったのか、どんな状況にあったのか）について、不案内な人もいるだろう。その二つの一月の夜明け前に発生したという雷鳴がどのようなものか知らない人もいるだろう。

とりあえず今は、エリアス・コントレラスは、サパティスタの古参兵士の先住民で、いくつかのサパティスタ反乱自治地区で支援活動をおこなっていた EZLN 調査委員だったということだけ、皆さんに言うておくことにしよう。サパティスタにとっての調査委員は、市民社会の皆さんが探偵とよんでいるものに相当する。そして、ラ・マグダレナは同性愛者の市民で、性転換手術をするため、通りで仕事をし、お金を稼いでいた。

数年前、エリアスとラ・マグダレナはメキシコ市で知り合った。そして、ラ・マグダレナはわれわれの同志になった。もっとも、彼に言わせれば、女性同志である。男にせよ、女にせよ、性別と無関係に、サパティスタになったのである。彼、つまり彼女は、ナディエ〔『厄介な死者たち』に登場する EZLN 特殊部隊のメンバーの仮名〕やエリアス・コントレラスとともに、悪と悪者と対決することにしたのである。その闘いでラ・マグダレナは命を失なった。

しかし、皆さんにお話していることは、そうしたことが起きてからかなり月日がたっている。だから、今、現在という時点で、何が起きているかを皆さんが想像できるようにしたい。愛、この何とも凶々しいものは、どうすれば密かに隠すことができるのか。そして、こちらの側における言葉で表現できるのか。われわれはそれを見守ることができる特権的な観客になれるだろう。

では、皆さん、想像してください。

われわれがいるこちら側は、まだ夜明け前だった。長く深い横たわる天空は小さな光が輝いていた。夜と木々が作り出す二重の暗闇に、影法師のように寄りそう二人の像があった。

ーラ・マグダレナはエリアスの肩に頭をもたれかけた。ラ・マグダレナは何も言わず、手を伸ばし、ひとつの流れ星を指差した。その流れ星によって、動くことのない星だけであることに嫌気がさしていた天空の単調さは打ち破られることになったー

二人が生きていた時代の隔たり、そして、ラ・マグダレナが男であるが、男でも女でもないことを知ったエリアスの心に生じていた違和感にもかかわらず、EZLN 調査委員の同志エリアス・コントレラスは、ラ・マグダレナの「教師ー指導者ー父親ー兄」にして、表には出せないが彼の崇拜者の役を自ら買って出ている。

エリアスは自分の持ち場にいる。彼はこの大地で起きるすべてに注意を払うのが自分の責務と考えていた。やがて、エリアスは話を始めた。ラ・マグダレナに何かを説明するためエリアスが創りだすお話と同じように、そのお話はいつ終わるとも知れず、徐々に構築されていく。だから、われわれは彼が話を続けるのをさえぎることはしない。

「われわれの最年長の古老たちは、ずっと前、いちばん最初の時間があったことを話してくれた。その時間は生まれたばかりの新しいものだったと、われわれの物知りの老人たちは言っている。生まれたてのヒヨコのように、時間はほとんど歩けなかったといってもよい」

ー黙って座っていたラ・マグダレナは、最初的一步を踏み出そうとする小さな女の子の姿を想像で思い浮かべていた。どんな原因、理由や動機はよくわからないが、エリアスも一人の小さな女の子を想像しながら、話しつづけるー

「まだうまく歩けないので、その時間はつまづきながら歩いた。時間はつんのめりながら歩いた。自分の身体の端にあるもの、つまり足が口に入れるだけのものでなく、歩くことにも役立つことを知ったばかりの幼子のものであった。こうして、生まれたばかりの子は、母親のナグア〔先住民女性の巻きスカート〕、椅子、机などをつかんで歩いている。つかむものがなければ、ドサッ！と地面に倒れてしまうからである」

ー並んでいたラ・マグダレナとエリアスは、女の子が尻餅をついて倒れこむ様子を想像した。彼女は、目撃者の有無を確かめ、泣き声をあげるかどうかとっさに計算しているようだった。お互い見つめるともなしに、二人はほほ笑んだ。エリアスは話を続けたー

「まだうまく歩けないため、いちばん最初の時間はとてもゆっくりと歩いていた。今のように、時間が大きくなって、全速力で駆けるということはなかった。

最初の時間はほんの一瞬でしかない。そのことをおまえも知っているだろう。悪辣な政府に対してわれわれが武装蜂起して、十年、いわゆる「デカーダ」以上の年月が経過している。このデカーダという単語は、僕が新しく知った言葉で、十年を意味する。つまり、十年のかわりに、デカーダというのだ。すると、十年ではないように思われるけれど、実際には十年である。だから、ことによっては都合のいい表現になる。なぜなら、ある人が、デカーダも学校に行ったが、学年は進級していない。つまり、学校に十年間いたけれど、何も習得しなかったというより、少しは傷つかないことになる。ついでに、例をあげれば…」

ー「あなたの話は散漫だわ。愛しい人」という表情で、ラ・マグダレナはエリアスを振り返って見た。エリアスは、ラ・マグダレナが「デカーダ」の意味を知っていることに気づいた。だから、そのテーマは終りにして、元の話の続けることにしたー

「さて、万事がとてもゆっくりと進んだ。すべてのものごとは多くのものを創りだすための独自の様式や時間をもっていた。例えば、話をする事、つまり話すことと聞くための様式や時間があった。ラ・マグダレナ、おまえも知っているだろう。市民の人は話をするための様式や時間をほとんどもっていない。だから、サパティスタの男女と出会って、彼らが話をはじめると、彼らからマイクを取り上げるのはとても難しいと、私は思っているが…」

ーラ・マグダレナは非難するようにエリアスを見つめた。エリアスは自己弁護したー

「わかったよ。何もそんなことを言っていない。こう言い触らしているのは副司令だ。市民社会の人はマイクを握ると離そうとしない。手に接着剤でもついているようだ。似たようなことを都会で一度体験したことがある。歯を磨こうとしたとき、歯磨き粉ではなく、接着剤を歯ブラシに

つけたのに気づけなかった。接着剤のチューブが歯磨き粉とそっくりだったからだ。当分、ガチッと引っ付いた歯で過ごすことになった。何も飲み込めなかったので、かなり痩せてしまった。短気だったからだとか、気性が荒く、歯ぎしりしたせいで、物を食べられないのだろうと、皆は僕に言った。だけど、歯ぎしりなどせず、たんに歯が動かさなかっただけである。僕の歯が不動だっただけである。この『不動の』という言葉は、僕が新たに習得したものである。その意味は動かないということである。そこにあるだけで、何も起きないということである。そこで…」

ーテーマに集中するよう諫めたのはラ・マグダレナでなく、エリアス自身だったー

「さて、世界を創った最初の神々は、元来とてもお喋りだった。話しに熱中していたので、世界が完璧で完全なものにするために必要なことを急いでするという気にはならなかった。神々が責務をなかなか実行しなかったので、大地、われわれの最初の母もお喋りに夢中だった。だが、話し相手はさほど多くなかった。大地は天空を歩んでいるものと話した。つまり、雲、太陽、月、星、さらにはある種の鳥とも話したそうだ。詳しくは知らない。最初の神々が鳥を創ったのかどうか、われわれは知らない。大地と天空を歩むものたちはその場にとどまり、あれこれと無駄口をたたきだした。そして、大地に向かって次々と不平を漏らした。

『そうじゃない。それらの神々はいちばん最初の神々だけれど、とても寝坊だった。わずかばかりの低木を私に植えつけ、河川や湖が私の上にはりつけられた。海は放り投げられ、七つの部分に分断され、今のような状態になった。その後、よく言われているように、母なる大地は壊されてしまった。だから、私もバラバラに分断されている。いずれ、地理や大陸によって、まる裸にされた状態である』と、大地は言った。

『私をよく見てください。神々は私をととても太らせてしまった。その一方で、私の別のお喋り仲間ときたら、完全にペチャンコになっている。今では、彼女ときたら、私が彼女の食べ物をガツガツと食べていると言いつらしている。おまけに、私にはこの色の汚い服を着せられているのに、彼女といえば、とても白い服を着ており、自分が純粋だと思い込んでいる。このあたりをあちこちフラフラと歩き回っていることをわれわれはよく知っている』と、雲たちが言った。

ーその後、やせっぽちの雲が喋りだしたー。

「というのも、最初、われわれをととても頑丈に創ったのよ。どこであれ、よくわからないところへ、われわれが風で吹き飛ばされないようにした。だけど、われわれは墜落するしかなかった。とても重たかったから。その後、鳥は出くわすたびに、われわれ雲を平手打ちしだしたの。

『オバちゃん、破壊や虐殺は忘れることよ。そんなことは、新自由主義的な資本主義のほうが先を行っているぐらいよ』こうして帰りには、われわれは少し軽くなった。いくつかの雲はもとから痩せっぽちだった。すまして歩くオバちゃんのようにね。重いものを彼女たちから取り除く必要はもとからなかった」

大地と天空を歩むものたちは、お喋りやうわさ話にうつつを抜かし、口のきき方を知らなかった。だが、われわれの最年長者たちは言っている。大地、われわれの最初の母親は、口のきき方を知らなかったわけではない。彼女は話の聞き役になっていた。なぜなら、反対側に行くことができないからである。その場にとどまるだけで、何も言えなかったのである。

『さて、オバちゃんたち。もう行かなければ。フリホールが焦げているから』

だが、まだフリホールはなかった。これらの神々、最初の神々は、何も急ぐことがなかった。ましてや、ありもしないフリホールを作り続けることはなかった。

それゆえ、大地は嫌になるほど多くのことを我慢して聞かねばなかった。彼女は良いことや知的なことも聞いていた。なぜなら、別のキャン…失礼、銀河系…失礼、世界があったからである。

とはいえ、その世界はまだ世界ではなかった。むしろ無秩序の展望といったところだ。つまり、あらゆるものが同じ時間、あらゆる場所に混在していた。『無秩序の展望』については、ラ・マグダレナ、後でおまえに説明するよ。今は、僕に話に口を挟まないでくれよ。僕から何トンものお話が消えてしまうから」

ーラ・マグダレナは「何にも言ってないわよ」という顔つきだった。満足したように、エリア

スは話しを続けたー

「さて、大地はマメスとも話し合った。われわれの先祖は、雨を創る神々、雷鳴の神々をマメスと呼んでいた。多くの陰口や噂話のなか、大地は天空を歩むものたちと取り決めをおこなった。

その取り決めというのは、天空を歩んでいる雲は、疲れたなら、大地にある水瓶を見つけ、そこで雲は休息するということだった。別の側から、つまり下の世界から、ものごとを見つめるため、雲はバツタリと倒れこむのである。

それと引換えに、もっとも最初の大地がお願いしたことは、大地が助けを必要とする時、天空を歩むものたちに大地を助けてほしいということである。昼はまだ来ていない。神々は昼を創っていないからである。夜もまだ来ていなかった。夜ができていなかったからである。

やって来たのは夜明け前である。ついに、神々は男女を創ることを理解した。最初の神々がどのように最初の男女を創ったかというお話は、また別のお話である。以前、その話はしたはずだ。そうでなかったとしても、その別の側にそのお話はある。

やがて、神々は大地の男女を創った。そして、神々は、男女の母親の任務、つまり男女を世界に産みだし、育てる任務を大地に与えたのである。

これらの神々は男女を創ったものの、男女を世界に追い出しただけにすぎない。日々、男女が食料を手ででき、哀しい気持ちになっていないかを確認していなかった。神々は食料を何も作らなかった。最初の男女にポソーレさえ与えなかったのである。良き母親である大地は、腹に入れるものを探し、男女があちこちと大地を彷徨っているのをじっと眺めているだけだった。

母なる大地はとても心配だった。そう、大地は歩いてはいない。もともと歩けなかったので、自分の場所でじっと静かにしていた。しかし、母なる大地は、急に発熱したかのようにになった。言い換えれば、震えて身もだえし、身体がバラバラになるような気がした。

でもいいですか、この時代には、すべてがゆっくり進んでいたのだから、たとえずつと震えていても、何も感じていないに等しかった。

さて、大地、われわれの母親は、男女が何も食べていないことが気になっていた。やむなく、彼らにオツパイを与えることもなかった。大地はブラジャーなどしていない。もっとも、当時は、ブラジャーにお金を出すことなどなかった。今では、色鮮やかな上げ底のブラジャーもある始末である。だが、いちばん最初の母親である大地は、すべきことについてあれこれと考えた。われわれの母なる大地は、調査する必要があると考えた。そして、その任務をカタツムリに託した。だから最初に調査委員になったのはカタツムリである。母なる大地はカタツムリに言った。

「カタツムリさん。『トウモロコシ』というよい食物があるらしい。だが、どこにあるのか、わからない。おまえに探してきてほしい。調査から帰ったら、どこにあるか、報告してください。至急、調査してください。私のちいさな子どもたちが、食べ物を今か今かと待っているのです」

そこで、カタツムリは稲妻に姿を変え、ボロン・ピン・ポンと、世界中を駆けめぐった。当時、世界はそれほど大きくなかった。何と言おうが、それは紛れもない事実である。やがて、カタツムリは手足をなくした姿になって戻り、母なる大地に言った。

「母なる大地さん、聞いてください。あなたが言っていた食べ物を発見しました。だけど、それはとても硬い石のなかに保管されています」

そこで、大地、われわれの母は、すべての動物に呼びかけた。もっとも、動物の数はさほど多くなかった。それは紛れもない事実だった。そして、次のように言った。

「よく聞くのよ。何でもいから、みんなが持っているガラクタを掴んでください。そして、ここにいるカタツムリがこれから言う場所に、稲妻のように出かけてください。そして、その石をたたき壊してください。私の子どもたちに食べ物として与えるため、石の中にあるものを取り出し、私のもとに持参してください」

言われた場所に動物の群れは出かけ、何度も石をたたいた。だが、石は砕けず、びくともしなかった。動物の群れは、意思喪失して帰ってきた。そして、大地に言った。

「まったく何もできませんでした。その石は、政治屋連中どもの頭以上に固いのです」

そこに登場したのは、マメスがもっていたもの、雷の神、ヤルクといういちばん偉大で、いちばん古く、もっとも物知りの神だった。ヤルクと大地、われわれのいちばん最初の母親は、意気投合した。そして、教え、習うべき重要なことについて、いろいろと話し合った。

大地、われわれの母親は、ヤルクを呼び出し、大地が抱えている問題について説明した。すると、ヤルクは良い人物に変身し、その岩石、例の石にいくつもの雷を落とす。すると、石は塩漬け肉のようにシワだらけになり、パツクリと開いてしまった。ヤルクはトウモロコシをつかみ取り、男女に手渡した。

ところが、男女はトウモロコシの粒で何をしたらよいかかわからず、トウモロコシの粒をその場に放り投げた。すると、われわれの母、大地は、トウモロコシの粒が寒くないようにと、土をかけた。やがて一本の芽が出てきた。すくすくと成長し、とてもよいトウモロコシの穂をつけた。

そして、ヤルクはトウモロコシの穂に雷を落とす。そして、トウモロコシの粒を炒って、ポップコーンを作った。それは少々ばかり焦げていた。というのも、落とす雷に大きな力を込めすぎたからである。やがて、トウモロコシのポップコーンだけを食べていた最初の男女は、バレンティーナ・サルサを買うために、お店にでかけ、映画を観ながら、ポップコーンをたらふく食べ、下痢になりました。…タンタン」



ポップコーンの起源



バレンティーナ・サルサ

ーラ・マグダレナは、当惑し少し怒った顔でエリアスを振り返った。エリアスはほ笑みながら言ったー

「はは！本当はそうじゃない。おまえが寝ているか確かめるために、言っただけだ。そうではない。本当のお話では、確かにトウモロコシの芽は出た。だが、それはポップコーン用のトウモロコシではなく、本物のトウモロコシ用のトウモロコシだった。つまり、良いトウモロコシ、遺伝子組み換えでないトウモロコシだった。そこで、大地、われわれの母は男女に話しかけた。ポソール、トルティーヤ、タマール、マルケソーテの作り方を説明した。すると、もう皆の腹が空腹で痛くなることはなくなった。タンタン」

ーラ・マグダレナは、おどろいたようにエリアスを振り返って、質問したー

「いったい全体、そのお話は、墜落する星とどういう関係があるの？」

「ああ、そうだ。確かに。すっかり忘れていた」とエリアスは答えた。

「さて、くだんの最初の男女、最初にここにいた人たち、つまりインディオの人々は、母なる大地に大いに感謝する気になった。そして、大地をいつまでも十分に大切にすると宣言した。最初の男女は、自分たちがいったい何を忘れていたのかを考えた。お互いに愛しあい、気もそぞろになり、大地が問題をかかえていることにまったく気づかなかった。そこで、大地というわれわれの母親、ユルク、天空を歩くものたちは、会議を開催した。そして皆でひとつの合意に達した。

その合意は、何人かの男女が、大地、つまり、山、川、海、谷、風の守護者としてとどまるというものだった。この守護者たちは眠っているように静かにしていた。そして、母なる大地が何か危険や問題に直面すると、天空を歩んでいる者たちが、大地に屋根を張り、何らかの対応策を

とるように、最初の男女、つまり守護者たちに知らせることにした。その取り決めでは、何かを知らせる時は、ヤルクと雷の神々が、世界を覆う天井からぶら下がっている星を支えている紐を引きちぎることだった。そして、大地が危険な状態にあることを男女に伝えるため、星が落下するようにした。だから、墜落する星は、実際には落ちてはいない。守護者たちに、もう時が来たと告げているのである」

別のキャンペーンや銀河系集会の総括集会などでとても望ましい具体性で、「二つほど質問があるわ。ひとつは、カタツムリはとてもゆっくり歩くと聞いたわね。だけど、カタツムリがトウモロコシをいち早く探しに出かけたのはどういうこと？」と、ラ・マグダレナはたずねた。

「カタツムリはもともとゆっくりと歩いている。だけど、その当時、時間もとてもゆっくりと進んでいた。だから、その時代としては、カタツムリはかなり早く歩いていたことになる。そして、実際には、時代とともに時は変わっていったが、カタツムリにそのことは知らされなかった。つまり、カタツムリはゆっくりと歩いているのではない。実際にあったことと言えば、カタツムリは別の時を持っているということだ」と、エリアスはほほ笑みながら答えた。

ラ・マグダレナは拍手しながら笑った。そして声を震わせ、「じゃあ、ひとつの質問。墜落する星—実際には落ちていないけど—が、大地の守護者に時が来たことを知らせると、あなたは言っていたわね。それはどんな時なの？」と、たずねた。

エリアス・コントレラスは、今にも消えそうに天空に横たわる長い光の引っ掻き傷を指し、もったいぶった声で、「目覚める時さ」と、言った。
タンタン。

アテンコのための自由と正義を！オアハカのための自由と正義を！
メキシコ南東部の山中から。叛乱副司令官マルコス。2007年1月。メキシコ

追伸

もうわれわれはここにはいない。しかし、エリアス・コントレラスとラ・マグダレナは東の地平線を見つめて座り続けている。沈黙を破ったのは、ラ・マグダレナである。

「エリアス・パパ。私が自分で手術して、女性に変われると想像してよ。うまくいけば、こどももできる。そう女の子よ。とっても短いミニスカートををはかせたいわ」

「そんな、あほな」と、すぐさまエリアスは言った。

「私の娘は、やるといっても、そんなピチピチのスカートははかない。ちゃんとくるぶしまでのナグアをはくさ。あるいは女性叛乱兵士のようなズボンだよ」

驚きとお世辞をないまぜにして、ラ・マグダレナはエリアスを見つめ、「あなたの娘さんでもあるのよ」と、言った。

副司令によって EZLN 調査委員に任命された人物、サパティスタ領域で起きたいくつもの複雑な事案を解決した人物、メキシコ市を一人で歩いても恐怖を抱かなかった人物、いつも彼の前に立ちはだかる 悪と悪者ときっぱりと対峙してきた人物、EZLN 古参兵士のエリアス・コントレラスは顔をポッと紅潮させた。それは、夜明け前の暗闇のなかでも隠せなかった。エリアスはなんとか次のように言うことができた。

「さあ、出発だ。ちょっと肌寒くなった。寒くなると、あんたの身体に障るからな」

丘をくだる時、ラ・マグダレナはごく自然にエリアス・コントレラスの手を握った。二人が村に着いた頃、太陽は大地の端から姿を覗かせた。ラ・マグダレナはレボソを深々と着込んでいた。エリアス・コントレラスはこれまでの人生で体験したことのないほど大量の汗をかいていた。

では、また。副司令はほほ笑み、星は大地に抱きしめられようとしている。

18 太陽と月の起源 (2007/4/10、クカパ・エル・マヨール)

数ヶ月前、12月という暦の最後の一枚がめくれ、不安で寒さが募る1月が開けたとき、生きているわれわれの死者、われわれが監視人と呼んでいる男女を探すために、私はわれわれの山に登った。それは、多くの月を費やしたわれわれの大地の道の歩みが下の世界で遭遇したものはいったい何かを彼らの心に質問するためだった。われわれはクカパの人たちの苦悩を見聞してきた。キリワは人々の苦痛を言葉にした。クミアイはその領域を台無しにしている不正について話した。多くの質問によって、サパティスタの第6の道の最初の備忘録は殴り書きで一杯になった。

長い間、監視人たちは沈黙を守った。一方、夜は音が充満していて、時を告げる鐘のような沈黙が夜明けを告げていた。監視人たちのもっとも年取ったいちばん最初の人が私にこう語った。

「太陽が歩き、天空にある上の星が支配している方面で創造された人は、煙から創られ、神々の夢から誕生した。彼らの長老たちはこれらの人々について語っている。世界の始まったとき、水と暗闇の世界で、湿った影、最初の二人の神がいた腸（はらわた）のようなものだった。

二人の神は、熱心にタバコを喫いながら、その煙を力として、まだ世界が世界でなかった頃の世界へ出て行った。一方の神は目が見えていたが、もう一人の神は目が見えなかった。これらの神々は、蟻に命令して大地を動かし、水から分離させた。二人の神は大地が乾くのを待ち、世界にいるすべての男女を創りだし。先住民、メキシコ人、中国人、アメリカ人を作った。



クカパ・エル・マヨールの集会



クカパの双子兄弟シパとコマト

目の見える神は、何も考えず気にせず、急いで男女を創った。もう一人の目が見えない神は落ち着いて作業した。目が見えないので、夢と自分が喫うタバコの煙に従って、男女を創った。こうしてこの神はクカパの人々を創った。夢と煙からクカパの人々を創った。とてもうまく創った。

最初の男女には目がなかった。見える神は、足の指に目を付けようと言った。最初の男女は10個の目を持つことになる。一方、目の見えない神は、歩くと泥やほこりが目に入り怪我をするので、それは良くないと考えた。そして、目を付ける場所は頭の方が良いと考え、一方の目が傷ついても別の目で見ることができるよう、目が二つあった方が良いと考えた。こうして、クカパの人々はうまく創られた。ちゃんと二つの目が付き、申し分のないものだった。

しかし、すべてが暗く、何も見えないので、目は役に立たなかった。そこで、目の見える神が太陽を創ろうとした。しかし、急いで何も気にせずに創ったので、失神したように、とても小さく弱い光の太陽ができた。まるで最初の太陽が世界を光で満たせなかったかのようだった。

目の見えない神は、これはよくないという夢を見て、別の太陽を創りだした。最初にある部分、次に別の部分と、少しずつ太陽を創り、完成させた。太陽が完成すると、それを空に向かって投

げ、一方の側で旅を始め、もう一方の側で旅を終えるようにした。太陽の旅が始まった所を「東」、終わった所を「西」と呼んだ。

目の見える神は、目の見えない神が創った太陽の方が美しいのを見て、腹を立て、いわば、イライラした。そして、自分が創ったとても小さく青白い太陽をゴミ捨て場に捨てにいった。すると、目の見えない神は、そんなことをしたら無駄で、その小さな太陽にも自分の仕事があるはずだと、目の見える神に言った。そして、小さな太陽を掴むと、大きな太陽が歩むのと同じ道に投げた。しかし、それはかなり後の方だった。それを「月」と呼んだ。こうして男女は、昼と夜、月や季節をどうすれば測れるか知った。

すると目の見えない神は、目の見える神の度重なる悪戯に腹を立て、どこかへ行った。目の見える神は独りぼっちになり、男女に話し方や生き方を教えた。

そして、多くのものを持参し、こどものようだったすべての男女に配った。世界はまだ若く、歩くこともできないひな鳥のようなものだった。そして、アメリカ人とメキシコ人の子どもたちは、すべてを自分のものにしたいと思って大泣きした。アメリカ人とメキシコ人の子どもたちのギャーギャーという声にうんざりしたクカパの子どもたちは、目の見える神に、メキシコ人とアメリカ人の子どもたちが黙るように、すべてを与えるようお願いした。

見える神は言われたとおりにした。何も残らないようにするため、クカパスの子どもたちには、弓と矢、漁網、良い夢を見ることができタバコを与えた。

長老たちは話してくれた。クカパには良い夢がある。今で言う「尊厳」のことを当時はこのように呼んでいた。

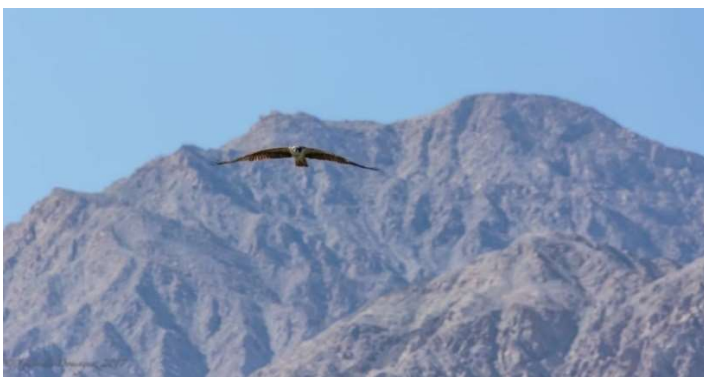
19 叔母と甥と怪獣 (2007/4/10)

長老たちの話によると、クカパの大地には「セロ・デル・アギラ」(鷲の丘)という場所があるという。そして、エル・マヨールという先住民共同体の近くにあるその場所で、一匹の怪獣に対して一人の若者が挑戦し、一人の女性によって打ち負かされたという。その二人は、クカパの人々の系族だった。

長老たちによると、次のようなことが起きたという。

先住民のエル・マヨール共同体にあるウィ・シュパ、鷲の丘に、クカパの叔母と甥が住んでいた。当時は、すべてがとても大きく、先住民はまるで巨人のようだった。その土地には、メキシコ人もグリーンゴもまだ来ておらず、先住民だけが住んでいた。海やコロラド川もなく、セロ・デル・アギラの麓には大地しかなかった。

その当時、世界には数多くの巨大な怪獣が住んでいた。その中でもっとも大きく凶暴で意地悪な怪獣がセロ・デル・アギラの南側に住んでいた。そして、誰もが彼をととても恐れていた。クカパの人々は、羊や鹿、家で飼育して食べる山鳥を探しに出かけられなかった。



エル・マヨールの山並みと鷲



山鳥

そこで、甥のクカパは、自分たちの一族を苦しめている怪獣を殺しに行く夢を見た。そして、叔母のクカパのところに行って、「しばらくしたら戻ってきます。怪獣を殺しに行くので。それほど長くはかかりません。目を光らせていないように、戻ってきますから」と言った。最初は悲しんでいたクカパ叔母さんは、怒りだし、甥のクカパを叱責した。彼女は彼に、気が触れたのかと言った。甥は怪獣がとても恐ろしいことを知らないなら、一口で食べられるに違いないと考えた。しかし、甥はまったく気にしなかった。魚を捕るためのモリ、網、弓と矢、鷲の羽根でできた羽毛飾り、そして腕輪を持っていたからである。

早朝、クカパ叔母が寝ているときに、クカパの甥は怪獣退治に出かけた。一緒に飼っていたぶち模様の犬を連れて行った。その子犬はとてもかわいかった。彼らは出発したが、大地が広がる南に向かって歩くには長い時間がかかった。やがて、寝ている怪獣を見つけた。怪獣がいびきをかくと大地は揺れていた。

クカパの甥は、怪獣には卵、つまり睾丸があることに気づいた。ひとつは青色、もう一方は赤色をしていた。クカパの甥はゆっくりと怪獣に近づき、その卵、つまり睾丸を突き刺した。すると、クカパの甥の銚が怪獣の睾丸に開けた穴から水が出だした。一方の睾丸からは青い水が出てきて海となった。それは今のカリフォルニア湾と呼ばれるものである。もう一方からは赤い水が出てきて川となった。それは現在のコロラド川と呼ばれるものである。

だが、怪獣は死なず、自分の玉、睾丸があまりにも痛かったので、さらに怒り狂った。一口で呑み込もうと、クカパの甥を追いかけた。もともと醜くかった怪獣は、怒りによってさらに醜くなった。今度は、噂通りで、クカパの甥も恐怖心が勝ってしまい、ぶち模様の子犬と一緒に逃げだした。そして、鷲の丘を目指して走った。

怪獣は彼らを追いかけた。怪獣の青い睾丸から出た青い水によって、海は陸地の側へと大きく入り込んだ。そして、自分を追いかける怪獣を止めるため、クカパの甥は、銚や網、弓矢、羽毛飾り、腕輪などを放り出した。しかし、怪獣は一瞬ひるんだものの、すぐに追いかけてきた。クカパの甥は、怪獣を止めるためにぶち模様の子犬を置いていったが、怪獣は立ち止まらなかった。

追いかけてこで疲れ果て、気を失いそうになったクカパの甥は、怪獣に追いつかれそうな気がした。そこで、クカパの叔母を呼んだ。様子を見に出てきたクカパの叔母は、甥のクカパを叱ったが、怪獣が来て甥のクカパを食べようとしているのがわかった。クカパ叔母は、怪獣のすることに腹が立て、苛立ってきた。耳から耳垢の塊を取り出し、とても硬い石を作り、怪獣の頭に投げつけた。しかし、怪獣がひるんだのは一瞬だけだった。そこで、耳からさらに耳垢をとり出すと、別の石を作って、怪獣に投げつけた。今度は、一瞬で怪獣を殺すことができた」

監視人のいちばん最初の人物は静かになると、タバコに火をつけた。そして、私に言った。

「太陽が眠っている北へ行くのだ。エル・マヨール、コロラド川へ行け。クカパの人たちを探せ。クカパの若者たちは、おまえたちが怪獣に挑戦するのを助け、女性たちは、怪獣を打ち負かすのを助けてくれるだろう」



子犬が変身したとされるシエラ・ラス・ピントス



クカパの叔母さんたち

このように、監視人たちは、クカパの話で、われわれに伝えてくれた。このようにわれわれに話してくれた。だからわれわれはこの大地に戻ってきた。怪獣に挑戦するため、われわれはあなたの協力が欲しい。…怪獣を打ち負かすため、われわれはあなたの支援を必要としている。

20 光についた傷 (2007/6/ 6)

この「6月の時間」を企画された方々に、文学と闘争というジレンマを最良の方法、つまり両方を駆使して解決している人物、エルネスト・カルデナルと会う機会を与えられたことを感謝したいとわれわれは思う。この言葉は、彼の人生と献身、そして何よりも、ニカラグアのインディオの諸民族と、われわれをさいなむラテンアメリカと呼ばれる大きな傷に注がれる寛大な眼差しに対する賛辞である。さらに、エルネスト・カルデナルと同じように、われわれラテンアメリカの人々の自由のための戦いの中で声を上げた人物、ホセ・マルティへの挨拶も、私はこの場に持参している。そして、彼の言葉を借用すれば、私が真摯な手を差しのべる誠実な友人のために、6月にも、1月と同じように、白いバラを持ち寄り、育てている。

サパティスタからあなたへ、ドン・エルネスト。



副司令とカルデナル



アメリカ先住民族集会のポスター

メキシコの反対側、南東部から、われわれが育てる別の花、「言葉の花」を持参している…かつて、われわれの守護者である監視人たちは、私に語った。夜明けは、そのたびごとに樹に変わっている。しかも、その夜に伸びた樹の枝々には、今にも墜落しそうな星のように、恐ろしくもすばらしいお話や伝説が吊るされているという。

監視人たちは私に語ってくれた。夜明けが樹に変わると、天空は地面に近づき、腕を伸ばすだけでももっとも奥深くに隠されたいくつもの秘密に触れ、夢見られたことも名づけられたこともない別の世界を覗き見ることができる。さらに監視人たちは私に語った。夜明けには、光の入り口はなく、影だけがその領域に入ることができ、大地の色をしたわれわれのための記憶となる物語を果物のように手に入れられる。そこには、光に満ちたお話し、言葉でできた宝物、はじけてすべてをその色で染める喜びがある。同時に、苦痛、閉じることの無い傷跡、治せないものの、言葉で癒せる悲しみもある。

この早朝に得られた熱のこもった収穫 [第12回イスマンアメリカ作家集会] に関して、われわれのいつものお話、痛みと希望に関するお話を私は持参している。そこに、ソンプラの雑囊から突き出ている矢の先端が目に入った。慎重に手に取ると、鋭い先端があり、ヤキの言葉の「ビカム」という言葉が刻まれている…



ヤキ領域の境界にあるボカ・アビエルタ



ソノラ州の先住民族

ビカムを出発したわれわれは、ほんの数時間前、ソノラ州のヤキの取り囲まれた領域への入口のひとつ「ボカ・アビエルタ」の丘の脇を横切った。月が早くから空に昇りだしたようだった。月の光は私の両側から注ぎ、すでに地平線からかなり高い位置まで昇っていた。その光は、丘のシルエットを完璧に描き出していた。その丘は、数週間前からアメリカ大陸のすべてのインディオに、来たる10月に開催される「インディオ人民大陸集会」を呼びかけている。

メキシコ北西部先住民族の伝説では、最初の創造主であるコヨーテの不可能な愛と定義している人物を見ていた時、私は「光の傷」だと思った。そして、下のメキシコの隅々をめぐる巡歴のひとつが終わった後、エリアス・コントレラスが話した逸話を私は思い出した。あなた方はその理由を知るはずもないが、私はこの場にいるのは、エリアス・コントレラスがEZLN調査委員であり、あったことを皆さんに伝えるためである。つまり彼は皆さんが「探偵」と呼ぶ存在だった。

かなり昔のことだが、6月のこの時間帯に開いている月と似た別の月の中で、エリアス・コントレラスは、彼の不可能な愛人、ラ・マグダレナに、自分の月のお話しを語った…。

エリアス・コントレラスによると、はるか昔の暦、日や時間に名前や数字がなかった頃、天空と地面はとても近く、同じ高さで向かい合うように存在していた。男や女は、星や植物に囲まれた長い道を歩いていた。収穫したトウモロコシの穂の中で、ときおり、流れ星、あるいは軌道を外れた別の惑星を発見することもできたという。

当時の男女は、天空の破片を見つけてもあまり騒ぎはしなかった。しばらく、その断片で遊んだ後、墜落した光を元の場所に戻したのは子供たちだった。

やがて、別の時代、上の世界の時代、命令する者の時代、お金の時代が到来した。恐怖が広がり、恐怖が植え付けられ、死が収穫されるようになった。怖くなった天空は、自分が上に行き、支配者が支配し破壊する大地から離れるべきだと考えた。どんどん昇り、その天井は遠くなり、手が届かなくなった。しかし、世界がどうあるべきかを忘れず、つねに念頭に置くため、天空はヤキに歴史の記録帳を持参し、表徴、約束、誓約を皮膚に留めるように頼んだ。

しかし、空はどんどん遠ざかり、その皮膚も光も届かなくなった。そこで、ヤキは弓を引き、天空がこれ以上昇らないように、天空に向けて矢を射ようとした。しかし、空はさらに歩みを進め、遠くなっていた。だが、ヤキは力強く、彼の弓と矢も強かった。だから、矢の先端は、天空の新しい皮膚を傷つけることができた。しかし、天空が昇のを止めることはできなかった。それは無理だった。しかし、天空はヤキに次のように言った。その傷跡が完全には消えてなくなることはないようにしなさい。世界が完全で、子どもたちがトウモロコシの粒や星で遊んでいた時代を思い出すため、傷跡を開いたまま生かしておきなさい。

だから、われわれのもっとも知恵ある人々も、ヤキを「記憶する者」と呼んでいる。そして、月は、記憶するために放たれたヤキの矢によってつくられたという。

エリアス・コントレラスは言っていた。つまり、月は、天空にある光の傷跡、つまりある程度は塞がるが、また開きだす傷跡である。そこで、月が満ちる時には、傷口から血が出て、その光が記憶の中に生きている影を薄めるようになっていられるとされている。エリアス・コントレラスのこの説に基づいて、最初の監視人、大地の守護者の誰かによって、傷は天空につけられたものだと、私は考えていた。そして、ヤキの言葉で「矢じり」を意味するビカムは、民族の粘り強い尊厳をわれわれに思い出させてくれる。命令する者たちのお金がこの土地で展開してから被ってきた攻撃に抵抗するとともに、忘れないよう記憶を保持できるよう天空に逆らうための尊厳である。

そして私は、この6月という時間に、アラスカからティエラ・デル・フエゴまで、エスキモーからマプチェまで、何百ものインディオの民族、部族、国家が繰り広げる抵抗と反乱が集中することになるビカムに、つまり矢じりに、尊厳を持参している。

何とすばらしいことだろうと私は考える。このメキシコ北西部の天空、この月、6月のこの時が、別の方法でヤキを見たり聞いたりするため、われわれの耳と目を開いている人々にとって。コヨーテが、500年という長い夜の中で、愛と距離が開けた傷口を通じて、見つけたり見つけられたりするという希望をふたたび養うためである。われわれがヤキ（別称）、セリ（別称コムカック）、マヨ（別称ヨレメモ）、ピマ、オダム（別称パパゴ）の叫びを反響させ、世界は逆立ち、われわれサパティスタの言葉では、「転回した状態」にすべきであると告げる歌が聞こえるようにするために。世界が申し分のないものとなり、先住民、女性、老人、こども、人とはちがうことがもはや恥でも反感でもなくなるために。つまり、世界は、出会いの場であり、多くの翻訳がある地獄でなくなるために。



月にあこがれるコヨーテ



コヨーテの踊りの仮面

21 でんぐり返し（2007/6/1、ソノラ州エルモシージョ）

もう一通の手紙を残しておこう。その手紙は、夜明け前のラ・ソンプラの手元にある。

記憶の袋のなかで、私はひとつの鍵を発見した。私は鍵と言ったが、橋でもあると言いたい。なぜなら、メキシコ南東部の山中で知り合ったマヤの戦士である老アントニオは、その肌や夢の中に「サパティスタ」という名前をもつことになる先住民たちの考え方やあり方を理解するための橋であるからである。きっと誰も知らないが、われわれの共同体で話されているスペイン語は、いくつもの言い回しや変異、さらにはメキシコ南東部の山中で話されているマヤ諸語に起源をも

つ言葉と接触した結果生じた語彙に加え、「きわめて特異な」世界の概念、つまりサパティスタの概念と関連している混合語がある。それゆえ、これから皆さんにするお話のタイトルは、言うまでもなく、ずいぶん奇妙に響くだろう。皆さんには、心を広く我慢していただきたい。というのも、サパティスタの言葉は、独自の歩みでもって、進むべき道を切り開くことになっているからである。「転覆」というために、われわれは「転回」といつているからである。これから紹介するのは、私の記憶では、老アントニオが私に語ってくれたお話である。

転回というお話

老アントニオは語った。人類の歴史のある時点において、金持たちは皆を騙したという。つまり、金製の巨大な鏡を作り、それを世界の前に立てかけたのである。鏡が置かれたのが、アメリカ大陸のインディオの人々を冷酷無比に虐待してきたひとつの「文明」の同義語である強奪、搾取、弾圧、軽蔑の開始に、先行するののか、後だったのか、同時だったのか、今、私は思い出せない。ともかく、これから皆さんにするお話にとってそれは重要な問題ではない。

こうして、大きな金製の鏡は、鏡である以上、すべてのものを逆に映していたのである。上にあるものが下に現われ、嘘が真実らしくなり、悪が善のように見え、不正が永遠に続き、修復できない姿となって現われていた。おそらく、輝いている権力、目新しさ、思考の緩慢さ、あるいはそれらすべてのせいで、男女たちは下を見るのをやめ、視線をあげた。こうして知恵は減ってしまった。

老アントニオの話によると、どんなかたちであれ、上を見つめるように強制されてしまった男女たちは、見えている像は現実のものであると考え、どんなことがあっても、それを変えることはできないと思い込んでいた。なぜなら、上の世界では、黄金の鏡は、模範的であったものすべてを反対に見せていただけでなく、永遠にそのような姿で、変えることはできないもののように提示していた。

このように、押し付けられた鏡のせいで、神々や政府がわれわれの大地にやってきた。彼らは、完全に偽者で不法な、命令ばかりする不正な上の世界の連中だった。

世界を創造した最初の神々は、別の側を歩んでいた。そのため、上の世界で起きていたことにはほとんど気づかなかった。だから、最初の男女の神々が戻ってきたとき、彼や彼女たちも、自分たちが最初の神々、創造神ではなく、世界はお金の神の魔術的な一吹きで歩んできたものと考えられるようになった。

時間の始まりの方向が変わると、ほかのすべてのものごとにも、取り返しがつかない致命的なかたちで変化が起きた。世界に最初の歩みをもたらしした自由は、奴隷状態になり、上の世界における自由では、殺しておきながら、救済しているとまで放言するようになった。以前、母であり、守護者だった大地は、敵のように処遇され、迫害され拷問され、大地に対する敬意すら完全に抹殺され、まったく大地と無縁の法律によって管理されるようになった。

しかし、神々、男の神も女の神も、いちばん最初の神々、創造者の神々は、ずいぶん前から、記憶喪失の時代が到来し、その時代には、すべてのものごとが裏返しに見られ、評価されることを知っていた。それ以来、つまり記憶喪失の時代のずいぶん前から、記録すること、忘れないようにし、記憶をつけておく作業が一部の男女に委託された。

老アントニオは言った。この暑い日が生まれたのと同じようなある夜明け前、20年前の真夜中の太陽が支配していた5月の夜明け前、この記憶を残す人々、監視人たちは、ものごとを転回させること、つまり転覆することを習得した。

なぜなら、監視人たちの記憶は、最初のイメージでいっぱいだったからである。それらの現実としてのイメージで、監視人たちはすべてを眺め、見つめていた。夢を見ているかのように、ものごとを見つめ名づけていった。ものごとをそのものとしてではなく、見えたように名づけていた。たとえば、「自由」という言葉を名づける場合、任意の形態をした奴隷状態や本質的な奴隷

状態に関する熱狂的な欺瞞を指すのではなく、尊厳ある行為を実践すること、自らに対する敬意、他者に対する敬意、母なる大地に対する敬意を指し示している。

老アントニオは語っていた。それゆえ、監視人たちが何か言ったときに、彼らは名づけたのであり、現実であるかのように言葉に似せた。さらに老アントニオは言っていた。ものごとは、あるがままのかたちで出現するのではない。かつてあったが忘れられてしまったかたちで登場する。監視人たちは、創造や発明するのではない。記憶を思い出し、記憶に声を与える。このように老アントニオは言った。

人々は語っている。1994年1月1日、サパティスタが上の世界の時計を破壊したとき、ほかにも数多くのものごとを破壊しはじめた。その中には、諦めて専制君主の前にひれ伏している祖国というイメージがあったことは言うまでもない。それだけではない。破壊されたのはものごとだけではない。上の世界の鏡に映っていたものごとのイメージも破壊された。

このことは老アントニオが言ったことではない。しかし、彼の許可、できればあなた方の許可のもとで、私が言いたかったことである。転覆は基本的な正義を実行する行為にほかならない。ものごとを転回し、ものごとを引っくり返し、確立していた秩序を引っくり返し、暦や地理を転覆させるに当たり、サパティスタ先住民は、注視すべきは下の世界であることをわれわれに告げている。下の世界は、記憶がもっとも素晴らしい輝きを保つ場所であり、そこでは権力の永続性など、母なる大地の長い息づかい中でのほんの一瞬の悪い呼気ではない。

つまり、老アントニオによれば、「転回」はサパティスタの切なる願いであり責務である。そして、大まかに言えば、ある様式にあるものを引っくり返し、別の様式にすること、つまりそれを転覆することである。



アロス・コン・レチェ

われわれの国の別の地理、すなわち下のメキシコを巡るわれわれの巡歴のある段階で、自由はセックスと同じように中毒になる傾向があると、言ったことがある。一度試すと、もう一度したくなり、さら何度もしたくなる。なぜなら、アロス・コン・レチェに…さらに息を吹きつけるように、それは元々、かなり熱が出るものである。

おそらくそうだろう。それと同時に、自由は感染する力があることも付け加えておくべきだった。なぜなら、この下の世界で、われわれが別の叛乱する男女たちとお互いに同志になっていく過程で、われわれは、旗印として自由を掲げる人が増加するごとに、風も勢いを増すということ、つまり体制の「転回」とは、体制の転覆にほかならないことを感じとり、知った。

世界が最初の位置に戻ることである。つまり平らで、上も下もない、搾取者や非搾取者がなく、強奪者も奪われる人もなく、弾圧者も弾圧される人もなく、軽蔑する人も軽蔑される人もいない状態に戻ることである。それは資本主義のない世界、つまり、所有者やパトロンのない世界である。

われわれサパティスタがすべき責務をやり遂げたとき、われわれが「転回」を成し遂げたとき、世界はずいぶん異なったものになるだろう。太陽は、吃驚したように目覚め、東の空から昇るため、ヤキ、セリ、マヨ、ピマ、オッダムの土地から歩みを進めるだろう。メキシコ南東部の山中にある影の腕の中で、いちばんすてきな赤い服装をまとい、安息するためである。そこには、われわれ死者たちが、新たに生きるため、新たに死ぬ時間を今一度、待っている。

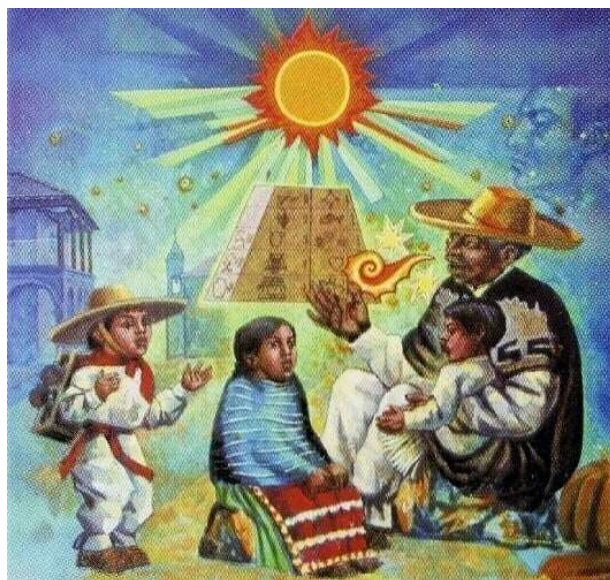
では、お元気で。私の影を傷つける光りが私に伝染するように、転回」が伝染するように。
メキシコ北西部から
叛乱副司令官マルコス　メキシコ、2007年5月

22 光と影のかなわぬ愛 (2007/6/12)

雨は一休みしたため、光を増した月が暗い鏡のなかに映し出されていた。それは、この夜明けではなく、10年前の別の夜明けである。老アントニオは、ナイロンで覆った家から出ると、しだいに大きくなる光の傷口を見上げた後、私の方を振り向いた。私は、雨で私のテントの屋根にでき、プラスチックを張っている蔓を壊しそうになっていた水たまりを取り除こうと焦っていた。老アントニオも、タバコも私を待ってはくれなかった。雨が降る前のように、葉巻やパイプの小さな雲とともに、言葉があふれ出した。

「まだ、たっぷり時間がある」と、老アントニオは言った。

一人のプレペチャの老いた賢者は私に話してくれた。不可能と思われる愛は、多くの場合、二重性を解消するキスを交わすため、奇妙な方法を探すものだ。影と光、月と太陽の愛以上に不可能な愛があるだろうか。プレペチャの賢者は、両者を結びつけ、今も結びつけている不可能なため息について、彼の先祖たちが語ったことについて話してくれた。



こどもたちに語るプレペチャの古老

クリカウエリという名前と呼ばれていた太陽は愛した。愛されたのはシャラタンガである。月はこう呼ばれていた。両者の愛、お互いに触れ合いたいという気持ちはとても強く、両者は離れなかった。何物にも突き進んだ情熱のせいで、人々や大地が苦しむことになった。

それを知った母なる自然、大地、始めと終わり、もっとも偉大で賢明なナナ・クエラペリの驚きは、とてつもなく大きかった。彼女が太陽と月を創り、天空を歩かせたとき、それぞれの任

務をちゃんと説明していた。太陽は昼に歩き、夜に歩むのは月の仕事となっていた。両者の愛と情熱は、最初の時間の約束に背くものだった。怒ったナナ・クエラペリは、両者を呼び出して、次のように宣告した。

「川も海も陸も山もすべて、私が創った。そして、それらを木や動物、植物や花などで充たした。その後、私の上や中で生きていくように男と女を創り出した。しかし、火山はその怒りを谷間にぶちまけ、雷のシルピリと雲のハニクアは互いに愛し合い、大雨が降ってしまった。そして、水がすべてを覆いつくした。これを解決するため、あなたたちは創られたのである。

シャラタンガが家で待機しているあいだ、クリカウエリは大地に暖かさをもたらす。その歩みとともに、われわれ人民の心と栄養であるトウモロコシの花は開き、成長し、成熟する。クリカウエリが家に戻ったら、月は、数多くの星々をともなって、世界の守護者となるため、出かけなければならない」 月と太陽は抗議したが、母なる大地ナナ・クエラペリは動じず、怒りもあらわに宣告した。「二人は一緒に寝てはだめだ。二人は肌を合わせてはいけない」

不謹慎な二人の恋人は泣き、大地に落ちた涙から、根や花、そして素晴らしい果実〔代表的なものはヒカマ〕が芽生えた。それ以来、太陽は昼を歩き、月は夜を見守るようになった。



大地の母ナナ・クエラペリ



火の神（太陽）クリカウエリ



ではぐくまれたヒカマの実

涙

しかし、こうも言われている。太陽と月は、密会し、触れ合い、愛し合う場所も時間もなかったが、影と光が出会うことのできる時間の部屋をある片隅に作った。だから、夜明けになると、月は雨を降らせ、用心のために星々は月を覆い隠し、月は雲だけをまとめて、太陽の抱擁にその身を委ねることがあるという。太陽はますます光り輝き、月はより穏やかになる。こうして雨が降りだし、長い吐息のような風が静かな大地を撫でていく。

老アントニオは黙った。すると、まるで風が夜を乱したかのように、ふたたび雨があたり一帯を支配しだした。しかし、それは、私にはまったく別の雨に思えた。

老アントニオが私に話し、そして今私が皆さんに話したような、ありえない愛の物語を聞くと、神が存在するかどうかは知らないが、奇跡は存在すると思ってしまう。

23 人喰いのお話 (2007/7/17)

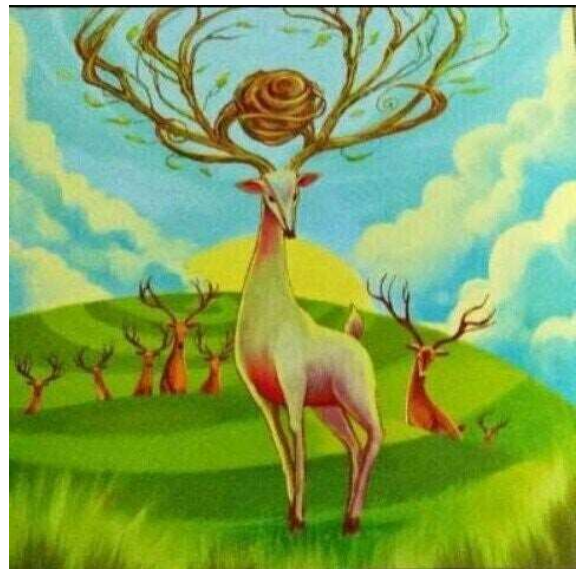
かつては遠く離れていたが、今は近くなっている大地に関するお話がある。ヤキの統率者とサパティスタの指導者による兄弟の言葉である。彼らの言葉によって、かつては一緒だったが、金持ち連中、ヨリと呼ばれる異邦人によって破壊され、遠く隔てられていたお話は、ふたたび大地と密着することになった。二つの違った土地において、双子だが異なる兄弟によって語られ、こ

のお話は生まれた。遠く離れているが、近い所から、このお話はきている。そのお話は、語りことができる高い権威の棒が据えられ、聳え立つあの場所からきている。われわれ、メキシコと呼ばれるこの歴史の北西部から見て、南東部にあたる大地のサパティスタの男女は、その棒のことを「語るバイルテ」と呼んでいる。その根によき夢の記憶を保存している木、世界を支えているセイバの木が聳える大地からきている。今日、われわれの言葉が出会っている場所のはるか彼方から、お話はきている。

はるか彼方で、夜の影にある欲望に向かうため、太陽は赤い衣装をまとっている。そこでは、この大陸にもとから居住していた人々の偉大なる出会い[2007年10月12日前後に予定のアメリカ大陸先住民集会]のため、別のソノラが、地面と天空を用意している。かの地、メキシコ・ソノラ州のヤキ溪谷のピカムから、苦悩、闘争、未来について語るこのお話の半分はきている。そして、影が夜を産みだし、昼間、自らの道を歩むべき太陽が休息しているはるか彼方からも、お話はきている。そこでは、別のチアパスが、はるか彼方からやって来る別の人たちとの橋を作るための言葉を用意している。メキシコ南東部にあるサパティスタの山中から、お話を完成させるため、お話の残りの半分がきている。



バイルテの樹



角のスズメバチの巣があるマヤの鹿の王シプ

戦士ヤキのもっとも物知りの人々、最年長の人々、知恵ある古老たちが、このお話を語っている。そして、サパティスタ戦士のいちばん最初の人々、監視人たち、地理と暦では彼方に見える人々が、別の言葉とシンボルで、このお話を語っている。両者は、現在もある恐怖に直面しながら、世界が存在していたことを語っている。

かなり前から、人喰いは出現していた。ヤキの人はイエエブア・エエメと呼んでいる。マヤの人はツル・カシュランと呼んでいる。

人喰いの野望はとどまるどころがなく、何ものに対しても敬意を払わなかった。人や人の生き方も呑み込まれ、人喰いの悪行をとめる術はなかった。人喰いが統治していたとき、恐怖という将軍が脇を固めていたため、世界は二倍も泣くことになった。恐怖の涙ですすり泣き、死の涙で苦悶していた。すべてが破壊され、呑みこまれていた。こうして、人、言葉、時間、場所は生命を失った。

お話では、人喰いはある女性を捕まえ、体を砕き、粉々にしたという。だが、死ぬ直前、彼女は双子の男子を産むことができた。母の体が砕ける瞬間、一人は一方の側に、もう一人は別の側に行った。二人は太陽が辿っている長い道の両端にいた。一人は太陽が歩みだす場所、もう一人は太陽の歩み終える場所にいた。

お互いの距離は離れていたが、二人は最年長の母、祖母、大地、いちばん最初の母に育てられた。祖母のスカートはとても大きく広がった。お互いに遠く隔たっていたが、双子は祖母のスカートで保護されていた。祖母は、自分の血で湧泉を創り、肉で木や森を創った。双子に付き添い、養育するよう、祖母は自分の声で動物に呼びかけた。二人がうまくやっているかを観察するため、両端を行き来するよう、鹿に委託した。二人の記憶が同じことを忘れないようにするためだった。

大地の広がったスカートのそれぞれの場所で、双子は戦士として成長した。それぞれの場所で、人喰いのお話は知られていた。それぞれの場所で、悪事を重ねる人喰いと闘い、打ち負かそうという考えが浮かんできた。最年長の母である大地は、二人を会わせ、異なった双子が合意するようにした。同じだが異なる二人は約束を交わし、人喰いを探しに人喰いのいる王宮に赴いた。人喰いに挑み、成敗し、闘うために、双子の兄弟は出かけた。それぞれの場所で、双子は勇猛果敢に戦った。こうして、人喰いは打ち負かされた。偉大なる母、大地は満足した。世界の男女たちも満足した。

今、われわれ、下の世界の暦、太陽の歩む道の両側にいるわれわれは、よく知っている。われわれの大地を恐怖と死で覆い尽くそうとする人喰いを打ち負かすには、二つの力だけでは不十分である。すべての男女が大地の色をした人々であることをわれわれは知っている。労働や尊厳を略奪されているあの男女たちと、われわれは団結しなければならない。人喰いと闘い、打ち負かすためである。われわれが自由になるためである。われわれの地理、われわれの暦の中で。今、その時である。

では、お元気で。われわれはお互い違っていても、夜明け前には団結できるように。

副司令マルコス

24 監視人たち (2007/7/19)

追伸：反ジェンダーのお話を語

コーラ缶といえば、このあたりに少年少女がたむろしている。まあ、歳をとっていても少年少女のように振る舞う人はいるが、ここでは年齢のいかない人のことである。この場にいる少年少女は、勘定する基準で異なり、はっきりしないが、われわれに見える数は多くない。しかし、われわれが耳を傾けている数はかなり多い。そこで少年少女のため、小さなガブリエルとカティのため、われわれサパティスタのいちばん年下の少女、あるいはシウダー・フアレスにいるママ・コラルのように、地理的には遠くとも、気持ち的には近い少年少女のため、PAN 支持者の中国人のドルのお話ほどではないが、少しは気に入るお話をすることにしよう。

EZLN 調査委員エリアス・コントレラス、「監視人」に関する極めて個人的で独特な見解をラ・マグダレナに語る。

EZLN 調査委員エリアス・コントレラスにとって、ジェンダーに関する問題は極めて特異なものだったに違いない。それが何よりもラ・マグダレナの教育活動であったことは論を待たない。ラ・マグダレナはトランスセクシャル、つまり男ではないが女でもない。それについてエリアスはうまく定義している。「ナディ」という特別班で、ラ・マグダレナはコンパニェロ（男性同志）か、コンパニェラ（女性同志）かと聞かれ、エリアス・コントレラスは、「コンパネーロア、女性同志になる予定の男性同志」と、答えた。でも、それは別のお話のテーマである。

この場では、EZLN 調査委員エリアス・コントレラスがわれわれに出会ったより前の雨の7月、彼がラ・マグダレナに語ったことを話そう。

その午後、エリアスとラ・マグダレナは、水と泥まみれだった。二人は集団で耕作しているト

ウモロコシ畑から戻る途中だった。エリアスはどこからかナイロンを取り出し、騎士道精神でラ・マグダレナを守ろうとした。いたずらな風はビニールとエリアスの親切心を吹き飛ばし、二人はびしょ濡れになった。二人はあきらめ、道の片側に聳えるセイバの大木の根元に座った。

雨が少し弱まり、「なぜ、こんなにひどく雨が降るの?」と、ラ・マグダレナが話した。

「まあ、そういうことだ」「つまるどころ」「うむ」と、いつも通りの答えではなく、ラ・マグダレナの接待役としてエリアス・コントレラスはラ・マグダレナにお話ししなければならないと考えた。そのお話は、いつも通り語ることで初めて紡がれるものだった。

「彼らがパーティーをしているからだ。彼らがパーティーを開くと、こうなる」

エリアスは太文字で「彼ら」と発音したわけではないが、この「彼ら」がただの「彼ら」ではなく何か特別なことに気づき、「彼らって何者なの?」と、ラ・マグダレナはたずねた。

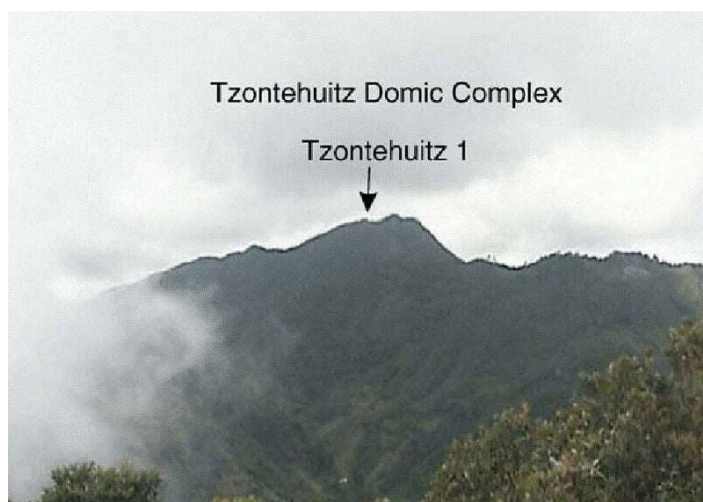
「彼らは監視人だ。あるところではトシルメイレチック [ツォツィル語で山に住む父母] と呼ばれ、別のところではツルタカ [ケチ語で山の平原] と呼ばれる」と、エリアスは答えた。

こうして、調査委員エリアス・コントレラスは、それ以降、ラ・マグダレナの違いを別の形で形容するお話を続けた。

「監視人は男であり女でもある。丘であると同時に平地でもある。監視人は混在している。2でありながら2でない。一体となっている監視人(男/女)である。しかし、われわれサパティスタは彼らを監視人と呼ぶ。彼らは、すべてのものの管理人(男/女)と言われる。山の中で、水が湧き出る場所の近くにいる。洞窟の中とか、湧泉の近くなど、良質で清らかで新鮮な水のある所には、監視人がいる。彼ら/彼女らは、雷と稲妻の主(男/女)と言われる。その言葉を発するとき、あまり遠くには届かない小さな雷のように、いつもゴロゴロという。だがパーティーになると歌と踊りが始まり、水があちこちに飛び散り、こんな土砂降りになる」

ラ・マグダレナがするはずの質問を待たず、エリアスは先走りして言った。

「監視人の仕事は、われわれ先住民や世界のことに関連している。また、良い考えで良い道を歩む人、悪い考えで罪を犯す人にも関連している。ここから見えない向こうの山の上に、測れないほど大きな囲いがある。その柵には、密林のすべての動物が飼われている。その動物はそれぞれの男女に応じたナワルである。ナワルは各個人の双子のような存在である」



ナワルの柵囲いがあるとされる聖山ツオンテウィツ

「今思いついたが、ブッシュのナワルはきっとロバに違いない。悪気はないが、誰かのナワルは去勢牛かもしれない。ラ・マグダレナ、君のナワルはラバ [雄ロバと雌ウマの交雑種、繁殖能力欠落] じゃないかな」

腹を立てたラ・マグダレナは、泥をつかんでエリアスに投げた。

「真面目に言っている。さっきの発言は気つけ薬だよ。私の言葉に注意を払っているか確認するためだ。そうしないと、あなたにわからないからだ。もちろん、ラバを軽蔑するなど言っている。ラバは妊娠が可能で、どこに行っても疲れ知らずである」と、エリアスは笑いながら言う。

エリアスは一休みして、「ラバは不機嫌だと泥も跳ね散らす…」と、無愛想に付け加える。

ラ・マグダレナは立ち上がると、何か…もっと強い力でエリアスを叩けるものはないかと探した。その手には棍棒のような枝がある。今、ほほ笑んで言うのはラ・マグダレナだ。

「あなた、何を言っているの？」

エリアスは、ラ・マグダレナの手にある抗議の道具を目にとめ、弁明しようとする。

「やめるのだ。ラ・マグダレナ。あなたのことじゃない。何もそんなことは考えていない。いわゆる逸話のたぐいだ。逸話というのはお話や小話に教えがあるという意味で…」

「それは寓話で、逸話じゃない」と、ラ・マグダレナは訂正する。

エリアスはひるまない。

「だから、逸話じゃなくて…あとで説明するよ。ラ・マグダレナ。興奮しているから、説明しても、わかってくれそうにない。監視人のお話を続けた方がいいのでは」

「いいわ。でもラバの話はぬきで」と、ラ・マグダレナは言う。

「わかった」と、エリアスは言う。

「もし、あなたが良い行いをすれば、監視人は、あなたの動物、つまりナワルを柵の中で飼い、世話するとともに、あなたも見守るといふ。だが、あなたが悪い行いをしたら、まあ、監視人は小動物を柵から追い出し、それを狩ることになる。または、動物は墜落するか、病気になる。そうすると、あなたにも同じことが起きる」

「監視人が疲れたり、いなくなったり、動物が全部逃げたら、どうするの？」と、ラ・マグダレナはたずねた。

「そうならば不祥事だ。われわれの仲間はとても苦しむ。すべてが死んでしまうのは、一目瞭然だ。大地は誰かが面倒を見るべきである。われわれサパティスモは監視人を助けるためにいる。そんなことが起きないように、われわれがもっとも愛する大地を世話するため」

「男と女がいるのに、なぜ彼らと言う？」と、ラ・マグダレナは挑戦的な質問をする。

EZLN 調査委員エリアス・コントレラスは、まじめな表情で、まるで遠く見えない何かに向かうように、答える。

「ああ、われわれサパティスタはまだ表現する言葉がないものがあることを知っているが、今ある言葉を使う。しかし、どう名づけるかわからないが、そういうものが存在し、そこにあり、多くはよいものであるが、われわれが想像できない苦悩、まだ知らない喜びもあることをわれわれは知っている。だが、いつの日か…」

エリアスは黙っている。

ラ・マグダレナは棍棒を捨て、彼に近づいて手を握り、「いつの日かって？」と、尋ねる。

エリアスは顔を赤らめ、「いつの日か、わからないことを理解するための言葉をわれわれは手に入れる。名前がなくても存在している世界はあるから」と、答える

ちょうどその時、なぜかわからないが、空が晴れ、別れを惜しむかのように太陽が顔を出した。太陽が顔を赤らめ立ち去る寸前に、反対側から月が顔をのぞかせた。しばらく太陽と月は顔を突き合わせていた。お互いを繋いでいた通常のコースをたどらず、一度だけすべての慣習を無視し、不可能を可能にするため、両者が会いに行かないだろうかと、誰でも想像できたはずだ。

下の方では、もっとも年長でいちばん最初の監視者が、星々に書かれていないことを読むよう鹿に教え、そこから離れた所では、ひとりの小さな女の子が、色とりどりの一冊の本の文字の中に別のアルファベットを発明していた…。

では。お大事に。そして、インド、韓国、ブラジル、米国の屈服することのない農民たち [2007年7月17日開催の『資本主義的略奪反対・大地領域防衛』シンポに参加] とわれわれを結びつける抱擁のように、まだ名づけられていないものに栄光あれ。

25 天空を読む (2007/10/11)

仲間の皆さん

私の声を通じて、サパティスタ民族解放軍の声が語られる。そして、私の声を通じて、メキシコ南東部の山岳地帯に暮らし戦っているマヤをルーツとする先住民のサパティスタの男と女、子どもと老人は挨拶する。われわれは、この大陸の根源であり支えとなっている先住民族、ナシオン、部族に挨拶する。大地の色が持つたくさんの色にわれわれは挨拶する。

われわれを歓迎していただいたメキシコ北西部のインディオの人々、クミアイ、パイパイ、キリワ、クカパ、トオオノ・オダム、コムカック、ピマ、マヨ・ヨレメ、ララムリ、グワリヒオの人々に挨拶する。そして特に、われわれを迎えてくれるヤキの男女に挨拶する。彼らの暮らしている大地と天空で、アメリカ大陸の先住者たちの文化の言葉が出会っている。ビカムの伝統的権威者、出席しているヤキのほかの人々に挨拶する。

われわれを召集する声と耳である先住民全国議会に挨拶する。われわれを助け、支援し、同伴しているソノラ州、メキシコ、アメリカ大陸、ならびに世界の女性と男性に挨拶する。

われわれは、距離、言語、国境、政府、嘘、迫害、死、そして上の世界の連中がわれわれに押しつける偽りの分断など、すべてのものに抵抗する姿勢で、このアメリカ大陸先住民族集會に参加する。上の世界のわれわれの監視体制下にあるわれわれのどんな夢と同じように、夜明けを迎えることは、数時間、数日、数ヶ月、515年前と同じように不可能に思えた。

アラスカからパタゴニアまで、アメリカ大陸に活力をもたらす先住民族、ナシオン、部族の代表団や代表者たちが、ここに参加している。世界の多くの場所から耳や言葉が届く。われわれは歌を聞き、沈黙を聞くことになるだろう。われわれは色や記憶を見るだろう。それゆえ、ここにいる人にもいない人にも挨拶する。そして、記憶を携え、お話しをもって挨拶する。

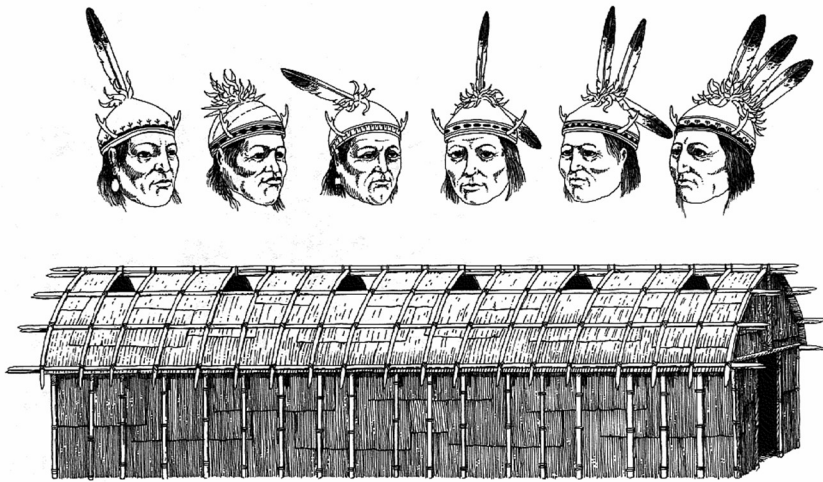


ヤキの代表たち



北西部の先住民族

メキシコの大地のもう一方の端、南東部の山地では、ある伝説が次のように言っている。月が曲がった光の傷跡のようにわずかばかりの影になっているとき、最初の神々、つまり世界を誕生させた神々が創った空間に、ひとつの問いかけが描かれている。その空間は、疲れを軽減させるため、皮膚が育つように創られた。伝説では、われわれの天空に新月が昇る頃、アメリカ大陸のすべてのインディオの先住民族の夜の屋根で、この質問は繰り返されるという。同じ問いかけは北米の空にも現れる。モホーク、オネイダ、カユーガ、オノンダガ、セネカ、トゥスカロラが住むハウデノサウニー [長い家: 米国のイロコイ連邦] の大地で、常に新鮮な緑の葉をした大樹ツォネラタセコワ [白松] の上に、ワユウ [コロンビア・グアヒラ半島の先住民族] の大地を経て、大陸の最南端のマプチェの天空に広がる。新月ごとに昔からの問いかけがなされる。



The Six Nations Confederacy was and is likened to a longhouse.

Copyright (c) 1991 by John Kahionhes Fadden

左からセネカ、カユーガ、オノンダカ、オネイダ、モホーク、トゥスカロラ



大樹ツォネラタセコワ

もっとも原初の母、大地のための生命はあるのか？

記憶の守護者である最長老たちは、最初の神々が世界を創造したとき、解答は作られなかったと語っている。創造主である神々によって、世界のパズルの基本ピースとして残された。最初の神々は、記憶がなくならず、ときおり現れるよう、解答を大地の天井に残したという。

やがて、死にいたる命令を下すお金が到来して、この大地を支配し始めた。破壊をもたらし、それを「近代」と呼んだ。強奪や略奪をもたらし、それを「文明」と呼んだ。強制をもたらし、それを「民主主義」と呼んだ。忘却をもたらし、それを「流行」と呼んだ。

ウォール街にある資金保管庫、大企業本社のクリスタル・タワー、大陸全域を痛めつけている悪しき政府の要塞バンカーの中では、この問いかけはまったく区別されないと、われわれの知恵者は言う。そのため、世界の始まり、大地の最初の歩みに際して残されたあれこれの問いかけを天空に読み取ることができるのは、先住民族だけだと言われている。われわれの最長老によると、それ以来、多くの解答が用意され、歌が歌われ、踊り、言語、布や皮膚の色、言葉、歴史、文化、記憶が創られている。

上の世界の連中、命令するもの、お金にとって、ひとつの答えしかない。銀行口座のように堅固で、強欲のように無尽蔵で、野心のように膨張している。「それはちがう。この大地のための生命などない」と、お金は答える。「死」ではなく、「商売」だと、反論する。

一方、先住民族、ナシオン、部族のなかでは、解答は壊れてしまい、多くの断片に分かれ、時間と空間の中にかかれ、死が構築し支配している国境の中で失われてしまった。515年前、われわれが、対立し、分裂し、いつも断片化していることに、支配者は気づいた。そして大地で通じて一体となっていた壊れた血を征服した。それから515年、われわれ先住民族、ナシオン、部族は、抵抗し、生き残り、戦おうとしてきた。

皆さんは、これらの苦悩と反抗的な尊厳のお話を今から聞くことになる。聞けば、話せば、われわれは自分が何ものであり、どこにいるかがわかるようになる。

われわれの血の苦悩は名づけられ、その責任者も名付けられる。お金である。経験と知恵も名づけられるだろう。われわれ民族も名づけられるだろう。われわれの要求も名づけられるだろう。われわれが望む正義、われわれが必要とする民主主義、われわれに相応しい自由である。われわれのものだったが、なくなり、奪われたものも、名づけられるだろう。われわれの心、われわれの人々の心の声も、聞かれるだろう。

答えが集団的なものになった時、この大陸が今日、火と忘却、騒音によって沈黙している声を回復した時、いちばん最初の母である大地が待っている解答、大地が要求している生命の「肯定」が、われわれの天空に描かれだすだろう。そのことをわれわれは理解するだろう。

それは いちばん最初の声、先住民の声、われわれの声である。

そうすれば、おそらく、今日、影から光への移行しはじめた新月のように、人生は彼らの道、彼ら歩み、彼らの仲間の中にあるという解答をわれわれのこどもたちの中に描き始めるだろう。そのためには、おそらく、振り返って遠くを見なければならぬ。それはわれわれが記憶と呼ぶものである。今、この場で、尊厳ある存在にならなければならない。それはわれわれが反抗と呼ぶものである。まだ存在していない世界、それを形作る手、それを歌う口、それを歩く歩みを待っている世界を歩かなければならぬ。それは、われわれが闘争と呼ぶものである。

仲間の皆さん

この集会の場では、われわれはサパティスタとして発言しないことにした。われわれの苦悩は、他の先住民族の仲間たちの苦悩の中で語られていることを知っている。同時に、われわれの夢や希望、それを実現するために展開する闘争についても語られている。ほかの機会と同じように、今日のわれわれの役割は、橋渡し役である。皆さんの声が行き来し、寛大な聴き手に出合い、皆さんの色が見られるように、皆さんの記憶が示されるようにすることである。われわれの男女の統率者、守護者たちはこう言っていた。それぞれが語りあい、われわれの心の声を聞きあおう。お互いに教えあい、われわれの心で学んでいこう。われわれの沈黙は、われわれが敗北していないこと、戦いが続いていることを思い出させてくれるカナダからチリまでの人々に対する挨拶、敬意、尊敬と感謝にほかならぬ。そして、勝利とは別の世界で生活することである。その世界とは、現在と未来のわれわれのすべての世界が収まる世界である。

そうなることが、望ましい。どうもありがとう。

26 ソンブラ（影）は月の追い立て役（2007/12/15）

ソンブラ、月の追い立て役。

かつて語られたとおりに語るとしよう。はるか昔のことだ。それを定める暦すらなかった。それが起きた場所を地図で確定できない。戦士ソンブラは、戦士でもソンブラでもなかった。報せが届いた時、ソンブラ（影）は山にまたがり、「どこ？」と、たずねた。

「あそこだ。山の切れ目のところだ」と、漠然としたことを言われた。

まだソンブラでないソンブラは、馬にまたがった。報せは、峡谷の隅々を駆け巡った。

「月だ。落ちたのは。それだけのことだ。月は気絶したように墜落した。嫌々をしながら、ゆっくりと落ちていった。私を見ていないように、私に気づかないかのように。でも、われわれは月を見ていた。われわれは、丘の上でいったんは立ち止まりその後、谷底に転がり落ちるのを見ていた。月はそこに行った。われわれは確かに見た。その時は光だった。月は光だった」

ソンブラは溪谷の端にたどり着くと、馬から降りた。ゆっくりと谷底に降りた。ソンブラはそこで月を見つけた。ソンブラは月をメカパルで包んだ。ソンブラは背中に月を担いだ。月とソンブラは山の頂上まで登った。道の上にはソンブラ、ソンブラの上には月がいた。両者は丘の一番高いところに到達した。そこから月を天空へ放り出し、ふたたび月が夜の道を歩くようにするためだと、ソンブラは告げた

「いやです。ここに、あなたと一緒にいたい。私の光は、寒い夜には、あなたにとって弱々しい。灼けるような昼間でも私の光は涼しい。あなたは、私の輝きを倍増させる鏡を持ってきてくれるでしょう。あなたと一緒にここにいたい」と、月は言った。

「だめです。世界も、男女も、植物も動物も、川も山も、月を必要としているのです。暗闇の中で自分の歩みをじっと見つめるため、迷子にならないため、自分が誰で、どこから来て、どこへ向かうのか、忘れないために」と、ソンプラは言った。

両者は議論しあった。ずいぶん時間がかかった。両者のつぶやく声は、茶色い光、発光する影になった。ほかにどんな言葉が交わされたか、誰も知らない。ずいぶんと時間がかかった。

夜明け前、ソンプラは立ち上がり、メカパルを使って、月を天空に投げ返した。月は怒り出し傷ついた。はるかに高い所、最初の神々が月に与えた場所に、月がとどまることになった。

その天上から、ソンプラを呪って、月は次のように言った。

「今から、あなたはソンプラよ。あなたは光だと思えるかもしれない。だが、そうではない。あなたはソンプラとして歩むことになる。戦士になる。あなたには、顔も家も休息もなくなる。あなたには、道と戦いしか残っていない。あなたは勝利するだろう。きっと愛する人に出会えるだろう。『あなたを愛している』と言うとき、あなたの心はあなたの口で語るだろう。しかし、あなたはソンプラであり続け、あなたを愛する人に出会うことはないだろう。あなたは愛する人を探すだろうが、『あなた』と言える唇に出会うことはないだろう。ソンプラ、あなたは、あなたでなくなるまで、戦士であり続けるのだ」

それ以来、ソンプラは今ようになった。つまり戦士ソンプラとなったのである。いつ、どこで、何だったのか。そして、これからどうなるか、誰が知っているというのか。

まだ、その暦を作る必要があり、その地図をまだ発明する必要がある。まだ、『あなた』と言うことを習得しなければならない。

まだまだ先は長い…

また明日、お会いしましょう。

副司令



戦士ソンプラが登場する『火と警戒の夜』の表紙

第7部 これから来たるべきことの記憶



第7部 2009～2021年 やがて来る記憶 (*は老アントニオが登場しないお話)

- 1 暗闇のなかの小さな光
- 2 やがて来る記憶
- 3 三つの視線*
- 4 イシュチェルのルート
- 5 ポップコーンのお話*

1 暗闇のなかの小さな光 (2009/1/6)

七番目のお話：老アントニオが話してくれた。暗闇のなかの小さな光

25年前と同じように、冷たく氷のように静かな夜明けがわれわれを目覚めさせる。25年前と同じように、老アントニオはドブラドールで作った巻きタバコに火をつけ、われわれのような暗闇の中に小さな光を描き出す。われわれは黙っている。誰も何も言わない。じっと待つ。やがて老アントニオは、気持ちを和らげ、慰め、希望を与えるほの温かい言葉呼び出す。

われわれの年長者のなかの最長老たち、もっとも昔の知恵者たちは言っていた。いちばん最初の神々、世界を創造した神々は、何の秩序もないまま、世界を創ったようである。最初の神々は、創った世界の一部分を好きなところに撒き散らしたという。創造された世界は、ひとつではなく、いくつもあり、それぞれが異なっていた。つまり、あなた方の言い方では、多くの地理があったという。すると、時間たちは一緒に、つまり過去、現在、未来と一緒に、神々に抗議に行くと、われわれの知恵者たちは語る。

「それはありえない。混乱した世界がいくつもあると、われわれの仕事はできない。われわれの時間がひとつの道を歩めるように、世界をひとつにしてほしい」と、時間たちは言った。

過去・現在・未来の言葉に耳を傾け、「了解。どうなるか確かめよう」と、神々は言った。

最初の神々、世界を誕生させた神々が集まり、何かを話しあった。内容は不明だが、長い時間がかかったことはわかっている。その後、最初の神々は、時間たちを呼び集め、「あなた方が導き出した言葉について考えてきたが、その考えは良くないと言いたい」と、言った。

「くそっ。ばか者はわれわれだ。われわれは神々でない」など、あれこれと時間たちはつぶやきだしが、「ちょっと待て。まだ言葉が終わっていない」と、神々は時間たちに言った。

「わかりました」と、時間たちは言うのと次の展開を待った。

最初の神々は、時間たちに次のように説明した。命令するものが全世界を支配し、世界にあるすべてのものを奴隷にしようとする時が到来する。命令するものが破壊し、殺すことになる。命令するもの力は偉大で素晴らしく、世界にはそれに対抗できる力は見つからない。命令するものに抵抗し闘う唯一の方法は、多くの異なる存在であることである。そうすれば、命令するものが、単一の在り方を掌中に収めたとしても、すべてを打倒することはできなくなる。世界にあった様々な世界で仕事しながら歩むには、多様な任務がある。それは時間にとっては面倒なことを神々は理解していた。仕方ないが、命令するものが到来したのである。

世界にあるすべての世界にとって、均等な時間でなく、多くの時間が存在するようになると、神々は時間たちに言った。あなた方の言い方では、多くの暦があることになる。

最初の神々は、時間たちに語った。世界を構成するそれぞれの世界で、地図や暦の読み方を知る男／女がいることになる。そして、過去、現在、未来が一体となり、すべての世界が、命令するものを倒す時が到来するだろう。いちばん最初の神々はこのように言った。

すると、答がわかっている時間たちは、逆らって、「命令するものを倒すと、多くの世界をまとめひとつの世界にできるのか」と、質問をした。

いちばん最初の神々は時間たちに言った。それぞれの時間にいる男女が、それを知ることになるだろう。次々と到来する命令するものに抵抗し、打ち負かすうえで、異質であることが、弱さになるのか、それとも強さになるのかを知ることになる。

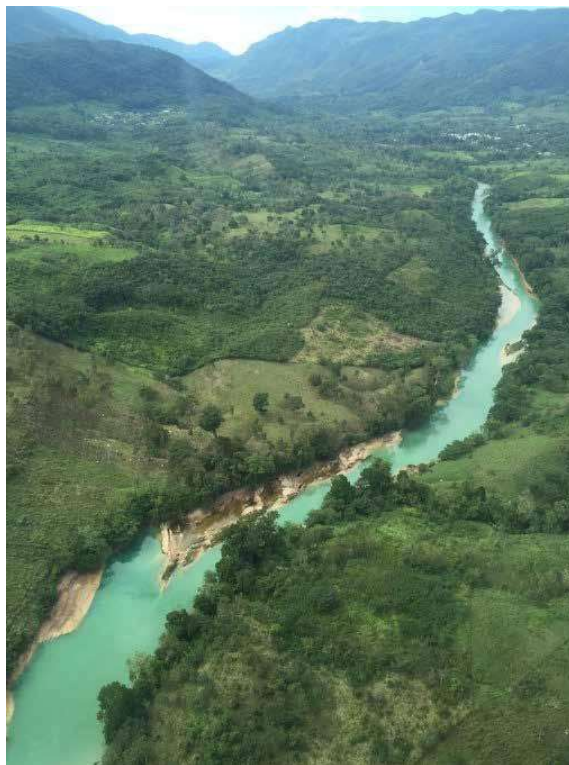
老アントニオはいなくなった。まだ寒かったが、ひとつの影が独りぼっちにならないように、小さな光が残っていた。

タンタン。

2 これから来るべきことの記憶 (2020/10/19)

35年前の10月のことである。

老アントニオは、雨に耐えている焚き火を見つめる。雨が滴り漏れてしまった麦わら帽子の下で、ドブラドールで巻いたタバコにおきびで火をつける。ときおり柱の陰に隠れるので、火は消えない。風も手助けし、吹きかける息で、怒りで赤くなった燃え残りは生き返る。



ハタテ川とシエラ・クルス・デ・プラタ

キャンプ地はワタピルと呼ばれ、ハタテ川とペルラス川の湿度の高い支流の間に聳えるシエラ・クルス・デ・プラタにあった。1985年10月の嵐は、彼らの朝を予感させるものとして一行を迎えた。背の高いアーモンドの木（この山を反乱軍の言葉で改名することになる）は、その慈しみの視線で、根元にいる小さな、とても小さな、取るに足りない一握りの女性と男性を見つめる。やつれた顔、萎びた肌、輝く目（おそらく熱、恐怖、錯乱、飢え、睡眠不足）、破れた茶や黒の服、靴底を固定しようとした蔓で変形したブーツ。

嵐の音に紛れほとんど聴き取れないが、ゆっくりと静かな言葉で、まるで自分に呼びかけるように、老アントニオは語りかける。

大地の色のため、命令するものは、ふたたび到来し、その厳しい言葉、その殺人的な理性のエゴ、その施しに見せかけた賄賂を押し付けてくるだろう。死がもっとも残忍な服をまとう日が来るだろう。道を痛めつける機械は、歯車と金切り音でその歩みを飾り、破壊を植え付けながら、繁栄がもたらされると吹聴する。植物や動物を恐怖に陥れるこの騒音に反対する者たちは、実際に殺され、記憶の中でも抹殺されるだろう。一度は鉛の銃弾で、次は嘘によって抹殺される。夜はとても長くなるだろう。苦悩も長く続くだろう。死はより致命的になるだろう。

アルーシュ [ユカタン地域で信じられる小さい聖霊] たちは、「死が迫っている。母よ、殺しながらやって来ている」と、母なる大地に警告を発するように言っている。

いちばん最初の母なる大地は、オウム、コンゴウインコ、オオハシの夢を振り払うように、目を覚まし、大地の男女の守護者たちの血を求め、その子孫たちにこう言うだろう。

「誰か、侵略者を愚弄しに行くのだ。ほかの者は血を分けた仲間たちを呼びに行くのだ。水におびえるな。寒さや暑さに音を上げるな。道がなくても道を切り開くのだ。川や海を横切るのだ。山を縦断するのだ。雨や雲など吹き飛ばすのだ。夜であれ、昼であれ、夜明けであれ、行ってすべてのものに警告するのだ。

私の名前や色はたくさんあるが、私の心はひとつである。私の死はすべてものの死となるだろう。私があなたに与えた色の肌、私があなたの口に植えた言葉、私のそばにいる自分の大きさについて、あなたは恥じることがあってはならない。私は、彼らの視線に光を、耳に庇護を、足と腕に力を与えている。異なる色や慣習、異なる道を恐れてはならない。なぜなら、私が引き継がせてきた心はひとつであり、理解や視線もひとつである」



アルーシュとされる土偶



アルーシュとされる土偶



オオハシ（トゥカン）



コンゴウインコ

そして、アルーシュたちの包囲網の中で、致命的な欺瞞の機械は、その傲慢さや強欲を破滅させるだろう。権力者は、ほかの国から、腐敗した死を構成する下僕たちを派遣するだろう。連中は壊れた死の機械の内部を点検し、壊れた理由を見つけ、こう言うにちがいない。

「どの機械も血にまみれている」

この不思議な現象の理由を説明しようとして、彼らは上司に報告するだろう。

「原因はわからない。ただ最初の血を受け継いでいる血ということだけはわかる」

そして、権力者が酔いにまかせ、わがままし放題だった大邸宅では、悪いことが自らに降り注ぐことになる。理不尽が彼の領地に入り込み、湧泉から水ではなく血が流れるようになる。その庭園は枯れてしまい、彼のために働き仕える人々の心も枯れてしまう。権力者は、使用人としてほかの臣民を連れてくる。使用人たちはほかの土地からやって来るだろう。お金をめぐって、対等な立場の間に憎しみが生まれるだろう。お互いが争うようになり、歴史や苦悩を共有する人々の間に死や破壊が訪れるだろう。

先祖代々の大地や天空で権力者の下僕や奴隷になった大地を耕し、大地で生活していた人たちは、自分たちの家に不幸が訪れることを目の当たりにすることになるだろう。その子どもたちは、腐敗と犯罪で腐りきった世界に溺れ、墮落していくだろう。

お金で純潔と愛を殺してしまう初夜権が復活するだろう。そして、子どもたちは母親の両膝から奪い取られ、その初々しい肉は、大貴族の下劣なさもしさを満たすため、奪われるだろう。金をめぐって、息子は両親に手を上げ、喪がその家を覆うことになる。娘は、暗闇や死の中で破滅し、領主とその金によって、その生命や存在を抹殺されるだろう。

未知の病は、小銭のために自分の尊厳や大事なものを売りはらった者、自分の民族、血と歴史を裏切った者、そして嘘を言いつのり広めた者ものたちに襲いかかるだろう。

世界を支えている母なるセイバの木は、その傷ついた叫びをはるか遠くにいる耳の遠い人にも聞こえるよう大声で叫ぶだろう。遠くにある七つの声が、セイバの木に近づく。隔たる七つの腕が、セイバの木を抱く。異なる七つの拳が、セイバの木と一体になる。母なるセイバの木は、スカートを上げ、その千本の脚は、鉄でできた道を踏みつけ蹴りだす。車輪付きの機械は、金属製の道から外れる。水は川や湖からあふれだし、海も怒りで荒れ狂う。こうして、すべての世界で大地と天空のはらわたが開いていく。

すると、いちばん最初の母なる大地が立ち上がり、懸命に自らの家と場所を主張することになるだろう。そして、権力の豪華な建物群には、樹々、植物や動物たちが侵入していくだろう。そして、それらの心を携え、人々の守護者にして心であるボタン・サパタは、ふたたび生き返るだろう。そして、ふたたび、ジャガーは、お金とその下僕が支配しようとした場所に君臨し、先祖代々の道を歩くことになる。

そして、その無知な傲慢さが音もなく崩壊するのを見るまでは、権力者は死ぬことはないだろう。そして最後の一息で、命令するものはもはや存在しないことを知るだろう。その存在は、支配者が命じた死に反抗し、抵抗してきた世界では、悪い記憶でしかない。

このことは、永遠の死者、つまり生きるために今一度死ぬことになる者たちが言っている、言われている。

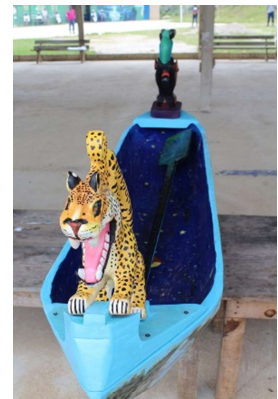
そして、この言葉が谷や山で知られるようにせよ。溪谷や平原でも知られるようにせよ。タパカミーノ [夜に大きな声で鳴く鳥、車や人の前で衝突する直前に飛び立つ] がその言葉を繰り返すことで、仲間として歩む心の歩みに警告するのだ。雨や太陽が、この大地に住む人々が見つめるなかで、その言葉をまくのだ。風がそれを遠くまで運び、同志的な思考のなかに巣を作るのだ。



タパカミーノ



ジャガーが彫り込まれた丸木舟



これから訪れる恐ろく、不思議なことをこれらの天空と大地は目撃するだろう。そして、ふたたび、ジャガーは、お金と下僕どもが支配しようとした場所を統治し、先祖代々の道を歩くことになる。

老アントニオは沈黙するとともに、雨音も消えた。何も眠ってはいない。誰もが夢見る。

3 三つの視線 (2020/12/23)

第3部、使命

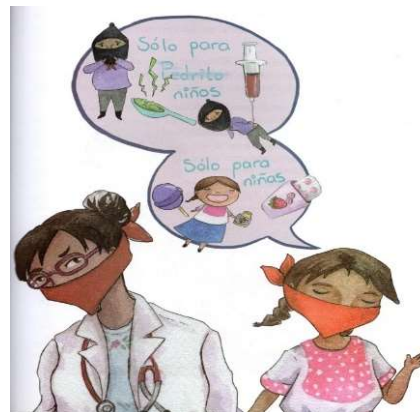
デフェンサ・サパティスタがエスペランサにサパティスモの使命をどう説明したかということと、いくつかの嬉しい理由付け



デフェンサ・サパティスタ



エスペランサの描いた絵



ペドリートには注射、お菓子は女の子にと夢想するデフェンサ

「これからあなたにととても大事なことを説明するわ。でも、あなたはメモできないので、頭の中にちゃんと保管してね。ノートはどこにでも捨てられるけど、あなたの頭はずっと運ばないといけないからね」。

今は亡きマルコス [2014年にガレアノに改名] が何かとても重要なことを説明するときにしたように、デフェンサ・サパティスタは何度も行ったり来たりした。エスペランサは丸太の上に座っているが、用心深く、苔や菌類、乾いた小枝で覆われた湿った木の上にナイロンシートを敷いていた。

その小さな手でどこともなく指差しながら、デフェンサ・サパティスタはぼやく。

「私たちが戦いで赴く場所を私たちが見ることができると、考えているの」

エスペランサはどう答えようかと考えていたが、デフェンサが修辭的な質問をしたのは明らかで、デフェンサにとって関心のあるのは、回答ではなく、最初の質問に続く質問である。デフェンサ・サパティスタによると、彼女は科学的な方法に従っているという。

「問題は到着することではなく、道を作ることよ。道がなければ、作るしかない。道がなければ、どうしようもないわ」

こう言ながら、少女はどこかから持ってきたマチェーテを振り回している。今頃、きっとどこかの小屋では、マチェーテを探しているはずだ。

「つまり、問題はちょっと変わり、いちばん大事なものは道よ。行くところへの道がなければ、あれこれ心配してもしかたない。行き先に道がないなら、どうすればいいの」

エスペランサは自信満々で答える。

「道を作るときに濡れないよう、雨がやむまで待てばいいわ」

デフェンサは髪をかきむしりー母親たち30分もかけてセットした髪は台無しー叫んだ。

「ちがうわ!」と、エスペランサは、ためらいながら、こう言い返した。

「わかっているわ。どこに行ってもお菓子があるって、私たちはペドリートに嘘ついたわ。道はないけど、最初に道を作る人が、お菓子で腹を満腹にできるのよ」

「クソ男子どもに応援を頼むの? 絶対ダメよ。私たち、女性として最初に道を作るのよ」と、デフェンサはすぐに反応した。



少女デフェンサとくつろぐ隻眼馬
(Caballo choco) と猫-犬(gato-perro)



エリアス・コントレラスと副司令モイセス

「確かにね」と、エスペランサは言うと、「チョコレートもあるかも」と、付け加えた。

「しかし、道を作っている時に迷子になったらどうする？」と、デフェンサは続けた。

「大声で助けを呼ぶのよ？ 爆竹を鳴らすか、法螺貝を吹けば、村にいる人が聞いて、救出に来てくれるのかも？」と、エスペランサは答えた。

エスペランサがこの問題を文字通り受け止め、集まっている人たちも同じように考えていることをデフェンサは理解した。

例えば、猫犬は、虹の先にあるチョコレートの詰まった大鍋を想像してヒゲを舐めだしている。隻眼馬は、塩漬けトウモロコシやペットボトルだらけの大鍋もあるのではと疑っている。カラミダーは、副司令ガレアーノが彼女のために考案した「パ・ド・ショコラ」と呼ばれるステッパー大鍋にサイのように突進する振り付けをリハーサルしている。

エリアス・コントレラスは、最初の質問でヤスリを取り出し両刃マチェーテを研いでいた。

さらに、「私をイスマエル [メルビルの小説『モビィ・ディック』の語り手] と呼べ」と書かれた旗をもった甲虫にそっくりの不定形の存在 [甲虫のドゥリート] が、老アントニオと陸上で不動性の利点について話し合っている。

「そうだ、親愛なるクィークオーク [『モビィ・ディック』の登場人物]、港に近づいている白鯨はいない」と、ドゥリートは言い張っている。年老いた先住民のサパティスタ、1994年に武器を手にした世代の知られざる教師 [老アントニオ] は、ドブラドールでタバコを巻き、小さな甲虫の言い分を注意深く聞いている。

少女デフェンサ・サパティスタは、理解されにくい立場にいることを承知している。科学と芸術のように。ピルエット [爪先立ちの旋回] の抱擁とポルテの支持を待つパ・ド・ドゥ [男女二人の踊り] のように。救ってくれる視線を待ちながらブリキ缶に閉じ込められたフィルムのように。係留する船のない港のように。使命と運命を与えてくれるヒップを待つクンビアのように。凸のない凹 [ディエゴ・シガラのフラメンコ楽曲] のシガラのような。「約束の花」 [ルス・カサルの7枚目のアルバムのタイトル] に会いに行くルス・カサルのような。パンクの爆弾のないルイス・リング [フランスのアナキスト・パンクバンド『ルイス・リングと爆弾』] のような。盗まれた四月 [ホアキン・サビナが歌った歌] をコードの後ろで探すパンチート・バローナ [盗まれた四月の作曲者] のような。スラムのないスカのような、それに名誉を与える副司令抜きのナッツ・アイスクリームのような。

しかし、デフェンサは守備側だが、抵抗と反乱が売りのサパティスタであり、視線で老アントニオの手助けを求める。

「しかし、嵐は誰にも遠慮しない。海でも陸でも、空でも地上でも同じだ。大地のはらわたまでかき回し、人間や動植物を苦しめる。色も大きさも関係ない」

老アントニオは消え入るような声でこう言った。

尊敬と恐怖をないまぜにして、全員が沈黙を守っている。

老アントニオは続ける。

「女も男も、風や雨やひび割れた大地から身を守ろうとする。それが過ぎ去るのを待ち、何が残り、何がなくなったか知ろうとする。しかし、大地はそれ以上のことをする。その後のため、その後起きることに備えている。大地を維持する過程で、すでに変化が始まっている。母なる大地は、何をすべきかを知るため、嵐の通過を待たず、事前に建設を始める。

だから、もっとも知識のある人々は言っている。朝は来て、いきなり出現するのではなく、すでに暗闇のなかに潜んでいる。見る目をもつ人は夜の割れ目に朝を見つけられる。

だから、トウモロコシの男女は、種をまくとき、トルティーリャ、アトーレ、ポソーレ、タマール、マルケゾーテを夢見る。それらは、今はまだないが、いずれはできることを知っている。そのことで、トウモロコシの男女は仕事に駆りたてられる。彼らは耕す畑を見つめ、種子が地面に触れる前からその実りを見る。

トウモロコシの男女は、この世界とその苦悩を見るとき、これから立ち上げるべき世界を見つめ、その道を切り開いていく。彼らは、これまでのもの、現在のもの、これからのものという3つの視線をもつ。だから、彼らは、視線という宝物を植え付けることができる」

デフェンサは熱心にうなずいている。彼女がうまく説明できない主張を老アントニオは理解している。そのことを彼女は理解したのである。暦も地理もまったく異なる二世代が橋を架け、道のように行き来している。

「そのとおり！」と、叫びかけ、デフェンサは愛しい眼差しで老アントニオを見つめる。彼女は老アントニオの言葉を引き継いで言った。

「行きたい場所がわかっているなら、行きたくない場所もわかっているはずよ。だから、一步一步、一方から遠ざかり別の方へと向かうのよ。まだ到着していないけど、私たちが作る道は目的地への目印になるわ。タマールを食べたいなら、カボチャを植えてはならない」

満員の観客は、恐ろしいカボチャのスープを想像し、当然ながら嫌悪感を表明した。

「私たちが知っていることで嵐を乗り切っても、すでに次の嵐に備えている。新たに、私たちはその準備をする。だから、言葉を遠くまで運ばなければならない。その言葉を発した人がいなくなってもかまわない。大事なものは、種子がよい大地に届き、そこで育っていくことである。すなわち、支援することである。それが私たちの使命である。つまり、ほかの種子を探す種子になることである」

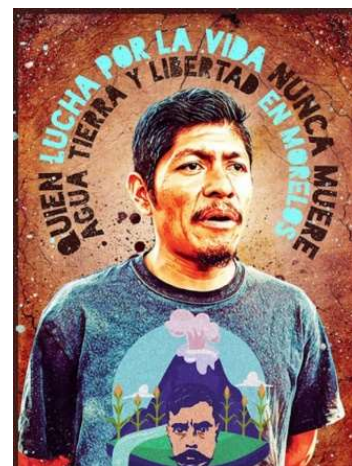
デフェンサ・サパティスタはこう宣告し、エスペランサに「わかったの」と、たずねた。

「ええ、もちろん。私たちが惨めに死ぬことになるのよ」と、エスペランサは立ち上がり9歳とは思えないほどおごそかに答え、「でも、やる価値があるものをしたい」と付け加えた。

全員が拍手喝采。



トウモロコシの包葉とバナナの葉で包んだタマール



サミール・フロレス

エスペランサの「やる価値のあるもの」という言葉を強化するために、老アントニオは袋から「ベシートス」（小さなキス）と呼ばれるチョコレートの袋を取り出した。

猫犬は、前足で上手にかなりの量を分捕り、隻眼馬はペットボトルで遊び続けている。

EZLN 調査委員エリアス・コントララスは、「われわれもやる価値のあることを実行しよう」と、低い声で繰り返し、仲間のサミール・フローレス [モレロス州統合開発計画反対運動指導者、2019年2月殺害] とその同志の心に想いを馳せる。彼らは、自らの尊厳で、親方の武器の陰に隠れ、水と生命を盗む世騒がせな泥棒と対峙している。命令するものへの盲従は「まず金、次も金、最終的にすべて金」という言葉に隠される。正義も自由もなく、生命すらない。

小さな虫は、シベリアの草原で死ぬところを一本のチョコレートで救われたという話をしだした。ドゥリートは、ヨイク [サーミの伝統的な歌] を歌うサーミの土地から、生命の木である杉の木を讃えるセリクプ [西シベリアのエニセイ川中流域左岸の先住民族] の領土に向かっていった。ドゥリートは言っている。「旅が何であるかを学ぶため、そこに向かっていった。なぜなら、暦や地理で遠く離れていても、重要で英雄的な抵抗や反乱が存在しているからだ」と言いながら、ドゥリートは、光沢のあるアルミ箔の牢獄からチョコレートを解放し、拍手し、一口分を飲みこむ作業を6本の脚を駆使し、同時に行った。

一方、カラミダーは、「次に起きることをよく考えなければならない」ことをよく理解しており、小さな両手にチョコレートを握り、「ポップコーンで遊ぼう!」と、熱く宣言する。

サパティスタ海陸訓練センターより。

「国際ゲロ吐き」ワークショップに参加した副司令ガレアーノ

4 イシュチェルのルート (2021/4/26)

ラ・モンターニャ号は出航するだろう。

愛と豊穡の母、植物と動物の祖母、若い母、老いた母、大地の苦悩が傷やシミ跡へと変容している怒りであるイシュチェルの館のひとつからラ・モンターニャ号は出航するだろう。

マヤの伝説のひとつによると、イシュチェルが虹の形で世界の上に広がっているという。それは、地球に対して、多様性と包含性に関する教訓を与えるため、大地の色はひとつではなくたくさんあり、すべての人が自分を失うことなく、ともに生命のすばらしさを照らしていることを思い出させるためである。彼女、虹の女性、イシュチェルは、すべての色を抱きかかえ、自分の一部としている。



ラ・モンターニャ号



ラ・モンターニャ号のルート



ドレスデン絵文書に現れるイシュチェル



イスラ・ムヘーレスに飾られているイシュチェル像

メキシコ南東部の山岳地帯では、古老のなかの最古老のマヤ語で、母なる月、母なる愛、母なる怒り、母なる生命、イシュチェルをめぐる数多くのお話のひとつが語られる。

老アントニオはこう話している。

東方から死と奴隷がやってきた。そう、やってきた。それ自体は、どうしようもない。われわれは起きたことを変えることはできない。だが、イシュチェルはこう言った。「明日、私の骨と血、私のこどもたちの言葉にある生命と自由を東に向けて航海させる。単一の色が命令することのないように。誰も命令することなく、誰も従うことがないように。それぞれが喜びを持ってありのままにいれるように。なぜなら、私というすべての世界を覗き見るため、窓でなく鏡を欲しがっている人たちから、苦痛や苦悩は発生する。怒りに任せ、苦悩みが癒えるまで7千枚の鏡を割らねばならない。苦悩から多くの死が生まれるが、最終的には生命が道となる。その時、虹は私のこどもたちの家、後継者の大地である山上を飾るだろう」

弾圧が、マヤの大地を金属と火となって襲ったとき、遠くからやってきたツルは、虹の女神の像がたくさんあるのを見て、その土地をイスラ・ムヘーレスと呼んだ。

未来のある朝、語る十字架が、過去ではなく、来るべきものを呼び起こすとき、山は、ツルの地まで航海し、オリーブの老木の前に停泊するだろうと予言した。その木は、海に影を落とし、その海岸で暮らし働いている人々の拠り所となっている。

21世紀の21年目の5月3日、メキシコのキンタナロー州イスラ・ムヘーレスから、ラ・モンターニャ号は、挑戦にみち、何も非難されるべき筋合いのない長旅となる大西洋横断に向けて出航する予定である。暦の6月には、スペイン・ガリシア自治州ポンテベドラのビゴ港（シウダー・オリビカ）のある海岸を眺めることになるだろう。

COVID、入管当局、明白な差別、排外主義、港やホストの間違えなどの理由で、上陸ができない場合にそなえ、われわれは準備している。われわれはそこで待ち続ける準備ができています。われわれは、ヨーロッパの海岸で「目を覚ませ！」と書かれた大きな旗を広げる。誰かがそのメッセージを読むのを待ち、誰かが目覚めるのを待ち、そして何かするのを待つ。

下のヨーロッパが、私たちの受け入れを嫌がるか、出来ないというなら、前もって備えてきたオール付きの4隻の丸木舟で帰途に就くことになる。もちろん、イシュチェルの家がある海岸をもう一度見るまでは、少しばかり時間がかかるだろう。

丸木舟は、われわれのサパティスタとしての4段階を表している。

マヤをルーツとする先住民族としてのわれわれの文化。いちばん大きな丸木舟で、中にほかの三つの丸木舟を保管できる。われわれの先祖たちへのオマージュである。

地下活動と蜂起の段階。この丸木舟は、最初の丸木舟に次ぐ大きさで、1994年1月1日以

降に戦いで倒れた人たちへのオマージュである。

自治の段階。大きさは3番目である。抵抗と反乱の中で、サパティスタ自治を掲げ、今も掲げているわれわれの先住民族、地域、地区に対するオマージュである。

サパティスタのこども段階。サパティスタのこどもたちが、好きなように形や色を使って描いて飾った一番小さな丸木舟。



ルーツであるマヤ文化



地下活動と蜂起の段階



自治段階



サパティスタのこどもたち

われわれが、上陸して、ヨーロッパで闘い、抵抗し、反抗している人たちを言葉で抱きしめることができたなら、パーティー、踊り、歌やクンビアで盛り上がるだろう。お互いが振り合うヒップは、隔たっている大地と天空を揺らすだろう。

大西洋の両側で、次のような短いメッセージが、全電磁波スペクトル、サイバースペースに溢れ、多くの人々の心に響くだろう。

вторгнення почалося
bosqinchilik boshlandi
a invasión comezou
Die Invasion hat begonnen
istila başladı
la invasió ha iniciat
l'invasione hè principiata
invazija je započela
invaze začala
инвазията е започнала
invasionen er startet
invázia sa začala
invazija se je začela
la invado komenciğis

εισοβολή έχει ξεκινήσει
tá an t-ionradh tosaithe
innrásin er hafin
l'invasione è iniziata
الغزو بدأ
êriş dest pê kiriye
iebrukums ir sācies
prasidejo invazija
d'Invasioun huet ugefaang
започна инвазијата
bdiet l-invażjoni
de invasie is begonnen
invasjonen har startet
است شده آغاز حمله

the invasion has started
invasioon on alanud
inbasioa hasi da
hyökkäys on alkanut
l'invasion a commencé
mae'r goresgyniad wedi cychwynn

rozpoczęła się inwazja
a invasão começou
invazia a început
вторжение началось
инвазија је започела
invasjonen har börjat

「侵略が始まった」

.-... .- / .. -.- -.- /- / .. -. ... -.-.- -.. -(モールス信号)

もしかしたら、月の女神イシュチェルは、われわれが歩む道のイルミネーションとなり、今日の夜明けのように、われわれの光と運命となるだろう。

以上間違いなし。

ツォツ・チョフ地区セミレーロ司令官ラモナのサパティスタ海陸訓練センターより

副司令ガレアノ

メキシコ、2021年4月26日。満月。

5 ポップコーンのお話 (2021/6/6)

今、小屋にいるのは、副司令、猫犬、カラミダーだけである。副司令は、辛いソースがかかったポップコーンをいきなり口に入れると、ご存知のコーラを一杯飲み、語りだした。

ポップコーンのお話

はるか大昔のことである。時間が年寄りの酔っぱらいのようによろよろ歩きだした頃、世界を創造したもっとも偉大な神々が集まって会合を開いた。そこで、トウモロコシの男女を創るという任務を皆のなかでいちばん物知りのイシュムカネーに託することが決まった。

しかし、男の神々は、もともとかなり間抜けだったので、トウモロコシがまだ創られていないことを知らなかった。イシュムカネーは、「ああ、兄弟よ。とても信じられない。トウモロコシがまだないのに、どのようにトウモロコシから人間を創れというの」と、彼らに言った。

「わかった」と、男の神々は言った。

「でも今にわかる。会合での合意があるので、あなたは合意を実行しなければならない」

もともと女性が不平を言うように、イシュムカネーは長い間不平を言った。やり方がないのにどうやれというのか。まったく、クソ男どもは何も考えていない。どうすればできるのか。この問題を解決するため、何か頭にいい考えが浮かぶかもしれない。

イシュムカネーが考えている間に、男の神々は悪口を言いはじめた。あのイシュムカネーは怠け者だ。合意を守ろうとしない。知らん振りをしている。次々と神々は悪口を言った。

「でも、われわれは知らん振りなどしたことはない」

自分たちは賢明なのに、どうしてイシュムカネーを待たなければならないのかと言った。

男の神々は、最初に出くわした木材で、最初の男と女を創った。だが、木の人間は動きが悪く、痙攣しているように歩いていた。その後、男の神々は金で人間を創ったが、あまりに重くて、歩けなかった。男の神々がどうしようと考えているあいだに、金の人間は、木の人間に自分たちを担がせた。木の人間は金の人間をあちこちと運び、食べさせ、敬っていた。

神々は何をしたらいいのかわからなかった。そこへきたイシュムカネーは、何が起きたかすべてを知り、怒りまくった。男の神々のせいで、金の人間が木の人間を奴隷にする事態が起きたと、男の神々を叱責した。「ひょっとしたら俺たちのせいかも。どうしてこうなったか、知ったことではない。俺たちは大事なことで忙しい」と、男の神々は言った。

「バカという以外、何もない。バカなことをしても責任を取らない臆病者だ。私たちは、彼らがした間違いを家父長制と呼ぶことにする。なぜならこの不正を誤解していたのはマッチョな男だけだからだ」と、イシュムカネーは言い返した。

しっかりと叱った後、イシュムカネーはすでにトウモロコシを作ったことを示した。男神たちは、自分たちにも素晴らしいアイデアがあったが、その理論を実行したイシュムカネーを拍手して祝福した。イシュムカネーは何も言わなかったが、彼女はあらゆる色のトウモロコシを手を持っていた。こうして彼女は世界に住む男性と女性を創ったが、他の人々も創った。こうして男や女などが創られ、神々は踊りに出かけた。

イシュムカネーは手をじっと眺めていた。トウモロコシを作るのに使った材料のすべてがなくなっただけではなかった。少しばかり残っているのがわかった。そこで、イシュムカネーは、歩き始めたばかりの世界には、まだ別の教訓が必要だと考えた。

そこで、イシュムカネーは、とても小さいトウモロコシを作ると、それを大地にバラまき、成長させた。しばらくして、トウモロコシは、あちこちと出歩き、世界を創っている男性、女性、それ以外の存在が力を発揮できるように働きかけた。しかし、誰も小さなトウモロコシに関心を示さず、嘲り笑い、軽蔑していた。誰も見向きもしないので、すべての小さなトウモロコシは悲しくなった。



いろんな色のトウモロコシ



小さなトウモロコシ、ポップコーン

小さなトウモロコシの集団の頭に、これはおかしい、なぜ自分たちは蔑まれ無視されるのかという思いが浮かんだ。こうして不満を抱くようになった。不満を抱く小さなトウモロコシの集団が生まれた。だが、残りのトウモロコシは、「不満を抱く小さなトウモロコシの集団がいてもかまわない。小さすぎるので誰も気にしない」と、思ったことを言い放った。一方、小さいトウモロコシの集団は次のように考えた。不満を抱いていても、だれもが対等であり続けることなどありえない。

すると、すべてが正しく行われているかを確認するため、世界を回っていたイシュムカネーがやってきた。彼女は小さなトウモロコシのグループを見つけ、何をしているのか、たずねた。小さなトウモロコシたちは、自分たちの不満を伝えた。イシュムカネーは笑ったが、嘲笑ではなく、愛情によるものだった。

「いいですか。小さな仲間たちよ。不満を口にするだけではだめだ。反乱し抵抗する姿勢を見せねばならない。反乱を起こし、怒りと勇気を持ち、自らを組織すべきである」と、彼女は小さなトウモロコシに言った。

イシュムカネーは立ち去った。男神たちが相変わらずバカなことをしているので、それを組み立て直す仕事が残っていたのである。

「さあ、行くぞ。私たちは怒りまっけてやる」と、イシュムカネーの言葉を考えていた小さなトウモロコシの集団は宣言した。

これまでに受けたあらゆる屈辱や軽蔑を考えると、さらに立腹し、憤激で身体が熱くなった。さらなる怒りで真っ赤になった小さなトウモロコシは、熱さに耐えられず、バーンと破裂し、飛び跳ね、フワフワになった。また別の粒が吹き抜ける風で持ち上げられた。

小さなトウモロコシが空を飛んでいることに、誰もがびっくりした。ほかの小さなトウモロコシも同じことをしだした。別のトウモロコシも破裂し飛び跳ねた。またひとつ、またひとつ、またひとつと続いた。さらに多くのトウモロコシが飛び出し、空は跳ねるトウモロコシだらけになった。

「ハトのように見える」と、小さな女の子が空を見あげて言う。

「そうだけど、ちっちゃい」と、少年は言う。

「そう、小バトみたい」と少女は言う。

少年は、男の子らしく、ポップコーンをつかんで食べ、「とてもおいしい」と言う。

「そうね。だけど何か足りない」と、少女は言った。

その時、イシュムカネーが忘れていた小瓶を見つけ、ポップコーンを漬けてみると、チクチク刺激はあるけど、おいしい。そして、女の子と男の子は、世界中の男の子、女の子、その他の子を呼び、空を飛んでいるトウモロコシを集めだした。ボウルに入れて、辛いソースをかけ、下痢になるまで食べ始めだした。とにかくパーティーをしたのである。



空を飛ぶポップコーン



カラミダーと衛生班の女性

ほかのすべてのトウモロコシは、感嘆し驚いた様子で見ている。なぜなら、空を飛べる唯一のトウモロコシだったからである。そして、「飛んでパーティーをするトウモロコシ」という意味の「ポップコーン」という名前がついた。それは私が発明したばかりの言葉である。

タンタン。

カラミダーは手を叩いて喜んだ。猫犬は拍手しなかった。というのも、辛いソースのかかったポップコーンに前足を突っ込んで、辛抱強く、その前足を舐めているここでは、何も無駄にされない。…とりわけポップコーンに関しては。

カラミダーは、ポップコーンと遊ぶつもりと宣言していた。彼女は、小屋の真ん中に立つと、息を止め、頬を膨らませた。彼女の顔色は赤から紫に変わっていった（子どもが癩癩を起こしたときのように）。

カラミダーが息をするように、シッと、副司令が言おうとした瞬間、カラミダーは飛び上がり、息を吐きながら「ドカン！」と叫んだ。そして、同じことをしているはずの副司令を見つ

めた。しかし、副司令は何ごともなかったかのように食べ続けていた。カラミダーは副司令に向かって、「いったい、あなたはサパティスタなの。そうじゃないの」言った。

この不意打ちの言葉で、副司令ガレアーノはウツと息をのんだが、口にはタバコの煙とポップコーンが充満していたので、大きな咳をして、半分噛んだポップコーンの破片を吐き出した。そして、自分や副司令が吹き出したポップコーンだらけの顔で、カラミダーは、「副司令はたくさんポップコーンが弾ける音を出した」と言って、熱心に拍手をした。

副司令は窒息しかけたが、衛生班の女性叛乱戦士がきて「注射しなければ」と言うと、すぐに回復した。しかも、その場にいた全員が駆けて逃げ出した。いちばん最初は猫犬だった。一人の副司令と混同しないでほしい。残ったのはカラミダーだけだったが、その彼女も、衛生用のリュックを背負って、小さな水たまりに向かって出発していた。

その水たまりには、捕獲しようとするケチな日中韓の大資本家たちの捕鯨船団から逃れられたのを知って、二匹のクジラがはしゃぎながら飛び跳ねていた。大資本家どもは、自分たちの習慣、つまりアニメ、K-POP、万里の長城を作るかわりに、クジラを捕獲して、ドル、ウォン、円、ユーロ、そして余ったらペソに変えようとしている。



ヨーロッパに向かったポップコーン部隊

このあとも、続くかな？